



FUJIKO

鳳の眼  
起の章

## 前置き、登場人物紹介

---

### ・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は「警備部暗躍係、公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人であるリカは、女性だけで構成された大手歌劇団に所属して、表舞台で華やかな舞台人として活躍していた。勿論、彼女の正体を知る者は限られていた。そんなリカは、歌劇団での自分の役目を終えてひとまず表の世界から姿を消した。その後の彼女の消息を知る者は少なかった。このまま平和な時間が思われたが、それを望まない者が潜んでおり、暗い場所で足音を立てていた。

### ・主な登場人物

#### リカ

本作の主人公。歌劇団の人気スターとして活躍し、裏では密偵として数々の犯罪に立ち向かっていた。

彼女は、公演真っ最中に都内で起きたテロ事件を解決して、退団公演を無事終えた後、公の場から姿を消した。

#### ケイ

元歌劇団トップスターでリカの先輩。現代的でアイドル要素があり、若手の頃から人気を博し、スピード出世でトップスターに就任した。しかし、トップになってからの活動期間は短く、ファンに惜しまれつつ、退団した。その後、彼女は裏稼業をしながら芸能活動を開始した。

#### チカ

元歌劇団トップスターの一人で、リカが尊敬する先輩でもある。常に冷静さを保ち、表の世界では実力派女優と評され、長年、歌劇団の伝統を支えていた。

裏の世界では冷徹な処刑人として恐れられているが、彼女の実力は未知数である。彼女は、リカをある計画に参加させようとしていた。

#### ユミコ

関西出身の元歌劇団スター。普段はほんわかで優しい性格であるが、舞台に立つと、自慢の歌唱力や表現力で観劇者を魅了し、別人となる。それは裏の世界でも同じことで、状況によって、

仏の顔が鬼の顔に変わる場合がある。彼女の本気の力を見た者は少ないとされる。

#### ヒロミ

元歌劇団スターの一人。姉も歌劇団スターで、後にトップスターとなった。そんな姉の影響で、彼女も歌劇団に入団することとなる。退団後は表舞台に立たず、姉のマネージャーを務めており、裏の世界からも身を引こうとしていた。しかし、かつて一緒に仕事をしていたチカに呼ばれ、裏稼業を再開することとなった。

#### ノリコ

元歌劇団トップスターの一人。リカの新人時代にトップを就任し、彼女を可愛がり、厳しく教育した。裏の世界では、密偵として優秀で、多くの悪党から恐れられている。現在では現場に行くことは少なくなり、諜報機関の指揮を任されている。

#### トウコ

元歌劇団トップスター。彼女は短期間でトップの座を降り、当時、若手ホープで後輩であるチエに後任を務めさせた。退団後、彼女は舞台の仕事を中心に再始動し、裏稼業の密偵活動も継続して行っている。在籍している諜報機関責任者の一人。

#### オサコ

元歌劇団トップスター。圧倒的な歌唱力で、退団後もミュージカル界の主力として、活躍している。その一方で裏の世界では、同期のノリコ、トウコと共に在籍している諜報機関の組織力を高めている。

#### ミナコ

元歌劇団スター。リカの同期でよき理解者でもある。退団後はあらゆる資格を取得し、第二の人生を歩んでおり、秘密機関の開発部に配属され、リカのサポート役となる。

#### アスカ

現役歌劇団トップスター。先輩であるリカ退団後、所属する班のトップに就任することとなった。裏稼業では、銃二丁を手にして、凶悪犯罪を撲滅している。

#### ユリカ

現役歌劇団スター。舞台上で圧倒的な存在感を持ち、多方面から注目されている。アスカ率いる班に異動となり、新風を巻き起こそうとしている。

#### ジュン

現役歌劇団若手スター。歌劇団の将来を担う舞台人の一人で、順調に経験を積んでいる。裏稼

業では敵地の偵察、分析などを担当して、頭脳戦を得意とする。

### ユズミ

中堅歌劇団スターの一人。あらゆる役を演じ切る力があり、個性派スターとして評される。得意のマシガントークで劇団仲間を笑わせて場を和ませている。裏の世界では、特攻小隊の隊長を任されている。使用武器は、幕末で暗躍した新撰組天才剣士、沖田総司の愛刀「加州清光」。

### クミコ

実力向上中の現役歌劇団スターの一人。長年、リカやアスカと一緒に居た劇団班から別の班に異動することとなり、活躍の場を広げている。裏の世界では隠密、潜入捜査を主に担当している。使用する武器は、旧式の装飾銃で、それは以前にトップスターを務めていたヨーコから譲ってもらった物とされる。

### ミチコ

トップクラスの歌劇団員で、退団したチエの後任でトップスターとなる。裏稼業では、あらゆる武器に精通している他、特殊な乗り物（重機、戦車、戦闘機、ヘリ、護衛艦、クルーザー等）の運転、操縦が可能である。

### コト

注目されている若手ホープで、元トップスターのチエに憧れて歌劇団に入団した。めきめきと実力を発揮して表裏の世界を生きている。

### エヴァ・ルシフェル

フランスの女性実業家。元々は父親と同じく政治の仕事をしていたが、突如、姿を消して、実業家に転職していた。しかし、彼女の裏の顔は、闇の商人でリカに追われる身となる。

### ウォン・イーシン

元中国工作員。一旦消息を絶つが、再び姿を現し、日本で開発されたステルス機と設計図を盗みだし、政府を窮地に陥れようとする。しかし、それには大きな黒幕が関係しているのであった。

### スン・ローファイ

出身地、中国を拠点にしている大物起業家であり、裏の顔は闇の商人である。日本が開発した新型ステルス機強奪をウォンに命じてある野望を抱いていた。

### サイクロプス

ローファイの配下にある企業が開発して、人間から突然変異した最強の戦士。元々はドイツが

開発した物であり、盗み出した情報で完成させた。特徴として、鎧のような体は炭素繊維とナノマシンで構成されていて、通常の兵器は全く効果がない。目の部分はV字型の一つ目で、現在のところ、地上型、狙撃型、飛行型の3タイプが確認されている。

## 序章 衝動の足音

---

愛知県 飛島村工場地

夜が更けて、静けさが漂う時間帯であったが、それはすぐにかき消されることとなった。突如、爆発が起こり、工場内は騒ぎとなった。

「.....何事だ？」

「...謎の爆発で火事が.....あそこは...！」

火元は格納庫のようで、偶然居合わせていた作業員たちは、すぐに火災現場に向かって消火活動に取り掛かろうとしていた。しかし、被害は大きく現場に近づくことは困難であった。仕方なく消防隊を待つ作業員であったが、彼らは驚愕する光景を目にしていた。

「.....ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ...」

火事になった格納庫から何やら轟音が鳴り響いていた。そして、その直後であった、大きな物体が宙を浮いており、目にも止まらぬ速さで、炎で赤く染まった空を駆け抜けていき、あっという間に姿を消した。

「.....あれはまさか...！！」

作業員たちは啞然として見ていたが、飛び立った物体の正体を知っていた。

この悪夢はまだ序章にすぎなかった。

それから三日後、東京 防衛省

その日、防衛副大臣の部屋に一人待っている者が居た。その人物は公安課警備部暗躍係の部長を務める新沼光博であった。彼は用意された茶に一切触れようとせず、どうも落ち着かない様子であった。

「.....コンコン」

「...はい」

ノックした後は入って来たのは防衛副大臣と側近であった。

「.....急にお呼び立てして申し訳ない、おまけに待たせてしまって...会議が長引いてね...言い訳しても仕方がないが...」

「いえいえ、おかまないなく...」

新沼は、立ち上がって一礼してから落ち着いて腰を下ろした。

「...早速本題に入るが、緊急事態だ、三日前に起こった工場火災の件はご存じだろうか？」

「ええ、ニュースで知りました、大手企業の工場なので驚きました.....製造している航空機の格納庫で火災が起こったとか...事故ですか？」

「...極秘情報だが君だから話そう、あれは単なる事故ではない...人為的事故だ、まだはっきりしたことは分かってないが...」

「...そうですか、犯人はまだ不明なのですね？」

「...ああ、現在捜査中だ、外部の人間の犯行とは限らないため、内部の人間に怪しい者がいないか調べている...」

「.....なぜ私を呼んだのですか？」

新沼が質問を投げかけると、防衛副大臣はさらに深刻そうな表情を浮かべた。

「.....この工場の事故には我々の組織が大きく関わっている.....！」

「.....どういうことですか？」

「...詳しく説明しましょう」

「...！」

新沼が疑問の目で訴えると、防衛副大臣に替わって側近が質問に答えようとしていた。

「...まず火災が起きた工場ですが、生産している物は主にロケットや航空機、衛星...航空宇宙事業本部という名称で生産を行っています...自衛隊の兵器なども製造しているため、我々の組織にとって、なくてはならない存在と言える...」

「...では今回の事故は...！」

「ええ、国家機密を危険に晒す事態となります...情報が洩れているのなら一刻も早く突き止めないと...もう事件として取り上げています...本当に犯人はとんでもないことをしでかした...」

「...と言うと？」

「.....何者かに最新ステルス機とその設計図を盗まれました...！」

「...ステルス機？」

「我が防衛省の技術研究本部と大手企業が提携して完成させた戦闘機のことだ...」

防衛副大臣は詳細を説明しようと新沼にある資料を見せようとしていた。資料の写真には戦闘機が写っていた。

「...この戦闘機は、国産戦闘機の生産実現、日本の先進的な要素技術を実証するために造られた物で重要な価値があります...」

「...設計図も盗まれたとのことですが...」

「ええ、無断でプログラムに侵入して、設計図のデータをごっそり盗まれました...ただの悪戯では済まされない...重罪です」

「.....と言ってもこれはまだ実証試作機だ、工場での飛行テストを済ませ、航空自衛隊の基地で演習を兼ねて飛行テストを行う予定だった...」

「試作機は、あくまで飛行性能、信号遮断性能優先で武器は装備されていません...ただ試験的にもう一つ計画が存在していた...」

「...もう一つの計画？」

「...はい、試験機をベースに実用戦闘機、Silver Hawk、SH01、またの名を銀鷹壱号、この機体は完全な攻撃型ステルス戦闘機です、それには小型無人偵察機が装着され、無人戦闘機の遠隔操作が可能、フォーメーションを組んで一機だけで複数の戦闘機に攻撃指令を送ることができる、完成すれば大きな兵力を手に入れたことになる...！」



「...日本はいつからそんな軍事国家に？」

「...平和ボケしている本国には分らんことだが、現在、世界はじわじわと荒れている...危険な渦に巻き込まれるのも時間の問題だ、これは戦争を起こすためではなく、起こさないための対策だ...世界情勢を探る仕事をしている君なら分かると思うが...理解して頂けたかね？」

新沼は、防衛副大臣の発言に軽く頷き、さらなる質問を投げかけた。

「...それでその実用戦闘機が完成していないとのことですが、どういう問題を抱えているんですか？」

「.....その実用機が盗まれました！」

「え？」

防衛副大臣たちは、己の失敗を悔やみながら新沼に真実を話そうとした。

「...未完成とはいえ、飛行は可能、ただ武器やオプションが装備されていないだけです...それが火災現場となった格納庫から飛び立ちました...他の試験機を破壊して...」

「...では犯人の目的は、その実用機...！」

「ああ、それと設計図、これは推測だが、盗んだ設計図で強奪した未完成の機体を完成させるのでは...何とも想像絶することだ...！」

「...可能性は高いです、まだ犯人の目星はついていませんが、産業スパイ...もしくはステルス機に興味を持った巨大組織の人物、敵対している国家政府が関わっているかもしれない...国際問題につながるかもしれません...」

新沼は、防衛副大臣たちの話を聴いて、事の重大さを感じ取った。

「.....現在、犯人捜索に全力を注いでいるが、国外での捜索は目立ってしまい、マスコミに嗅ぎつけられる恐れがある...極秘のため、それはどうしても避けたいのだ...そこでだ、君の...公安の力を借りたい...君の部下は、世界各国に潜んでいると聞く...優秀な密偵に捜査協力をお願いしたい...！」

防衛副大臣は、新沼に頭を下げて頼み込んだ。

「...頭を上げてください！断る理由はありません、本国の一大事の力になれることがあれば何でも致します、引き受けます」

その時、防衛副大臣の渋い表情が、少し緩み笑みを浮かべていた。

「...ありがとう、君しか頼る者がいなくてな...頼りにしている」

「ご期待を裏切るようなことはいたしません、さっそく任務に適した人材を集めましょう...！」

「...よろしく頼む」

こうして、新沼は防衛省から極秘捜査を引き受けて、ステルス機を強奪した犯人捜索のために部下に声を掛けようとした。

それから時間が流れ、ステルス機強奪事件から数ヶ月経とうとしていた。

南フランス 地中海

ここは美しいエメラルドグリーンの海が一望できるとある常夏の島群。ここにはいずれも美しい観光地、保養地が存在し、国際的にも人気があり、国内だけにとどまらず、世界中から旅行者が訪れる。

海水は透き通っているため、海上にある船やヨットは、宙に浮いているようであった。複数の小島には別荘があり、利用者は映画俳優や著名人が多く、仕事のことを忘れて大いにバカンスを満喫していた。

セレブが優雅に泳いでいる中、その中にひときわ目立つ女性が一人居た。

その女性は、スパッツタイプの水着を着用して酸素ボンベなしで、長時間海中を深く泳いでいた。海の生物と戯れるその姿は、おとぎ話に出てくる人魚のようで妖艶さがあり、神々しくもあった。

彼女は、海中を潜って海の生物に別れの挨拶をした後、ゴムボートの上うつ伏せで寝転んでしばらく日光浴をしていた。時間はゆったりと流れていき、彼女は、嫌なことが吹き飛ばすほど癒されていた。

彼女の名はリカ、日本の元大手歌劇団の劇団員で、裏稼業では公安の密偵として本国の平和のために活動していた。彼女は、舞台の仕事を引退して裏稼業も休業中で、長期休暇をもらい、羽を伸ばそうと隠れ別荘に訪れていた。

リカは適当に寛いだ後、陸に上がり自分の別荘に向かおうとするが、別荘の前に彼女を出迎え

る物体が現れた。それは、グレートピレニーズという大型犬で彼女の愛犬であった。名前は「コスモ」という。ご主人様の帰還に歓喜し、尻尾をちぎれそうになるまで振り続け、若い人間の子供のように甘えていた。

コスモと戯れたいりかであったが、まず設置されたシャワーで潮水を洗い流した。そして、自分の体をタオルで拭き取った後、コスモを撫でまわして一緒に別荘に入った。

りかはタオルを首にかけ、冷蔵庫に手を伸ばし、冷えた缶ビールを取り出した。一口飲んだ後、彼女は大胆にソファに深く腰掛けた。彼女は、休日のだらしない親父のように横になりながら目の前にあるテレビの電源をつけた。平和な時間が流れ、休暇を満喫しているりかであったが、別荘に招かれざる客が訪れようとしていた。

島の海辺に一隻のモーターボートが停まり、操縦者はりかの別荘に向かおうとしていた。突如現れたその人物の服装は、黒のジャケット、マフィアのように帽子を深く被りサングラスをしているため、顔ははっきり分からなかった。

「...バウ...ヴァウヴァウヴァウ！.....」

「.....何？どうしたコスモ？」

眠気に襲われていたりかは、コスモの吠える声で起き上がった。普段、コスモは五月蠅く吠えないため、りかはすぐに異変に気づいた。

「.....何かいるな...！」

りかは外にいる妙な気配に気づき、警戒態勢を取った。

「...コンコン」

謎の来訪者は、ゆっくりとりかの別荘に向かい、扉をノックした。

「...開いてるんで入って来て下さい！」

りかは、大声で謎の来訪者を招いた。

「.....！！」

謎の来訪者が扉を開けると、りかが堂々と構えていた。謎の来訪者はその様子になんとも動じなかった。

「...どちら様か知らないけど、命が目的なら抵抗させてもらうわよ...！」

「.....」

リカは、鋭い目つきで謎の来訪者を威嚇していた。愛犬のコスモも同じく威嚇していた。謎の来訪者は攻撃しないことを証明するため、両手を挙げて降参の意を示した。

「...あなた何者？」

リカは謎の訪問者に質問しながら身体検査をした。すると謎の訪問者は言葉を発さず溜め息をついた。

「.....態度が悪いわね、教育した人の顔が見てみたいわ...」

「...ふ」

その時、謎の訪問者は、リカの発言に対し軽く笑みを浮かべた。

「...何がおかしいの？」

「.....いや、まさかあんたに説教されるとは思っていなくてね...立派になったもんだ...」

「...何?.....!!」

「バコ!!」

その時、リカは、謎の訪問者に蹴飛ばされ倒れ込んだ。

「...相手が抵抗しない素振りを見せても油断は禁物...！」

謎の訪問者は、余裕の表情を浮かべてリカを挑発した。

「...ヴァン!!」

その時、コスモは謎の訪問者に噛みつこうとしたが、軽くかわされ、触れられたコスモは急に倒れ込んだ。

「コスモ！！！！！」

「...ご心配なく、ちょっと眠ってもらっただけだから.....あんたはこうはいかないと思うけど...」

謎の訪問者のなめきった態度でリカは怒りをあらわにして反撃しようとした。

「バゴ！！！！！」

リカは謎の訪問者を思い切り蹴飛ばして外で闘おうとした。彼女は、銃を拾い上げてから外に出た。

「はは、かかってこいよ...」

「...おたくをボコボコにしないと私の気が済まない...！」

リカは、そう言って謎の訪問者に攻撃して浜辺で激闘を繰り広げようとしていた。お互い攻撃パターンを読み取り、防御するため、ほぼ互角で勝負の行方は分からずにいた。しかし、時間が経つにつれ、ほんのちょっとした油断で攻撃が当たりだし、お互いダメージを受けていった。

「.....はあ、はあ、なかなかやるじゃないの.....甘ちゃんだったのに...」

「.....はあ、はあ、私のことを知ったような口利くんじゃないわよ.....久々に暴れたわ.....おたく一体何者？」

「.....体は鈍ってると思ったけど、それだけ元気があれば大丈夫そうね...第一試験は合格ね...」

「...第一試験？」

リカは謎の訪問者の発言に首を傾げ戦意を失っていた。

「...まだ分からないの？あいかわらず鈍いわね...」

謎の訪問者は、体についた砂をはたいてサングラスを外した。その途端にリカの目は点になった。

「...あなたは！！」

「久しぶりね、リカ...」

リカの前に現れたのは、歌劇団時代の先輩であった。また裏稼業での先輩でもある。

名はケイ、歌劇団時代、現代的なアイドル要素が注目され、スピード出世でトップスターに就任した。その後も裏稼業を続けながら芸能事務所と契約し、芸能活動を開始した。彼女は、リカの若手時代にコンビを組んだことがあり、教育係なども任されたりしていた。リカの尊敬する先輩の一人である。

敵地に乗り込む時の主要武器は妖刀「村正」で、体格は細く小柄な方だが、それ以上に驚異的な身体能力を発揮することができ、クライアントから厚い信頼を寄せられている。

「ケイさん、どうしてここへ？」

「ちょっと用があってね、美味しいシャンパン持って来たよ、一緒に食事でもどう？」

ケイの突然の来訪に驚愕したりカであったが、さらなる衝撃的な出来事が待ち受けているのを彼女はまだ知らなかった。

## 現場復帰

---

地中海 南フランス リゾート地

日は暮れていき、島の都市部に光が灯り、美しい夜景が姿を現した。

リカは、休暇中に思わぬ場所である人物と対面した。その正体は新人時代に世話になった先輩エージェントのケイであった。リカは歓迎して別荘に招き入れた。

「.....シャー」

別荘の浴室からシャワー音が聴こえた。使っているのはケイであった。リカと砂浜でひと暴れしたことで、服が砂まみれとなり汗を掻いたため、借りていたのであった。

リカの方は夕食の準備をしていた。...と言ってもデリバリーしたものを並べているだけであった。リカは料理が出来る方だが、今回は簡単に済ませようとした。

「こら！コスモ、つまみ食いしちゃ駄目だよ！」

リカは愛犬に叱りつけて、ケイが浴室から出てくるのを待っていた。

「...あ～さっぱりした～悪いわね、服まで借りちゃって...」

湯上りのケイがリカに顔を出した。

「全然いいですよ、自分の家みたいに寛いで下さい～」

「ありがとう～コスモちゃん、さっきはごめんね～」

ケイを不審に思っていたコスモもすっかり懐いていた。

「...前にもここに来たことありましたっけ？」

「ええ、だいぶ前だけどね、何も変わっていないわね、いい別荘だわ」

「ありがとうございます、私もここ、気に入ってて...隠れ家的な...退団後も利用できたのでよかったです...」

「...トップスターの特権よ、裏稼業を継続するという条件付きだけど...」

「それくらいどうってことないです.....さあさあ、たいしたものではありませんが、召し上がって下さい〜」

「...あら、美味しそうね、お言葉に甘えて頂きましょうか」

ケイは、コスモを抱えながらソファに座り込んだ。リカはグラスにケイからのお土産のシャンパンを注いだ。二人はテーブルに並べられた和食や中華を猛烈な速さで平らげた。

「.....もぐもぐ...こうやって一緒に食事するのも久しぶりですね〜」

「...そうね、歌劇団にいた頃はよくスイーツの取り合いをしたわね〜」

「...はは、懐かしいですね、ケイさんは本当に甘いもの好きだから...それにしても体型変わりませんね〜」

「まあね、今も現役バリバリで働いてるわけだし...所属している事務所、体育会系だし...」

「...細いけどムキムキですね、ケイさんは歌劇団の中でもかなりの怪力の持ち主だから...」

「...歌劇団時代よりも能力は向上しているわ...あなたこそ体型は維持しているようね...」

「はい...休暇中だからと言ってだらけた生活はしていません、太りやすいので毎日、トレーニングは欠かせません、ジムに通ったり、泳いだりしています...」

「あいかわらず真面目ね、一見、ふにやつとしているけど、実はストイックなところがあなたの魅力ね...退団公演は素晴らしかったわ、もう私が知っているリカじゃなかったわ...成長したわね、立派なスターになると確信していたけど...」

「...いえいえ、たまたま運がよかったんですよ...ケイさんにも...色々な方にお世話になりましたから.....」

「...運も実力のうちよ、あなたはキャリアを積んでいき、ものにした...もっと自信を持ちなさい...!」

「はい!」



リカは、ケイの言葉に心打たれていた。

「...あなたなら歌劇団を辞めても上手くやって行けるでしょう...仕事は続けるでしょう？」

「...ええ勿論、やりたいことはいっぱいあるので.....ケイさんたちのように活動の場を広げたいです...！」

「...最初は大変だけど慣れれば楽しいわよ、視野が広がって、いい経験が積めると思う...あなた次第ね...」

「...そうですね、頑張ります」

「.....ところで裏稼業でも大活躍のようね、日本各地で起きたバイオテロ事件も見事に解決した...」

「.....ええまあ」

半時間ほど食事や雑談で盛り上がっていたが、ケイは、突然深刻そうな表情を浮かべた。リカは異変に気づき、冷や汗を掻いていた。ケイは、グラスに入っているシャンパンを飲み干して口を開いた。

「.....私たちがいくら犯罪を阻止しても、その活躍は世間に知られていない...暗黙の了解で裏稼業のことはシークレット...ばれれば歌劇団と警察組織は終わってしまう...一部の劇団員はリスクを背負って日々生活している...そうよね？」

「...はい、そうです」

ケイは、じっとリカの顔を見て話をした。その時のケイの顔は険しかった。

「.....分かっていると思うけど、今日は遊びに来たんじゃない...大事な話があるの...聞いてもらえる？」

リカは、ケイの問いに対して静かに頷いた。二人は食器を片づけて話の続きをしようとした。

「.....話というのは？」

「...ええ、休暇中に申し訳ないけど、本当に重要なことなの.....ビジネスの話よ」

「...ビジネスですか？」

「.....あなたはもう一人前、フリーになれば環境は変わる...本部から何も聞いてないでしょ？」

「...はい」

「...本部は今、猫の手が借りたいほど忙しくてね.....だから私が代わりに伝えに来たわけよ...これを見て」

すると、ケイは専用のタブレットをテーブルに置き、本題に入ろうとした。

「...何ですか、これは...？」

タブレット画面にはある書類データが表示されていた。

「...承諾書よ、あなたの新しい務め先のことが書かれている...」

「...！」

ケイはタブレットを持って、リカの横に移って腰を下ろした。そして操作しながら順に説明しようとした。

「.....歌劇団在団中のあなたは、本部である警視庁公安部の命令で極秘捜査を行ってたわけだけど、退団してフリーになれば立場が変わるわ...」

「...どういうことですか？」

「...今まで公安とは上司と部下の関係だったけど、これからは顧客と請負人の関係になるわけ...もう社員ではなくなるわけよ...これはどういうことを意味するか、まずやらしい話だけど、ギャラが増える...少ないと感じれば交渉可能よ...」

「.....私はお金にあまり関心がないんですけど...」

「...あなたは借金してなさそうだし、この件は大丈夫そうね.....次は仕事内容だけど、比較的海外が多くなるわ、危険区域にも言ってもらえる場合があるし...慣れれば旅行気分を楽しめるかもね...」

「.....日本にいる時間が少なくなる可能性が高いんですね...？」

「.....ええ、そうね、何か問題が？」

「...家族と会う時間が少なくなるんだなと思って.....」

リカは表情を曇らせた。

「...確かに大事な人と過ごす時間は減って行くわね...でも大丈夫、もう本部に拘束されることはないから、かなり融通が利くわ...早く仕事を片づければ長期の休暇が取れる場合があるわ...」

「...そうですか」

リカは、ケイの説明を聞いて、固まった表情が崩れだし、うっすらと笑みを浮かべた。

「...話を続けるわよ、あなたは正式にフリーになったわけだけど、歌劇団や警察とは違う組織に配属となる、それは都内にあるから近いうちに案内するわ...」

「...どういった組織なんですか？」

「表向きは個人の芸能事務所よ、退団した劇団員も所属芸能人として働いていたりするわ...勿論、裏の姿は公の場では明かしてなくてね...あくまで極秘よ、私だって別に大手の芸能事務所に所属しているわけだし...あなたも事務所決まったでしょう？」

「...ええ決まりましたけど...また二足の草鞋を履くわけですね...何か大変そう...」

「そうでもないよ、皆、結構楽しんでやってるから...すぐ慣れるはず...」

「...そうですか」

「ざっと説明したけど何か質問は？」

「.....特にありません」

「...分厚いマニュアルだけど、たいしたことは書いてないわ、あなたのパソコンに送信するから適当に読んで...特に問題なければ早速、承諾書にサインを.....ああ、そうそう...！」

「？」

ケイは、急かして契約承諾書を出した途端、ふと何かを思い出した。

「.....一つ大事なことを言い忘れそうになった...実はある計画を進行しているんだけど、計画名は「アクアプロジェクト」」

「...何なんですか、それは？」

「...各国の秘密機関、諜報機関と同盟を結んで地球にはびこる犯罪組織を撲滅する計画よ...！」

「...何か壮大な計画ですね」

「...でしょ？今のところ、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、我が国日本が参加している...私もチームの一員でね...あなたもチームに入らない？」

「...私ですか？」

「...ええ、あなたのような優秀な人材をスカウトしててね、メンバーの数は、五人を予定していて、あなたで丁度五人目よ...どうする？」

「.....分かりました、参加します」

リカはケイの熱意を感じとり、承諾した。

「...ありがとう！歓迎するわ、残りのメンバーはじき紹介するわ」

リカはケイが用意した承諾書に全てサインした。

「.....それでこれから私はどうすれば？」

「...明日予定は？」

「...え？特にありませんが...」

「...それなら早速だけ働いてもらうわよ、私と組んでほしい...」

「...ケイさんとコンビを...！」

「...私では不服？」

「...いえ、そんな...！光栄です、昔を...新人時代を思い出します！！」

ケイは、リカをからかって楽しんでいた。

「.....もうプロとはいえ、だいぶ現場から離れているから体がなまっているでしょう...？私が鍛え直してあげるわ」

「...よろしくお願いします！」

リカは歌劇団時代の下級生の姿に戻っていた。

「...とは言ってもさっきの手合せで大体能力値が分かったわ、すぐに実戦で使えそうね...」

「...恐縮です」

「...これで話はまとまったわね、もうこんな時間か...厚かましいようだけど、今夜泊めてくれない？」

「...え？あ...はい、寝床はちゃんと用意できるので...ご遠慮なく...」

「...ありがとう、明日は早いからもう寝ましょうか...」

「...はい、コスモ寝るよ～」

こうしてリカは急遽、現場復帰することとなった。

夜は更けていき、月光がリカたちのいる別荘を照らしていた。やがて空は明るくなっていき、朝日が顔を出そうとしていた。

リカたちは、朝風を浴びながら軽く朝食をとっていた。

「...まだ行先を聞いてないんですが...」

リカはケイのカップにブラックコーヒーを淹れ、予定を訊きだそうとした。

「.....ここからそんなに遠くないわ、行き先はモナコよ...そこで仕事をする」

「...滞在時間はどれくらいですか？」

「そうね～状況によるけど、一週間くらいかな～？」

「...そうですか」

「何か気になることでも...」

すると、リカは愛犬のコスモをじっと見た。ケイはそれで彼女が何を言いたいのか理解した。

「あ、そうか、彼は一人になるわね、留守番出来るの？」

「.....二、三日くらいなら平気ですけど、一週間だと心配ですね...」

「...そうか、どうしよう.....じゃあこうしよう！彼の面倒を見てくれる者をよこすわ...」

「え？いいんですか？」

「...どうってことないわ、出来るだけ早く片づけたいしね...」

「ありがとうございます！」

リカは子供のように喜んだが、コスモは無視していた。

「可愛くないな～」

リカたちは食事を済ませ、出かける準備に取り掛かった。

「...荷物は最小限に...着替えもあまり持って行かなくていいわ...ある程度、必需品はこっちで用意するから...」

「そうですか、銃や備品は全部返してしまったので...」

「...勿論そういうのも用意するわ...それじゃあ行きましょうか...」

リカは、愛犬コスモにしばしの別れの挨拶をして、ケイの操縦するモーターボートに乗り込んだ。ボートはエメラルドグリーンの美しい海を走行していき、二人は心地よく海風を浴びていた。

「...？」

しばらくすると前方に一隻の大型クルーザーを目にした。

「...あれに乗るわよ」

どうやらケイが所有しているクルーザーのようで、ボートを船内に収納して、リカは一緒に乗り込んだ。

「...これ...ケイさんのですか？」

「...そうよ、これでも安物だけど、プライベートでも使ってるわ、あなたも自分の船くらい持ちなさい...」

中央の大部屋には冷えたシャンパンとデザートが用意され、二人は快適空間で存分に寛いだ。

こうしてリカたちは、優雅なクルージングを満喫しながらモナコへと向かった。

数時間後、モナコ港に着き、クルーザーから出ると迎えの高級車が停まっていた。

モナコ公国（モナコこうこく）、通称モナコは、西ヨーロッパの立法君主制国家。都市国家であり、首都モナコ市がそのまま全領土となる、世界で二番目に小さい小規模国家で、国連加盟国の中では世界最小である。フランスの地中海沿岸地方コート・ダジュールのイタリアとの国境近くに位置する。カジノやF1モナコグランプリ、WRC・ラリー・モンテカルロが開催されることで知られる。

余談として、ハリウッド女優、グレース・ケリーがモナコ皇妃となり、女優業を引退したことが有名で、彼女は謎の事故で生涯を閉じた。享年五十二歳。

グレースは、日本愛好家（華道に興味を持つ）でモナコに日本庭園を造営することを希望していた。生きていうちに実現できなかったが、死後、本格的な日本庭園が造られた。

リカたちは宿泊するホテルまで送ってもらっていた。リカは、車内からモナコの街風景を眺め

ていた。そこは岩山が迫り、海岸沿いに住宅やビルが建ち並んでいる。中心街には国営賭博カジノをはじめ、湯治場、ゴルフ場、水泳場、美術館、植物園、豪華なホテルなどの設備が豊富で、世界中から富裕層が大金を落としに来る。

また、モナコの夜景は、「世界新三大夜景」と言われるほど、世界的にも夜景が美しい場所として有名である。香港、ナポリなどに引けをとらない美しい夜景を見る事ができるわけである。

「...明日、モナコグランプリが開催されるそうよ...」

モナコグランプリのレースコースは市街地のため、ツアーで観光客が開催前日にコースとなる公道の前で記念撮影をしていた。レース前日でも人の数は多く、大いに賑わっている様子であった。

リカたちは宿泊するホテルに到着し、ホテルマンに出迎えられた。宿泊地はVIP御用達の高級ホテルであった。二人はチェックインを済まし、宿泊部屋まで丁寧に案内された。

「...五分後、私の部屋に来て...」

「分かりました」

部屋は高級感が漂い、窓から外を覗くと美しい景色を一望でき、F1レースの観戦も可能である。

リカは室内を見渡すと、あるものが目に入った。テーブルの上に封筒とコンパクトケースが置かれていた。それは支給品であった。

まず彼女は、封筒を確認しようとした。中には新たな身分証明証とパスポート、仕事での注意事項の書類、そして、現場復帰の歓迎の手紙が入っていた。リカは、身分を証明出来るものだけ抜き取り、書類等は、時間がある時にゆっくり目を通すことにした。

次に彼女は、コンパクトケースを開けた。中には愛銃であるグロック26が収納されていた。今回、特殊な装置は内蔵されておらず、弾も通常弾で常人でも撃てるようになっている。リカは銃を手に取り、弾倉を抜き差ししてからケースの中に戻した。

五分経ち、二人はさっそく仕事の件について話し合おうとした。

「.....さて、内容の確認をしましょうか...標的はこれよ...」

ケイは、タブレットに標的の写真を表示させてリカに見せた。

「...この女性ですか？」



「...ええ、名はエヴァ・ルシフェル 二十六歳、父親はフランスの大物政治家で、自身も政治の道に進もうとしたけど、数年で政界から姿を消したわ...」

「...今、彼女は？」

「.....やり手の実業家だけど、裏では世界の犯罪組織や独裁国家軍などを支援する事業を始めたわ...裏社会でもかなりの大物...」

「...彼女がですか...？」

リカが驚くことに無理はなく、彼女の姿を見ると、ショートヘアの髪型が似合い、清楚で気品が溢れ、リカたちより若く、女優でもおかしくないほどのプロポーションであった。

「...事実よ、これを見て」

ケイは、リカに別の画像を見せた。それは怪しい取引現場に写っているエヴァの姿であった。

「成程...私たちが彼女を捕らえるわけですね？」

「ええ、最近、軍事、兵器産業が潤っていてね...市場は拡大の一途を辿り、世界各地の紛争で使用されている大量殺戮兵器の一部は、彼女が提供しているそうよ、平和な日本にも出回っているから驚きよ、彼女を餌にすれば、多くの犯罪組織を割り出せるし...一石二鳥よ...！」

「...なぜフランスではなく我々が引き受けることになったんですか？」

「...地元の捜査員はあまり乗り気じゃなくてね...彼女の父親は大物政治家...次期大統領に一番近い人材とされている...どうやら政府に圧力をかけられたそうよ...それで藁をもつかむ思いで私たちに依頼した...最近の活躍を見て、能力を買ってくれてるみたいで...私たちだけ極秘で捜査するよう頼まれたわけよ...」

「成程.....それで彼女はモナコに？」

「...ええ、この国に彼女の別荘があつてね、ビジネスも兼ねて滞在しているという情報が...それと...」

「？」

その時、ケイはさらに顔が強張った。

「.....実は彼女の別荘に偵察しに行った仲間がいるんだけど、ミスをして捕まってしまったの...まだ生きていようだけど、早く救出しないと...！慎重かつ確実に動くことを頭に入れて...！」

「...了解しました！」

「それじゃあ早速、標的の顔を拝みに行きましょうか...」

二人はミーティングを済ませて、リカは自分の宿泊部屋へと戻った。外出するまでかなり時間があり、彼女は部屋の探索の続きを始めようとした。浴室でのシャワーの水圧、ベッドの寝心地など部屋の隅々を確認していた。そして、最後にクローゼットを開けると何着か衣装がかけられていた。

まず目に入ったのがスーツ一式であった。

リカたちエージェントは、レディースではなく、表稼業で男役を演じていることからメンズを完璧に着こなす術を持っていた。また、仕事で着るスーツは、有名ブランドのオーダーメイドで、裏稼業に欠かせないアイテムの一つである。

次にリカの目に入ったのは、煌びやかなドレスであった。札のようなものが付けられており、「今夜の外出する際、このドレスを着てくるように！」と書かれていた。

「.....」

リカはドレスに触れると、なぜか苦い表情を浮かべた。

それから日が沈みだし、モナコ市は夜の顔を出し始めた。名物の美しい夜景を一望できて夜でも街は賑やかであった。

リカたちは送迎車である場所に送ってもらっていた。

カジノ・ド・モンテカルロ 別名グランカジノ。

一八七八年に開館したカジノ・ド・モンテカルロは、パリのオペラ座を作ったガルニエという建築家が造った建物で、モナコの象徴ともいえるものして有名である。世界中からセレブリティたちが集まり、世界基準でもレベルの高いカジノとなっており、どちらかと言えばカジノでの遊びを知り尽くした人向けの上質なものである。VIP向けのカジノ施設もあるため、セレ

ブリティーたちがお忍びで訪れる。

内部には豪華な部屋がいくつも並び、一つ一つの部屋を見て回るだけでもヨーロッパ貴族の社交界の優雅さを味わうことが出来る。また、カジノフロアにはステンドグラスや絵画などの美しいインテリアデザインが施されていて、百年以上昔のスロットマシンなども展示されている。

リカたちはこのカジノに標的であるエヴァが現れるという情報を入手したため訪れていた。

このカジノは、一般的なカジノとは異なり、しっかりとしたドレスコードが設けられている。よって、二人はアカデミー賞パーティーの時に着るようなロングドレスで館内に足を踏み入れた。

「.....この格好じゃないと駄目なんですか？」

リカは、小声でケイに話しかけた。

「...一般旅行者向けのスペースでは正装する必要ないけど、彼女は一流実業家...VIP向けの方に顔を出すわ...そっちでは正装する必要があるからね...何か問題でも？」

「.....何か落ち着かなくて」

「...どうして？ドレスは着ることあるでしょう？変装する時とか...」

「...どうもこういうの苦手でスースーするんです...」

「.....じき慣れるでしょう、できるだけ上品に歩いてね...」

ケイは呆れて先に進んだ。リカはまだ恥ずかしそうにして館内を歩いていた。

館内を見渡すと、やはり世界でも有数のセレブの姿ばかりで彼らは大金を賭けてゲームを楽しんでいた。二人はバーカウンターから周りの様子を見ることにした。

「...皆、目がキラキラしているわね、ちょっと賭けてみる？」

「...私、ギャンブルに興味がないので遠慮しときます...」

「.....全く欲がないわね、一応五百万ユーロあるから...賭けたくなったら言って」

「!...どうしてそんな大金を？」

「...この国は金持ちしか相手にしないわ...仕事のためなら用意できる...」

リカは愕然として、ケイの話を聞いていた。

「...！」

しばらくバーでカクテルを飲んでいると、リカたちはある気配を感じ取った。

何やら物々しい雰囲気、オーナーに案内された団体が現れた。

「...来たか」

リカたちはその団体から目を離さなかった。大柄のサングラスをかけた男たちは、護衛のようで所定の配置について歩いていた。護衛されている人物こそエヴァ・ルシフェルであった。一気に緊張感が高まり、二人は固唾を飲んでエヴァたちを監視していた。

「...今回は偵察に来ただけだから気を楽にして！」

「...了解」

「...主要メンバーが揃っている...彼女の傍にいるのは秘書と経理...細身で長身の青年が秘書で、眼鏡をかけた小柄の中年男性が経理よ...運営している会社で二重帳簿の疑いがあるところよ...」

エヴァは、ルーレットコーナーに案内されてゲームを楽しんでいるようであった。

リカたちは気配を悟られないよう、じっと彼女を見ていた。それから数時間、特に怪しい動きがないので、二人はカジノから去り、次の行動に移ろうとしていた。

## モナコ奮闘記

---

モナコの夜景が見渡せる山中に、美しい白城がぼつんと建っている。それは別荘のようであった。夜中のためライトアップされ、警備も厳重になっていた。家主はエヴァ・ルシフェルであった。

エヴァは、仕事のために行ったグランカジノから戻り、なぜか自分の部屋に戻らず、地下フロアの方に向かった。

「ボグオ...！」

エヴァが、部下と共に地下につながる階段を一步一步降りていくと、何やら鈍い音が聴こえだした。地下フロアに辿り着くと、そこは洞窟のように暗くて空気は冷たく、薄気味悪い場所であった。

蠟燭の火で若干人影が見え、岩壁には一人の人物が鎖でつながれていた。その人物を見ると大量の汗を流して、衣服は血で汚れていた。その人物は長時間監禁され、拷問を受けており、体力的にも精神的にも危険な状態のようであった。衰弱している謎の人物であったが、長身で体つきは、引き締まっている方であった。呼び名を長身Aとする。

長身Aの視線の先には、熊のような大男が立っており、手には棒状の鈍器を持っていた。大男は、それで数えきれないほど長身Aの体を叩き付けていた。

「.....そろそろ何か吐く気になったか？」

大男は、嬉しそうな顔で長身Aにそっと話しかけた。

「...ぺっ！」

長身Aは、大男に向けて溜め込んだ血を吐いた。

「...貴様！」

「.....お望み通り吐いてやったよ...満足か？木偶の棒」

「.....俺は女だろうと容赦しないぞ...！殺すことだって出来る...！」

「.....彼女はまだ殺しては駄目よ！」

「...ボス！」

大男は、慌ててエヴァの方に振り向いて素直に服従した。

「...お帰り、ご苦労様...」

長身Aは、エヴァに明るく振る舞った。

「...あなたも強情ね、そんな体にまでなって...話す気にならない？何が狙い？」

「...ならないね、あんたの部下にいたぶられるのが癖になりそうだよ...」

「...こいつに何をしても無駄です...！もう殺りましょう！！」

「...黙りなさい！これだから野蛮人は...」

大男はエヴァに怒鳴られ、しょぼくれていた。

「.....さて、どうする？このまま拷問を続ける？」

「.....」

長身Aは、余裕の表情を浮かべてエヴァを動揺させた。

「.....いいわ、しばらく休憩しましょう...別の手を考えるわ...」

「...それは楽しみね」

「.....お腹減ったでしょう？用意するわ」

「...どうも、あと頼みたいことがあるんだけど...」

「...何？」

「...強い酒が飲みたい...」

エヴァのおかげで長身Aの寿命は延び、その夜を凌いだ。

数日後、何やら街中が賑やかであった。その日は、ル・マン二十四時間、インディ500と並んで世界三大レースの一つと言われている伝統と格式の高いモナコグランプリの開催日であった。予選は終わり、ついに決勝レースとなり、勝ち残った猛者が揃っていた。

モナコグランプリは、市街地コースが特徴的でグランプリ期間中、普段は人口三万人の小国に、およそ二十万人の観客が訪れる。モナコ王室を始めとして、政財界の協力によって行われる国家的な観光イベントでもある。

レースを楽しみに世界各国から熱烈なファンたちが集まる中、別の目的で街中を歩いている者がいた。それはリカであった。

リカはダークスーツで身に包み、群衆を潜り抜けながらホテル街へと突き進んだ。

「...現場に到着...標的は？」

「三〇一六号室よ...」

リカは、ケイの指示でホテルの一室に向かった。彼女は、監視カメラを気にしつつ、脱いだ上着で隠しながら銃にサイレンサー（消音装置）をとりつけていた。そして、リカは用のあるフロアに着くと、部屋の人間に気づかれぬようそっと歩いて行った。

「...コンコン」

リカは、三〇一六号室の扉をノックした。

すると、雑談していた部屋の中の間人たちは驚いた様子であった。人数は五人、がたいがよくて、スーツを着た男たちであった。彼らは警戒して息を殺して扉の方をじっと見た。

「...おい、見てこい」

一人の男が命令され、扉の方へと向かった。手には銃を持っていた。のぞき穴で廊下を確認しようとするところには誰もいなかった。見張りの男が誰もいないと首を振ると、奥の男は一応確認しろと合図した。見張りの男は、確認のために静かに扉を開けようとした。

「ボゴ...！」

すると、見張りの男は急に顔面を殴られて気絶した。リカは、死角に潜んでいたのがあった。

「.....誰だ？」

男たちはざわつき、リカと目が合った。

「...ちょっと訊きたいことあるんだけど...」

男たちはリカの質問を聞こうとせず、抵抗しようとした。彼女は少しも焦らず冷静に対応して、次々と相手を倒していった。

数分後、騒ぎは落ち着いたようであった。

リカは、部屋に置いてある酒を一口飲んで倒した男たちから話を聞こうとした。

「...エヴァ・ルシフェルは何処？」

「...さっき、うちのボスとここで取引をしていたが、もう帰った...何処に行ったかは知らない...  
...本当だ！」

「.....あっそう」

リカは、嘘を言っていないか見極めてから男に打撃を与えて気絶させた。彼女の周りには気絶した男が寝転がっていた。

「.....力は衰えてないようね、安心したわ」

「...いえいえ、力の加減が難しいですね、銃はまだ使っていません...」

「...結構、まだ使う必要はないわ...手がかりがなければ次行きましょうか？」

「はい.....！！」

その時、リカは部屋である人物と目が合った。その人物は、ホテルの従業員ではなく、エヴァの部下であった。彼は驚きのあまり口が開いたままであった

「.....あら、何か用？」

「...お前は何者だ？」



「.....ちょっと人を探していてね...エヴァって女性.....ちょっと待って...何かあなたの顔見たことあるような...確かカジノで...」

「...！」

リカは、男の正体に気づき出した。それは一瞬のことであった。

「...ドン！」

彼は、すかさず左胸の襟元の内側に手を突っ込み、装備している銃を取り出してリカに向けて発砲した。

「...パシュ...パシュ...！」

リカは弾を避けて、相手に撃ち返した。二人は壁やホテルの備品、気絶した男を盾にして、激しい銃撃戦を行った。他の宿泊客は、リカたちの騒ぎに気づきだし、そっと廊下に出ていた。

しばらくするとお互い弾切れになり、リカが弾を補充しようとする、男は彼女に飛びかかって来た。

「...バギ...ドガ.....ポコ...！」

男は、リカの上に馬乗りになって動きを封じようとするが、それは上手くいかず、払いのけられた。それでも二人の睨み合いが続き、お互い自慢の体術を披露して黙らせようとした。

男の大きな拳がリカをとらえるが、彼女は瞬時に防御した。少々後退するが、リカはすぐに体勢を立て直した。

男の猛攻は止まらず、部屋にある備品を武器にしてリカに迫って行った。リカは少しも退かず、攻めるのを止めなかった。彼女は相手の隙を見つけ、反撃しようとした。

「...ドゴ...バキ...ドド...」

リカの華麗な蹴りが男に炸裂していき、彼女の方が優勢になろうとしていた。エヴァの部下は手が出せず、立ち上がるのにかなり時間が掛かっていた。

「...ふう、ちょっと休みましょうか？」

「...！」

「...ドン！」

男は、またリカに向けて発砲するが、適当に撃った後、そのまま背を見せて部屋から出ようとした。彼は逃げることに全力を注ごうとした。

「...逃がすか」

リカは銃に弾を補充して、男を追った。彼女は標的が乗ったエレベーターに乗り遅れ、仕方なくもう一基のエレベーターを待った。

「...どうしたの？まさか逃がしたの？」

ケイが心配して無線で状況を確認した。

「.....ええ、すみません、でも大丈夫...発信器をつけてるんで...」

「...とにかく急いで追って...！騒ぎが大きくならないうちに捕らえないと...」

「...了解！」

リカは、発信器を頼りに標的の男を追った。

ホテルを出ると、道はほとんどレースの観客で埋まり、なかなか前に進むことが出来なかった。もうスタートの時間が迫っていた。リカは、人ごみの合間を縫って標的を探した。距離は百メートル近く離れており、リカはどうか距離を縮めようとした。

「...ドッ！」

その時、リカは強引に進み、観客数人とぶつかってしまった。

「...いて～な～姉ちゃん...もうレース始まるっていうのに、何ちよこまか動いてんだ？ああ？」

「.....」

ぶつかった相手は、ガラの悪い強面の男たちであった。リカは彼らを見向きもせず先に進もうとした。

「...こら、こっち向け！」

ガラの悪い男たちがリカを止めようと、肩を叩いたことで惨劇が起こった。

「バキ...ボギヤ...ズギヤ...」

ガラの悪い男たちは、一瞬でリカに倒された。彼女は何事もなかったかのようにその場を去って行った。

野次馬たちは、怖い顔をしたリカと目が合い、すぐに道を開けた。

標的の男はリカの気配に気づき、それまで観客に紛れてじっとしていたが、走って逃げる準備をしていた。徐々に距離が縮まって行き、リカはついに標的を発見した。

「...ちっ」

標的の男は舌打ちして、背後を気にしながら人波から抜けようとした。しかし、リカとの距離は目と鼻の先であった。

「...え？」

リカは突如、様子が一変して標的の男に近づくのを躊躇した。

「...ドン！ドドン！！」

「...きゃあああああ！！」

男は、大勢の観客がいる中で銃を発砲した。同時に悲鳴が鳴り響き、周辺は騒然となった。標的の男が撃った銃弾は、観客の何人かに命中していた。

「.....よくもこんな真似を...！」

標的の男は感情を表に出さず、リカは彼の行為に対して、怒りで震えあがっていた。

手段を選ばない標的の男は、銃を向けながらその場から逃げようとして、警備についていた警官隊も駆けつけたため、人波はさらに荒れた。

標的の男は歩道を抜け出し、レースに使用されている公道の方へと走って行った。リカは、彼を必死に追跡しようとしていた。警官隊が彼らを呼び止めるが、二人には声が届かなかった。

「.....！！！」

その時、目の前には一台のレースマシンが走って来ていた。近くにいるリカたちは思うように

体が動かず、立ち止まった状態であった。

「...何！！」

このまま衝突するかと思われたが、レーサーは非常事態に気づき、ハンドルを思いっきり切った。そのまま横転して観客がいる方にコースアウトすると思われたが、プロのテクニックを披露して持ち直した。マシンはトラブルを乗り越えてレースを続行した。もし、レーサーが運転を誤っていれば暴走して、観客がいる方向に激突して大惨事になるところであった。

「.....わあああああああああ！」

これにより、さっきまで脅えていた観客たちは、恐怖感が消えて歓声を上げた。

標的の男は、その場からどうにか逃げだし、リカは警官隊に取り押さえられ、そのまま連行された。

「.....」

ある高層ホテルの一室で高みの見物をしている者がいた。その人物は、元々レース観戦をしていたが、リカたちの騒ぎに興味を持って覗き込んでいた。その人物の正体はエヴァであった。

彼女は、双眼鏡を部下に渡して何かを指示しているようであった。

レースの方は、途中トラブルが起きたが、中止にはならず、最後までちゃんと行われた。こうして、波乱の追跡劇と世界的大イベントは、幕を閉じようとしていた。

レースは終わり、コースの撤去作業が進められ、閉鎖された公道には一般車両が姿を見せ、交通整理されながら走行していた。

ケイは、赤のRCZを運転して、ある場所に向かっていった。目的地は地元の警察署であった。

ケイは、連行されたリカを迎えに行こうとしていた。リカは独房に入っていたが、ケイの連絡を受けてすぐ解放されようとしていた。ケイは幼稚園の送り迎えをするような感じで署内へと入って行った。

「...やれやれ」

ケイは、手続きを済ませてリカがいる場所に案内された。

「...ケイさん！」

「.....本当にあんたは世話が焼けるわね」

「...すみません」

ケイたちは世話になった責任者に礼を言って警察署を後にした。ケイは、リカをRCZの助手席に乗せて説教を始めた。

「...この国は比較的、犯罪が少なくてね...そう大事件は起こらない...私がいなかったらこんなにすぐに出れないわよ...」

「...被害の方は？」

「...三名ほど、銃弾が当たったけど、軽傷だからすぐに退院出来るそうよ...」

「...そうですか」

リカはケイの返答に対し、安堵の表情を浮かべた。

「.....もし観客に死人が出て、レースが中断すればと考えるとぞっとするわ...運がよかったわね...」

「...ええ、私も死んでいたかも...命拾いしました...！」

「...あんたたちの騒動に巻き込まれたレーサーは二年連続優勝しているベテランだったわ、今年も優勝...どこまでもついているわね...」

「.....あの...追っていた男の行方は？」

「...発信器つけてたみたいだけど、反応が消えたわ...故障かしらね？」

「.....これからどうするんですか？」

「...そうね、本当なら今日、彼女もろとも一網打尽にするつもりだったけど、予定が大きく崩れたわ...」

「...すみません」

リカは、酷く落ち込んだ様子であった。

「...まあいいわ、ひとまず出直しましょう...もう強行突破と行きましょうか...明日、別荘に行く

わよ」

「...エヴァの別荘にですか？」

「...ええ、滞在期間が限られているから...そろそろ成果出さないとね～明日は早いわよ...飯食って早く寝ましょう～」

「...そういえばお腹空きましたね～あの警察署、何も出してくれないんだもん...普通ならカツ丼とか出るでしょう～？」

「...あんた、ここは日本じゃないのよ、それに昔の刑事ドラマ観すぎ...」

ケイはそっとリカに突っ込みを入れて、宿泊先まで車を走らせた。

一方、リカから逃れた男は、エヴァの別荘に帰還していた。彼は心身ともに疲れているようであった。しかし、休む暇もなく、男はエヴァに呼び出されていた。

エヴァは専用デスクの椅子に腰かけ、不機嫌そうな顔で男を見て、重い口を開こうとした。

「...今日は災難だったようね...」

「...はい、変な奴に出くわしまして...」

「...何者なの？」

「...分かりません...日本人のようでしたが.....ボスのことを訊かれました...」

「...その様子だと好意を持った人物ではなさそうね...それであなたは何も情報も掴めずおめおめと逃げてきたわけ...？」

「.....申し訳ありません...！」

男の顔色はますます悪くなっていき、言い訳の言葉も見つからなかった。

「.....あなたってお遣いもろくに出来ないのね...情けない...もう要らないわ！」

「...！！！」

「...ガチャ」

その時、部屋の扉が開き、恰幅のいい二メートル越えの強面の男二人が入室してきた。

「...ボ...ボス！！どうかお許しを！！」

男は、強面の男たちに体をつかまれ、強制的に退室させられた。男の言葉はエヴァに全く届かず、彼はそのまま闇に消えた。

それから数分後、エヴァの部屋にまた新たな訪問者が訪ねてきた。

「...コンコン」

ノックの音に反応したエヴァは、すぐに来訪者を招き入れた。

「.....あなたに訊きたいことがあるんだけど...」

エヴァは、何かを企んでいる様子であった。そして、決戦の日を迎えた。

リカたちは、早起きして軽く朝食を取り、チェックアウトを済ませた。二人は早速エヴァの別荘に向かおうとした。

「...優雅なホテル暮らしも終わりね...」

「...実に残念ですけど...やっぱり少しでも賭けとくべきだったかな？ルーレットどっちに賭けます？」

「...黒に全額」

「.....私は赤に全額ですかね～」

「...やっぱりお金は自分の腕で稼がないとね...まだ現役バリバリだから...」

「...ええ、それじゃあ稼ぎに行きましょうか...」

リカたちは軽く冗談を交し、RCZに乗り込んだ。

エヴァの別荘は山の方にあり、名物レースが終了したことでスムーズに運転することが出来た。RCZは、都市部を抜けて山道に移ろうとしていたが、怪しい影が監視しているようであった。リカたちはそれに気づき、会話を止めて後方を気にした。

尾行していると思われる車は、黒のプジョー207が二台、運転しているケイは、アクセルを強く踏んだ。それと同時にプジョーもスピードを上げた。

走行する山車道は坂道で急カーブが多く、レースコースに出来ない程、難関であった。幸い、比較的車の数が少なかったため荒っぽい運転が可能であった。

激走する中、プジョーの窓が開き、搭乗者が顔を見せて手には自動小銃を持っていた。

「...朝っぱらから賑やかになりそうね...」

ケイが冗談を言った直後、銃声が鳴り響き、RCZは格好の的となった。ケイは自慢の運転技術で攻撃から逃れようとした。しかし、それでも相手はしつこく、すぐに追いつき攻撃を続けた。

「...このままじゃあ逃げ切れませんよ...私にお任せを...！」

「...あら、昨日の借りを返してくれるの？」

リカは静かに頷き、車の窓を開けた。

「...チャ」

リカは風に当たりながら愛銃グロック26を抜いた。

「...ドン...ドドン！」

リカの撃った弾は、一台のプジョーに命中し、そのまま横転した後、制御が利かず近くの車に衝突した。これで追手の車はあと一台、激しいカーチェイスはまだ続くのであった。

二台の車は、山中のトンネルを抜けて、山の間地点に辿り着いた。そこにはモナコの美しい景色を見ようとする観光客が集まっており、たちまちそこは惨劇の場と化した。

観光客が逃げ惑う中、ケイはクラクションを鳴らしながら前進した。追手はいったん車中に引っ込み、プジョーをRCZの横につけて、何度も体当たりを続けた。二台の車は傷つきながらも走行しており、RCZは強引に前に進もうとするが、追手はまた何かを企んでいた。



「...!!」

追手はRCZに向けてある物を放り投げた。それは手榴弾であった。

「...ドバン!!」

気づいた時にはもう遅く、RCZは爆発に巻き込まれた。手榴弾の爆発の影響で辺りは煙に包まれた。

追手は車を停めて、武器を持ちながら炎上しているRCZに近づこうとした。リカたちの気配はなく、追手はもう死んだと確信して引き揚げようとした。

「.....ドン！」

その時、銃声が鳴り響き、一人の追手が倒された。残りの追手は啞然としていた。

銃弾は視界の悪い煙の中から発射された。

「...ドン...ドドン...ザシュ！」

今度は銃弾に加えて斬撃が発生し、残りの追手は瞬く間に倒されていった。

リカたちは生きており、油断している追手を一掃した。

「.....間一髪でしたね...」

「...これくらいの危機は乗り越えないとね...プロなんだから」

「...でも足が無くなりましたね」

「...レンタカーだから弁償しないとね...まだ結構距離あるんだけど...」

「.....先輩、どうにかなりそうですよ」

リカは、追手の車に乗り込んでエンジンをかけていた。ケイは笑みを浮かべて助手席に乗り込んだ。リカたちは追手の車を借りて目的地に向かった。

リカたちは、エヴァの城に辿り着き、攻め込もうとしていた。

### エヴァの別荘

リカとケイは、追手の猛攻を潜り抜けて、標的のいる別荘に侵入しようとしていた。屋敷のセキュリティは嚴重ではあるが、彼女たちはかまわず正面から入ろうとしていた。

「...ドグワオン！！」

ケイは、閉じられた分厚い扉にプラスチック爆弾を仕掛け、強引に破壊した。扉は爆発で変形して火の粉が舞っていた。

爆音を耳にした警備は、すぐにリカたちがいる場所へと駆けつけた。

「...あの...いいんですか？極秘任務ですよ...確か...？さっきから派手にやっちゃってますけど...」

「...いいの、いいの、後からどうにでも出来るから...ここまで来たら前に進むしかないでしょう～？」

一気に警備に囲まれたリカたちは、怖気づくことなく、それぞれの得物を抜いて戦おうとしていた。

「...どうも表が騒がしいわね」

「...我々の他に誰か来るのかね？」

エヴァは応接間で取引をしていた。取引相手は犯罪組織の幹部であった。

「...他に約束はしていません、どうやら招かれざる客のようですね...セキュリティは万全なので心配いりません...」

「鼠が忍び込んだか...よかったらうちの兵を貸そうか？...退屈そうにしてるんでね...」

「...そうですか、ではお言葉に甘えて...」

「...よし、手を貸してやれ」

犯罪組織幹部は、数人の部下に外の様子を見てくるよう命じた。

「.....では話を続けましょうか」

「...そうだな、契約書にはひととおり目を通した...問題はない...君のおかげで組織の規模は順調に拡大している...」

「...ありがとうございます」

「...本当に商談が上手いな、頭がいいのは父親譲りかな？」

「.....」

その時、にこやかに対応していたエヴァの表情が一変して黙り込んだ。

「...どうした？」

「.....父の話をするのは止めていただけますか...もう縁を切っていますし...」

「.....そうか、それは悪かった.....！！」

犯罪組織の幹部は、エヴァの冷たい目に恐怖を感じて冷や汗を掻いた。

「...ご理解いただき感謝します、私は誰にも頼らず今の地位を手に入れました...大物政治家を父に持つお嬢様など遠い過去の話...新しい自分を創るためなら悪の道に手を染めてもいい...」

「.....いい顔だ、今後の活躍を期待しているぞ...！」

エヴァと犯罪組織の幹部は、お互い気持ちを切り替えて取引を続けた。

同じ頃、リカたちは屋敷内に侵入して、警備の相手をしていた。

「...ドンドン...ドウ...ドギン...！」

屋敷内は、銃声が鳴り響き荒れ続けた。リカは、得意の早撃ちで武装している警備を蹴散らして、ケイは愛刀で銃弾を弾き、次々と相手をなぎ倒した。戦況はリカたちが有利となった。

「...強行突破はいいですが、どうしますか？このまま同行しましょうか？」

「.....いえ、二手に分かれましょう...私は捕まった仲間を助け出す...あなたは先に彼女のも

とへ...！」

「...了解、気を付けて...」

「...あなたもね...幸運を祈ってるわ」

こうしてリカたちは、二手に分かれようとしたが、相手はそう簡単に侵入を許さなかった。広い渡り廊下を通ろうとすると警備は一旦引き下がり、彼女たちから距離をとった。その直後、床に異変が起きて、そこに収納された大型機関銃が姿を現した。

「...ここはからくり屋敷ですか〜？」

「...ドガガガガガガガ.....」

ケイが冗談を言い放つと、いったん引き下がった警備が機関銃の引き金を引き、辺りかまわず乱射した。リカたちは近づけず、ひとまず死角となる壁際へと移った。

二人はじっと攻撃が止むのを待ち、相手の隙を窺っていた。

機関銃は固定式のため、移動して姿を確認することが出来ず、一時攻撃を止め、自動小銃を装備した警備二人が恐る恐るリカたちに近づこうとした。

警備たちは、素早くリカたちに銃口を向けた。

「...バゴ！！.....！」

警備たちは、先手を取られてしまい、殴打され気絶した。

「...！」

機関銃射撃を担当している警備は、異変に気づき、攻撃を再開しようとしていたが、時すでに遅しであった。リカは瞬時に機関銃の銃口を狙い、一発で命中させた。機関銃は暴発して使用不能になった。一人の警備が得物を抜こうとするが、目の前にはすでに刀を持ったケイがいて、対応が間に合わずあっさりと倒された。ケイの攻撃は全て峰打ちであった。リカは致命傷を避けて銃を撃っていた。二人のコンビネーションは抜群で順調に攻略していた。

「...さて大体片付いたわね、もう助けはいらないでしょう？」

「...ええ、私はこのまま進みます」

「...捕われた仲間は何処かに監禁されているはず...地下かもしれない...捜し出してみせるわ...！」

「...ではまた後で.....！」

やっとりカたちは別行動がとれるように思われたが、またもや新手が現れた。その姿は二メートル以上の巨漢で、彼女たちの前で仁王立ちしていた。

「.....まったく次から次へと...そんなに遊んでほしいの？」

「...今までの雑魚とは違うようね...リカ、ここは私がやるわ...！」

「...え？」

「...こんなところでモタモタしていたら標的を逃がすわ...二人で相手をするまでもないでしょう...早く行って！」

「...分かりました、すみません」

リカは、ケイを信じて任せようとした。しかし、大男はリカの前に立ち塞がった。

「...！」

その時、大男は突然、悪寒がした。彼の視線の先には冷たい目をしたケイが立っていた。大男は彼女の迫力に圧され、金縛りのように体が固まってしまっていた。

「...私の可愛い後輩に少しでも触れれば地獄を見る時間が早まるよ...」

「.....分かったよ」

大男は素直にケイに従った。リカはケイに一礼して先に進んだ。

「.....ではぼちぼち始めましょうか？先を急ぐんでね...」

「.....お前ら何者だ？」

「...ちよっとこのボスに用があつてね...それと仲間を取り戻しに来た...」

「...仲間だと？」

「...私たちが来る前に一人来たと思うけど...？」

「.....ああ！あの生意気な女か！お前より目つきが悪かったな...そうか、あいつの仲間か...」

「...居所を知ってそうね、教えてくれたら見逃してもいいけど...」

大男は薄ら笑いを浮かべ、ケイの言葉に応じなかった。

「...ふん、聞く耳持たんわ、お前も彼女みたいに可愛がってやるよ...」

「...何をした？」

「...俺の好きな拷問タイムに付き合ってもらった、なかなかいい声を出していたぞ...お前もいい声で鳴くんだらうな～」

「...！！」

ケイは、大男の下品な口調に耐えられず、頭の中で何かが切れてじっとしていた。

「...どうした？かかって来ないのか？」

「...ルールを決めましょう、私は三分間、一切攻撃しない、ただ避けるだけ、あなたは好きにしてくれたらいいわ、どう？」

「...いいだろう、じっくりと楽しみたいところだが、三分以内に片づけてやるよ！」

こうして、ケイと大男の死闘が繰り広げられようとしていた。

一方、エヴァの方は取引が終わり、屋敷内での騒ぎを気にしていた。

「...おかしいわね、もう結構時間が経ってるけど、報告が来ない...」

「...うちの部下も戻ってこない、何かあったのか？...様子を見に行こうか？」

「...ええ」

エヴァたちは何か胸騒ぎがして、応接室から出ようとした。

「...！...ドギヤ！！！」

その時、扉が勝手に開き、それと同時に一人の男性が室内に弾き飛ばされていた。

その男性は犯罪組織幹部の部下であった。

「...ひい！」

犯罪組織幹部はその光景を見て、愕然としていた。そして、彼らの前にある人物が現れた。

「...どうやらここにお集まりのようだね～」

「...！あなたは？」

エヴァに慌てる様子はなく、部屋に入室したりカに訊ねた。

「...私の名はリカ、エヴァ・ルシフェル...あなたに用がある...」

「...私には多くの友人、知人がいるけど、あなたは初めて見るわね...」

「...こっちだってあなたのことは今まで写真でしか見たことないわ...」

「...ご用件は？」

「...あなた、ある世界ではかなり有名なようね...相当悪事を働いているそうじゃないの...御嬢さん～」

「...成程、私を捕まえに来たわけか...でもあなた日本人でしょう？よそ者に捜査する権利はないでしょう？政府が認めないわよ...」

「...その政府に頼まれたのよ、内部で動く騒ぎは大きくなるから...極秘任務よ」

「...その割には派手に暴れてるじゃないの.....これ全部あなたがやったの？」

エヴァは表が気になり、様子を見ると多くの警備が物のように転がっていた。彼女は恐怖を感じ、ゆっくりと振り返ってリカと目を合わせた。

「...あなたの部下は弱すぎるわ...鍛え直した方がいいよ」

「...やるじゃないの...また新たに雇うわ...もっと役に立つ人材を...」

「...気楽なものね、世間知らずのお嬢様は」

「...これでも結構常識人だと思うけど...じゃないと商売上手くいかないわ...」

「...非合法の仕事でしょう？偉そうに言ってんじゃないよ！」

リカとエヴァはお互い気が強いため、一歩も引かず、二人の間に火花が散り、口論は激化していった。

「.....よくも俺の部下まで酷い目に遭わせよって...！ただでは済まんぞ！！」

機嫌の悪いのはリカたちだけでなく、犯罪組織幹部は、リカたちの口論に割って入った。リカは、ゆっくりと犯罪組織幹部と視線を合わせた。

「...チャ！」

リカは、黙って犯罪組織幹部の口に自分の銃を押し込んだ。

「...が...ご...ああ...！！」

犯罪組織幹部は、銃で口を塞がれて喋られず背筋が凍っていた。エヴァの護衛も怯えて冷や汗を掻き、ぴくりとも動こうとしなかった。

「...風穴開けられたくなかったら少し大人しくしといて...」

リカは冷たい表情を浮かべ、犯罪組織幹部を脅し、彼は静かに頷いて素直に応じた。

「...へえ、実力は本物のようね...でもプロのモデル並みにスタイルなのにこんな仕事してるなんて勿体ないわ」



「お互い様よ、あなたなら一流女優にでもなれたでしょう？」

「...そういうの興味ないのよ、稼いだ実感が湧かないから」

「...ほぼ同意見よ、それに今はこの仕事しかなくてね...」

「.....そういえばあなたに似た人物が同じように訪ねてきたわ...あっさり捕まってこっちで預かっているけど...」

リカは、今のエヴァの発言に対して、敏感に反応した。

「...仲間を返してもらおうわ！」

「.....いいわ、会わせてあげる」

「？」

リカは意外な展開に驚愕していた。

「...コツコツ」

すると、奥の渡り廊下から足音がかすかに聴こえ、その音は大きくなっていった。明らかにリカたちがいる場所へと向かっていた。

「...ガチャ」

しばらくして応接室の扉が開かれ、ある人物が来室した。

「...！」

その時、リカの表情が一変した。

一方、ケイは大男の猛攻に立ち向かっていた。彼女は、約束通り一定時間攻撃せず、紙一重で回避していた。大男は自慢の怪力を駆使して、警棒のような武器で休まず攻撃を続けた。

そして、そろそろ約束の三分が経とうとしていた。大男は、大量の汗を流して、疲れている表情を浮かべていたが、ケイは特に疲れていない様子であった。

「...大丈夫？フラフラだけど...」

「...このアマ...ちょこまかと.....！」

「...もう三分経ったわ、悪いけど、もう攻撃させてもらうよ...」

「...ふん、好きにしな...」

大男は薄ら笑いを浮かべ、踏ん張って立とうとした。反撃するケイの顔は一変していた。彼女は愛刀を使わず、格闘術で攻めていった。

「...バゴン...バゴ...ボゴ...！」

ケイは、どちらかといえば小柄で体の線が細い方であったが、見た目以上の力があり、一瞬で大男の力を凌駕していた。

「...なんて重いパンチだ...！この女、何者なんだ...？」

大男は、完全に圧されて防御することで精いっぱいであった。

「...どうしたの？さっきの威勢はどこ行ったの？」

「...調子に乗るなよ！その脳天に一撃喰らわせてやる！」

大男が反撃をしようとするが、すでに遅く、彼の視界は真っ暗となった。

「...ドバン！うげ.....！」

ケイは、大男に目がけて戦闘で崩れた壁の大きな破片を投げつけた。彼は衝撃で尻餅をついた。

「...悪いけど、あんたと遊んでる時間ないんだよね～最後のチャンスよ、捕われた仲間の場所を教えてくれたら見逃すわ...」

「...ふん、勝った気であるようだが、俺はまだやれるぜ...かかって来いよ...」

「.....あっそう、じゃあ仕方ないね...」

その後、大男は地獄を見ることとなった。

一方、エヴァの別荘、応接室。

リカの前に姿を現したのは、捕まって拷問を受けていた長身Aであった。彼女は無言のまま長身Aと目を合わせた。長身もまた口を開こうとしなかった。

「...彼女でしょ？ご覧のとおり無事よ」

「.....」

「...あまり感動してないようね、何が不満？」

「...実は捕まった仲間の顔を知らないの、臨時で呼ばれたものだから...もう一人の仲間を確認してもらわないと...」

「...そう、面識はあるの？」

「...あまり...かなりの先輩だけど...」

「そうなの？.....もう一人のお仲間を待つのもいいけど、それまで退屈だわ、一つゲームをしましょうか？」

「...ゲーム？」

「ええ、あなたも参加してもらおうわよ」

エヴァは、リカと長身Aを部屋の中心に来させた。

「...でどうするの？」

「...至ってシンプルよ、今からあなたたちに殺し合いをしてもらおうわ...！」

「...！！」

「お互い相手の急所を撃ち抜くのよ、撃ち合ってどちらかが生き残れば、そっちに従う...もし二人とも死んでしまえばゲームオーバー...簡単でしょう？」

「...同士討ちが目的ね、どうせどっちか生き残っても後から殺すんでしょうが...」

「...約束は守るわ、ただし銃はこれを使ってもらうわ...」

リカと長身Aに渡されたのは、普通のハンドガンであった。

「...これで撃ち合うわけ？」

「ええ、自分の銃だと細工しているかもしれないからね...弾は一発しか入っていないから勝負はすぐ決まる...もし、途中でゲームを拒否したり、怪しい素振りを見せれば彼らに撃たれるわ...ご理解頂けた？」

リカたちの近くに、それぞれ銃を構えたエヴァの護衛が立っていた。

「私は特に問題ないけど、あちらさんは大丈夫なのかな？」

「.....」

リカは長身Aに応答を求めるが、彼女は無反応であった。

「...彼女は私の言葉にしか反応しないわよ...身柄を自由にすることを条件に忠実な部下になってもらったわ...彼女が勝てば都合がいい...」

「上手く手なずけたってわけね...それじゃあとつとと始めましょうか...」

「.....ちょっと待って...あなたの銃は私が預かっておくわ...」

「...大事に扱ってよ、暴発する可能性があるから...」

リカは、エヴァにそっと愛銃を手渡して、長身Aと向き合った。

「...いつでもどうぞ、私は準備出来てるんで...先輩！」

「.....ふ」

その時、長身Aは軽く笑みを浮かべたように見えた。リカたちは、一定の距離をとって呼吸を整えてから構えた。すると、二人の目つきが変わり、室内は緊迫感高まる空間に変化し始めた。普段冷静なエヴァも、今の状況に怯えているようであった。

これが数々の窮地を乗り越えてきたプロ同士の命のやり取りであった。勝負は一度で決まることになり、お互い全く隙がなかった。

「...！！！！！」

リカたちは、自分のタイミングで銃を抜いた。抜いた速度はほぼ一緒に、あとは引き金を引くだけであった。

「.....ドドン！！」

運命の引き金は引かれ、二発の銃声が室内に鳴り響いた。それから数秒間、時間が止まっているようであった。

「.....」

これで勝負が決まったかのように思われたが、リカと長身Aに変化がなく、無言のまま立っているだけであった。

苛立ったエヴァは、今の状況に黙ってられず、大きく口を開こうとした。

「...こ...これはどういうこと？一体どうなったのよ！！」

エヴァは叫んだ途端、石のように固まっていたリカたちがやっと動き出した。

「.....勝負は終わったよ、結果は見ての通り...」

リカは、怖い顔をしたエヴァに対して冷静に答えた。

「...な...何を言ってるの？二人とも立っているじゃないの！ふざけるのもいい加減に.....」

「.....もう茶番劇は終わりよ！」

「...？」

突如、今まで無言だった長身Aが喋り出したので、エヴァは目が点になった。

「...どうして？あなた命令に背く気？」

「...ガチャン！」

長身Aは、撃った銃を床に放り投げて、魂が宿った生き生きとした表情を見せた。

「...私はあなたの操り人形になった覚えはないよ...」

「...何ですって？」

「...女王様を気取るのもここまでよ、両方生き残ることを考えなかったの？シナリオ通りにはいかなかったわね...」

リカは、長身Aの策に気づいていた。

「...二人で私を騙したのね...？」

「...そういうこと～私も後輩も演技には自信があるんでね...」

「...もう許せない！死んでもらうわ...！」

怒りが頂点に達したエヴァは、護衛にリカたちを殺すよう命じた。

「...！」

リカたちは、抵抗して護衛に立ち向かおうとした。

リカは護衛に弾切れの銃を投げつけて、顔に当て、その隙に素早く銃を破壊してからひと蹴り浴びせて気絶させた。

一方、長身Aの方は、なぜか護衛が引き金を引けず、その隙に彼女に足払いされ、動きを封じられた。これで形勢逆転となり、エヴァは顔が青ざめていた。

「...さてどうする？まだ抵抗する？」

「...くっ.....！」

その時、窮地に追い込まれたエヴァは、預かっていたリカの銃を構えようとした。

「...それは玩具じゃないことは分かってるよね...?仕事で取り扱っているんだから...」

エヴァは、手を震わせながらリカに銃を向けて撃とうとしていた。

「...誰にも.....私の...邪魔はさせない...邪魔する者は殺す!!」

「...そう?それなら撃てばいい...気が済むのなら好きにすればいいわ...」

リカは、エヴァに銃を撃たないよう説得しようとはせず、彼女との距離を詰めながら撃つよう勧めた。長身Aは間に入ろうとはせず、じっと様子を見ていた。

「.....うわああああああ.....!」

挑発に乗ったエヴァは、叫びながらリカに向けて引き金を引こうとした。

「...ドン!!」

「...?」

ついにエヴァが銃を撃ち、銃声が鳴り響いたが、撃たれたりリカには特に異変はなかった。打たれた弾は大きく的を外していた。エヴァは撃った衝撃で手を痛めて蹲った。

「.....やっぱりね、思った通り、あなたは一度も銃を撃ったことがない...そんな小さい綺麗な手では、そのじゃじゃ馬を扱えないわ...銃を撃てない人が、殺戮兵器を扱っているなんてとんだ皮肉ね...」

「...あなたの負けよ、観念しなさい」

長身Aは、蹲ったエヴァをゆっくりと立たせた。

「.....どうしてあなたみたいな女性がこんな犯罪に手を染めたの?問題は父親?」

「.....あなたなんかに話す気はないわ...」

優しく質問したりカに対してエヴァは冷たく返した。

「.....彼女には訊く権利があるよ、実は今回の件はあなたの父上に頼まれたのよ...」

「え？」

エヴァは、長身Aの言葉で理性を取り戻しつつあった。

「...悪の道に進んだ娘に気づいた父上は、放っては置けなかったけど、周りが気を遣って捜査しようとしなかった...それで私たちの組織のことを知り、依頼されたのよ」

「.....余計なことを」

「...父上はどんなことをしてもあなたの暴走を止めようとした...その気持ちが分からない？」

「...彼を一度も素晴らしい父親と思ったことないわ...あいつが最低の男よ！仕事を優先して家族はほったらかし...母に苦勞ばかりかけていた...母は過勞で亡くなったわ...あいつは葬儀にも来なかった...国にとっては英雄かもしれないけど、私にとってはただの悪魔よ...！」

エヴァは包み隠さず、思い出したくない記憶、父親への思いを語った。

「...その話、父上から聞いたわ、葬儀は出張で行けなかったそうよ...だから妻の命日には必ず墓参りに行くと言っていた...本当は娘であるあなたと行きたいそうよ」

「...それは無理ね、そんなことで罪滅ぼしにならないわ...あいつには罰を与えてやりたい！」

「...パン！.....！？」

その時、リカがエヴァの頬を叩いた。

「...ちょっと何するの？」

「...ごめん、腹が立ってつい手が出ちゃったわ...許してもらわなくて結構...ただ一言言わせてもらおうわ...」

「...！！」

リカは眉間に皺を寄せて、エヴァに顔を近づけて話そうとした。



「...今、あなたが売っている商品が各国に出回っている、私の生まれ故郷も関わっているわ.....それが原因で多くの尊い命が無残に消えていっている...自分の忌まわしい過去を消したいようだけど、あなたがやらかしたことの記憶は、一生消えることはないわ...犯罪者という烙印が押され、死ぬまで恨まれる...あなたに耐えられるかしら？」

「.....あなたって私より生意気ね...罪は償うわ...」

エヴァはリカの言葉に心打たれ、抵抗しようとしなかった。これで一件落着かと思われたが、まだ見逃してはいけない者がいた。エヴァの取引相手である犯罪組織幹部が、そっとリカたちから去ろうとしていた。

「.....何処行くの？」

「...ひい！」

リカは、逃げようとする犯罪組織幹部の後頭部に銃を突きつけた。

「...御嬢さんから買い取った商品を闇ルートで安く売りさばいているようだね...数は膨大だからかなりの儲けね...」

長身Aは、テーブルに置かれた取引の書類に目を通した。リカたちは犯罪組織幹部も連行しようとした。

「...先輩お久しぶりです！」

リカは事件が解決した瞬間、長身Aに一礼した。

「しばらく見ない間に逞しくなったわね...試験は合格かな？」

「...試験？」

「...詳しいことは後で話すわ、ケイも来てるんでしょ？合流しましょう」

「...はい」

長身Aの本名はチカ、リカと同じく歌劇団出身である。ダンスを得意とし、トップスターを務めた。リカの尊敬している先輩の一人である。彼女はリカが若手の頃、舞台のことだけでなく裏稼業での極意を教えた。

細身の体型で、常人離れした動きで敵を翻弄する戦法を得意とする。中でも奥の手は特殊な手袋である。

リカたちがエヴァたちを連れながら廊下を歩いていくと、ケイが腕を組んで待っていた。まずチカがケイに歩み寄った。

「...どうやら上手くいったみたいですね」

「あなたはどうして来なかったの？」

「...彼の遊び相手をしてたんですよ...」

ケイの傍には、傷つけられた大男が大の字で寝ていた。

「...こいつ、私を拷問した男ね...」

「...一発かましておきますか？」

「...遠慮しとくわ、彼の拷問はいいマッサージになったから感謝しないと...」

「...チカさんの居場所を訊いたんですが、嘘つかれたんで、腹いせにまたお仕置きしときました...！」

「あの...気になることがあるんですが...」

リカはあることを疑問に思い、チカたちに話しかけた。

「...どしたの...リカ？」

「...今回の任務なんですが、別に私がいなくても解決したのではないかと...」

チカたちはリカの発言に対して、軽く笑みを浮かべた。

「...勘が鋭くなったわね、その通り、この件は私でもケイでも一人で解決できたわ...あなたを試したのよ」

「試した？」

「...あなたが私たちの組織の一員として相応しいかのテストよ...だから私はわざと囚われの身となり、あなたたちを待っていた...あなたを試すための任務を設けたわけよ」

「...そうだったんですか」

「...任務はこれで遂行された...途中ミスがあったけど、総合すると一応合格点よ、おめでとう～」

「...あ...ありがとうございます！」

リカは、呆然としたままチカに礼を言った。外を出るとサイレン音が聴こえ、数機のヘリコプターが屋敷の近くに着陸した。

「話をつけてある、後のことは任せてここから離れましょう...」

迎えに来たのは地元警察のヘリであった。リカたちはヘリに乗り込み、下界へと戻ろうとした。

リカたちは、ひとまず新たにホテルの部屋を予約した。チカも加わり、一つの宿泊部屋でミーティングをしようとした。

「...二人ともお疲れ様！何はともわれ事件は解決したわ、もうこの国に用はない」

「...私はこれからどうすればいいんですか？」

「...ケイ、例の計画の件については話したの？」

「...ええ、事細かに説明したつもりです...ちゃんと承諾してもらいました」

「オッケ～それじゃあ善は急げよ、日本に帰国してもらおうわ」

「...日本にですか？」

「ええ、勿論すぐにとは言わない...先に日本で待ってるわ...着いたらケイに連絡して、詳しいことは帰ってから話すから...」

「...了解しました！」

「それじゃあ、またね～」

チカは、リカに用件を伝えると、そそくさと部屋を退室した。

「.....急で悪いけど、これから忙しくなるわ、ちゃんと着いて来てね～」

「...は、はい！」

モナコで起きた出来事は、あくまで序章にすぎなかった。過酷な任務は、これからだということのリカはまだ知る由もなかった。

## 集いし代理人

---

パリ＝シャルルド・ゴール空港

フランスの首都、パリの玄関口ともいえる国際空港には休む暇なく、航空機が離着陸を繰り返していた。そんなヨーロッパで一番忙しい空港に、一機のジェット機が停まっており、それはプライベートジェットのものであった。チャーターしたのはケイである。機内には、ケイの他にリカと愛犬コスモが搭乗して離陸するのを待っていた。

「...いや～助かりました、ペットを持ち込むのは手続きが面倒で...貨物室に閉じ込めておくの、可哀相ですし...」

「あんたには色々と付き合ってもらったからね...ほんのお礼よ、まあ寛いでよ～」

「ありがとうございます、なんか桂さんたちに会ってからセレブになった気分です～」

「...楽しんでられるのも今のうちかもね...日本に戻ると大変忙しくなるかも...」

「...そうなんですか、私に務まるでしょうか？」

「...まあ大丈夫よ、あなた一人で動くわけじゃないから...本部にはチカさんたちが待ってるから着いたら案内するわ...」

「...はい、よろしくお願いします」

リカたちが雑談しているうちに、ジェット機は離陸し始め、日本を目指そうと飛び立っていき、次第に機体は小さくなっていった。

こうしてリカは帰国後、本格的に職場復帰となる。リカたちは、日本に到着するまで優雅な航空プランを満喫していた。

それから約十二時間後、窓を見ると、東京都市部の夜景が一望でき、リカたちを乗せたジェット機は無事、羽田空港に着いた。到着後、リカたちは空港近くのホテルで一泊して翌日に備えた。

翌日、その日の東京都内の天気は曇りであった。リカとケイは、軽く朝食を済ませた後、送迎車に乗って、ある場所に向かっていった。その場所は、都内の繁華街に建てられたガラス張りのオフィスビルであった。リカはケイに誘導され、そのビルに入って行った。普通の声が響くほど

の広々としたロビーを通過して、エレベーターホールに向かい、ケイはエレベーターで地下に行こうとしていた。

「...さあ、ここがあなたの新しい職場よ」

ケイはそう言って、専用カードキーで着いた地下フロアの扉を開いた。

フロア内は、落ち着いた空間で冷たい空気が漂っていた。そこは一般企業と変わらないようであったが、何処となくハリウッド映画に出てくる秘密組織のセットにも思えた。奥に進むと至る場所に万全なセキュリティーが完備された重厚な扉があり、ケイはある場所で足を止めた。

「...ここは？」

「...まずうちのボスに会ってもらおうわ」

リカはケイの言葉に緊張が走り、動作が若干ぎこちなかった。ケイは、そんな彼女の様子を見て軽く笑みを浮かべた。

組織の責任者がいる扉が開かれ、リカは恐る恐る足を踏み入れた。すると部屋の奥に二つの人影があった。一人は専用デスクの椅子に腰かけており、傍に立っているのはチカであった。

「...チカさん、お早うございます」

「お早う、先日は世話になったわね」

リカは、チカに軽く挨拶をして、座っている人物と目を合わせようとした。すると、彼女は驚愕することとなった。

「...彼女がここのボスよ」

責任者は、リカがよく知っている人物で紹介するまでもなかった。

「...あなたがここのボス...！」

「そういうことよ、よろしくね」

責任者は淡々とリカに挨拶した。

責任者の正体は、元歌劇団トップスターで、リカが尊敬する先輩の一人のノリコであった。リカの新人時代に歌劇団トップスターに就任し、その頃、チカやケイとも共演を果たし、歌劇団の一時代を築いた。退団後も積極的に舞台を中心に活動している。また、裏の世界でも密偵として活動を継続し、現在では有能なエージェントを束ねる立場となり、仲間からの信頼が厚い。

リカは、突然の先輩との再会に動揺して、口が開きっぱなしであった。

「...なんて馬鹿な顔してるの、あなたは今日から我々のチームの一員になるんだから...」

「...はい、すみません、まだ実感が湧かなくて...」

「...まあ、いいわ...私がここの責任者よ、一応ね...時と場合によっては変わることもあるけど...今は同期で交代してやっていて...特に気にしなくていいわ、それで彼女にはうちの組織のことは説明したの？」

ノリコは、ケイの顔をじっと見て質問した。

「...はい、大体は...マニュアルも渡しましたし...」

「...どうせちゃんと読んでないでしょう、うちの組織の正式名称は知ってる？」

「.....ええ、あの.....知りません...」

リカは、ノリコから目を逸らし、顔を赤くして小声で答えた。

「.....まあそうですね、教えてあげるわ、Secret Japan Agent（秘密日本国家請負機関）通称SJA...以前所属していた秘密警察と違い、活動範囲が格段に広がり、海外を相手にしないとイケない...仲間がどうなっても責任は一切とらない...覚悟はできているのよね？」

「...はい」

「...チカ、彼女、見込みはある？」

「ええ、腕は衰えていないようです、特に問題はないかと...」

「よし、それじゃあいいよ、期待しているよ、リカ...！」

「はい、ご期待に添えるよう頑張ります...」

ノリコは、リカの真剣な眼差しを見て、信じることにした。

「...今回は、あなたの顔を見たかっただけなんだけど...質問とかある？」

「...いえ、特には.....ただ...」

「ただ？」

「...久々に先輩たちとお会いできて良かったです...なんか懐かしくて...」

「...そうね、歌劇団にいた頃、よく四人で舞台に立っていたわね...それが時の流れは早いもんで...私が辞めて...チカがトップを引き継いで...次はケイが...班は違うけど、あなたもトップに就任した...そして、今こうして一緒に仕事をしている...後輩たちの活躍には驚かされてばかりよ...もう追い抜かれそうね...」

「...そんな私なんてまだまだですよ...未熟なところが多くて...」

「...自分の弱点を探ることは大事だと思うけど、そればかりだと進歩しないわ、持った才能を殺すことになる...何があっても自分を信じなさい、自信を持つのよ...！」

「はい！」

ノリコは、先輩らしくリカにアドバイスして、快く彼女を歓迎した。

「それじゃあそろそろお開きにしましょうか...これからちょっと本業の打ち合わせがあってね...すぐに戻って来るつもりだけど...チカ、後はあなたに任せるわ」

「分かりました」

「リカ、今度また落ち着いたら、ゆっくり食事でもしましょう...」

「はい、ありがとうございました」

ひとまずリカはノリコと別れ、チカたちに別の場所を案内された。



「...ゆっくりと中を案内したいところだけど、時間がなくてね...早速仕事をしてもらおうわ...ついて来て」

そう言って、チカはリカをある場所に連れて行こうとした。そこは何重にもセキュリティが施されており、最後の扉が開かれると、何やら騒がしかった。奥に世界地図が映された巨大モニターがあり、機材に囲まれながら何人ものオペレーターが対応に追われていた。

「...ここは？」

「作戦司令部よ、組織の核といえる...規模は小さいけど、防衛省と連携していて、ほとんど同じ環境よ、二十四時間休まず、衛星を使って世界で監視している...世界情勢は限なくチェックしないと依頼が来ないんでね...」

「...緊張感がひしひしと伝わりますが...映画の世界みたいで現実とかけ離れていますね...」

「そうでしょう、ここにいればすぐに有力な情報が手に入るわ、ネットのようなガセネタに左右されることはない...的確な判断が出来るわけ.....」

「...ヴァーヴァーヴァー♪.....!!!」

リカたちが話している途中、しつこく耳に響く警報が鳴り響き、室内は急激に慌ただしくなった。

「...何事？」

「.....例の標的に動きがあったようです、防衛省総司令部より緊急通信が...！」

「分かった、ノリコ指令が不在のため、私が代わりに対応するわ...」

チカは、オペレーターと話し合い、警戒態勢が敷かれようとしていた。

「...悪いけど、忙しくなりそうだわ、ケイ、リカと一緒に先に先に行ってて...」

「分かりました、行こうか、リカ...」

リカたちは邪魔にならないよう、司令室を後にした。ケイは、フロア内を歩きながらリカに説明した。

「...突然のことで驚いたでしょう？非常事態が発生すれば、ああなるのよ...」

「とてもここが東京の繁華街とは思えませんね...」

「...まあね、このオフィスビルは地上五十階、地下は五階まであるんだけど...十五階に歌劇団OGが所属している芸能事務所があってね...地下フロアは、全てうちの組織が所有、管理しているの...前にも話したと思うけど、OGは、芸能の仕事と密偵の仕事を兼職している...人数は多すぎて数えたことないわ...私のように裏稼業のことを隠している人もいるけど...」

「...歌劇団時代より過酷みたいですね」

「まあね、まあ直に慣れるわよ」

ケイは、リカをある部屋まで誘導した。

そこはミーティングルームであった。

「ここで待っていて、そのうちチカさんが来るはずだから...」

「...分かりました...！」

室内を見渡すと既に二人の人物が待機しており、自然とリカたちと目が合った。

「...あら、久しぶりやね」

一人の女性が、はんなりとした関西弁でリカに話し掛けた。リカは、その人物をよく知っていた。

「...ユミコさん！お久しぶりです！！」

彼女の名はユミコ。元歌劇団スターで、トップスターになれなかったものの、芝居、ダンス、歌全てを得意としており、実力派舞台女優として、退団後も人気を博している。

裏ではSJAに属し、危険な任務に当たっている。一期上のチカとは相性がよく、歌劇団時代からゴールデンコンビと評されている。リカは新人時代、彼女と共演しており、よく可愛がられたようである。

「皆、バラバラになって長いこと会ってへんもんな～一緒に舞台立ってた頃が懐かしいわ～」

「...本当ですね～...と言うことは...！」

「リカ、久し振りだね～」

もう一人の女性もリカの先輩で、名はヒロミ。元歌劇団スターでリカの一期先輩。姉も歌劇団出身でトップスターである。姉の影響で歌劇団の道に進むことになる。退団後は姉のマネージャーを務めながら、SJAの一員として活動している。

「うわ～本当に懐かしい～昔にタイムスリップしたみたい～また一緒に仕事出来るってことですか～？」

「そういうことよ、チカさんにユミコさん、ヒロミに私とあんた...これでメンバーが揃ったわけよ」

ケイは、意味深な言葉を口にした。

「はっきり言って、歌劇団にいた頃よりハードやで、海外出張は当たり前...あと、ここには歌劇団OGが出入りしているから顔見知りが多いわ、かつての仲間とも会えるだろうし、ファン時代の伝説の歌劇団スターに会えるかもしれない...」

リカは久々に会った仲間から色々と説明を受けて期待が膨らんでいる様子であった。

「...ところでここで何をするのでしょうか？もう紹介は済んだわけだし...」

リカがそう言うと、ケイたちは深刻そうな顔を浮かべた。

「.....私たちも今日、急に呼ばれたのよ、穏やかではなさそうね...あなたの歓迎会ではないみたいよ...」

ユミコとケイは、ヒロミの言ったことに納得していた。

しばらくすると、リカたちが待機する部屋に足音が近づき、扉が開くとチカの姿があった。表情を見ると機嫌はいいように見えなかった。そして、彼女はゆっくりと口を開いた。

「.....楽しいOG会しているところ悪いけど、緊急事態よ、メンバーも揃ったわけだし、作戦会

議を始めましょうか...」

チカがそう言うと、他メンバーの顔つきが一変して、室内の空気が張り詰め、作戦会議が始まるのであった。チカは、前に立ってリカたちに内容を伝えようとした。

「...さっき防衛省から本国の領空内で、自衛隊輸送機が行方不明になったと連絡があった...」

「例の標的が関係しているんですか？」

その時、ユミコはチカに鋭く質問した。

「...ええ、まだ調査中だけど、恐らく原因は同じでしょう...」

「.....すみません、どういうことか説明してもらえますか？私はここに居ていいんでしょうか？」

リカは状況が把握出来ず、思わずチカたちに質問を投げかけた。

「...勿論居ていいよ、あんたには聞く権利...聞く義務がある...ここ最近、世界中で民間機や戦闘機が謎の事故に遭っているのはご存じ？」

チカは、リカの質問に対して、質問で返した。

「...ええ、海外にいた時も現地のニュースや新聞で目にしたことがあります...」

「...結構、今でも世界中の空で多くの飛行機が行方不明になったり、墜落したりと騒ぎになっている...原因はまだはっきりしてないけど、心当たりがあるの...数ヶ月前にある事件があつてね...」

「...事件？」

「真夜中に愛知県に位置する工場で大規模の火事が起こったの...火元は格納庫で付近は灰になり、すぐに工場現場の事故だと報じられた.....でも本来は単なる事故ではなかった...政府の圧力で公の場で明かされなかったのよ...」

「...隠蔽ですか？」

「...そうよ、実際は事故ではなく、事件だった...工場では元々、ロケットや航空機の生産を行っていたんだけど、極秘である物を生産していた...それがこれよ」

チカは、部屋に設置された端末を操作してモニターにある物を映し出した。

「...これって戦闘機ですか？」

「...そうよ、ただの戦闘機じゃないわ、日本初の最新鋭ステルス機...名はシルバーホーク...銀鷹  
壱号、これが何者かに盗まれたの...」

「え？盗まれた...！」

「火災が起きた格納庫には、開発中のステルス機があつてね、機体は無残に破壊されたけど、一機だけ姿を消したの...それは未完成の実用機で、盗まれたわけよ」

「...なぜ未完成の機体を盗んだんでしょうか？」

「そのことだけど、実はもう一つ盗まれた物があつてね...それは実用機的设计図...無断でコピーされていたわ、犯人の狙いはステルス機の情報よ...未完成の機体を逃走用の足として使った...设计図を盗んだのは、自らの手で機体を完成させるため...間違いのないわ...ここ数日、世界中から奇妙な目撃情報が殺到するようになった...」

「...まさか最近の飛行機の事故って...！」

チカの説明で、リカは真相に辿り着いた。

「...先日、南シナ海で日本とフィリピンの合同演習があつたんだけど、両国の戦闘機が謎の攻撃を受けて墜落した...幸い死亡者は出なかったけど、ただ事ではないわ、例のステルス機に撃墜された可能性が...」

「...対処方法はあるんですか？」

「ステルス機は、電波を異なる場所に反射させるため、通常のレーダーで探知するのは不可能だけど、技術の進歩で、追跡は決して不可能じゃないわ...ただ相手も手強い...性能は各国のどの戦闘機よりも上で、武器が搭載されていれば、さらに脅威になる...現在のところ、捕獲や破壊は不可能とされているわ」

「...そうですか」

「.....犯人の目星はついたんですか？」

その時、ユミコが手を挙げて、新しい質問をした。

「...ようやく有力な情報が入ったわ、ステルス機を生産している工場の整備士に不審人物がいることは発覚してね...その人物は経歴詐称して紛れ込んでいた...スパイの可能性が高い...」

チカは、犯人の画像をモニターに出した。映し出されたのは、鋭い目つきの青年であった。

「...彼は奥山健人と名乗って、整備士として働きながら隠密活動を行っていた...国籍も偽っていてね...日本人ではなく、中国人だった...名は、ウォン・イーシン...」

「彼は、何処の組織に所属しているんですか？」

ユミコは質問を続け、チカは、ウォンの経歴が記された資料を読み上げた。

「ウォンは五年程、中国の特殊工作員として、活動していたけど、ある任務で消息を絶ったわ...死亡したと噂されたけど、それから数年後、姿を現した...インターポール（国際刑事警察機構）の情報によれば、高額の報酬を要求する悪名高い暗殺者になっていた...彼のために、何人もの政府の要人が犠牲になっている...それについてC I AやM I 6にもマークされ出したわ...目的のためなら手段を選ばない...工作員の時の経験が活かされ、潜入もお手の物、厄介な相手よ」

「...成程、それで現在、彼は何処に？」

「...全力を挙げて捜索しているけど、発見されてないわ...」

「私たちは、どうして集められたんですか？」

ユミコに代わって、ヒロミがチカに質問した。

「...いい質問ね、実は防衛省から要請があつてね...私たちはそのために集められた...今からある場所を調査しに行くわ...」

「...それは海外ですか？」

「.....いえ、国内よ、ぎりぎりね...東シナ海南西部に位置する島嶼群よ...」

「...そこってまさか...！」

チカ以外のメンバーは、ある場所が頭の中に浮かんだ。それは全員一致した。

「...そう、尖閣諸島...長年、中国と領有権で揉めている島...と言いたいところだけど...若干位置がずれているわ...日本は孤島が多いからね...」

「何故、そこの調査を？」

ケイが眉間に皺を寄せながら、チカに質問した。

「...今言った場所は、飛行機の墜落が多くてね...よく例のステルス機の電波をキャッチするし、怪しいと踏んだわけ...」

「成程...」

「何か不満？」

「いえ、わくわくします、どうも最近スリルのある仕事が少なくて...先日のモナコでの任務は楽しめましたが...」

ケイは、チカとリカの顔をちらっと見た後、無邪気に笑みを浮かべた。ケイ以外のメンバーも満更でもない顔つきであった。

「...これで分かっていることは全て話した...特に意見がなければ出発するわ」

四人は意見せず、素直にチカの指示に従った。

「...ああ、そうだ、リカ...あなたは配属されたばかりだからこれ渡しておかないとね...」

チカはそう言って、リカにカードのような物を渡した。

「...何ですか、これ？」

「...そのカード一枚で色んなことが出来るわ...本部の入溝証になるし、世界のあらゆる情報機関

にアクセス可能で、歌劇団時代から最良にしている宿泊地、施設でも使えるわ、クレジットカードみたいなものね、飛行機や船もチャーター出来るし...とにかく便利よ」

「へえ～なんか凄いな～ありがとうございます！」

「大事なツールだから絶対なくさないでね...再発行出来ないから...悪用される場合もあるし...顔の写真貼りたいければお好きにどうぞ...」

「...分かりました！」

その時、リカは若干、手を震わせていた。

「何か訊きたいことある？」

「...えっと、この自分の名前の上に表記された長い文字は何ですか？」

「...ああ、それはあなたの肩書よ...S J A アクアプロジェクトチーム ピュア・ガーディアンズ エージェント...少し長いけど、適当に覚えて...今日からあなたはチームの一員よ...！よろしく」

「はい、改めてよろしくお願いします！」

リカはメンバーと厚く握手を交し、歓迎された。

問題の孤島に派遣されることになったメンバー五人は、本部を後にして、送迎車である場所に向かうこととなった。

東京都多摩地域中部 横田基地

アメリカ空軍と航空自衛隊の主要基地にチカ率いるピュア・ガーディアンズが訪れた。彼らは基地の輸送機、C-130Hをチャーターしていた。

「...これで島まで直接行くわけですか、豪華なプライベートジェットを期待していたのに残念ね、リカ...？」

ケイの冗談に対して、リカは苦笑いを浮かべた。

「遊びに行くんじゃないんだから、これで充分よ...それじゃあお願いします」



チカは、輸送機のパイロットに離陸させるよう指示した。リカたちを乗せた輸送機は、問題なく離陸し、東京から離れて行った。

輸送機の乗り心地は、航空機に比べると期待出来ないと思っていたが、案外、快適のようであった。騒音も気にならず、搭乗しているメンバー五人は、目的地に着くまで雑談していた。

「チカさん、これが我々チームの初任務になるわけですね？」

「ええ、やっと五人揃った、この時をどれだけ待ったか...ようやくアクアプロジェクトが実現する...！」

チカはユミコの発言に対し、屈託のない笑顔を見せた。

「...歌劇団時代、よくこの五人で行動していたのを思い出します、アイドルみたいにライブとかもやりましたね...テレビ番組とかもよく出てたし...」

「...私、班替えや怪我でライブ出れなかったんで、滅茶苦茶泣きました...」

「やっぱり最後のライブは、全員で出たかったよね...」

リカは昔のことを思い出し、悔しさをあらわにした。

「全員退団したわけだし、それを記念に再結成あるかもよ...」

「...どういう記念や...」

チカの発言にユミコのさりげないツッコミが入り、その場は笑いに包まれた。

「...再結成したら武道館でライブしたいですね～」

「ドラマとかも出たいな～舞台でもいいけど～」

ケイとリカは自分の世界に入り、ずっと妄想していた。残りのメンバーは、それを馬鹿にせず真面目に聞いていた。このままたわい無い会話が続き、気づけば目的地の東シナ海付近であった。

輸送機が、美しい海域の上空を飛行する中、リカたちがいる場所に一人の男性自衛隊員が訪れ、彼から指示を受けることになった。

「まもなく、目的地の島がある上空に着くんですが、島に着陸するのは不可能です...なので、降下して島に潜入してもらおうと思います...」

「パラシュートで降下するわけですね？」

「...いえ、別の物を用意しております、ついて来て下さい」

リカたちは隊員に誘導され、後部ハッチへと移動した。

「...何ですか、これは？」

彼女たちの目の前には、鉄製のサーフボードのような物体が並べられていた。

「防衛省技術研究本部が開発したジェットボードです、これで降下してもらいます」

「...隊員じゃない私達でも扱えるの？」

「操作はいたって簡単ですよ、あと度胸があれば大丈夫です...」

「あら、そうなの？」

メンバー五人は、半信半疑で隊員の説明を聞こうとした。

「...まずボードの上につ伏せになって乗って下さい、手足は開かないように...そうすれば電源が入ります、あなた方で何も操作する必要はありません、今回は自動モードにしているので、目的地に着くようプログラムされていますので安心を...」

「...昔の特攻兵器みたいね」

「...ええ、それに近いものがあります、掛かるG（重力加速度）は、現代の戦闘機飛行時とほぼ同じです...」

「...はは、目的地に着く前に体がバラバラになるんじゃないの？自殺行為ね...」

ケイが冗談交じりに話すと、隊員はある物を持って来た。

「勿論、生身の体では無理です、使用する時は、まずこの特殊スーツとゴーグルを着用して下さい、Gに耐えられます...」

「.....私たちの他に、これ使った人とか居るの？」

「...何度か実験で使用していますが、実用化まで至っていません、常人以上の能力を持ったあなた方なら扱えるかと...」

「...それ、皮肉に聞こえるわ...私たちも血の通った人間よ」

チカは、隊員の言動が気に入らず、他のメンバーは隊員を睨んだ。隊員は迫力に押され、冷静な表情が一変して大量に汗を掻いていた。

「.....すみません、特殊スーツにはパラシュートが収納されています、ボードが故障したり、何らかのトラブルがあれば、緊急で開く仕掛けになっていますので...あと、前方のランプが赤く光り出せば、立ち上がりことが可能です」

「説明ありがとう、それじゃあ準備しましょうか」

メンバー五人は、説明された通りに行動して、スピードスケーターのような格好で、所定の位置についた。輸送機は、高度一万フィート（約三キロメートル）で後部ハッチを開こうとした。ハッチが開くと強風が注がれ、獣の雄叫びのような音が鳴り響いていた。

その後、固定されたメンバー五人は、順番にボードごとミサイルのように射出され、降下して行った。小さく見える陸地も高度が下がるごとに大きくなっていき、危険なダイブとなった。メンバー五人はじっとすることしか出来ず、無事、目的地に辿り着くことを祈った。

「.....ボゴオ！！！！！！」

その時、轟音が鳴り響き、ボードの動きが安定したところで、自動的に鋭い翼が展開され、ジェット噴射した。あっという間に島の姿がはっきり見えてボードのランプが光りだし、メンバー五人は立ち上がろうとした。立ち上がると、スピードが徐々に減速されていき、ボードは浜辺の方へ前進して行った。ジェットボードは問題なくメンバー五人を島まで送り届けた。

「...ふう、どうにか着いたわね」

チカは特殊スーツを脱いで、安堵の表情を浮かべた。メンバー五人は、スーツを脱ぎ捨ててから、新鮮な空気を吸っていた。

「まさに孤島ですね、この静けさが逆に落ち着かない...何かあった時、助けは来るんでしょうか？」

「...いざという時のために、危険信号を送る送信機があるわ...あまり当てにはしてないけど...」

「...何も起こらないことを願っていますが、無理な話みたいですね...」

「...そ〜ゆ〜こと、その時はその時よ...気楽に偵察でもしましょうか...つてあれ？」

チカとユミコは、ある異変に気が付き始めた。

「...ケイとリカは、どこ行ったんや？」

「...あっちです」

ヒロミがそっと指差した先を見ると、ケイの姿があり、リカはボードと共に砂浜に深く突き刺さって埋もれていた。ケイは、着地失敗したりカを助けようとしていた。

「...全く世話が焼ける娘ね」

チカとユミコは呆れた顔でリカたちを見ていた。

「.....ぱは！！死ぬかと思った...！！」

砂まみれになったリカは、命拾いした様子であった。

「...先が思いやられるな」

チカは溜め息をつき、島の中を散策しようとした。ついに五人揃っての潜入任務が開始された。リカたちが訪れた孤島には何やら陰謀が渦巻いており、行く手を阻む者が迫ろうとしていた。

## 陰謀の島

---

場所は暗闇に包まれた某所、そこは通信機器が出揃っていて、正常に起動していた。その空間には数名の気配があり、ずっと複数のモニター画面を見ていた。

「.....島に反応があります、侵入者が...」

「...ほう、客とは珍しい...人数は？」

「...えっと...五人のようです...島に入っていきます...勘付かれたんでしょうか？どうします？」

「...しばらく様子を見よう.....奥に進めば袋の鼠だ...一応準備させておけ...」

「了解しました」

オペレーターは、指揮官の男の命令を聞き、作業に移った。指揮官の男は、不敵な笑みを浮かべて椅子に深く腰掛けていた。リカたちが訪れた島は、明らかに怪しかった。

リカたちメンバーがいる島は、東シナ海、尖閣諸島と台湾の間に浮かんでいる孤島、`蝕島（むしじま）`。島の面積は二九.六平方キロメートル、人は一切立ち入らず、自然は荒らされていないはずであったが、島付近で航空機や輸送機が墜落したりと、妙なことが続けて起こっていた。リカたちは盗まれた国産ステルス機と関係があるかを調査するため、島に派遣されたのであった。

リカたちは輸送機からの降下で使用した自衛隊専用機ジェットボードを砂浜に隠して、島の中を探索しようとしていた。

「...ほんとに静かですね...気味が悪いくらい...」

リカは不安げな表情を浮かべながら、チカたちについて行った。

「大きな体して何びびってんの？昔やってた秘境探検みたいで楽しいじゃない～！」

「...そうでしょうか？...いて」

楽天的なケイは、リカの肩を強く叩き、彼女に気合を入れた。

「ケイちゃん、人の心配ばかりしてられへんで...油断大敵や、何か臭うわ」

ユミコはケイに忠告し、注意力を高めていた。

「...ユミコの言う通り、この島は何か変だね...無人島のはずなのに妙な気配を感じる...これは鳥や獣じゃない...皆、とにかく気を付けて...」

メンバーのリーダーであるチカは、メンバーに警戒するよう呼びかけて先頭となって進んで行った。森の至る場所からリカたちをこっそり覗く者がいたが、それは生物ではなかった。その正体は監視カメラで、彼女たちは薄々気づいていた。

それから島に足を踏み入れて十数分、リカたちは警戒しつつ、深く茂る植物を駆け分けていき、森林地帯を歩いて行っているわけだが、途中、メンバー一人に異変が起こった。

「...！」

リカは最後方を歩いていたわけだが、彼女の前には一年先輩のヒロミが歩いており、彼女は急にピタッと停まった。

「...ヒロミさん、どうしたんですか？」

ヒロミは、なぜかりカ言葉に応答しなかった。そして、彼女は素早く振り向き、予想しなかった行動を取ろうとしていた。

「...ジャキ！」

「ヒロミさん！何を！？」

ヒロミは振り向いた直後、何を血迷ったのか、装備していたアーミーナイフを取り出し、リカに襲いかかろうとした。他のメンバーが気づいた時は既に遅く、ヒロミを止めることは出来なかった。

「...動かないで」

抵抗しようとするリカに対し、ヒロミはそっと声を発した。

「...ブジャ！」

その時、リカは近くの大木に追い詰められて、ヒロミの奇襲で壁ドン状態となった。同時にナイフの何かを突き刺した音がして、他のメンバーたちは絶句した。それからしばし時間が止まり、張り詰めた空気になるが、どうも様子がおかしかった。リカは怪我をせず意識があり、ナイフの方に視線を向けた。

「...え？」

ヒロミのナイフは、リカではなく、彼女が寄りかかった大木に突き刺さっていた。

刃先を見ると五センチほどの巨大蜘蛛が突き刺さっていた。

「.....ふう、危ないところだったわ」

ヒロミは、息絶えた蜘蛛を枝に乗せてナイフを納めた。

「...なにになに？どうしたの？」

ケイは、慌ててリカとヒロミのいる場所に駆けつけた。

「すみません、お騒がせして...ちょっとアクシデントが...」

「...その蜘蛛は？」

「...毒蜘蛛です、リカに喰らいつこうとしていたので...」

「...ありがとうございます、全然気づかなかった...！」

「...先輩を驚かささないでよ、頭がおかしくなったのかと思ったわよ...」

「...本当にすみません、リカ怖がらせてご免ね...」

「...いえ、助かりました、ヒロミさんは命の恩人です！」

「...腕は衰えてないようね」

「しばらくデスクワークだったもので、一応トレーニングしているんですが...」

「頼りにしているわよ」

三人は目を合わせ、絆を深めていた。

「.....ちょっとあんたたち、問題なければ先に進むよ...！」

リカたち三人はチカに呼ばれ、急いで後をついて行こうとした。

「...彼女、長いこと闇社会から退いていましたが、問題なさそうですね」

「ええ、復帰してすぐ私たちと行動を共にして、適性テストも余裕で合格した、彼女は努力家だし、あれだけ殺気を解き放つことが出来れば心配ないわ.....問題はもう一人...」

「...リカですか？」

「...モナコで彼女の動きを見たけど、特に問題ない...でも世界が相手のなれば、公安の密偵での経験だけでは太刀打ち出来ないかも知れない...私たちが鍛え直さない地行けないかも知れない...！」

「...そうですね、彼女の潜在能力を引き出すきっかけがあればいいんですが...」

チカとユミコは、ひそひそと後輩の今後について話し合っていた。

長く森林地帯を歩いて、飽きてきたリカたちであったが、島の中心辺りに辿り着くと、ある物を発見することとなった。

「...あれは？」

リカたちの目の前には、木造の立派な山荘が建っており。それは新しいものであった。付近を確認すると、焚火を起こした跡や鍋や食器など、食事をした跡があり、誰かが住んでいるのは明らかであった。しかし、リカたちが訪れた時、留守なのか全く人の気配がなかった。

「どうして無人島にこんな物が？私たちが追っている標的と関係がありそうね」

「...中に入りますか？」



「勿論よ、ここで引き下がれば、給料振り込まれないわよ」

チカは躊躇せず、謎の山荘の潜入しようとした。扉は鍵が掛かっておらず、すんなりと入室が出来たため、罠ではないかとふと疑ったが、彼女たちは潜入を試みた。小屋の中に入ると、がらんとしており、リカたちは住居者を気にしつつ、手分けして隈なく調査しようとした。玄関からごみや色々な物が散乱しており、お世辞でも片付いていると言えない状態であった。そんな中、リビングルームの中央のテーブルにはジェラルミンケースがいくつも置かれ、チカはそれが気になり、中を調べようとしていた。

「...あれ？」

しかし、ケースはロックが掛かっており、暗証番号を入力しないと開かなかった。残念がるチカであったが、テーブルの上にはまだ気になる物があった。それは注射器と空になった何かの薬品の容器であった。

「...ユミコ、押収する物は写真を撮って、それをメールに添付して本部に送って...」

「了解しました」

チカは、気になる物を片っ端から押収しようとした。

「...チカさん、ちょっと来て下さい！」

その時、二階の部屋からケイの声がして、チカとユミコは、彼女のもとに駆けつけた。

「どうしたの？何か見つかった？」

「...こんな物が...」

「...これは、盗まれたステルス機の.....操縦マニュアルのようね...やはりここには犯人のウォンが...！」

「...しかし、ここで一人だけで使用しているとは思えません...個人で使っていると思われる部屋が他にもありましたから...」

「...確かに彼一人だけの犯行とは思えない...必ず黒幕がいるはず...突き止めないと...他の皆は何か手がかりを見つけたかしら...？」

チカたちは他の仲間のことが気になり、様子を見に行こうとした。すると二階の廊下に一人、ぽつんとヒロミが立っていた。

「ヒロミ、どうしたの？」

「...あの、この部屋の扉だけ開かなくて...強引にこじ開けてもいいんでしょうか？」

「...何か隠してあるかもしれない、開けましょう...」

チカの許可を得て、ヒロミは扉を蹴破ろうとした。扉をこじ開けると大量に砂埃が舞い、長い間、放置されたままのようであった。また、異臭がして空気が悪く、チカたちは思わず鼻をつまんだ。

「...これは酷いね、金目な物がないことは間違いない...」

「入りますか？」

「ちゃっちゃと調べましょう、吐き気がするわ」

チカたちは、不機嫌な顔を浮かべながら室内を調べようとした。するとすぐ嫌な予感が的中した。空気を入れ替えるため、窓を開けようとしたが、近くに一つベッドがあり、妙な違和感があった。恐る恐るベッドを調べようとする、チカたちは、衝撃的な物を目にすることとなった。

「.....！！」

チカたちはベッドにある物を見て、血の気が引いた。ベッドに横たわっているのは軍服を着た男性の亡骸であった。それは無残な姿で、体はかなり腐敗していて、虫が湧いており、異臭の原因が判明した。

「...腐敗の進み具合からすると、死んでからあまり時間が経っていないようですね...まあ死因にもよりますが...」

「...死因は恐らくこれでしょう...」

チカとユミコは、少々知識があるようで、刑事のように死体を調べていた。死体が横たわるベッドには、ある物が置かれていた。

「...チカさん、これって！」

チカとユミコは、ベッドに置かれた物に見覚えがあった。それは、さつきリビングルームで発見した注射器と薬品の空容器であった。

「何なんですか、それは...？」

ヒロミだけ何も分からず、チカたちに質問した。

「.....さて、まだちゃんと説明出来ないわ、どうやら私たちはとんでもない事件に巻き込まれているようね...軍人のようだけど、彼の身元を知りたいところだけど...」

チカたちは困惑し、重要な件として、謎の亡骸の写真を撮り、その後、そっと掛布団を被せてから部屋を出た。そして彼女たちはあることに気づいた。

「.....あれ？リカは？」

「そう言えば見ませんね...誰か彼女の姿を見た？」

「二階には居ないと思いますが...」

「ユミコと一階に居たけど、会ってないわね...全くあの娘は...」

先輩四人は、未っ子のリカのことを心配になり、迷子を捜すかのようにして各自散らばった。

「.....ヴ...ザ...！」

その時、メンバー五人が使用している無線イヤホンに反応があった。

「ザ...誰か.....応答して下さい...ザ...」

「...リカ？あんた何してるの！！」

リカの声がした途端、チカは声を張り上げた。

「.....リカ、今何処に居るんや？」

少々興奮状態のチカに代わって、ユミコがリカに質問した。

「.....今、一階の裏口に居るんですが、気になる物を見つけまして...皆さん来てもらえませんか？」

「了解...すぐ向かうわ」

メンバー四人は、リカの指示で一階の裏口へと直ちに向かった。

薄暗い裏口には難しい顔をしたリカが立っていた。

「リカちゃん、何を見つけたのかな～？」

「...これです」

ケイが明るく訊ねると、リカは低めのトーンの声で発し、ある場所を指差した。

「...これは隠し扉...！」

「地下につながっているようです...」

「でかしたわ、いくらでも手掛かりが出て来るわね...それじゃあ探検しましょうか」

チカは機嫌がよくなり、彼女たちは地下へとつながる階段を降りて行った。

地下は暗い上に窮屈な空間なので、彼女たちは携帯電灯を点けて、慎重に奥へと進んで行った。

階段が終わると、地下フロアには一つ部屋があり、鍵は開いていて、彼女たちはかまわず部屋に入って行った。誰か潜んでないか、警戒したが室内は無人のようであった。彼女たちが目にしたのは、いくつもの通信機器や何かの機材であった。少々旧型ではあるが、電源は全て電源が入っているようであった。

「...山荘の地下室に通信設備...あと軍人の亡骸...探れば探るほど臭うわね...」

「...ずっとここで連絡を取り合っているようですね...送信先を辿れば、黒幕が分かるかもしれない」

「.....こちら作戦司令部...応答せよ！」

「.....！！」

突然、誰かから通信が入り、リカたちは慌てふためいた。

「...こちら作戦司令部...応答せよ.....誰か居ないのか？.....そこに誰か居るはずだが.....」

「...え？」

リカたちは、送信者の意味深な発言を耳にして、さらに驚愕していた。

「.....そこには五匹程、鼠が忍び込んでいるはずだ...君たちは丸見えだよ...遠い空から監視されているからね...」

「...まさか衛星を使って...やはり泳がされていたようね...」

リカたちは観念して送信者に応じようとし、チカが代表して専用マイクを取った。

「...こちら鼠、こそこそ私たちの動きを覗いていたのね...」

「...ああ、そこの島に辿り着くとは大したものだな...何処の部隊に所属している？日本か？」

「.....そっちが何者か教えてくれたら教えてやってもいいわ...」

「...ふふ、威勢がいいな、今、君たちがどういった状況に置かれているか分かっていないようだな...」

送信者がそう言うと、突然、室内にあるモニターの映像が切り替わった。映ったのは山荘付近の外の映像であった。

「.....これは！」

映像を確認すると、至る場所に怪しい人影が見え、山荘は完全に囲まれていた。

「ご覧の通り、袋の鼠ということだ...君たちを逃がすわけにはいかない...無事では済まないよ、

放った猫は狂暴でね...」

「...いくら小さな鼠でも、怒れば猫に勝てるかもしれないわよ...結構獰猛でね、油断大敵ってこと...！」

「...案外君たちは鼠よりも小さい蟻かもしれないよ...それで相手は象という場合もある...自信過剰にならないことだ...」

「お互い様よ、周りの連中を片づけたら次は余裕ぶっこいて高みの見物をしているあんたを追い詰める...首を洗って待っているのね...！」

「...はは、面白いね、また会えるのを楽しみにしているよ、それでは幸運を...」

送信者は、チカの挑発に対して嘲笑い、通信を切った。

「チカさん、指示をお願いします！」

チカはヒロミの発言に頷いて、メンバーたちには外に出よう指示した。彼女たちは、地上にあがった瞬間、夥しい数の殺気を感じていた。微塵も逃げ場はなく、リカたちは戦うしかなかった。それでリカたちは、外に出て戦おうとしたが、相手はそれを許さず、外に出る前に重火器を乱射し始めた。

「...ドガガガガガガガガガ！！！」

その時、耳にしつこく響く激しい銃声が鳴り響き、リカたちは山荘に閉じ込められた状態となった。山荘は銃弾の雨を浴びて、瞬く間に穴だらけとなった。しばらく武装集団の攻撃が続き、彼女たちの消息は分からず、沈黙状態であった。

「.....あの島で騒ぎを起こしてよかったですか？」

作戦司令部のオペレーターは、チカと言葉を交わした司令官にそっと質問した。

「...気にすることはない、ばれてしまったら隠れ家とは言えない...破棄することにするよ...侵入者もろともな...それに演習ばかりではちゃんとしたテータが取れない...そろそろ実戦も経験させないとな...」

「...しかし、まだ早いのでは...これで各国の捜査機関に勘付かれては厄介かと思いますが...」

「...今さら怖気づいたか？心配することはない...忍び込んだのは恐らく日本人...弱腰の日本政府は何も出来ず、他国の政府が気づく前に争いは片付いている...証拠は残さんよ...」

「.....一応日本領空内にステルス機を待機させています...応援が来た場合も対処出来ます...」

「それで充分だ、我々は最強の武力を手に入れたのだ...弱点などあるものか」

司令官は強気の態度で失敗はないと断言し、島の様子を確認していた。

数分間、武装集団の攻撃が続き、リカたちがいた山荘は、無残に崩れていった。武装集団は一旦攻撃を止めて、リカたちの生死を確認しようと動き始めた。武装集団は、銃器を構えながら一步一步慎重に瓦礫の山と化した山荘を歩こうとした。搜索するにもすぐに彼女たちの姿は見当たらず、武装集団は仕方なく、瓦礫をどかそうとした。

「...！」

その時であった。武装集団に隙ができ、彼らにいくつかの気配が忍び寄っていた。

武装集団はなかなかその気配に気づかず、

事態は急展開した。

「ガッ！！」

その時、武装集団の一人に異変が起こり、なぜかその場から動けなかった。彼は何か足に掴まれているようであった。武装集団の一人は、そのまま後方に強く引っ張られ、瓦礫の山の上で倒れ込んだ。それで武装集団の様子は一変し、警戒態勢を取ろうとしていた。瓦礫の山の中には、何か危険な生物が潜んでいるようであり、ずっと武装集団を見ていた。それはまるで獲物を狙う鮫のようであった。一時、武装集団が居る場所は、静けさに包まれていたが、それは大きく変化しようとしていた。

「.....ボゴバ！！！！！！！！」

その時、飛び上がるほどの大きな音がして、それと同時に無数の瓦礫が四方八方に飛び散った。

「...ドンドンドン！！！！」

その時、落ち着く暇もなく、奇襲を受けて武装集団の数人が銃弾に倒れた。

「...！！」

奇襲を受けた武装集団の前には、リカとヒロミが立っていた。二人は銃を構えて相手を威圧していた。

「.....があ！」

その時、別の場所でも武装集団が襲われているようであった。そこには数人倒し、武装集団の一人の胸ぐらを掴んでいるユミコの姿があった。

「...ババババババ」

また別の場所でも動きがあり、冷たい風を感じたのと同時に、多くの武装団員が倒れて行った。近くには愛刀を持ったケイが居た。ちなみに最初に武装集団の一人の足を掴んで倒したのは、チカであった。彼女たちは全くダメージを受けておらず、攻撃するタイミングを窺っていた。敵側の司令部は、予想外の状況に驚愕している様子であった。

「...なかなかやるじゃないか、やはりただの調査員ではないな...面白いショーになりそうだ...」

司令官だけは動揺せず、リカたちの戦闘を映画のように楽しんで観ていた。

リカたちは武装集団を囲み、形勢逆転を狙おうとしていた。

「...数は五十弱...まだ結構残っているわね...得物は色々と持っているけど、一人につき、十人以上相手にするということはどう？」

「...賛成です、分担した方が戦いやすい」

リカたちは瞬時に敵の戦力を分析し、リーダーであるチカの意見に同意した。

「...それじゃあ始めましょうか」

チカは号令を掛けて、メンバーは散って攻撃を開始した。武装集団は、落ち着きを取り戻し、



無言のままリカたちの相手となった。リカたちは相手の攻撃を避けつつ、森林地帯へと駆けて行った。武装集団も分かれて行動して、人間同士の狩りが始まろうとしていた。島の上空を見ると小さな飛行物体が飛んでおり、それは敵側の最新監視カメラであった。また島の至る場所に監視カメラが仕掛けられ、リカたちは常に彼らから見られていた。作戦通り分担して戦うこととなり、島のあちこちで激闘が繰り広げられようとしていた。

## 蝕島 北エリア

北エリアにはケイがいた。ケイは仕掛けられた監視カメラが気に入らず、見つけては斬って行った。

「...やれやれ、こうやって鬼ごっこするの、どれくらいぶりかな...若手時代の演習が懐かしい...」

ケイは呟きながら、木の上から相手の動きを窺っていた。武装集団は熱探知ゴーグルを装備しており、すぐにケイを発見した。

「テクノロジーには敵いませんな～」

ケイは、忍者のように次々と木を飛び越えていき、追手から逃げようとした。武装集団は彼女のスピードについて行けず、見失いそうになっていた。

「...はあ...はあ...ぜえ.....」

ここで体力の差が出て、追いかける武装集団は、息を切らしていた。そして、ケイはいつの間にか彼らの前から姿を消していた。

武装集団は得物を構えながら、錯乱状態に陥っていた。

「.....！」

その時、狼狽える武装集団の背後に気配があった。

「...ビュン！」

武装集団が気づいた時は既に遅く、空気を切る音がしたのと同時に、彼らはバタバタと倒されていった。

「テクノロジーに頼りすぎるとこうなるのよ...」

ケイはそう言い捨てて、また新たな敵を見つけに行こうとした。彼女の斬撃は峰打ちであったが、それでも凄まじい威力であった。

蝕島 西エリア

西エリアにはユミコがいた。彼女は首を振ったり、欠伸をしたりなど退屈そうで隙だらけであった。相手の武装集団は、罨ではないかと思い、彼女になかなか攻撃が仕掛けられなかった。しかし、ずっとその状態を保つことは不可能で、勇気ある者が現れようとしていた。

「.....ジャキ」

その時、武装集団の一人が銃器をユミコに向けた。それでも彼女の表情に変化はなかった。

「...おたくだけ勇敢やね、好きに撃ってもかまへんで...」

ユミコは少しも恐れず、笑みを浮かべながら銃器を向けた武装集団の一人の前に立った。

「...ぐぐ！」

武装集団の一人は、余裕のユミコに圧倒されて、手が震えていた。周りの仲間たちも動けずにいた。

「.....何や情けないな...それでも男かいな？相手は私一人やで、とんだ腰抜けやな」

「...！！！！」

その時、武装集団はユミコの言葉に怒り狂い、戦意を取り戻したようであった。そして彼らはユミコに攻撃しようとしていた。

「...そうこなくっちゃ」

「...ドガガガガガガガが！！！！」

武装集団は、容赦なくユミコに向けて発砲した。しばらく乱射が続き、瞬く間に周辺の木が倒れていった。また砂煙が立ち込めて視界が悪くなった。武装集団は、一旦攻撃を止めて、ユミコを捜そうとするが、どうやら彼女を見失ったようであった。しばらくして砂煙が晴れ始め、視界が良くなっていくわけだが、そこでまた異変が起ころうとしていた。武装集団の姿を確認出来たが、どうも様子がおかしく、魂の抜けた人形な状態で倒れていった。そして、その直後、ユミ

コが姿を現したのであった。

「...数撃ちや当たるとは限らんよ、諸君...って誰も聞いてへんか...」

ユミコは少しも体力を消耗していないようで、気楽に口笛を吹きながらその場を後にした。

蝕島 南エリア

南エリアにはヒロミがいた。彼女は森林地帯で武装集団に追い詰められた状態であった。

「.....参ったわ、好きにして...」

ヒロミはなぜか攻撃する意思がなく、抵抗しようとしなかった。武装集団はためらわず、ヒロミに銃口を向けた。彼女は死を

恐れることなく、妙に落ち着いていた。そして、運命の時が来て、ヒロミを標的に大量の鉛玉が発射されようとしていた。

「.....ドガガガガガガ...ババン...ドウ...！！」

武装集団は一斉に引き金を引き、ヒロコを始末しようとしていた。激しい銃声や爆音が長い時間鳴り響き、彼らは表情に出さないが殺戮を楽しんでいるようであった。

時間が経ちにつれて、地面に転がっている空薬莖の量が増えていき、一方的な攻撃は

止むのであった。荒っぽい攻撃で砂煙や黒煙が立ち込め、火薬の臭いが広範囲に漂っていた。ヒロミの安否が気になるころだが、普通死んでいると誰もが思う。しかし、予想外の展開が待ち受けており、誰も気づかずにいた。

「.....ドンドンドン...ドドン...！！」

「.....！！！」

その時、銃声が出て武装集団は人形のように倒れていった。撃った相手は見えず、

武装集団は錯乱状態となっていた。しばらくすると銃声は止み、そこにいた武装集団は全滅していた。

「...いいりハビリにはなったかな～」

そう言ってヒロミが何処からともなく姿を現した。ここでも実力の差を見せつけ、彼女はその場を後にした。

蝕島 東エリア

東エリアにはリカがいた。彼女は他のメンバーと比べて少々苦戦を強いられているようであった。武装集団は強力な銃火器を持っていて、森林地帯は、銃弾の雨や火炎放射器で赤く染まっていた。リカは物陰から射撃する戦法を取ろうとしたが、隠れ場所を失っていき、焦りの表情を浮かべていた。

「.....全く好き勝手に暴れちゃって...ゲリラ戦は、先輩たちの方が慣れているからな...ぶつぶつ...」

リカは呟きながら弾倉を装填し、相手の動きを窺っていた。そして、彼女はある決断をしていた。武装集団は容赦なく攻撃を続けて、ついにリカを追い詰めたのであった。

「ジャキ...！」

武装集団の数名が獲物を構え、リカに止めを刺そうとしていた。

「.....」

彼女の反応はなく、武装集団は引き金を引こうとした。

「...ド！」

その時、リカは高い木から武装集団がいる位置まで飛び降りた。彼女は瞬時に相手の隙を突き、攻撃を始めたのであった。

「...ドドン...ドドン...ドン...ドン.....」

武装集団は、リカの強襲で圧倒され、対応が遅れた。リカは倒した敵の得物を奪い取り、反撃を続けた。

「...攻撃は最強の防御...度胸がないと仲間外れにされるんでね...」

リカはそう言って、武装集団を蹴散らしていった。これにより彼女の勝利は確実であった。

蝕島 中央エリア

中央エリアにはチカがいた。彼女は問題なく武装集団を倒していき、リーダーの貫録を見せた。

「...皆、順調のようね、それじゃあぼちぼち、こっちも終わらせるか...」

チカは、武装集団の一人にヘッドロックをかけながら仲間の様子を気にしていた。

「...ジャキ！」

残りはあと三名であった。彼らはまだ戦意を失っていないようで、一斉攻撃を始めようとしていた。

「.....いい面構えね、度胸があるのは褒めてあげるけど、諦めも肝心よ.....！！」

「...！？」

その時、武装集団はチカの気迫に押されて、金縛りのように体が固まってしまっていた。

「ス...」

チカは、その隙に常人以上の速さで武装集団がいる方に突っ込んでいった。彼らは反撃出来ず、あっけなく弾き飛ばされた。

チカは少しも呼吸が乱れておらず、どや顔を浮かべた。

「...たわいもない、鍛え直した方がいいよ」

「.....ザ.....チカさん、そっちは片付きました？」

その時、ユミコからチカの無線に通信があった。

「...ええ、準備運動にもならなかったわね...彼らの中にまともに口利けるの居ないようだから、もうここに用はないわね...引き揚げましょうか...迎えを呼ぶわ」

「それじゃあジェットボードがある砂浜で合流ということで...」

「...了解、それでは...また後で」

リカたちは、島の調査を終えて帰還の準備をしようとしていた。

一方、島での戦闘を観ていた敵側の司令部には静けさが漂っていた。ただそれは武装集団が全滅したことで落ち込んでいるわけではなく、他に理由があるようであった。その司令官は不敵の笑みを浮かべ、リカたちの監視を続けていた。これにより、本当の戦いはこれからだということを受けられた。

## 覚醒解除

---

リカが所属する秘密組織は、強奪された国産ステルス機の手がかりを掴むべく、蝕島という東シナ海に浮かぶ島に専属チーム、ピュア・ガーディアンズを派遣した。

派遣されたメンバー、チカ、ユミコ、ケイ、ヒロミ、リカは島に上陸し、数々の奇妙な出来事に遭遇するのであった。

敵のアジトと思われる山荘を発見した彼女たちであったが、罠にはまり、謎の武装集団に包囲され、対決することとなった。

戦況はリカたちの方が有利で、実力の差を見せつけることとなったわけだが、敵側にはまだ秘策があるようで、勝敗の行方は分からないままであった。

リカたちは武装集団に打ち勝ち、合流しようと砂浜に向かっていた。

「...皆、迎いの輸送機は今から約一時間半後に到着するわ、予定より早く仕事が片付いたから休憩しましょう」

「それじゃあいい天気だし、浜辺でティータイムでもしますか～」

「ええね～ケイは、お茶淹れるの上手いから～」

「何かお菓子持ってくればよかったな～」

「もうピクニック気分ですね～」

メンバー五人は仕事のことを忘れ、輸送機が来るまで呑気に寛ごうとしていた。

島の中はしばし騒がしくなっていたが、また静けさを取り戻し、ひとまずリカたちの任務は完了しようとしていた。

「...全エリア部隊、全滅...侵入者に一人も負傷者や死亡者は居ないようです...」

「...やるじゃないか、日本にこれほど優秀な部隊が居たとはな...恐れ入った.....しかし、まだまだ爪が甘い...我々の本当の力を見せてやろう.....準備しろ...」

「...了解しました」

敵側の司令官は、オペレーターに命令して何やら企んでいた。

「.....！」

その時、リカたちに倒された武装集団の目が開き、異変が起こりつつあった。それはとてつもない恐怖を予兆するものであった。

「...え？」

リカたちは妙な違和感を覚え、思わず立ち止まって振り返った。

「...！！」

彼女たちの前には、倒したはずの武装集団が平然な顔で横一列に立っていた。リカたちは驚くほかなかった。

「...そんな、急所を外したとはいえ、動けないはず...！」

リカは、あまりの衝撃でなかなか動けずにいた。その他メンバーもまたリカと同じような反応であった。

一方、敵側司令本部。司令官はさりげなく不敵な笑みを浮かべたまま、島の状況を監視していた。

「...しつこいようですが、よろしいのですか？ たった五人に試すことはないのでは...」

「...あの五人、普通の自衛隊員ではないよ、日本もついにスパイのような特殊な機関を設立したと聞いたことがある...このまま逃がしたら取り返しのつかないことが起こりそうな気がしてね...少しでも障害になるものは排除しておいた方がいい...」

「...分かりました、では実戦モードに切り替えます...！」

司令官は、リカたちのことが気になり、オペレーターにあることを命令した。これにより、彼女たちは地獄を見ることとなり、事態は一変することとなる。



それからリカたちは相手の動きが読めず、しばし棒立ちであったが、ようやく相手の武装集団に異変が起こり始めた。

「...？」

死んだ魚のような目をしている武装集団は、ゾンビのように一步一步歩きだし、リカたちに襲いかかろうとしていた。

「...気味が悪い、昔のホラー映画じゃないんだから付き合ってるわ...さっさと片付けちゃおう〜」

「...ちょっと待って...リカ！」

リカはチカの命令を無視して、復活した武装集団に挑もうとしていた。

「...ドドドン...ドンドンドン！」

リカは得意とする銃さばきで、手や足を撃ち、武装集団の動きを封じた。相手は先手を取られて沈黙し、手応えがないように思えた。リカは、安心して愛銃を納めてその場を去ろうとしていた。

「.....！」

しかし、これで決着は着きそうになかった。リカは背後にまた妙な空気を感じ、恐る恐る振り返った。すると手足を撃たれた武装集団は何事もなかったかのように立ち上がっていた。それで、リカはすかさず彼らに銃を向けた。武装集団はリカに怯えることなく、また前進し始めた。身の危険を感じたりカは容赦せず、銃を発砲しようとした。

「...ドドン！ドドドン...！！」

リカは防弾ベストで守られた体ではなく、無防備の頭に銃弾を命中させた。それは見事なクリーンヒットであった。

「...え？」、

普通、頭を撃ち抜かれたら、息絶えて人形のように倒れるはずだが、その撃たれた武装集団はビクともせず、ずっとリカの方を見ていた。そして、さらに驚かされることが起こり、リカは唾

然とした。

「...カチャン」

リカが武装集団に撃った銃弾は、体内から抜かれ、傷口が閉じられようとしていた。しかし、それでまだ驚いた口は塞がれそうになく、武装集団の体に異変が起こった。体中、黒い霧に覆われ、武装集団をそれに包まれていった。次第に謎の霧は具現化していき、西洋の鎧を模っていた。やがて彼らの状態は落ち着き、武装集団は驚異の変身を遂げていた。島の各エリアにいる他のメンバーも状況は同じであった。

「...どうやら砂浜での日光浴は満喫出来そうにないわね.....この連中を全滅させるまで無線の使用は禁止よ...皆、生きてこの場を潜り抜けられることを願うわ...一人でもメンバーが欠ければ承知しないわよ...！」

「...了解！！」

チームリーダーのチカは、余計な指示を与えずメンバー全員が無事に生還することを願った。

「...修羅場になりそうね、以前もこういったことあったな~今回はどうなることやら...」

リカは呑気に眩きながら逃げも隠れもせず、真正面から立ち向かおうとした。

「...ドドドドドド...ドドドドン！！！」

リカは、標的に向けて、辺り構わず乱射した。広範囲に煙が立ち込める中、結果は悪く、彼女の表情が少し強張った。発射された銃弾は全て弾かれて、武装集団は無傷であった。リカは一基に不利な状況に追い込まれ、頭を搔いてその場から逃げようとした。変身した武装集団は、V字の赤い一つ目を妖しく光らせて彼女を追跡した。

これにて、決死の第二ラウンドの幕が開かれようとしていた。

「組織は、たとえ私たちに身の危険が迫っていても一切関与しない...そのかわり、常人離れした未知の力を授けられた...その力を解放するのは本人の自由である...」

蝕島 中央エリア

このエリアでは、チカが武装集団と応戦していた。

チカはまとめて相手をしようとしたが、相手の力量が大きく変化しているため対応は実に慎重であった。森中に武装集団の怪しげな気配があり、彼女は完全に囲まれていた。

「……こうもピンチになるとはね～」

チカは、溜め息をついて策を練っていた。

鎧を纏った武装集団の目には、熱探知機が備わっているようで、チカの動きは丸見えであった。

「…！」

武装集団は痺れを切らし、一斉に彼女に襲い掛かろうとした。

「…いい度胸だ、かかってきな！」

チカは怯むことなく、真正面から武装集団に挑んだ。彼女は標的に接近して、接近戦に誘い込んだ。

「…ボゴ」

チカは先手を取り、武装集団の一人に鉄拳を浴びせた。しかし、攻撃された相手は顔色一つ変えなかった。むしろ顔色を変えたのはチカの方であった。

「……………いったーい！！！！！！」

チカは標的を殴打した手を抑えながらハスキーな声で悲鳴をあげていた。標的の体は鉄のように固いようであった。

「…ボゴ！！！」

隙を見せたチカは武装集団の一人の鉄拳を浴びせられ、勢いよく吹っ飛び、大木に叩き付けられた。

「…ぐ…は……今のはちょっと効いたかな……」

チカはなかなか起き上がれず、死の一字がうっすら頭の中に浮かんだ。

「……」

武装集団は無言のままチカの動きを探っていた。チカは何かを目論んでいるような目をしてゆっくりと立ち上がった。

「……感情が表に出ない分、あんたらとは戦いやすい…悪いけど容赦しないよ…！」

その時のチカは戦意を喪失しておらず、穏やかな表情が一変し、殺気を帯びていた。

「……！」

鎧を纏った武装集団の表情は分からないが、明らかに恐怖で振るえている様子であった。

「…さて、お人形さん、ゲームを再開しようか…もう地に膝をつけるような無様な姿は見せないわ…」

チカは、強気な姿勢で武装集団を刺激した。彼らは構えて所定の位置についた。

「…ザ」

砂地を駆ける音がかすかに聴こえ、チカたちは木を飛び移っていき、戦闘を開始した。彼女は無理に反撃せず、相手の動きを読んで回避することに集中した。周りの植物が武装集団の攻撃で荒らされる中、チカは冷静に攻撃を避けていった。チカは複数の敵を相手にして、戦闘は激化していった。

しばらくの間、地響きや木がなぎ倒される音が続くが、決着はもう着きつつあった。

「…ゴオオオオオオオオ」

激闘の影響で辺りは砂煙が舞っていて視界は悪くなっていた。

「…ザッ」

勝負の行方は、確認出来ないように思われたが、そんな時、砂煙が舞う奥から人影が一つ見えた。それはチカのようにであった。

「.....ふう、ちょっと大人げなかったかな」

チカは、そう呟いてその場を後にした。

やがて砂埃が晴れていき、チカの相手をしていた武装集団を確認すると、全員静かに倒れていた。特に目立った外傷はないようで、彼らは電池が切れた玩具のようにぴくりとも動かなかった。チカは呆気なく勝者となったのであった。

チカは接近戦を得意とし、いざ実力を発揮する時、特殊な手袋を使用する。その手袋を装着した状態で彼女に触れると相手は一瞬で全身が石のように固まってしまう。彼女の装着した手袋の名は`チルド・グローブ`。文字通り、手袋から冷気を発し、標的に触れた後、瞬時に内部から凍結させることが出来る。凍った物体（または人体、生物）の解凍は不可能に近く、機能を失う恐れがある。チカの後輩であるチエが使用する`インフェルノ・グローブ`と正反対の性質を持ち、SJAの中でも強力な武器と評され、彼女が通った後は、凍結した敵がドミノのように倒れていつている。

また、冷気の調節が利き、武器以外にも使用可能。オーバーヒートした乗り物や機材を修理出来たり、体温を下げて風邪を治したり、火傷を治療したりと他にも活用術があるが、ほとんど仲間が流した噂のようである。

蝕島 北エリア

このエリアでは、ケイが武装集団と応戦していた。

ケイは愛刀`村正`で武装集団を蹴散らしていくが、どうも上手くいかずにいた。

その場にいる武装集団は、肘に仕掛けられたナイフやブレード（大刃刀）で応戦していた。彼らがかんりの実力でケイは少々押され気味であった。彼女の体を見ると、至る箇所に切傷があり酷く出血していた。

「.....く...さっきとまるで動きが違う...皆も手間取っているんだろうな〜」

ケイは、武装集団とせめぎ合いながら仲間の心配をしていた。

「ガキン...キキキキキキ...キン!!!」

ケイと武装集団の刃先が激しくぶつかり合い、その場は荒れていった。武装集団には微塵も隙がなく、ケイは焦りの表情を浮かばせていた。

「峰打ちでは致命的なダメージを与えられない...とすると手加減なしで斬るしかないね...」

その時、ケイは戦況が不利だと感じ、戦法を変えようとしていた。ある決断をしたケイの声のトーンは低く別人のようであった。彼女は殺気立っているようであった。

武装集団もケイの異変に気づき始めていた。

「...ガキン!!!」

ケイは何人もの武装集団の得物を弾き返し、天高く飛び上がり、ひとまず周辺で一番高い木の枝に飛び移った。ケイはそこで一呼吸して刀を鞘に納めた。その時の彼女は完全に無防備で罠だと悟った武装集団は動こうとしなかった。

「.....そっちが来ないからこっちから行かせてもらうよ...」

ケイはかかって来ない敵を見下ろして、攻撃を仕掛けようとしていた。

「...バ！」

ケイは頭を地に向け、大木の枝から勢いよく飛び降りた。地上で待っている武装集団は彼女の動きに警戒しつつ、迎え撃とうとしていた。

「...チャキ」

ケイは鞘から刀を抜こうとする仕草を見せた。待ち構える標的は応戦しようとするが、その時、冷たい風を浴びせられ何も出来ずにいた。その間にケイは愛刀を抜き、地に足をつけていた。

「...!!!」

反撃しようとする武装集団であったが、なぜか体を自由に動かすことが出来なかった。

「...そのまま楽になりな」

「...ブシャ！」

ケイがそう言うと、武装集団数人の体から大量の血が噴き出て、そのまま息絶えた。

その様子を見ていた残りの武装集団は、あまりの衝撃で震えていた。

「...へえ、そんな妙な格好していてもちゃんと赤い血が流れるんだね...安心したよ...おたくら宇宙人か何かだと思っていたからさ...」

ケイは、不敵な笑みを浮かべながら武装集団に威圧感を与えていた。

「ザザ...」

武装集団はあまりの恐怖で後ずさりしていた。

「...まさか逃げる気じゃないよね？私をその気にさせちゃったんだから...責任とってもらおうよ...相棒はまだ血が吸いたいようだから...」

「...ひい！」

ずっと無口だった武装集団は、別人格が宿ったケイに対し、思わず悲鳴をあげ始めた。

「.....何だ、声出るじゃないの...本当に安心したよ、この島には化け物が棲みついているのかと...と言っても、もうどっちが化け物か分からないね...」

「.....！！」

武装集団は、実力の差をまざまざと見せつけられ、そのままケイに挑もうとした。勝負の結果はすぐに明らかになった。数分後、ケイは無残に倒れている武装集団を避けながら歩いていた。

ケイは「村正」という日本刀を戦闘時に使用している。その刀は、武将、戦国大名の徳川家康がコレクションしていた名刀の一つであったが、徳川一族が殺害された刀が偶然にも村正だったため、妖刀として恐れられる。妖刀伝説の真偽は定かではないが、切れ味は抜群でS J Aの科学力が加わり、ケイの手に渡った。

あまりに切れ味があるため、普段、彼女は峰打ちで敵を倒している。窮地に追い込まれた時、本来の村正の力が発揮され、血の雨を降る恐れがある。

ケイは数回、村正の刃を向けて戦っているが、斬った時のことを覚えておらず、同刀の妖気によるものだと噂されている。刃はぎざぎざの鋸状になっており、チェーンソーのように振動し、それで切れ味が増すこととなる。また、血で錆びにくくするために特殊加工されている。

蝕島 西エリア

このエリアでは、ユミコが武装集団と応戦していた。

ユミコも窮地に追い込まれ、負傷している様子であった。

「はあ...これって絶体絶命ってやつやね...何年ぶりかな...?ピンチになるの...」

ユミコは息が上がっていた。疲労感が現れていたが、なぜか笑みを浮かべており、そこが何処となく不気味であった。

「...カチャ」

武装集団は、腕に仕掛けてある近未来的な光線銃を構えて、ユミコに止めを刺そうとしていた。

「.....はは、さっきから色々面白い玩具を見せくれるな...昔、洋画でよくそういうのが流行ったけどな...それで殺せるもんなら殺してみい！」

ユミコは、まだ負けを認めておらず、敵に挑発していた。

「.....」

武装集団は無言のまま、ユミコに照準を合わせて光線銃を発射しようとした。

「ピュン！！」

その時、武装集団が青白い光線を発射したが、ユミコは紙一重で避けて逃げようとした。

「ピュン...ピュン、ピュン...！」

武装集団は攻撃を止めず、得物の光線銃を連射して、ユミコを追いかけた。彼女は必死に逃げようとするが、敵の足は速く、すぐに追いつかれそうであった。

「...！！」

そこで、さらにユミコには不運が起こった。目の前は大きな岩山がそびえ立っており、行き止まりになっていた。彼女は今度こそ絶体絶命のようであった。

「...ちっ仕方ないか...」

ユミコは危機的状況に舌打ちしたが、それは敗北を悟っているようではなかった。



「...カチャ」

武装集団は勝利を確信し、光線銃を一斉に発射しようとした。これで勝負が決まるかと思われたが、事態は予期せぬ方向に進もうとしていた。

「...？」

武装集団は光線を撃とうとするが、なぜか反応せず、誰一人、撃つことが不可能であった。そして、それ以外にも異変が起きていた。

「ガザ...ガザガザ...ガザ」

突如、周りの木々が靡き始めた。その原因は、風のせいでも野生動物の悪戯でもなかった。武装集団は突然の怪奇現象に首を傾げて錯乱状態になりつつあった。そんな時、ユミコの姿を見ると、彼女はなぜか口を大きく開けた状態であった。

「...？」

ユミコは声を発しないまま、口を大きく開けた状態であった。その行為が何を意味するかは不明で、謎の怪奇現象はしばらく続いた。

「.....!!!」

それから武装集団に異変が起こり、装備された電子機器に障害が起こり、故障し出して武器も使用不能となった。

「...くは!!」

妙な現象は続き、黒い頑丈な鎧に亀裂が入り、脆くなって剥がれていった。原因が分からない武装集団たちはそのまま謎のダメージを受けて血を吐き、また嘔き出していた。彼らはもがき苦しみ、最終的に謎の死を迎えた。気づけばユミコの前には大勢の武装集団の亡骸が並んでいた。

「.....！」

その時、ユミコは周りの環境の変化に気づき、口を閉じようとした。不思議なことに、彼女が口を閉じると怪奇現象は去って行ったようであった。

「.....あ～あ、やりすぎちゃった...久々だったからな...仕方がないか...ハイテク機器に頼りすぎる

からそうなるんやで...」

ユミコは眉をしかめて意味深なことを口にした。彼女は後悔した様子でその場を後にした。

ユミコの攻撃手段は、聞こえない声である。彼女の声は超音波となり、自身の首に巻いてあるチョーカーは、超音波発生装置であり、制御装置でもある。これは彼女が所属する組織、S J Aの備品開発部が造り上げたものである。威力は強大なため、ユミコはほとんど加減して使用している。普通に使えば、近くの電子機器が一時使用不能になったり、生物の感覚を麻痺させ、気絶させたりする程度だが、力を完全に引き出した場合、周りの障害となる物はすべて破壊され、生物の場合は、体内の細胞を破壊されていき、死に至らしめるほどの威力がある。彼女は滅多に秘めた力を解放しないように心掛けている。

蝕島 南エリア

このエリアでは、ヒロミが武装集団と応戦していた。

ヒロミは、息を殺しながら茂みに隠れて武装集団の動きを窺っていた。彼女は相手の隙を見て、奇襲を掛けるのが狙いであった。

「...よし、あれから行ってみるか」

ヒロミは、一人で行動している標的を見つけて作戦を実行しようとした。

「.....！」

ヒロミは奇襲を掛けようとするが、背中に視線を感じ、すぐさま状況を確認した。

周辺には多くの武装集団が潜んでおり、彼女は完全に包囲されていた。歩いている武装集団の一人は、囹のようであった。

「...やれやれ、まんまと餌に食いついちゃったか...」

ヒロミの奇襲作戦は呆気なく潰され、彼女は総攻撃の餌食となった。

「ピュン...ピュピュン...ピュピュン...！」

武装集団はヒロミに容赦なく謎の光線を浴びせて有利な位置に立った。

「シュバババババ...！」

ヒロミは、隠し持っている苦無や手裏剣を放ったりと反撃しようとするが、相手の頑丈な鎧には通じず、全く歯が立たなかった。

「...ちっ」

ヒロミは表情を曇らせて、一旦退却しようとしたが、逃げ場を見つけるのは難しいことであった。

「カチャ...」

その時、武装集団の一人が、逃げ惑うヒロミを背後から狙っていた。彼女は狙撃者の気配に気づかず、もう殺されるのは時間の問題であった。

「.....ヒロミさん！伏せて！！」

「...え...？」

突然、女性の大声がヒロミの耳に届き、狙撃者も慌てている様子であった。

「ドン...ドンドン！」

大声がした直後、銃声がしたことで状況は変わりつつあった。

「.....ピュア！」

謎の銃弾で、武装集団の右腕は弾かれ、光線は明後日の方向へと発射された。

「.....あんた！」

ヒロミを助けたのは、リカであった。リカはいつの間にか東エリアから南エリアに移っていて、ヒロミの姿を目にしたのであった。

「...危ないところでした」

「.....まさかあんたに助けられるとはね...借りが出来たわ」

「...いいえ、これでチャラです、さきほど毒蜘蛛から救ってくれたので...」

「...ふ、相変わらず馬鹿真面目ね」

しばし和やかな雰囲気であったが、安心してはいられなかった。二人は武装集団の包囲網を突破しなければならなかった。

「.....どうしますか？相手は予想より手強くて...通常弾では歯が立ちません...」

「そうね、かなりの化け物よ、一筋縄ではいかない、あんたこういうこと経験したことないでしょう？」

「...ええ、まあ」

「私もあまり経験ないけど、それなりに試練は乗り越えてきた.....弾は残ってるの？」

「...あとわずかです、どちらにしろ何発撃とうが効果はありませんが...」

その時、ヒロミはリカにある物を渡した。それは銃弾が入ったポーチであった。

「...これを使いなさい、少しはましでしょう...」

「...え...あ...ありがとうございます...二人でならどうにかかなりそうですね...」

その時、ヒロミはリカの発言に対し、頷こうとしなかった。

「.....組んで戦うのは反則よ、ここは私の領域...このエリアはどうにかするから自分の持ち場に戻りなさい...！」

「...こんな時に何を？一人では勝ち目はありませんよ...！」

「.....そうとも限らないわ、先輩たちは既に片づけて私たちが待っているはず...甘ったれた発言は厳禁...歌劇団...公安にいた時とは環境がまるで違う...チームといっても、自分の身は自分で守らないといけない場合がある...その辺を理解して...」

ヒロミは、先輩らしくリカに説教して、組んで戦うことを拒んだ。

「...すみません、ヒロミさんの言う通り、甘く考えていました...」

「...いいのよ、恐いのは当然よ、私もこのチームに配属されたばかりの時、よくぼやいていた...  
どうしても手に負えない時は呼びなさい...それまでお別れよ」

「はい、ヒロミさんもご武運を...」

リカたちは二手に分かれようとして、その場でヒロミは囿となった。

「さあ続きをしようか、そっちが優勢なんだから、少しでも楽しそうにしたらどう？」

武装集団は相変わらず無愛想で、ヒロミに容赦なく襲い掛かろうとした。

「...バツ」

その時、ヒロミはありったけの手榴弾や爆薬を武装集団に目がけて放り投げた。

「...！！！！」

「ドガオオオオオオオン...！！！」

ヒロミの攻撃で大爆発を起こし、辺りは一瞬で火の海となった。リカはどうか爆発現場から逃れていた。遠く離れた場所に居るチカたちも爆発に気づいていた。

爆発後、焦げた植物が舞い、武装集団の何人かが木の下敷きになって息絶えていた。それでもまだ半分以上、敵は残っており、ヒロミの姿は見当たらなかった。さすがに頭にきたのか、生き残った武装集団は、血眼になってヒロミを搜索していた。なかなか姿を見せない彼女であったが、逃げたわけではなく、密かに形勢逆転の機会を狙っていた。武装集団は何も気づいていなかった。

「...ドオウ！ドオウドオオン！！」

「...！」

突然、強烈に響く銃声がして、武装集団に命中した。撃たれた弾はかなりの威力で、命中した弾は頑丈な鎧を貫通し、火を噴き出していた。勿論、その弾が命中した者は即死であった。武装集団は、状況が把握出来ず狼狽している状態であった。

「...今のは効いたでしょ？装甲車を一発で破壊するくらいの弾だからね...」

耳を澄ませると、かすかにヒロミの声が聞こえるが、何故か彼女の居場所は、誰も分からなかった。いつの間にか異様な空気に包まれ、恐れをなした武装集団はバラバラに行動せず、団子状態になった。しかし、それが墓穴を掘る結果となった。

「...バチン」

一瞬火花が飛び散る現象が起こり、また何か不吉なことを予兆していた。

「.....バチバチ...ドバババババババ...」

その時、青い閃光が走り、凄まじい放電が起こった。そして、その場にいた武装集団全員は、電流を浴びてそのままショック死していった。

「.....よし、どうにか片付いた、これで一服出来る～」

ヒロミはそう言って、何処からともなく姿を現した。ヒロミは、奥の手で武装集団を倒した。

ヒロミは武器を使った格闘術を得意とし、衣服の中に無数の小型武器を装備している `暗器、の使い手である。これは元々、中国から伝わり、日本でも古くから忍者が似たような戦術を使う。彼女は戦闘中、役に立つ道具を数多く持っており、不意を突く時は、 `トレースマント、という特殊なマントを使用している。そのマントを全身に纏うと、姿が消えたように見える。実際は周りの風景と同化しているだけであるが、気づかれない仕掛けとなっている。

また、赤外線熱探知機でも探知されず、たとえ電波を発する物を身につけていても遮断され、レーダーに反応しない効果があり、逃走にも活用される。これは隠密には欠かせない道具である。

強力な武器は、高圧電流を発する特殊な手袋で、主に周囲を包囲された時に使用するのが効果的である。彼女が持つ武器は全て S J A の開発した物である。

一方、謎の武装集団を操る司令官は、ご立腹の様子であった。

「...どういうことだ、我が軍と対等に戦える者がいるとは...！」

「.....今のところ全体の八割の兵を失っています...残りの兵は、あと一人の侵入者と交戦中で非常にまずい状況です...！」

「く...さっきから嬉しいニュースがちっとも入って来ない...まるで悪夢だ」

「.....指令、こんな時に悪いんですが...」

「ん？どうした？」

側近の一人が恐る恐る司令官に近づき、あることを知らせようとしていた。顔色の悪さから吉報ではないことは確かであった。ここでまた事態は急展開することとなった。

蝕島 東エリア

このエリアでは、リカが武装集団と応戦していた。彼女はヒロミと別れ、自分が担当するエリアに戻って武装集団と戦っていた。

「ドウドウドウドドン！」

体が震えるほどの銃声が鳴り響いているが、その銃声は聴き覚えがあるものであった。リカはヒロミから強力な銃弾を分けてもらい、戦況は若干有利になっていた。

敵の数は減って行くが、それに伴い、リカの体力も減りつつあった。今までにないことを経験していることで、彼女の体力はもう限界に近かった。出血が酷く、大量の汗を掻き、足はふらつき始め、気を失いそうになっていた。

「.....はあはあ、もうしんどくなってきた...このままじゃ.....」

リカは気力を振り絞って、戦う意思を見せようとしたが、体は鉛のように重たくなっていき、立つのがやっとであった。

「.....バシュ...！」

その時、青白い光がリカの腹部を貫いた。彼女の目の前には、横一列に武装集団が立っているが、何も出来ず静かに横たわっていった。やがて目の前が真っ暗になり、彼女は完全に意識を失った。その後のリカの運命は神にも分からず、予期せぬ新境地が開かれようとしていた。

## 次なる策略

---

東シナ海 蝕島

強奪された国産ステルス機の手がかりを掴むべく、調査をするために派遣されたチカ、ユミコ、ケイ、ヒロミ、リカであったが、衝撃的な事実を目にし、謎の武装集団に襲撃されることとなった。チカ、ユミコ、ケイ、ヒロミは実力を発揮して、武装集団を撃退したが、リカは苦戦を強いられ、致命傷を負い、ついに力尽きてしまった。

「...リカの反応がありません...恐らく負傷しているかと...」

「.....やはり今の彼女では荷が重たかったようね...」

「...公安での経験が無駄だとは言えへんけど、次元が違いますからね...今、相手にしているのがまさにそれ...」

「...すみません、彼女から協力して戦うよう頼まれたんですが、断ってしまって...」

「...ヒロミのせいじゃないよ...これも試練だから...皆、そうして成長していった...ただ今回ばかりは嫌な予感がする...予想以上に危険な香りがするのよ...彼女を救出しないと...」

派遣メンバー四人は、リカの非常事態に肖り、彼女がいるエリアへと急行していた。

一方、リカは体力の限界を超えて体が自由に動かず、腹部を光線銃で撃たれてしまった。彼女は悲鳴をあげず、ゆっくりと倒れ込んだ。

「.....うう、あ...あ...」

リカは上手く言葉を発せず、仲間に現状を報告することが不可能であった。

「...ジャキ！」

武装集団は、得物の光線銃や刃物を突きつけ、リカの様子を見ていた。彼らは罨ではないかと警戒しているようであった。

「.....」

リカの荒い呼吸は、たちまち収まっていき、瞼が重たくなって目を閉じ、静かになっていった



。彼女にはまだ息があり、意識を失った状態であった。

敵側の司令部の人間は、その様子を見て、若干笑みをこぼしていた。

「...奇跡はそうは起こらん...彼女は運に見放されたな...」

「.....あとの四人の戦闘能力が異常だということでしょうか...?」

「さてな...今日は理解しがたいことがよく起こる...そろそろ引き揚げるとするか...あっちはお迎えが来るようだし...」

「...彼女たちはどうしますか?」

「.....悔しいが、今の戦力では太刀打ち出来ない...あの島を捨てて出直した...」

「...今映っている侵入者...まだ息があるようです、始末しますか?」

「.....そうだな、まだ生きているのなら利用出来そうだが...何処の組織に所属しているか知りたい...生け捕りだ...」

「...了解しました、残りの侵入者が東エリアに向かっています...」

「...どうにか振り切って撤退させるんだ...」

「...では彼らにそのように指示します」

司令官は、オペレーターに命令した後、深く溜め息をついていた、リカは殺されることなく、人質にされそうになった。派遣メンバー四人は間に合いそうになかった。

「.....ドクン...ドクン...ドクンドク...」

その時、激しい動悸が聴こえ、それはリカの心臓からであった。彼女の心臓の鼓動はずっと激しく打たれ、鎮まりそうになかった。彼女は意識を失ったままで、体の異常の原因が分からなかった。

「……ドクン」

その時、リカの動悸が治まり、事なきを得たように思われたが、体の異常はまだ続きそうであった。

「…！」

その時、リカの目が開かれ、瞳は赤く光っていた。

「…！？」

リカの周りにはいる武装集団は、彼女の異常に気づき始めて離れようとした。

「…ゴオオオオオオオオオオ！！」

その時、武装集団は衝撃波で数十メートル四方八方に吹き飛ばされた。衝撃波を放ったのはリカのようにであった。

「…何事だ？」

「…分かりません、電波障害により、映像が乱れています…通信も途絶えました！」

緊張を緩めていた敵側司令部も現場の異常に気づきだし、モニター画面に釘付けとなった。

目覚めたりカは、異様な雰囲気醸し出し、武装集団の前に姿を現した。彼女の姿を見ると、髪の毛は赤みがかった長髪のドレッドヘアー、目つきは狂気に満ちており、瞳は赤色、口には牙が生え、爪は長く鋭くなっていた。リカは変異し、面影は無くなっていた。

「……！！」

武装集団は、リカの変わり果てた姿を見て、後ずさりしていた。

「……あいつら何をしている？さっさと掛からんか！」

武装集団は、司令部の命令で仕方なく、リカと攻撃しようとした。

「……グオオオオオオオオオオオオオ」

その時、変異したりカは、体が震えあがるほどの雄叫びを上げた。武装集団は、決死の覚悟で彼女に立ち向かおうとした。

「...ピュンピュンピュン...ピュンピュン」

武装集団は、変異したりカに目掛けて装備している光線銃を連射した。

「バツ！」

リカは、攻撃を綺麗にかわしていき、勢いよく武装集団がいる方に飛び掛かった。

「...ガキン...バキバキバキ...！」

変異したりカは、鋭い爪と怪力で武装集団を圧倒していた。今の彼女は狂暴化した野獣のようで、鬼神のごとき強さを誇り、それはむごい光景であった。

派遣メンバーは、リカがいる東エリアに到着していき、その場の惨劇を目の当たりにしていた。

「.....想定外のことが起こっていて、頭の中の整理が出来へんわ...」

「...本当に戦っているのはリカなんですか...？無線はさっきから応答しません...」

「...彼女の気が感じられますが、かなり異質です...容姿も全く違う...」

ユミコ、ケイ、ヒロミが変異したりカに驚愕する中、チカだけはなぜか冷静であった。

「...確かに以前より能力が向上しているみたいだけど、あれでは駄目ね...」

「...どういうことですか？チカさん...」

ケイは、チカに質問した。

「動きに無駄が多すぎるわ...何も考えず、体力を消耗させているだけ...長く持たないわ...冷静に戦えば相手に勝機があるわ」

「やられるのも時間の問題...では加勢する必要があるのでは...？」

「...今は行けないわ、彼女の姿を見て...理性を失っているとしか思えない...あれでは敵味方を識別出来ないわ...助けに来た私たちが襲うかもしれない...！」

「...じゃあ、どうすればいいんですか？」

「...彼女の動きが止まるのを待つよ、元の姿に戻った場合や倒される寸前に攻撃を仕掛ける...いいわね？皆...」

チカは、メンバーに的確な指示を出し、暴走しているリカの姿を覗き見していた。

変異したりカであるが、チカの見解通り、無駄に体力を消耗させていき、相手に攻撃パターンを読まれていた。リカはこれで形勢逆転とはいかなかった。

「...何だ、見かけ倒しか、驚かしよって...興味深い素材だが、致し方ない、もう始末しても構わない...こちらにはもう時間がないのだ」

敵側の司令官は、変異したりカの能力を疑問視し、また別の脅威に重点を置いているようであった。

「...はあ、はあ...ぜえ...はあ...」

変異したりカは、体力の消耗で息を切らして、ふらつき始めていた。武装集団はまだ十人残っており、反撃する機会を窺っていた。

変異したりカは、正気を取り戻すことなく、また倒れ込もうとしていた。派遣メンバーは、チカの合図が掛かるまでじっとこらえていた。

「...チカさん！」

ケイはもう我慢の限界であった。

「...そう急かさしないで、そっと近づいて一気にケリをつけるわよ...彼女の救出は私がするわ...」

派遣メンバーは、奇襲を掛けようと所定の位置についた。武装集団は、まだ派遣メンバーの気配に気づかず、リカのことに集中していた。

「.....ふう、ふう...」

変異したりカは、呼吸の乱れがなくなっていき、妙に落ち着いていた。そして、そのまま反撃する素振りを見せず、じっとしていた。

「ピュー...」

その時、武装集団の右腕に装備された光線銃の銃口が青く光りだし、彼らはリカに止めを刺そうとしていた。

「...！」

チカたち派遣メンバーは、リカを救出しようと、奇襲を掛けようとするわけだが、ここで思いがけないことが巻き起ころうとしていた。

「ピュオ！！」

武装集団は、戦意を失ったりカに目掛けて、一斉に光線を発射した。これで勝利を確信した彼らであったが、リカにまた異変が起ころうとしていた。

「...ピカッ！」

「...この光は？」

突如、リカの体が妖しく紫色に光り出した。武装集団は、謎の光で視界を奪われ、身動きが取れなかった。チカたりもまた、何も出来なかった。じきに謎の光は収まっていくが、さらに驚くことが起こった。

リカが堂々と武装集団の前に立っていた。ただ、まだ彼女の様子はおかしく、意識がはっきりしない状態で目は虚ろであった。今のリカは隙だらけであったが、なぜか武装集団は動けずにいる。

「キッ」

リカが武装集団を睨み付けた直後、彼女の体に更なる変化が起きた。武装集団の体はようやく自由に動き、妙な現象が起こる前に攻撃を仕掛けようとした。

「ピュオ.....！！」

リカがいる方向に青白い光が束になって放出されたが、その光は弾かれていった。

「...!!!」

リカの方を見ると、大きくて黒い翼のような物に包まれていた。

「...バサ!!!」

武装集団は、翼の殴打を浴びて弾き飛ばされ、ダメージを受けた。

「...あれがリカ？」

チカたちと武装集団は、リカの姿を見て、愕然とした。彼女はまた姿を変えて復活していた。特徴として、髪の毛は白の長髪で、瞳は紫、顔の反面には仮面のような物が装着され、体は丈夫そうな灰色の戦闘着が纏われ、落ち着いた表情であるが、冷酷さも滲み出ており、危険な感じがした。さらには、背面から体を覆うほどの大きな翼が生えていて、とても人間の姿ではなかった。

「...とてもじゃないけど、ついて行かれへんわ...あの娘、どないなったんや？」

「.....さあね、ただ言えることは、まだ私たちが出る幕じゃないってこと...」

派遣メンバー四人は状況が読めず、一旦引き下がろうとした。敵側の司令部もさすがに錯乱状態であった。

「...どうやら我々は夢を見ているようだな...早く醒めてほしいと願いたいところだが...」

「...残念ながら現実です、素直に受け止めて下さい...島付近に多数の反応が...」

「...ついに来たか...」

「...ステルス機は島から離脱させました、パイロットは次の命令が下るまで待機ということで...」

「...結構だ、これにて一時撤退する」

敵側の司令部は、リカたちの結末を見ることなく、その場を立ち去ろうとした。

見捨てられた武装集団は、勝ち目がないことを悟り、その場から逃げようとしていた。変異したりカは、なぜか彼らを追跡しようとせず、じっとしていた。

「...逃がすつもり？」

派遣メンバー四人は、変異したりカの動きが読めなかった。

「...バサ！」

その時、変異したりカは、生えた翼を広げて羽ばたこうとしていた。彼女はあっという間に数十メートル高く飛び上がった。

「...空に飛ぶことも出来るんだ...」

派遣メンバー四人は、上空にいるリカを呆然と見上げていた。変異したりカは、適当な高度で静止し、島を見下ろしていた。

「...ピピ」

リカの顔半面に装着された仮面は、高性能の探知機のように、逃げ惑う武装集団を捕捉していた。

「...一体何を？」

変異したりカは、翼を上斜めに広げていき、その直後、何枚かの羽根が舞い、ボウガンのように急な速度で地上へと放たれた。さらに放たれた羽根は、変形して先が尖っていき、まるで鋭利な刃物のようなようであった。

「ガガ！！」

「...ぐえ！！！」

変異したりカが放った羽根は、逃げる武装集団に深く刺さり、うめき声を上げさせ、致命傷を負わせた。

「...ドガアアアアア！！！！」

羽根が刺さった直後、爆発を起こし、武装集団は無残に倒された。

「...なんて攻撃だ.....」

派遣メンバー四人は、あまりの衝撃の光景に開いた口が塞がらなかった。

変異したりカは、謎の武装集団を全滅させ、無表情のまま地上へと降りて行った。

「...元の姿に戻らない、彼女はこれからどうする気？」

派遣メンバー四人がリカを心配する中、彼女に変化があった。

「.....そこに居る四人...そろそろ出てきたらどうだ？」

「...！！！！？」

変異したりカは、物陰に隠れている仲間の存在に気づいていた。しかし、どうも様子がおかしく、派遣メンバー四人は驚いたまま姿を現した。

「...こそこそ隠れて見学していたのか？」

「...正常なりカなら助けに行こうとしたわ...その口調からして、あなたは私たちが知っているリカじゃないんでね...何者？」

「...私はりカであってリカじゃない...もう一人の彼女の人格...影の姿...情報の一つに過ぎない...ご理解出来たかな？」

変異したりカは、紳士のような振る舞いでチカに答えた。

「...なぜその姿に？ どうして現れたの？」

「.....具体的に話すと長くなる...簡単に言えば彼女が...リカが呼んだんだ...」

「...リカが？ どうして？」



「...私に助けてほしいと願ったんだ...かなり危ない状況だったようなんでね...彼女が私を呼び起こした...」

「.....とても理解出来ないわ...特殊な仕事をしているとはいえ、リカは普通の人間よ...あなたとどういったつながりが？」

ケイの質問に対し、変異したリカは表情を若干強張らせた。

「...ああ、彼女はれっきとした人間だ、突然変異ということになる...数年前、私の細胞が紛れ込み、彼女の一部になった...」

「...そんなこと初めて聞いたわ」

「.....話したくない、思い出したくないことだからだろう...この姿になる前に野獣と化した姿を目にしたはずだ...」

「.....あの姿は何なの？」

「...あれもまた別人格のようなものだ、知性の欠片もなく、ただ周りのものを破壊していく化け物...時間を掛けず無理に覚醒させたため、誕生してしまった...でも時の流れで力が蓄えられ、奴は消滅して私の姿に進化したわけだ...」

「.....成程、どちらにしろ本来のリカの力じゃない...他力本願のようなものね.....もう敵は居ないわ...元の彼女の姿に戻ってもいいんじゃない？」

チカは、リカを取り返そうと、変異体に説得し始めた。

「...残念ながら元の彼女の姿に戻すことは出来ない...今の彼女にはこの未知なる力を制御する力がないんでね...私は私だ」

「...そんな...リカはどうなるの？」

ヒロミは、激しく変異体に疑問を投げかけた。

「...じき時間が経てば、目を覚まして帰ってくるかもしれないが...私の細胞に浸食されて、このままという可能性も高い...！」

「...そんなことが許されると思っているんか？」

ユミコは、怒りがこみ上げて変異体をじっと睨みつけた。

「...残念だが、私にはどうすることも出来ない...私を彼女と思って接するしかないんじゃないか...？」

「...そんな冗談笑えないね.....あなたを今から敵と見なすわ」

「...ほう、それはつまり、私と戦うということか？」

「そういうこと、まずは生意気なあなたを黙らせるわ...それから元の姿に戻す方法を考える」

「...それはいい考えだ、受けて立とうじゃないか...」

チカはメンバーに合図を出し、所定の位置につき、変異体と対決しようとしていた。変異体は、微動だにしなかった。

「.....つかぬことをお伺いするけど、あなたに名前とかあるの？」

「.....ププ」

チカの質問に対して、変異体は思わず笑ってしまい、そこに人間臭さがあつた。

「.....細胞組織の名は長くて覚えにくい...通称ゼファーだ...」

「いかした名前ね、素直の答えてくれて嬉しいわ...手加減はしなくていいわよ...四人が相手だからね」

「...そのようだな、さっきの人形より楽しめそうだ...」

派遣メンバー四人とゼファーは、お互いの力を探り合い、無闇に動こうとしなかった。

「...！」

双方とも動こうとした時、他に妙な気配が接近しようとしていた。

「...何？新手？」

「.....ボアアアアア！！」

突如、森の奥から青い炎が放出され、派遣メンバー四人とゼファーは、回避しきれなかった。

「.....この炎は！」

チカは、謎の炎に心当たりがあるようであった。

「.....この炎全然熱くない...！どちらかといえば心地よい.....」

「.....？」

謎の炎は、派遣メンバーに対し、何も影響がなかったが、ゼファーだけは、なぜか様子がおかしかった。

「...♪～」

謎の炎が五人を囲った後、続けて何処からか美しい歌声が聞こえ、また、五人の周りに異変が起きた。

「...緊張感がほぐれていく...」

「...この歌声は！」

ユミコは、謎の歌声に聞き覚えがあるようであった。

「...うう！」

歌声を聞いたゼファーは、頭を抱えて唸りだし、とても苦しそうであった。

「...あなた、どうしたの？」

「.....どうやら...はあ...交代の時間が...はあ...来たようだ...もう少し...お前たちと絡んで...はあ...みたかったが.....残念だ...はあ...さらば...だ...」

「...ちょっと！」

ゼファーが別れの言葉を言い残すと、体に異変が起こり、徐々に元のリカの姿へと変わっていった。これで彼の姿は完全に消滅した。

「...何かよく分かんないけど、問題が解決したみたい...」

ケイは、安堵の表情を浮かべ、愛刀の柄から手を放した。

「...ちゃんと生きています！」

ヒロミは、リカの脈拍を調べて、生死を確認した。

「...ようやく迎えが来たようね。しかも強力な...」

気がつけば派遣メンバーは、大勢の武装隊に囲まれているが、彼らは敵ではなかった。さらには、島周辺の海上に護衛艦二隻が停船、輸送ヘリコプター三機が島の浜辺に着陸し、上空にはF-2A戦闘機二機が飛行したりと、鬼気迫るものを感じる状態であった。

「...戦争が起こるような雰囲気ね」

「...そう思われても仕方ないね～」

「...！」

唾然としている派遣メンバーの前に二人の人物が現れた。

「やはり...あなたたちでしたか...」

チカとユミコは、目の間にいる人物をよく知っていた。

「...なんかこの辺り、空気が悪いんで浄化させてもらったで～」

滑らかな関西弁を話すその女性の名は、トウコ。チカたちの先輩である。元歌劇団トップスターであるが、下積み時代が長く、苦勞の末、歌劇団頂点の椅子を手にした。

彼女は短期間でトップの座を降り、当時、若手ホープで後輩であるチエに後任を務めさせた。同劇団退団後、彼女は舞台の仕事を中心に再始動し、裏稼業の密偵活動も継続して行っている。

ちなみにノリコとは同期で共に歌劇団の一時代を築き、裏稼業でも日本の秘密機関であるSJAのトップに選ばれた。

戦闘時には特殊な素材の手袋「バリアス・グローブ」を装着し、チエのインフェルノ・グローブと同じく、炎を発生させられるが、効果は多種多様で、攻撃以外にも使用される。攻撃の威力については、計り知れないものと恐れられている。

「...先輩の歌声、久々に聞きました、さすが聞き惚れますね～」

「相変わらずお世辞が上手いわね～そっくりそのままお返しするわ」

ユミコと会話を交わしている女性の名はオサコ。彼女も歌劇団OGで元トップスターの一人であった。同劇団時代から超越した歌唱力があり、長年人気を博し、退団後もミュージカル界の主力として、評されている。彼女もまた、ノリコ、トウコと同期で、退団後も交流を続けているため、付き合いが長い。

歌を得意とするユミコは、当時、オサコが率いる劇団班に所属しており、歌唱力や表現力が鍛えられたようであった。

裏稼業でも活躍しており、同期のノリコ、トウコ、チカたちと共に日本の平和維持に力を注いでいる。

戦闘時では、彼女の歌声が最強の武器となり、数々の任務を遂行させている。歌の効力は様々で相手を錯乱させたり、動きを封じることが可能、また、興奮状態を沈ませたりと癒しの効果があり、精神的攻撃が特徴である。彼女は、特殊な訓練を受け、制御装置なしで歌声を武器にすることが可能となった。

「.....あんたら随分とこの島で暴れたようやな...あちこちで死臭が漂ってるで...事情を聴かせてもらおうか...」

「...話すと長くなります...それにしても随分賑やかですね...迎えにしては多すぎるのでは...?」

チカが代表して、トウコたちに疑問を投げかけた。

「.....これは迎えではなく、応援よ...あなたたちがこの島で調査している間、政府に大きな動きがあつてね...政府の要人が集まる会議に、ノリコが出席している...」

「...ノリコさんが！」

「.....それに那覇基地司令部のレーダーが微弱な反応を感知してね...位置はこの島付近の上空や...長い間、その反応は消えず、その反応を不審に思った司令部は、捜査に乗り出した...緊急要請で私らも派遣されたわけや...」

「...でその反応の正体は？」

「反応する位置に向かったけど、何もなかった...尻尾を巻いて逃げたように思える...」

「...正体は、まさか例のステルス機？」

「...その可能性は高いわね、だからこれだけの部隊を出撃させたわけだけど...無駄だったようね...」

「.....でこの島はどうやった？率直な感想を聞きたいね」

「.....想像をはるかに超えたものがありました...ただ、ステルス機に関しては有力な手掛かりがありませんでした...」

「...そうか、皆、ちゃんと生きているようやけど...一人疲れ切っているのが居るな...」

「...彼女とは初対面ね...確か...最近の歌劇団のトップだったと思うけど...」

トウコたちは、意識を失っているリカに目を向けた。

「...今日からアクアプロジェクトチームの一員となったりカです...」

「...ああ、やっぱりそうか、以前、国内で起きたバイオテロ事件を解決させた娘やね～一度会ってみたかったんや～チエともよく一緒に仕事してたな～」

トウコは、リカのことを気に入っている様子であった。

「...でも初日からこんな過酷な任務に関わるなんて...ついてないわね」

「...今はまだ未熟ですが、必ず戦力になります...どうか見守ってあげてください！」

チカはりカのことを想い、トウコたちに頭を下げ、続けてユミコたちも一緒に頭を下げた。

「...まあ頭を上げや、気持ちは充分伝わってるで、せっかく新しい仲間が増えたんや、快く歓迎するで」

トウコたちは頭を下げるチカたちに対し、暖かい笑顔で応えた。

「...さて、皆さん疲れたでしょう？この島の後処理は地元の部隊に任せて、私たちは本部に帰りましょう...」

「...私はこの島に残るわ、先に帰っというて」

「...分かったわ、随分熱心ね」

「...久々に骨の折れる仕事みたいやからな...腕が鳴るわ」

「それでは先輩、失礼します」

「ああ、また東京で会おう」

チカたち派遣メンバーは、トウコと別れ、蝕島を後にした。彼女たちは、まず怪我の治療のため、島から近い那覇の自衛隊病院へと向かった。ひとまず、これでリカたちは悪夢から解放されたのであった。

一方、リカたちが蝕島へと向かった数時間後、防衛省の会議室では、日本政府の要人や自衛隊組織の上層部の人間が集結し、緊急の会議を行っていた。その会議にはノリコも参加していた。室内は何とも言えない緊迫感に包まれていた。

「.....皆さんご存知の通り、現在、我が国は極めて危険な場所に足を踏み入れている...そこで対策を練るため集まって頂いた...」

防衛大臣は、神妙な面持ちで口を開いた。

「...例のステルス機強奪の件について、現状を教えてくださいませんか？」

政治家の一人が防衛省側に質問し、担当職員が報告しようとした。

「...現在、全力を挙げてステルス機を捜索していますが、いい結果は出せていません」

「...そもそも最新鋭のステルス機を追跡出来るんですか？」

「...可能です、技術の進歩により、レーダーも高性能となっています...微弱な反応でも探知することが出来ます...」

「...では何故捉えることが出来ない？」

そこでまた、別の大物政治家が質問した。

「ステルス機の性能が良すぎるからです...何者かの手のよって完成し、恐ろしい完璧な攻撃機になってしまったのです...」

「強奪された機に対抗出来る兵器はないのかね？」

「...残念ながらありません、試作機も全て破壊されてしまったので...」

「...ではどうやって対処するつもりかね？何か秘策はあるのか？」

「...現時点では、追跡するのが精一杯です」

「...話にならん、大臣、これでは何の対策にもなっていない...！どう責任を取られるおつもりですか？」

大物政治家は、気分を害し、防衛大臣に激しく迫った。

「...まあまあ、他のも捜査協力者は居ますので...秘密日本国家請負機関の彼女からの報告を聞きましよう...よろしく頼む」

防衛大臣はそう言って、ノリコに合図を送り、報告させようとした。ノリコは専用のタブレット端末を使って会議出席者に報告しようとした。

「...我が機関は、強奪されたステルス機と同時に、強奪した犯人を捜索しています」



「...その情報は少し耳にしている...知っている、まだ正式に公表されていないが...確か中国のスパイだろう？」

「...ええ、偽名を使っているかもしれませんが、名は、ウォン・イーシン年齢不明...彼は元々中国の特殊工作員でしたが、一旦姿を消し、悪名高い傭兵として、再び姿を現しました...既に数えきれないほどの各国の要人が彼の手により殺害されています...C I Aなども総力を上げて彼を追っています」

「...で彼の居所は分かっているのか？」

「...捜索を続けていますが、まだ有力な情報は入って来ていません」

「...何だ、大していい働きをしていないな」

ノリコは、大物政治家の言動に腹を立てて、表情や態度に出さないよう心掛けた。「...ウォンの行方は分かりませんが、捜査を続けているうちに、ある手掛かりを見つけました...」

「...それは何だね？」

「ステルス機と思われる反応が、東シナ海南西部に位置する島上空でよくキャッチされるため、怪しいと踏みました、それで島を調査しようと部下をそこに派遣しました、絶対何かあるはずですよ」

「...成程、それは期待出来そうだな」

「...報告は以上かね？」

防衛大臣は、優しくノリコに問い掛けた。

「...はい、現状報告は以上ですが、一つ話をしたいですか？」

「ああ、構わんよ、手短にな」

「...今回のステルス機の件、とてもウォン一人で行ったとは考えにくいです...雇い主はまだ分かっていませんが、かなり大きな黒幕が関わっている恐れがあります」

「...ほう、興味深い...君の見解を聞こうじゃないか...最終的にどうなる？」

「...最悪の場合、国を巻き込んだ争いが起こるかもしれません...！」

「！！！！」

ノリコの衝撃の一言に対し、会議出席者がざわめき始めた。

「...ふん、戦争が起こるとでも言うのか？馬鹿馬鹿しい...」

大物政治家はノリコの発言に対し、嘲笑っていた。

「...いいや、ふざけた発言とは思えない...

日本もついに海外のテロや紛争に巻き込まれるようになったかもしれない」

大物政治家に反論したのは、自衛隊統合幕僚長であった。

「...幕僚長、何か意見が？」

防衛大臣が幕僚長に問い掛けた。

「...すみません、どうもあの先生の態度が気に入らなくて、つい、意見してしまいました...」

「...何だと？」

大物政治家は、幕僚長に苛立っている様子であった。

「...我々は他国の軍隊と比べて活動範囲が限られているため、不自由に思う時があります...何も戦場に行きたいと言っているのではなく、存在意義を問いたいのです...」

「詳しく聞こうじゃないか」

防衛大臣は、発言権を幕僚長に与えた。「...我が国は、アメリカという最強国家と同盟を結んでいるため、守られているわけですが、納得していません...何処まで協力してくれるか分からない...敵国から攻撃を受け、あとはアメリカに任せるなど虫のいい話だ...我々自衛隊の立場はどうなる？これも全てあなたのような傲慢な政治家のせいだ！」

「言わせておけば...！」

「あなた方の曖昧な論争で我々は振り回され、迷惑しているんだ！他国で人質に取られた日本国民は助けようとせず、見殺しだ...今の日本の戦力は、無能に等しい」

「く.....」

大物政治家は、幕僚長の発言に対し、言い返すことが出来ずにいた。

「...今後の対策について、何か考えているのかね？」

防衛大臣は、幕僚長に重要な質問をした。「...いつでも各基地から出撃出来るよう、態勢を整えております、許可が出れば、攻撃されると予想される場所に、防衛ラインを張る予定です」

「...アメリカと連携するつもりはないのかね？」

「...ええ、そのつもりです、何が起きようと、我が自衛隊部隊だけで対処しようと考えております」

幕僚長の発言で、政治家側はさらにざわめいていた。

「...そちらの言い分は理解した...総理に報告するよ」

「よろしくお願いします」

「...それでは他に入った情報や対策法を順に報告してもらおう、報告に対し、意見があれば遠慮なくおっしゃって下さい.....」

ノリコが参加している緊急会議により、日本の運命が左右され、もう決戦の日は近かった。

## 一時の安息

---

蝕島の騒動から二十七時間経とうとしていた。例のステルス機強奪事件については進展がなく、また、民間機、自衛隊輸送機の地絡事故は起こらなくなり、嘘のように日本上空は平穏となった。

島に派遣されたメンバーは、本部に帰還し、次の命令が下るまで待機していた。リカだけはまだ島での任務の疲労やダメージが残っていて、本部の医療室のベッドで眠っていた。室内には彼女に他にケイが居て、様子を見に来ているようであった。

「.....早く起きて俺を暴れさせろ...！」

「.....!!!？」

その時、リカは、夢の中の謎の声に責められ、咄嗟に飛び起きた。

「...凄い汗ね...恐い夢でも見たの？」

「.....はあ...はあ...ケイさん.....私は.....ここは...何処です？」

リカは無理に目覚めたため、錯乱状態となっていた。

「...安心して、ここはS J A専用の医療室よ、かなり疲れているようだったからここまで運んで休ませていたの...」

「...そうだったんですか、すみません、迷惑をかけてしまって...あの変な武装隊との戦闘に苦戦して、はっきり覚えていないんです...先輩たちが倒してくれたんですか？」

「.....いいえ、あなたはあの武装集団に勝ったわ...全く覚えていないの？」

「.....ええ、途中気を失ってしまって...本当に私が奴らを倒したんですか？」

「.....」

ケイはリカの困惑した表情を見て、嘘をついていないと納得した。

「.....私はどうなったかご存知であれば、教えてくださいませんか？」

「...いいわ、話すけど、あなたも何か心当たりがあれば包み隠さず話してね...」

「...分かりました」

「.....とその前に担当医を呼ぶわ、検査後、話すから」

リカは、本部内で簡単な健康診断を受けた。本部の医療設備は最新鋭で、エージェントに体の異常があった場合、迅速に対応出来るようになっている。リカの診断は数時間で無事に終わり、彼女はケイの付き添いで、担当医から診断結果を聞こうとしていた。

「...結果だけど、血圧、脈拍、内蔵機能など、特に問題ない.....ただ...」

「...ただ？」

「血糖値が若干高い...甘いものとか、お酒は好きなの？」

「...ええ、まあ、お酒は好きです」

「あらそう、適度な運動はしているようだから問題はないと思うけど...過剰な飲酒を続ければその完璧なプロポーションは一気に崩れていくよ...注意して」

「...はい、太りやすいので気をつけます」

担当医は若干強面の男性であるが、ちょっとした冗談を平気で言う性格のようであった。

「.....では彼女はすぐに仕事出来るんですね？」

ケイは、安堵の表情で担当医に質問した。

「...ああ、君たちは、はっきり言って異常な体質だからね...怪我の治りも予想より早い...学会で君たちの身体データを発表すれば、皆ひっくり返るだろう」

「化け物みたいに言わないで下さい~私たちだって普通の人間ですよ...ただちょっとだけ丈夫なだけ...！」

「こっちは仕事が楽でいいんだがね...まあ油断は禁物だ...何が起きてもおかしくない時代だからな...さあ、もう用は済んだ...一服させてくれ...」

リカとケイは、医療フロアを後にして、自分たちの専用オフィスフロアに向かった。

「...あれ？誰も居ないんですか？」

「皆、会議に行ったわ、私はあんたの監視を任されてね...特に今は仕事ないから寛いでいいわよ...」

ケイはオフィスに設置された全自動エスプレッソマシーンを使用して、リカに分までコーヒーを淹れた。

「...ありがとうございます、これだとゆっくり話が出来そうですね...」

「そうね、じゃあぼちぼち話しましょうか」

二人きりとなったオフィス内でリカたちは島で起きた出来事を話し合おうとしていた。

一方、他のS J A関係者十数人は、ステルス機強奪事件に関しての会議に参加していた。

「...防衛省の会議に行つて来たけど...自衛隊側と政治家側で意見が真つ向から分かれたわ...」

S J Aの責任者の一人であるノリコが、会議で集まったメンバーの前で報告していた。

「...どういった論争を？」

チカが、ノリコに質問した。

「自衛隊側は積極的に強奪されたステルス機に対して、防衛対策を取るそうよ...アメリカの助力は一切要らないとのこと...」

「...政治家側は？」

「自衛隊を前線に出さず、アメリカ軍の協力要請の案を持ち出したわ...自衛隊はあえてサポート役に回すってこと...あと、来年納期予定のアメリカ製の最新ステルス機を緊急で導入させるよう交渉するそうよ...完璧な他力本願...余計な手間を省き、虫が良すぎるのが見え見えよ...」

「...まあ予想通りの判断ね...私は自衛隊側に一票よ、ここに居る人間は、ほとんど同意見だと思

うけど...」

「我々のチームも自衛隊と連携して動くことにしたわ...ただ、あくまで私たちは影の存在だから、こっちで有利な状況に導く策を練らないと...それで例のステルス機の行方は？」

「.....全くレーダーに反応がありません、関連した事故も起こらなくなりましたし...」

職員の一人が、ノリコたちに現状を報告した。

「...嵐の前の静けさみたいで不気味ね...もう最終決戦の 때가近づいているのかも.....それじゃあ...次は、チカたちが調査した例の島について聞かせてもらいましょうか...」

派遣メンバーは、専用タブレット端末に保存した報告レポートを表示させ、チカが代表して読み上げようとした。

「...島を探索しましたが、かなり前から何者かによって潜伏場所にされているようですね...爆発しましたが、一軒の山荘がありました...」

チカたちは隠れ家とされる山荘を隅々まで写真に収めていた。写真データは、中央のプロジェクターに映し出された。

「...どれくらい潜伏していたか知らないけど、何のためにこんなものを建てたの？相手は何者？」

ノリコが、チカに質問した。

「...私たちが潜入した時、誰も居なかったのですが、部屋を調べていくとこれが...」

チカは、ある一枚の衝撃写真を、ノリコたちに見せようとした。それは部屋で変死していた兵士らしき人物であった。

「.....！これは酷い...死んでかなり経つわね...この仏さんの身元は分かる？」

「...はっきりとした身元は不明ですが、この隠れ家を搜索した後、彼の仲間と思われる集団と遭遇することになります...」

「...かなり手強かったそうね？」

「ええ、手練れの兵士で...奥の手を使わなければやられていたかもしれません...」

「...何処の部隊かはまだ分からないのね？」

「...はい、現在押収した物の中にあつた資料を基に調べていますが、まだ有力な手掛かりは見つかっていません...重要な情報は処分されたかもしれません...」

「...他に押収した物は、具体的にどんな物なの？」

「...そうですね、ジェラルミンケースがいくつか置いてあつて一つだけ押収しました、ロックが掛かっていたため、戻ってきてから専門スタッフに開けてもらいました...報告をお願いします...」

チカは一旦、科学班の代表に報告を委ねた。

「...はい、中には液体状の薬品が入った容器と注射器がありました...薬品の成分を分析しましたが、合法の物ではないようです...極めて危険な薬品です」

「...もし、人間が投与すればどうなるの？」

「...個人差がありますが、最悪の場合、死に至る恐れがあります...分析を続けていますが、完全なる毒物だと判明しました」

「.....変死体の近くに使用済みの注射器がありました...死因はその毒物かと...」

「...成程、なぜその毒物を投与したか気になるところね...何か分かったことはある？」

しばらく、ノリコとチカの対話が続いた。

「...あくまで推測ですが、我々を苦戦させた武装集団が関係しているかと思われます...最初戦った時、大した相手ではありませんでした、でも一度敗れた彼らは、急に復活を遂げ、変身しました...！」

「...変身？」

「話すより直接見た方がいいかと思います...ご覧下さい」



そう言って、チカは新しい写真映像をノリコたちに見せた。写真が公開された途端、室内はざわめき始めた。

「.....これは一体？私たちがからかっていない？」

「いいえ、至って真面目です、我々はこれと戦いました...！」

写真に写っているのは、化け物と化した武装集団の姿であった。

「...この物体を公の場で説明するには、かなりの時間が掛かりそう...納得のいく説明は出来る？」

ノリコは真剣な眼差しで、チカに詰め寄った。

「...はっきり言って自信はありません、公表するのは控えた方がいいかもしれません...」

「...まあいいわ、とりあえず私たちだけに話してみて...」

「はい、彼らは変身した途端に、驚異的な力を見せつけました、通常の攻撃、武器では全く歯が立ちません...おまけに妙な光線銃など装備していて...まるでS F映画の世界です...」

「...まあ言っていることはあながち嘘ではなさそうね...実は、ついさっき例の島に残ったトウコから通信が入ってね...島のあちこちに謎の物体が転がっているようで、それは腐敗が進み、人間の死体のようだけど、消し炭みたいになって無残な状態になっているそうよ...死体は回収してこちらで分析するつもりよ」

「...そうですか、この化け物については以上ですが...」

「...よろしい、盗まれたステルス機のマニュアルが発見されたようね...強奪犯のウォンは島に居たと思う？」

「.....多分居なかったと思います、ステルス機も見当たらなかったし...あれを操縦しているのは彼で、別行動を取っているかと思われます...」

「...成程、私は特に異議はないけど...二人だけで喋るのもなんだから、みんなの意見を聞きたいわ...何か質問ある？」

ノリコがそう言葉を投げ掛けると、一人の幹部の男が挙手した。

「.....今の君たちのチームについて訊きたいのだが、上手くやっていると心配でね...率直な意見を頂戴したい...まだ一人のメンバーは意識を失って眠ったままだそうじゃないか...新入りだからといって、あまりにも実力に差がありすぎては考え物だ...そのメンバーは、組織に貢献出来るのか？」

チカは、幹部の厳しい質問に対し、顔色一つ変えなかった。

「.....確かに、新入りは未熟な点が多々ありますが、素質はあります...もう少しの間、見守って頂けないでしょうか？」

「...うむ、ノリコ指令はどう思います？」

「.....まだ配属されて三日ほどしか経っていません...答えを出すのはまだ早いのでは...?彼女たちは足手まといと思ってないようですし...次にもし何か問題が起きれば、それまでの人材だったということです...私は彼女の今後を期待しています」

「...成程、ではもう少し待つとしよう...大変失礼した...」

チカや他メンバーは一息つき、その様子を見て、ノリコは密かに笑みを浮かべた。

「...さて他に何かある？」

悪い空気は過ぎ去っていき、ノリコは仕切り直そうとしていた。

一方、リカとケイは、島で起きた出来事について話を続けていた。

「.....そうでしたか、私はいつの間にか化け物になって、あの不気味な武装集団を全滅させていたんですね...」

「...ええ、とてつもない力だったわよ、ほれ、こんな感じ〜♪」

すると、ケイは専用端末にある画像を表示させた。

「...これって！」

「...興味深いんでね、こっそり撮っておいたわ、チカさんたちには内緒ね...」

ケイは、リカの変身した姿を写真に収めていた。

「.....二回も変わっている...それぞれ雰囲気違いますね...この私と接触したんですか？」

「...その最初の鬼みたいなのは、理性を失っていたみたいだから絡まないようにしたわ...次の翼生えたのは少し話したけど...」

「...奴は何と？」

「...自分はりカの別人格、情報の一つに過ぎないと言っていたわ...あんたはまだ力を上手く制御出来ていないから隙あらば乗っ取るかもしれないってさ~」

「...そんなこと言ってましたか...なんか怖いな~また変身したらどうしよう~！」

「...そもそも何で変身するようになったか教えてよ、心当たりあるでしょう？」

ケイがそう言うと、リカは目を閉じて、記憶を蘇らせて、変身のきっかけとなった原因を話そうとした。

「一つだけ心あたりが.....去年の夏あたり...私の最初で最後のディナーショーを終えた後の話です...公安の命令である事件を担当しました...一つの猟奇的殺人事件が全ての始まりでした...殺害されたのは、神戸研究施設の優秀な研究者の一人で、彼は外国人犯罪組織とつながっていたんです...驚くべきことは、さらにあり、彼はある恐ろしい計画に加担していたんです...」

「...恐ろしい計画？」

「...捜査中に歌劇団のサユミと鉢合わせしまして...彼女も殺害された研究者の件を捜査していて、それで知りました...」

「...サユミって今、トップスターをしている娘よね？」

「はい、その頃、サユミは、トップに就任したばかりで、表と裏の世界を行き来していました...彼女は、事件の被疑者を追っていましたが、その途中に予期せぬことが起こりました...」

「...続けて」

「サユミは何者かの奇襲を受けて、被疑者を逃がしてしまったんです...サユミの相棒は、奇襲で重傷を負わされました...」

「...サユミは？」

「.....彼女も負傷しましたが、奇襲を掛けた者に妙なことをされました...」

「妙なこと？」

「...サユミは、無理矢理、注射器を刺され、謎の薬物を注入されて、襲撃者は彼女たちから姿を消しました...」

「...襲撃者の正体は？さっき言った計画と何か関係が...？」

「...ええ、襲撃者は、事件の重要人物でした... `鴉の眼、（※鳳凰変幻編参照）と名乗り、闇社会で活動していました」

「鴉...？それは人間なの？」

ケイは、リカに恐る恐る質問した。

「...はい、一応.....見た目は人間...元は人間と言ったらいいのか...人体実験で突然変異を起こし、黒い羽を纏った化け物に変わってしまったようです...」

「...突然変異...じゃああんたも！」

ケイは、勘が働き、答えを見いだそうとした。

「.....ええ、サユミが投与された薬物は、突然変異を起こす効力があつたみたいで、私も油断して、同じ物を投与されました.....驚くことに `鴉の眼、の正体は、私たちと同じ歌劇団の人間でした...！」

「...何ですって...何て名なの？」

「...彼女は、新人時代に実験体となったため、残念ながら経歴は残っていませんでした...歌劇団に居た時の記憶は、あるみたいですが...人格は元の彼女のものと違うと思います.....殺害された研修者はその恐ろしい実験の実行犯の一人でした...計画名、 `ミューテーションプロジェクト、

、防衛省の要請で実現されたようです...」

「.....次から次へと衝撃発言が出てくるわね...それで鴉はどうなったの？」

「.....はっきりした企みは分かりませんが...私とサユミを化け物に覚醒させて、闘わせて生き残った方を仲間にしようと考えていたようです...ミチコさんたちの助けがなかったら、どちらか死んでいたかもしれません...！」

「...ミチコが...あの人も偉くなったね～」

「...確か同期でしたよね～？」

「ええ、彼女は才能がありながら、本当に謙虚で努力家でね、トップになるのに時間が掛かったけど、今後の活動に期待出来るわ、勿論、裏の世界でもね、うちの組織に引き入れたいくらいだわ」

「ミチコさんにはよく助けてもらいました...いつか借りを返さないで...」

「...そうね、ちょっと話が横道に逸れちゃったけど、標的には勝ったのね？」

「...ええ、私が奴を始末しました.....あまり思い出したくないですが...どうも後味が悪くて...」

「...一応事件は解決させたんでしょう？」

「...はい、一応は...研究所の不祥事を暴くことが出来ましたが、公の場に明かさな方がいいかもしれません...」

「政府が絡んでいるとなると厄介ね...改めて我々だけで極秘捜査した方がいいかも...また落ち着いたら、分かっていること話してもらっていい？」

「...ええ、先輩たちなら話せますんで...」

「あんたをチームに引き入れて正解だったわ、これからは楽しくなりそう...上層部の言うことは気にしないで...現場経験のない者とは気が合わないわ...」

「...ありがとうございます.....ところで一つお願いがあるんですが...」

「...え？どんなお願い？」

「外出許可を頂きたいんです...どうも中にずっと居ると落ち着かなくて...それに自宅を長いこと空けているので気になるし...愛犬は、知り合いに預けて問題ないんですが...」

「...別にいいんじゃない？今のところ暇だし...黙って出て行くのはまずいけど、私が居るわけだから好きにしていよ...ただあまり長居は出来ないよ、休暇じゃないから...」

「...分かっています、様子を見に行ったらすぐに戻ってきますので...」

「...了解、じゃあ外出許可の書類出すから、それに記入して...」

「ありがとうございます」

「...今のうち、外の空気を吸っておきなさい、そろそろ本格的に動くかもしれないからね...」

「...はい、ピリピリしているのが伝わります」

「...コツコツ」

リカとケイが談話している中、彼女たちがいるオフィスに足音は近づいていた。

「.....あれ？ここに居るの、あなたたちだけ？」

リカたちの前に現れたのは、オサコであった。

「...オサコさん、先日はどうも...先輩たちは会議中ですが...」

「あらそう、例の追ってる事件で有力な情報入ったんで報告しに来ただけけど...」

「...わざわざすみません、もう少しで終わると思うので待つて頂けますか？コーヒー淹れますので...」

「...ありがとう、お気遣いなく～.....あなたリカちゃん...よね？元気になったの？」

「...はい、お陰様で、あの...初めまして...ですよ？」

「...裏の世界ではね...表の世界では、歌劇団のイベントとかで、顔を合わしているかもしれない...とりあえずよろしくね~♪」

オサコは、愛想よくリカと言葉を交わし、和やかな空気に包まれていった。

「...今までどちらに？」

ケイは、オサコにコーヒーが入ったカップを渡してから質問をした。

「...今度上演する舞台の発表会に出ていたの、何かと忙しくてね...トウコモノリコモ...よく体が持っているわ」

「...忙しくて当然ですよ、トップクラスの実力なんですから...我々後輩の励みになります」

「...ふふ、お世辞が上手いわね」

「私は本気で言ってますよ！」

「.....まあ素直に受け止めておくわ.....あら、何処かにお出掛け？」

その時、オサコは、リカが記入している外出許可書に注目した。

「...はい、しばらく家に帰ってないので、少しの間、居ようかと...」

「成程...確かにこんな所のずっと居れば頭がおかしくなるからね...」

「...私もここしばらくそれぞれの職場を行ったり来たりで家に帰ってなくて...どうにかなりそうです...」

「あなたは大丈夫でしょう...いつでも元気いっぱいじゃない？どんな環境でも適応出来るわ」

「...人を化け物みたいに言わないで下さい！」

「.....」

リカは、オフィスを抜け出すタイミングを窺っていた。

「.....あら、ご免なさい、もう出てもらって結構よ...」

「...すみません、それでは失礼します...」

「あ...！」

リカは、申し訳なさそうにオフィスを後にしようとするが、その時、ケイが何かを思いだし、彼女を呼び止めようとした。

「どうしました？」

「...忘れるところだったわ、実はあなたを待っている人が居てね...悪いけど会ってあげて...」

「...別にいいですけど、誰なんです？」

「それは会ってのお楽しみ～一番下の開発フロアで待っているわ...受付で名前を言えばすぐ来てくれるから...」

「分かりました、では失礼します」

「はいはい～気を付けてね～」

リカは先輩たちに一礼し、その場を後にした。彼女はケイに言われた通り、開発部のフロアに立ち寄ろうとした。

S J A 地下五階 開発部フロア

開発フロアに着くと、白衣を着た者が目立ち、独特な雰囲気を出していた。リカは、まず受付へと向かった。

「.....あの、この関係者と待ち合わせしているリカという者なのですが...」

「...はい、それではこの認証パネルに本部入溝証をタッチさせて下さい」

リカは入溝証を提示した後、しばらく待つよう指示された。数分後、出入り口の扉が開かれ、一人の白衣を着た女性が姿を現した。



「...あれ? どうして？」

リカは、その女性を知っているようであった。

「...久し振りね、体の方はもう大丈夫なの？」

リカを待っていたのは、同期のミナコであった。

「...待っていたのは、あなただったの... どうしてここに？」

「...まあ詳しい話は中ですから... 入って、入って～」

リカはミナコに招かれ、開発部の中枢へと入って行った。中に入ると、ガラス張りの研究、実験スペースがいくつもあり、研究者は作業に没頭していた。ミナコは、リカを専用オフィスまで誘導した。

「...ここで働いているの？」

「そうよ、あなたと担当したバイオテロ事件解決後にスカウトされてね... ギャラもいいし、働かせてもらっているわけよ... 副主任って聞いた時は驚いたけど...」

「...凄いわね、色んな才能があって...」

「...大したことないわ、あなたの方が凄いわよ、エリート集団に仲間入りね..... えっとブラックでいいよね？」

「...何かあまり実感ないけど..... ありがとう」

ミナコはリカにコーヒーを淹れ、本題に入ろうとしていた。

「とにかく、また一緒に仕事が出来て嬉しいわ... 私はあなたたち現場担当の備品を開発、管理していてね、サポート役ってわけよ、よろしくね～」

「...辺りを見渡すと、本当に色んな物が置かれているわね...」

「...ガラクタも混じっているけどね、あなたに渡す物があってね... 呼び出したわけよ」

「何をくれるの？」

「...まずは通信手段のツール、一見、普通のスマートフォンだけど、万能でね、たとえ電源が切られていたり、故障していたりしても、GPS機能は生きていて、どんな場所でもキャッチ出来るわ、ボタン一つで本部につながるから緊急事態が起きた時、便利よ.....ちなみに公用品のため、プライベートでは使わないこと...通信料は全てうちの組織が払うわ...」

「...了解、こういうのに今まで助けられてきたわね...」

「...デジタルに疎いあなたの場合、こっちの方が信用出来るでしょう？」

すると、ミナコは、小さな金庫のような箱を持ってきて、リカに中身を見せた。

「...これは！」

「...新しいあなたの武器よ」

箱の中身にあるのは、リカの愛用銃、グロック26であった。

「...また何か仕掛けが？」

リカがそう言うと、ミナコは自慢気な表情を浮かべた。

「...以前、バイオテロ時に渡した物より、格段に命中精度が上がっているわ...さらに通常弾でも破壊力、貫通力を高めることが出来て、あなたにしか扱えない、他者が使えば高圧の電流を浴びることになる...発信器が付けられ、衛星により、ほとんど狂いなく撃っている場所が分かる...さっきのスマートフォンと一緒に持っていれば、迷子にはならないでしょう」

「...余計なお世話よ」

「あとオプションにロングマガジンとサイレンサー（消音装置）、コンクリートの壁や防弾ガラス、一定の分厚い鉄製の物質を貫通、破壊出来る弾を付けておくわ、状況に応じて使い分けて...」

「ありがたく頂戴しとくわ」

「...あとは接近戦用の武器として、この靴よ、見た目は普通の靴に見えるけど、うちが開発した

金属、ネオチタジエニウム、製でね...最高の錆びない耐食性と耐久性を実現させ、驚くほど軽いから問題なく動けて攻撃力を高められる...靴の内部は特殊な布が縫い付けてあり、この特殊なスパッツを穿くことで足を痛めたり、骨折することはない」

「...へえ、これも役に立ちそう～」

「...あと一つはとっておきよ、ついて来てもらえる？」

「...え、いいけど」

まだ取って置きがあるようで、ミナコはリカを連れて別の場所に移動した。そこは専用オフィスより広く、主に車など、乗り物が整備されていた。

「.....これもあなたの新しい相棒よ、ようやく完成してね」

リカたちの前に停まっているのは、一台のアルファロメオであった。

「以前乗っていたのと違うようだけど...」

「コンペティツィオーネちゃんはしばらくお休みよ、名前はグロリアちゃんよ、大事に使ってあげてね」

「...これにも色々仕掛けがあるんでしょ？」

ミナコは、また自慢気な表情を浮かべて販売員のようにリカに説明しようとした。

「近未来的なデザインに合わせ、内装もすっきりさせたわ...車体カラーは七色まで変えられ、ナンバーも5パターンある、さっきのスマホで、遠隔自動操作可能で、応急処置の薬品や器具も収納されている...ダッシュボードには銃などの収納スペースがあるわ...あと快適な冷暖房完備...」

「それはどの車にも付いているでしょ...」

「...当然、あらゆる衝撃に耐える構造で耐熱、防弾加工されていて...何と言っても自慢なのは、装備された武器よ、自動照準式バルカン砲、自動追尾短距離ミサイル.....中でも強力な武器は、プラズマエネルギーを利用したキャノン砲...」

「...プラズマエネルギー？」

「プラズマは物質の三態、すなわち個体、液体、気体と異なったもので、新エネルギーとして注目され、ドイツと共同研究を行っていて、ついに実用化に至った...この車にはプラズマエネルギー貯蔵庫があり、武器として使用出来るの...車からプラズマエネルギーが光速に近い速さで発射され、広範囲であらゆる物体を分解、破壊することが可能よ」

「.....」

リカは、今のミナコの説明に興味を示さなかった。

「.....まあ簡単に言えば奥の手よ、一回しか使えないからね...ピンチになったら使ってみて...」

「.....何か覚えることが多そうね、ちゃんと扱えるかな...」

「...操作マニュアルは車内のカーナビに保存してあるわ...ゲーム感覚で覚えられるから大丈夫よ...ゆっくり慣れていってよ」

「...そうするよ、なんかここ数日色んなことがあって頭パンクしそう~一旦、家に帰ろうと思ってね...」

「それがいいわ、丁度いいじゃない、試乗ついでにこれで帰ったら？」

「...そうさせてもらうわ、気晴らしにドライブしてくるわ」

「駐車場に行けるエレベーターがあるから案内するわ、ガスはちゃんと入ってる？」

「ええ、いつでも出れますよ」

ミナコは整備士と確認を取り、リカを車に乗せた後、遠隔操作で駐車場につながる車用エレベーターがある場所まで案内した。

「それじゃあ私はここまでよ、上に着けばすぐ出口よ」

「ありがとう、落ち着いたらランチしましょう~」

「そうね、いい店見つけたら紹介するわ」

リカはミナコに別れを告げ、エレベーターに乗り込んだ。彼女は束の間の骨休めをしようとするが、また、新たな災いがひっそりと足音を立てていた。

## 稼働する闇工場

---

東京都内、夕日は沈んでいき、夜の時間が訪れようとしていた。生憎、その日は天候が荒れており、昼間は曇り空であったが、夜になった途端、ぽつぽつと雨が降り始めた。本格的な梅雨の時期が近づき、うっとうしさを感じながら、傘をさしている者も居るが、うっかり傘を忘れてコンビニや適当な場所で雨宿りをする者が目立った。

「...ヴオオン」

とあるオフィス街の車道には、渋いワインレッドのアルファロメオ・グロリアが制限速度を守って走行していた。車を運転しているのは、本部から外出許可をもらったリカであった。

「...♪」

リカは、プライベート用のスマートフォンをハンズフリーの設定にして、運転しながらある人物に電話を掛けようとした。

「.....分かったわ、では今から向かうわ」

リカは、家に帰ろうとしたが、突如、予定を変更して誰かと会う約束したようであった。

「ザザザザ...」

雨は、次第に耳に響くほど激しく降り出した。リカは集中豪雨に巻き込まれ、ワイパーを作動させて、待ち合わせの場所へと車を走らせた。

リカが目指している場所は、新宿方面であった。新宿は、東京都新宿区南西部と一部渋谷区にまたがる歓楽街、オフィス街であり、渋谷、池袋に並ぶ三大副都心の一つである。

交通機関の中核である新宿駅の一日の利用者数は、三百万人以上とされ、付近の繁華街には国内のみならず、海外からも観光（またはビジネス）で多く訪れるほどである。都市部は発展していき、高層ビルが増える中、風俗店、パチンコ店などが密集した雑多な景観も特徴とされる。また、都市の人口が増える一方で、犯罪も増加していき、警察は休まず対応に追われている。ビル群には暴力団関係、非合法の会社も紛れており、都市には悪が蔓延る裏の顔があり、後に外国人犯罪者も増えている。

新宿は、あらゆる問題を含め、東京の大都市の一つとして注目され、一秒も休まず活発に動いていた。

リカは、仕事から解放されたビジネスマンや門限を破って遊びに行く若者たちを見ながら、車を運転していた。新宿の群衆は、巨大な生き物のようで、夜になっても力は衰えず、躍動感に溢

れていた。奥に進んで行くと、ネオンのまばゆい光を浴び、奇抜な格好をした店員に誘われそうになったが、勿論、リカはそう言った場所に用はなかった。彼女が向かったのは新宿の高級ホテルであった。ホテル内の駐車場に車を駐車し、リカは颯爽とロビーを抜けて、エレベーターに乗り込んだ。どうやらスイートルームの一室に待ち合わせをしている人物が宿泊しているようであった。

「.....コン...コンコン」

リカは、待ち合わせ相手が居る部屋の扉を数回ノックした。宿泊者がすぐさま扉を開けて、彼女を招き入れた。

「...突然、悪いわね...まさか都内に居るとは思っていなかったから...」

「全然構いませんよ、丁度暇だったんで」

リカを待っていたのは、一人の年下の女性であった。彼女の名は、二階堂愛美。兵庫県、神戸市に本部がある遺伝子科学総合研究センターの研究員の一人で、若手ながら多方面から注目され、プロジェクトリーダーに就任した。リカとは、自分が在籍している研究センターで起きた不祥事事件がきっかけで、知り合うこととなり、それから親交を深める仲となった。

奥の大部屋に進むと、神戸の美しい夜景が一望できるが、今回は雨の影響で視界が悪い状況であった。愛美は、ルームサービスのコーヒーを勧めてから席に着いた。

「...仕事で東京に？」

「ええ、学会があったので...プライベートで来る方が少なくなりました...」

「やっぱり偉くなると色々大変なのね...」

「...この前、お世話になった騒動で、職場の環境が一気に変わりましたよ、上層部に活気がなく、私のような若手研究員は生き生きしています、これで良かったかと思うんですが...」

「...世代交代ってことじゃない、いいじゃない、周りのことを気にせず、胸張って歩けるでしょう？」

「まあそうですけど、上司は重要ですよ」

「頼れる上司ならね、あの前にセンター長やった男、感じ悪かったわね...今のセンター長はど

うなの？」

「...え？いい方ですよ、兄のような存在で頼りがいがあります、変な噂も一切ありませんしね...」

「.....じゃあいいけど」

リカたちは軽く世間話をした後、本題に入ろうとした。

「.....それで...電話で話してもらいましたが、本当に変異を起こしたんですか？」

「...ええ、その時の記憶はないけど、証拠があるわ...」

「...！！」

その時、リカは自分の変異した姿が写った写真を愛美に見せた。

「...それで信じてくれたでしょ？」

「...分かりました、信じるしかないようですね、誰かと闘っているようですが...」

「...裏の仕事でね、無人島に行って来たの、詳しいことは話せないけど...変な集団と遭遇して、襲われて体に異常が起きたわけ...以前に変異した時と同じ感じだった...目の前は真っ暗で、自分の心臓が激しく鼓動して気を失った.....その後、変異した時のことは全く覚えてない...」

「この写真は誰が撮ったんですか？」

「...仕事仲間よ、先輩でね、今は公安ではなく、また別の組織でお世話になっているの」

「...その先輩も、リカさんのように強いんですか？」

「...私よりはるかに強いわ...積み重ねてきた経験が違いすぎるわ...ついて行けるか心配よ...」

「.....足手まといにならないために変異能力を利用するつもりですか？」

愛美はリカの思惑に気づきだし、試しに言葉に出すと、どうやら凶星のようであった。



「そうね.....出来ればモノにしたい、じゃないと今度は確実に死ぬわ...自分で制御しないと何に意味もない...異質の力が必要なのよ...！」

リカは、真っ直ぐな目で愛美に熱く語った。彼女の想いは充分伝わっているようであった。

「.....では...まずなぜ今頃になって偏したか考えましょう...例の異種細胞は、私が開発した解毒剤を投与したことで消滅させました、定期的に検査を受けてもらったので間違いないです...もう一人の被害者であるサユミさんは特に問題はないようです...」

「...私はなぜ？」

「.....ちゃんと説明されていないため、あくまで自論ですが、考えられるのは体内に小さなカスが残っていて、それが時間を掛けて成長していったのではないかと...この...姿が違うのが気になります...野獣のようなのが最初に変異した姿のようですが...」

「ええ、先輩の話だと、野獣の姿で暴れ回り、スタミナが切れて、ピンチになった時に、黒い翼が生えた化け物に変異したそうよ...その時は口が利けたそうよ、私の意思で話してないけどね...」

「...何を話していたんでしょうか？」

「...えっと、変異した私は、別人格で情報の一つに過ぎないと...ややこしいけど、私が呼んだから姿を現した...と言っていたみたいよ...」

「...つまり、リカさんの別人格だということですね...最初の野獣より知能が高いように思いますが...」

「そうみたい...落ち着いて話していたそうよ.....それとこんなことも言っていたな...野獣の姿は、無理に目覚めたことから誕生した姿で、知性の欠片もないただの化け物だと...長く力を蓄えていたことで、黒い翼が生えた化け物に変異したそうよ」

「...私の言ったことは、どうやら当たっているようですね...あなたの体内に残った異種細胞は、密かに力をチャージして、次にまた目覚める時を待ったんです、そして、その時は訪れて、力を解放した...」

「...気持ち悪い話ね、自分の体じゃないみたい...」

「...リカさんの体には目に見えない者が居て、常に監視されている状態です、隙を狙って乗っ取られる恐れもある...」

「...変異した私も同じようなことを言っていたわ...」

「自分で変異能力を制御出来ない以上、また勝手に変異する可能性があります...」

「...また解毒剤を使えば解決するんじゃない？」

リカの発言に対し、愛美の表情は曇ったままであった。

「.....解毒剤と言っても、劇薬と同じような物です...体が持つかどうか...無闇やたらに投与すれば副作用などで死ぬ場合だってある...お勧め出来ません」

「...危なくてもいいわ、いちかばちか賭けてみましょうよ！」

「...絶対に出来ません！解毒剤だつてもうないんです！劇薬や例の突然変異に関する資料は、全て処分しました...知ってる関係者ももう居ません...何か危ないことに首を突っ込んでいるような感じがして怖くなりました...彼のように...権藤先生のようになるような気がして...」

「...！！！」

その時、愛美の発言が胸に刺さり、リカはそれで我に返った。

「...すみません、お役に立てなくて...」

「いいのよ、こっちこそ御免ね、自分のことしか考えてなかった...つい感情的になってしまったわ...」

「...お辛いのはよく分かります、他の解決策を試してみましょう」

「...何か策があるの？」

その時、リカは愛美の衝撃の発言を耳にして、愕然としていた。

「...結果は分かりませんが、試してみる価値はあると思います、要は気持ちの問題だと思います...」

「気持ち？」

「リカさんに潜んでいる異種細胞は、いわば躰されていないペットと同じです、なめられているから暴走してしまうんです、奴はあなたの成長を見ている、弱音を吐けば、また現れることでしょう...弱みを見せず、強気になれば服従するはずです...つまり好きな時に変異出来る...！」

「...成程、単純に私が強くなればいいのか！自分との闘いね？」

「その通りです、自信持って下さい！」

ようやく問題は解決した様子で、リカたちは安堵の表情を浮かべていた。

「...なんか話が片付いた途端、疲れがどっと出てきたわ...」

「...確かに顔色悪いですね、ちゃんと休養した方がいいですよ...」

「大丈夫、これは空腹のせいよ、ここ数日、ろくに食事していなくてね...」

「...そうなんですか、じゃあ私をご馳走しますよ！」

「え...いいわよ、適当に外食するから...」

「遠慮しないで下さい、私もまだディナーを食べていないし、一人だと味気ないし...」

「...そう、じゃあ一緒に食事しましょうか」

リカは愛美に連れられ、ホテル内にある高級レストランで食事することとなった。

リカは次々に運ばれる高級食材を目にして、涎が溢れそうになり、我慢出来ず常人以上のスピードで平らげていった。愛美はただただ唾然として、彼女の食事シーンを見ていた。

「は～生き返った、満足～満足～」

リカは、デザートのアイスクリュームを口に入れながら酔いしれていた。

「それは良かった、ここに宿泊する際、行きつけにしている店なんです」

「へえ、そうなんだ.....やっぱり奢ってもらうの悪いから払うわよ」

「...本当にいいですから、カードで払いますから」

「悪いわね、あなたには借りを作ってばかりだわ...次に会う時は必ず奢るわ...歌劇団の公演チケットも譲っちゃおう！」

「ありがとうございます、この前、サユミさんの公演を観劇して来まして...彼女、素晴らしいですね、普段は大人しいけど、舞台上立つとまるで別人だわ...！」

「...サユミは、若手の頃から注目されていたからね...思った通りいいトップスターになった、後輩の出ている公演は色々と勉強になるわ...」

「...後輩の方の舞台を、観に行かれるんですか？」

「ええ、逆に後輩が先輩の出ている公演を観に行ったりするし...違う班の作品を観たり...それで芸を磨いていくわけよ」

「成程～」

「退団した後も観に行くよ、後任のスターのことも気になるからね」

「何かいい関係ですね、皆さんの仲がいいのがよく分かります」

「百年以上の伝統があるからね...自分たちで守って行かないと.....！」

リカは話している途中、仕事用のスマートフォンに着信が入ったことに気づいた。

「...そろそろお開きにしますか？」

「そうね、楽しかったわ、今夜はご馳走様」

「お互いしばらく忙しくなりそうなので、また落ち着いた時に会いましょう～」

リカは、食事の支払いを愛美に任せて、その場で別れることにした。彼女は足早にロビーを通り過ぎて、駐車場の方へと向かった。着信履歴を確認すると、それはチカからであった。リカは

車を停めたまま電話を掛け直そうとした。

「.....もしもし？」

「...もしもし？リカです...すみません」

リカの電話に応答したのは、チカであった。オフィスには、彼女の他にS J Aに所属する歌劇団OGメンバーが集結していて、電話での会話をスピーカーで聴こうとしていた。リカは、そうとも知らず会話を続けようとした。チカは、少々ご立腹の様子であった。ケイはその横でしょげていた。

「.....ケイから聞いたわ、目覚めた途端、好き勝手にやっているようね...先輩たちはピリピリしているっていうのに...！」

チカは、怒りを込めてリカに言い放った。

「申し訳ありません、まだそちらの環境に慣れていないもので.....直ちに戻ります...」

「.....一つ気になることがあるわ...あなた、家に帰るために外出したと聞いたけど、どうして新宿のホテルに居るの？」

「.....え？どうして場所が？」

「...何言ってるの？車の追跡装置や携帯端末ですぐに分かるわ...遊びに行く時は注意することね」

「!...決して遊びに行ったわけではありません、仕事に関係することです...」

「へえ、それは興味深いわね、今すぐ内容を話せるの？」

「.....今はまだ話せません、もう少し落ち着いてから話そうと思っています...」

「...言っておくけど、もし組織に悪い影響を与える行為が発覚すれば、ただでは済まないわよ、処罰され、職場に居られなくなってしまう...監獄で生活することにもつながるのよ...」

「その点は大丈夫です、神に誓います...ただ、今話すべき時ではありません...今、担当している件を片づけてからにしたいんです...」

「.....分かった、あなたの詫びる気持ちは伝わったわ、ただし、それだけでは外出の件は水に流すことは出来ないわ...ある条件をクリアすれば考える...

「.....え？条件とは？」

「...早速だけど、仕事よ...例のステルス機事件のことで進展があつてね...オサコさんが入手した情報よ...」

「...オサコさんが！」

「今からあなたには、有力な手掛かりが潜んでいるある場所に向かってみようわ...」

「...その場所とは？」

「横浜近郊にある工場よ、そこを偵察して来てほしいの...」

「...横浜の工場ですか？」

「そう、詳しいことはオサコさんから聞いて...お願いします」

チカはオサコに一礼して、内容説明を頼んだ。

「.....リカ...さん、よく聞いて、黒幕を炙り出せるかもしれないの...慎重に動いてほしいの...」

「...はあ、例の事件の黒幕が分かったんですか？」

「まだはっきりとした証拠はないわ、だから調べてきてほしいの、工場の地図と必要な情報を送るわ...」

リカの車は通信設備が充実しており、搭載されたミニパソコンに本部からメールが送信された。それは、携帯端末でも閲覧することが可能である。オサコは送ったデータを基に説明を始めた。

「.....この工場は元々、ある大手企業所有の化学工場だったんだけど、不景気のご時世と業績悪化の煽りで企業は倒産して、工場は閉鎖されたの...だけど、すぐに新しい所有者が現れたの...名はスン・ローファイ...中国、上海を拠点にしている大物起業家よ、日本にも支社や関連した子会

社があるわ、彼により、工場は再稼働することとなったわけで、主に石油化学製品、化学薬品の開発や製造のために利用されているんだけど、どうも裏がありそうよ...闇社会につながる人物が工場を出入りしているみたいよ...所有者であるローファイもその連中と何かの取引をしている...」

「...確かに怪しいですが、ステルス機の件と何か関係あるんですか？」

「...つながる点はあるわ、最近、彼は軍事産業に興味を持ち、参入し出してね...状況は順調なようで、現在、ある事業に力を入れているようよ...」

「その事業とは？」

「.....ステルス機開発事業よ！」

「！！」

「これで察しがついたでしょ？見逃すわけにはいかないわ...」

「了解しました、偵察に向かいます」

「.....偵察と言っても、生易しいものじゃないわ、出来れば潜入して有力な情報を入手してきてほしいのよ...」

その時、オサコと代わり、チカガリカに命令を下した。

「...私一人ですか？」

「...ええ、こちらから応援は派遣しないわ、採用試験の応用編よ...以前のモナコでの採用試験と比べると、難易度はかなり上がるわ...何か問題が？」

「.....私一人ではとても無理です、改めて捜査した方がいいかと...」

「甘ったれるのもいい加減にしないで、あなたの置かれている立場をよく考えなさい...いざという時、信じられるのは自分だけ...もし生きていられないのなら、そこまでの人間だったということ...仕事を受ける気がないなら今回の捜査から外すわ...！」

リカは、チカからお叱りを受けて、苦渋の決断を迫られた。

「.....分かりました、受けます...！」

「一度言えば本当に引き下がれないわよ、本当にいいのね？」

「...はい、やれるだけやってみます...！」

「もっと自信を持ちなさい、サポートはするから...こまめに連絡を取り合って任務を確実に遂行させるのよ...！」

「はい、ご期待に添えるよう頑張ります」

「制限時間は十二時間よ、それまでに遂行出来なかった場合、今回の捜査から外されるということで.....工場付近に着いたら一度電話頂戴！」

「はい、では現場に向かいます」

リカは一旦電話を切って、車を発進させようとした。ホテルの駐車場を出ると、雨は止んでおり、美しい夜空を拝むことが出来た。こうして、急遽、リカは任務のために横浜へ向かうこととなった。

静寂な夜の横浜、街灯が車道を橙色に染めていき、そこに赤のアルファロメオが走行することで鮮やかな色が表れていた。

「...キィ！」

リカは送られた地図データで工場の場所を照らし合わせた。彼女は徐行して、工場がある付近で一旦車を停めた。

「...もしもし、現場に着きました」

「...現場はどんな感じ？」

「.....灯りは点いていますが、まばらで人気がありません...」

「敵の数が把握されていない分、危険だわ、注意を怠らないで...！それと潜入中はなるべく通信や通話を避けて...感づかれる恐れがある...」



「...了解しました、それでは行ってきます」

リカは電話を切り、工場の潜入のための準備をした。

一方、本部のオフィスにはチカ、ユミコ、オサコと少人数となっていた。三人はリカに何事も起きないことを祈っていた。

リカは、ダッシュボードから銃や備品を取り出して、ミナコからもらった靴に履き替えてスパッツを穿いた。彼女は準備が出来た後、車を置いて工場の入り口へと向かった。工場内は、ほとんど機能しておらず、あまりにも静かで不気味さが漂っていた。

リカは人が居ないことを確認して、銃を構えたまま、抜き足で中へと入って行った。しばらくフロアは薄暗く、特に気になる点はないため、ひとまずほっとしていたリカであったが、彼女の行動をじっと見ている者が潜んでいるようであった。

「.....後ろ...ばれているわよ」

「...！」

その時、リカは立ち止まって、前を向いたまま尾行している人物に話し掛けた。

「...私は忙しくてね...相手ならここでするけど...」

「...チャ」

尾行者は、得物を納めて抵抗しないことを証明した。

「.....以前より鼻が利くみたいですね、腕は衰えてないようだ...」

「.....あなたは！」

リカは尾行者の声を耳にして、鳥肌が立っていた。彼女はゆっくりと振り向き、背後の人間の顔を確認した。

「久し振りですね、リカさん」

「...アスカ、どうしてここに？」

リカの前に現れたのは、歌劇団の後輩であるアスカであった。彼女はリカが退団した後、後任としてトップスターに就任した。

裏の世界でもリカと活動した経験があり、頼れる相棒として、従事していた。使用する武器はグロック18Cで、二丁拳銃を得意とする。他の銃器、武器に精通しており、隠密活動、場合によっては、暗殺任務を担当している。

「...こちらは公安の...秘密警察の任務で潜入しているんです...リカさんの方こそ何しているんですか？」

「...私も裏の仕事よ、話すと長くなるけど、転職先が決まってね...」

「...そうなんですか、噂で聞いたことがありますが、うちより大きな組織なんでしょう？」

「うん、まあね...色々ハードだけど...」

「いいな～♪」

アスカは、リカが所属する組織に興味を抱き、目をうるうるとさせていた。

「それにしても何のためにここに潜入を？差支えなければ教えて...」

「...実は現在、関東を拠点にしている暴力団組織の抗争が激化しているんです、火種を作ったのは、蒼龍会という暴力団組織で驚くほどの速さで勢力を伸ばして行って、シマを制圧していています、そして、原因を追究すると、一つのルートを発見して、この工場に辿り着いたわけです、ここに蒼龍会の間人が出入りしているようなんです...」

「...奴らの目的は分かったの？」

「...どうやら何者かと闇の取引しているようなんです、幹部連中が来ているようなので、今日でケリをつけようと思います」

「...成程、以前はよくそういうの追ってたな、懐かしい...」

「...先輩はどういった任務を？」

「...えっと、極秘情報だけど...いいか、数ヶ月前に国産初のステルス機とその設計図が盗まれちゃってね...それでこの工場に実行を企てた黒幕らしき人物が居るといった情報が入ったんで、捜査しに来たわけ」

「.....ほうほう、やはり噂は本当でしたか、どうも怪しいと思ったんですよね～隠蔽しても無駄なのでは...」

「政府もその件で揉めているようね、なんとしても真相を暴かないと...！」

「気合入っていますね、お一人で潜入とは...信頼されているんですね～」

「そうでもないけど.....あなたは連れが居るようね...」

リカはアスカ以外の気配にも気づいていた。彼女の前に二人のメンバーが姿を見せた。

「...彼女たちも知ってる顔だわ」

現れたメンバーは、リカの後輩のようであった。

まず一人目は、歌劇団現役スターのユリカ。長身で体格がいいのが特徴で、普段は優しい性格である。歌劇団の未来を担う若手スターの一人で、舞台上で存在感を放つ。元トップスターのチエは、彼女の才能を買っており、表の仕事でも裏の仕事でも、気に入って共に行動していた。

在団十年目の節目に、長年世話になった班からアスカ率いる班に異動となった。

「どうも、ご無沙汰しています」

「...ほんとね、チエさんの班に居た頃が懐かしいわ～」

「そういえば共演したことがありましたね...最近組むことになりましてね、頼もしいですよ～」

「...あら、そうなんだ、もう一人もよく知ってるけど...」

もう一人のメンバーは、歌劇団現役スターのジュン。注目される若手劇団員の一人で、着実にキャリアを積んでいる。仏のような笑みが印象的で、お茶目なイメージがあるが、いざ舞台上に立つと正統派舞台人の貫録を見せつける。裏稼業では情報収集を担当している。

「こんな所で会えるとは思っていませんでした～」

「皆、しばらく見ないうちに逞しくなっちゃって...今度、観劇しに行くからね」

こうして、リカはかつての同志と再会したのであった。

「...ところでどうしますか？管轄は違っても追っているものは近いので、一緒に行動しませんか？」

「...それだと助かるわ、情報が少ないんでね、やはり一人だけだと不安だから...ちょっと待って...うちの組織、隠し事は厳禁でね...」

「？」

その時、リカは、仕事用のスマートフォンを取り出して、本部に居るチカと連絡を取ろうとした。

「...リカ、どうしたの？何かトラブル？」

「.....トラブルというか、ちょっとしたアクシデントが...歌劇団時代の仲間と遭遇しまして...」

「...どういうこと？」

リカはテレビ電話機能を利用して、アスカたちの姿をチカに見せようとした。

「...公安の任務で潜入しているようなんです...捜査目的は違うようなんですが...一緒に行動しようかと考えていまして...」

「.....あなた、彼女たちに捜査内容を話したわね？また規則を破った...！」

「...え？...はい...すみません...」

チカは、リカの性格に怒りを乗り越えて呆れていた。

「まあ言ってしまったことは仕方ない...いい戦力を手に入れたわね...彼女たちと行動してもらって結構よ...ただし、自分の任務を遂行出来た時点で、別行動を取ること...いいわね？」

「...了解しました、ありがとうございます」

「.....それと...またあなたは規則を破った...いちいち連絡してこなくていいわよ、正しいと思うなら自分の判断で動きなさい...間違っていれば後から正せばいい...失敗から学ぶことも大事よ...後輩たちの前で恥をかかないようにね...よろしく頼むわ、皆さん~」

アスカたちは、スマートフォンの画面に映るチカに一礼した。

「それでは行って参ります」

リカは、安堵の表情を浮かべて、電話を切ろうとした。

「.....全くいくつになっても世話が焼ける娘ね...」

「...一見、頼りないように見えるけど、多くの人を惹きつける魅力がある...彼女にしかないもの  
だわ...」

オサコは、溜め息をつくチカに歩み寄り、リカのことを評価していた。

「...ええ、彼女は強運の持ち主ですが、彼女たちとの接触は偶然とは思えません...誰が助け舟を出したのか気になります...歌劇団時代のあなたの班に居た後輩が映っていましたね...?」

「.....」

その時、チカの問いに対して、オサコはとぼけた表情を浮かべて、淹れたばかりのコーヒーを啜った。

一方、共同任務の許可を得たりカたちは、軽くミーティングを始めようとした。

「では、まず...工場内部について、ご説明します...お願い」

アスカは、ジュンに専用タブレットを操作するよう指示して、工場内の立体見取り図を見せようとした。

「...凄い、これなら分かりやすくいいわ」

「約一ヶ月潜入して、この見取り図を完成させました...これがないと攻略は難しいでしょう...この工場は新たな経営陣の方針で、環境が変わりました...稼動しているエリアは全体の三分の一...

ほとんどの工場は閉鎖されています...小規模で薬品など開発、生産作業を行っていますが、事業内容ははっきりしていません...密かに工場は改装されているようで、怪しい地下フロアを発見しました...」

「...捜査している件と関係が？」

「さっきの暴力団の抗争の話に戻りますが、蒼龍会の組員の一人が自宅アパートで、変死体となって発見されました...その死体を調べると、体内からある薬物が検出され、その薬物が死因と判明しました」

「その死因となった薬物とは...？」

「危険薬物に違いありませんが...成分を照合した結果、どうも何処にも出回っていない新種のようです...この工場に何か手掛かりがあるかもしれません」

「成程、怪しい匂いがプンプンね、悪の巣窟と言ったところね...」

「私たちは蒼龍会を挙げるために全力を尽くします...後のことはお任せしますので...」

「了解、それでは協定を結んだということで行きましょうか...」

リカは先頭に立ち、アスカたちを引き連れようとした。しかし...

「...リカさん、そっちじゃないですよ...こっちの通路です...」

「.....」

リカは、ジュンに呼び止められた途端に、顔が赤くなり立ち止まった。

何はともわれ、リカは、古巣の仲間と謎に包まれた工場に潜入することとなった。

横浜港 某工場

リカは、チカからステルス強奪事件の黒幕の情報を得て、工場に潜入しようとするが、その途中、偶然にも、かつての歌劇団時代の仲間と顔を合わせ、しばらくの間、合同捜査することとなった。

リカは、アスカ、ユリカ、ジュンの協力で、迷うことなく工場内を歩くことが出来た。工場は稼働していない場所が多いため、真っ暗闇で冷たい空気が流れ、静かすぎるため、なんとも不気味な感じであった。

しかし、進んで行くうちに暖かい光が視界に入り、一旦、出口を出ると。今までとは違う世界が広がっていた。煌びやかな雰囲気を持った蛍光色が、工場を包んでおり、それはまるで近未来映画に出てくる要塞のようであった。また、あまりの明るさで、その周辺だけ昼間のようであった。

「.....ここがいわば工場の本体です、エリアを縮小し、高い稼働率を維持して、一日も休まず、生産が続いています」

アスカは、リカに工場の現状を話そうとした。

「...どうせ、造られているのは、非合法の物ばかりでしょう？」

「...ところが、そうでもないんです、ちゃんとまともな物を生産していて、各界から評判がよく、顧客は増える一方で、黒字が続いているようです...この経営陣は、かなりやり手のようですね...」

「...成程、表と裏の世界を上手く渡り歩いているようね...私たちみたいに...」

アスカたちは、リカのさりげない冗談で笑みを浮かべていた。

「.....ここからは堂々と歩くわけにはいきません...監視カメラやセキュリティーは万全です...注意しないと...！」

「何か策が？」

その時、アスカは、リカに自信に満ちた顔を見せた。

「...この用意した3D見取り図があれば、大丈夫です...事細かにルートを記録していますから...安心して、私たちについて来て下さい」

「本当に心強いね～」

「...実は、私たちの他に仲間が先に忍び込んでいまして...合流しようと思います」

「へえ...それは公安の人間？」

「いいえ、歌劇団の人間です、リカさんもよく知っている人物です...」

「それは楽しみね、なんか現役の頃に戻ったみたい...」

「...では行きましょうか」

リカは、アスカたちに誘導され、先を進もうとした。

一方、場所は変わり、工場内のある大きな一室、そこには大柄で強面の男性が目立ち、スン・ローファイ、工場の経営陣と、何やら取引しているようであった。取引相手は、アスカたちが追っている暴力団組織、蒼龍会であった。ここで、アスカの言っていた闇の取引が行われようとしていた。

「...おたくの援助のお陰で、我々の組織の力は順調に勢力を伸ばしている...なんとお礼を言っていないか...」

蒼龍会の組長は、スン・ローファイに深く頭を垂れた。

「いえいえ、こちらこそ、色々と協力して頂いて...資金源はあえて聞きませんが...」

「...少し頭を捻れば、金は溢れてきますよ、昔は、威圧して集金に行ったものですが、今は、巧みな演技で餌に食らいついてくれるんでね...容易いことです、自分の手を汚さず、いくらでも手に入ります...」

「...日本は、金がないと言いながら、体質なのか、隠れて大金を溜め込んでいる...脱税の金も結局は使えず、溜め込むしかない、それではいつまで経っても、国は潤うことはないでしょう...実



に残念だ...」

「我々の金の使い方は合っているでしょう？夢を手に入れるには、金が必要だ...だからそちらに投資している...」

「このままだと、あなたの組織が日本の裏社会の頂点に立つ日はそう遠くない...お役に立てて光栄です...これからも良き関係を築いていきましょう」

「.....」

「...どうされました？」

両者とも相手を褒めちぎり、穏やかな空気が漂いつつあったが、ふと、蒼龍会の組長は、あることを打ち明かす決意をしていた。

「すみません.....戦力強化には感謝しきれない...しかし、失礼ながら一つ腑に落ちないことがあります...」

「ほう、それはどういうことですか？」

「...銃火器の他に不正薬物を提供してもらっていますが、気になることがありましてな...うちの部下の一人が、提供された薬物を摂取したことで死亡しましてね...」

急に事を荒立てる組長であったが、ローファイの方は、冷静さを保っていた。

「はて...見当が付きませんか～」

「とぼけるな！一度摂取しただけで、えらい目に遭っている！自分の目で確かめろ！」

その時、蒼龍会幹部の一人が割って入り、ある物をローファイに見せた。それは一枚の写真で、蒼龍会の組員が無残なミイラのような姿で写っていた。

「...これは！」

ローファイは写真を見て、若干、顔色が変わった。

「...単なる事故で済ますわけにはいかないぞ！何か意図があるのなら素直に吐いてもらおうか！」

蒼龍会の幹部は、憤怒し、ローファイを問い詰めた。

「...そう、怒鳴らないで下さい、話を整理してお話ししましょう...」

「...納得のいく説明をお願いしたい...」

組長は、興奮気味の幹部を後退させ、ローファイの目をじっと見て、話を聞こうとした。

「...まずお訊ねしますが、この亡くなった組員は、健康体でしたか？持病を患っていたり、何かアレルギーがあったりとかは？」

「はあ...おい、どうなんだ？」

組長は、死亡した組員のことをよく知らず、幹部の人間に質問した。

「...はい、特に持病はなく、アレルギーもないかと...ただ...」

その時、幹部の男は何かをふと思い出したようであった。

「...ただ、何だ？」

「.....彼が健康かと訊かれると、そうとは言えません...ここ最近、体調を崩すことが多く...原因はすぐに分かりました...」

「...ほう、原因は何だ？」

「...危険薬物の過剰摂取です、彼は麻薬中毒になりつつあった...薬を止めるよう注意しましたが、全く言うことを聞かず、新型の麻薬が出る度に入手していたようです」

「...成程な、聞いての通りです、どうやら自分で命を縮めていたようです...勝手な思い込みでそちらを疑っていたようです」

「...そのようですね、しかし、彼が投与したうちの商品...かなり危険な代物でしてね...健康でない状態で摂取すると、すぐあの世行きです、他に麻薬のような毒を摂取していれば、なおさらだ...急激なスピードで体を蝕んでいきます...以前、そちらの幹部の方に説明したはずですが...」

その時、組長とローファイは、割って入ってきた幹部の男を睨み付けた。

「...そうなのか？」

「.....ええ、確か...言っていたような...」

「...取引の内容については、全て若頭のお前に任せているんだ...しっかりしてもらわないと困るな...どうして組員の手に渡った？」

「...私の目を盗んで手にしたようです」

「監督不行届ってやつか、話にならん...」

組長は、幹部に呆れた様子であった。

「.....しかし、彼らが提供したもので命を落としたわけだから、詫びる必要があるのでは...？」

「...詫びる？何に対してですか？」

ローファイは、悪ぶれる様子もなく、冷淡な態度を取った。

「.....おのれ、どれだけ恥を掻かす気だ！」

「.....グイ！！！」

その時、組長は、思い切り幹部の男の胸ぐらを掴んで、そのまま自分の方に引き寄せた。

「...おやじ.....！」

「...お前の方こそ、どれだけワシの顔に泥を塗れば気が済むんだ...彼らとの仲に亀裂が生じれば我々は終わりだ...次にまた余計なことを口にすれば...ただでは済まさんぞ」

「.....すみません」

組長は、ドスの利いた声で幹部の男を説教し、彼を深く反省させた。

「.....問題は解決しましたか？」

「...どうも失礼しました、うちは非常識な人間が多くて困ったものだ、厳しく教育しているつもりなのだが...」

「...まあ、こちらも説明不足だったかもしれません...今後、注意して下さい...あれは、損所其処らの危険薬物とは別物なので...強靱な肉体を作り上げる万能薬です...ただ、相手を選びますが...」

「...もうその薬は要りません...他の物を譲ってもらえませんか？」

「.....生憎、うちは麻薬などを扱っていません...快樂が欲しいのであれば、他に方法がある...なんなら教えましょうか？」

「.....いいや、遠慮しておこう」

組長は、不敵な笑みを浮かべたローファイを恐れて、すかさず勧誘を断った。

「そうですか、では武器の方だけ提供しましょう...契約は継続ということで...」

「ああ、頼れるのは、あんだとチャカだけだ...これからもよろしく頼む...！」

組長は、ローファイに対し、丁重に頭を下げ、周りの組員たちも一斉に頭を下げた。「...では取引を続けましょうか、ついでに契約更新ということで、新しい契約書をご用意しましょう...詳しく説明させていただきます...新しい商品が入りまして...」

「それは楽しみだ、あんだ、ワシたち極道以上に危ない橋を渡っているようだな...」「...ええ、危険があるからこそ楽しめる...時間が経てば慣れます」

組長とローファイは気分を良くして、闇の取引を続けようとした。

「.....」

その時、ローファイたちが居る部屋の天井裏に謎の気配が忍んでおり、密かに彼らの取引現場を覗いていた。

一方、工場内に潜入したりカたちは、非常通路を通過して、仲間と合流しようとしていた。

「...この辺で待ちましょう、じき現れます」

「...誰なのか楽しみね...」

待ち合わせ相手はまだ現れず、リカたちは適当に雑談しようとした。

「...調子はどうですか？辞められて数ヶ月経ちますが...」

「.....長い休みが取れてリフレッシュ出来たけど、拍子抜けしてね...退団した日はほっとしたけど、いざ時が過ぎると、あの戦場ともいえる舞台が恋しくなる...」

「...そうですか、リカさん、稽古場に立つと、本番以上に人格変わるから初めて見た時は驚きましたよ〜」

「私は集中すると、我を忘れることがあるからね...班の皆はよくついて来てくれたわ...」

「リカさん、意外とS（サディスティック）で、後輩に厳しく指導するから...ふふ」

「...私もよく注意されていました」

「...あれ？そうだったかな〜」

リカは、アスカとジュンの投げかけに対し、ひょうきんな表情を浮かべて、とぼけていた。

「...私も新人時代の公演で、リカさん扮する役をよくさせてもらっていて、色々とアドバイスを頂いたので、いい経験になりました...！」

ユリカは、リカを褒め倒し、話に参加しようとした。

「そうだったね...チエさんからあなたのことを聞いているよ、成長が著しく、これからの活躍が楽しみだと...これで私が辞めても問題ないわ...彼女は安堵の表情でそう言っていたわ」

「そうですか、心配してくれてたんですね、チエさんにはみっちり扱われましたから」

ユリカは、嬉しそうにかつて属していた班の偉大なる先輩のことを話した。

「...アスカたちの前でなんだけど、今の班には慣れた？」

「...ええ、初めは馴染めるか不安でしたが、皆さん、暖かく迎えてくれて...まるで前から居たか  
のようです！」

「うちは、人一倍愛想がいいのが取柄なもので...」

アスカは、さりげなく班の自慢を述べた。

「それならいいわ、私もアスカも異動でキャリアを積んできたからね...先代のトップスターのヨ  
ーコさんや先輩劇団員から芸のいろはを叩きこまれ、ちゃんとトップに就任した...勿論、他の班  
のトップスターからも学ぶことが多かった...ノリコさん、チカさん、チエさん...彼女たちの背中  
を見て、成長していったわ...」

「...私もリカさんの背中をずっと見ていましたよ」

アスカは、リカの発言に付け加えをした。「...上を目指したければ、上に立つ者の背中を追う  
ことね...アスカはまだまだ伸びていく逸材なんだから...」

「はい、アドバイスありがとうございます！」

リカたちのためになる話で、和やかなムードに包まれるが、異質の気配が接近しようとして  
いた。

「...！この気は...」

リカたちは、一つの忍び寄る影に気づき、警戒していた。

「...チャキ！」

リカは、即座に銃を構え、そのまま標的が居る方に振り向いた。

「...リカさん、待って下さい！」

その時、アスカが声を張り上げて、リカを制止しようとした。

「.....うわ～！何や？危ないな～！！」

「え？」

標的となる人物は、慌てた様子で言葉を発した。また、その人物の関西弁の口調は、聞き覚えがあるようであった。

リカたちの前に現れたのは、待ち合わせしていた味方であった。

彼女の名は、ユズミ。現役歌劇団スターの一人である。何役も演じ分ける自由自在の演技が彼女の持ち味で、定評がある。他に歌やダンスは修行中である。得意のマシガントークで仲間を和ませ、ムードメーカーの役割を果たす。

裏稼業では、小隊の隊長を任されるほどで活動の場を広げている。任務で使用する武器は、幕末で暗躍した新撰組天才剣士、沖田総司の愛刀 `加州清光、であった。

「...ホンマに心臓止まるかと思いましたわ~気を付けてくださいよ~先輩！」

「...ごめんごめん、襲撃されたと思ったから...あなたを待っていたのね...あと一人居ると聞いていたけど...」

「...もう一人は別件で待機しています、後で合流することに...にしても驚きました、こんな所でリカさんに会えるなんて...」

「相変わらず元気そうね~あなたの班と合同任務ってこと...？」

「方針が変わりましてね、合同任務も珍しくなくなりました...ユズミは同期なので、特に違和感はありませんし...」

「組んだのは無名時代以来やな、いつの間にかトップになってもうて...」

「ユズミもおちおちしてられないね、ある意味、知名度は高いけど...」

「そら、どういう意味ですか？会った途端、そうやってからかう~！」

リカとユズミは、漫才を展開して、周囲の人間を笑わせていた。

「...コホン、では一応仲間も揃ったところで、行動に移りますか...ユズミ、手筈は整っているの？」

「...ああ、ばっちり下準備してきたで、後は一斉に仕掛けるだけや」

「...リカさん、これからどうしますか？別行動を取った方が時間は短縮されますが...」

「...そうね。ここでひとまず分かれましょうか...こっちはまず情報収集を...迷わなければいいけど...」

「私たちが作成した見取り図を転送しましょう、役に立つはずですよ」

「ありがとう、ジュン」

「...言っておきますが、ここはただの工場ではありません...単独の行動はかなり危険かと...」

「ええ、ここからは身を引き締めないとね、まあ、どうにかなるでしょう～お気遣い感謝～」

「.....私がサポートに回ります、少しは動きやすくなるでしょう...」

「...何言ってるの？それは駄目よ、自分の持ち場に行きなさい！こっちはいいから」

リカは、アスカの思いがけない発言を耳にして唾然としていた。

「...遠慮しないで下さい、全然構わないので、決して捜査の邪魔はしませんし、せっかく許可をもらって、合同で動いているわけですから...」

「...まあ、そうだけど、あとの皆はいいの？」

「ええ、こっちは人数多いので、アスカさんを少しの間、お預かりします」

ユリカは、一切ためらうことなく、陽気にリカに答えた。

「さ～こっちも段取りがあるんで、そろそろ始めましょうか～アスカ、後は任せといて～」

「頼むわ、ユズミ！ユリカたちは彼女の指示に従って...任務完了後に落ち合うということで...」

ユリカとジュンは、アスカに従って小刻みに頷いた。こうして、アスカは一時的にリカにつき、ユズミは、ユリカとジュンと組んで行動することとなった。

「それじゃあ、皆、無事に生還して元気な顔を合わせましょう！」



「了解！」

いつの間にか、リカが仕切っており、歌劇団時代の彼女を彷彿とさせていた。

「私たちはこれから暴れ回るんで、そっちに何かあっても助けに行けないかも知れません...」

「結構よ、こっちも楽しくやってるから」

リカたちはしばしの別れを告げて、二手に分かれた目的地に足を進めた。

一方、ローファイと蒼龍会の組員たちの取引は続けられていた。ローファイは、新商品のサンプルを見せて組員たちに興味を持たせようとしていた。

「...この携帯型爆弾は、小さい割に半径五百メートルまで被害が及ぶ威力があります、シンプルで持ち運び便利かと...」

「...確かに相手の事務所ごと破壊する時に使えるな...」

「...次にこの靴ですが、底に小型ナイフは仕込まれていて、つま先部分には毒針が仕掛けられています...」

「...ほほう、これも気に入った！全部頂こうか...」

「ありがとうございます、では契約書の方に目を通して頂けますか？」

「.....うむ、まずお前が確認しろ...」

組長は、まず側近の組員に契約書を確認させた。

「.....！！」

その時。側近は契約書を確認した途端、顔色が悪くなった。

「...どうした？」

「...この金額見て下さい！」

組長は側近にそう言われ、契約書を目にした。

「.....これは！何だ、このべらぼうな金額は...？」

組長は、冷や汗を掻きながらローファイに質問した。

「...と普段注文している物に加算すればそれくらいになりますよ...何か問題ですか？」

「...当たり前だ、さすがに高すぎる...！どうにかもう少し安くならないか？」

ローファイは、組長の頼みになかなか応じなかった。

「.....分かりました、では、今回は特別にオプションを付けましょう...！」

「...オプションだと？」

「...はい、少々お待ちを...」

すると、ローファイは手招きして、ある人物を呼びだした。

「...何だ、その男は？」

「彼は、うちの用心棒です.....実は新事業を始めまして...それは人材派遣サービスです...とはいっても、ワケありのね...殺してほしいものが居れば、彼が代わりに殺しに行きます...」

「...何だと!？」

蒼龍会の組員たちは、ローファイの発言で騒然とした。

「...彼の名は、ウォン・イーシンといって、中国の工作員の経歴があり、とても優秀です...暗殺はお手の物、確実に標的を消します...殺し代行ってやつですよ」

そこには日本のステルス機を強奪した実行犯、ウォン・イーシンが立っており、彼はローファイの用心棒を務めていた。

「...誰に向かってそんなことを言っている...？殺しは専売特許だ...だから武器さえあれば充分だ

...失敬だとは思わんか？」

組長の発言に対し、ローファイは退こうとしなかった。

「.....私のような実業家が言うことではないと思いますが、今のあなた方のやり方は古いのでは...？」

「何だと！！？」

蒼龍会組員は、ローファイが反論したことで我慢出来ず、殺気立っていた。

「...ヒットマン、日本では鉄砲玉といいますか...奇襲を掛け、自ら犠牲になり、任務を全うする...渋い英雄を重んじているようだが...成功する確率は低い...無駄に部下を失っているだけだ...」

「...その用心棒は死なないというのか？」

「はい、着実に任務を遂行して、平然と戻って来ます...」

「...奴は超人とでもいうのか？」

「まあ、それに近いですかね...試してみますか？」

「...どういうことだ？」

「...嘘ではないと証明するんですよ.....誰でもいいので、うちの用心棒を殺してみませんか？」

「からかうのもいい加減にしろ！お前の冗談に付き合ってもらえん！」

「...私は本気ですよ、誰か彼に向かって銃を撃って下さい」

「...もし、彼が死んだらどうする気だ？」

「...そうですね、契約金を半額にでもしましょうか...」

「...確かに聞いたぞ...約束を破ったら招致せんぞ！.....おい、お前が撃て」

「...え？」

組長は、一人の若手組員にウォンを撃つよう命令した。

「早くせんか！！」

「はい！！！！」

若手組員は、組長に怒鳴られながら装備している銃を構えた。ウォンは一切抵抗せず、じっと彼の前に立っていた。

「...よく狙って、頭でも胸でも...致命傷になる箇所を数発撃って下さい...」

「...は.....い...」

若手組員は冷や汗を掻いて、仕方なく引き金を引こうとした。

「...バオン！バオオン！！」

[.....！！]

その時、室内に銃声が鳴り響き、しばらく静寂な空間となった。ウォンは、若手組員に頭など急所を撃たれて静かに倒れた。彼からは、大量の血が流れて地面に広がっていった。

「.....おい、倒れたままじゃないか...後味の悪いショーを見せよって...！」

「...まあ、そのまま見ていて下さい...結果はすぐに出ます...」

ローファイが淡々と答えると、ウォンに変化があるようであった。

「...な...！！！！」

その時、蒼龍会の組員は、衝撃の光景を目にして青ざめていた。撃たれたウォンは目覚めて何食わぬ顔で起き上がった。

「...ひいい！！！！」

ウォンを撃った若手組員は、あまりのショックで悲鳴をあげて腰を抜かしていた。

「...ご覧の通りです、彼は防弾チョッキを着用していませんし、頭を撃たれている...騙してなんかいませんよ」

「...説明してもらえるか？」

「...いいでしょう、包み隠さず教えてあげましょう」

ローファイは不敵な笑みを浮かべ、蒼龍会の組員たちにウォンの秘密を話そうとした。

「.....！」

取引現場に潜んでいる一人の密偵は、ウォンの姿を見て、思わず声が出そうになっていた。

密偵の正体は、現役歌劇団のスターであった。名はクミコ。現代のアイドル的な容姿で人気を博し、中堅スターとしてスキルを上げている。同期にはトップスターのサユミが居る。長年、リカやアスカと共に舞台に立っていたが、突如、異動となり、ユズミが居る班で新境地を開くこととなった。裏の世界でも優秀で、隠密活動を得意とし、数多くの危険な敵地に潜入している。使用する武器は旧式装飾銃で、射撃はリカが認めるほどの腕前である。

取引現場を監視するクミコは、冷静さを保っていた。

「.....！！」

その時、クミコは、ウォンにじっと見られているような感じがして動揺していた。彼女は警戒するが、どうやら気のせいのように何も起きなかった。

同じ頃、リカとアスカは情報管理室に侵入していた。そこに居た従業員は、彼女たちの手により眠らされていた。リカは、情報収集のために無断で設置されたコンピュータを操作していた。アスカは、監視映像を気にしつつ、リカの手伝いをしていた。

「.....本当にアスカが居てくれて助かるわ～一人ではとても片づけられそうにない...」

「...いえいえ、丁度、うちも情報を覗きたかったので.....ここの企業...かなりやばいですね...顧客リストを見ると、まともな企業が少ない...海外の顧客も多く...闇社会とつながっているところが目立ちます.....裏帳簿もありました...」

「...ここは軍事産業にも手を出しているようよ、密かに暴力団関係者などに売りさばいて利益を得ているようね.....！」

「...どうしました？」

リカは何かを発見したようで、思わずタイピングしている指が止まった。

「.....やっと見つけた、これだわ...本部の皆に教えないと...！」

リカは、急いで専用のフラッシュメモリーに有力な情報データをコピーしようとした。

「.....これって...例の盗まれたステルス機ですか...?とんでもないことを企んでいるようですね...」

アスカは、あるシミュレーション映像を目にして唾然としていた。

「...黒幕ははっきりした...ここで食い止めところだけど...」

「...ローファイという男、捕まえる気ですか？」

「ええ、そのつもりだけど...」

「応援は来るんですか？」

「...来ないわ、単独で行動するよう言われている...」

「...一人で奴らを相手することは無理ですよ、蒼龍会の連中もいるわけだし...ただ、私たちが加われば状況は変わるかもしれません...」

「アスカ...！」

「...まだこの経営陣と蒼龍会が同じ場所に集まっています...私たちは蒼龍会を...先輩はローファイを挙げる...まとめて相手をするのが手っ取り早いかと...」

「...それしかないようね、私たちもユズミのところへ行きましょう...」

「.....すぐに向かいたいところですが、うちの動きがばれたようです、こっちに武装した警備がわんさか来ています...」

アスカは、監視映像を見て、リカに知らせた。

「...対応が早いわね、こっちはまだ準備が出来ていないっていうのに...！」

「...コピーにはどれくらい時間が掛かりそうですか？」

「...あと二、三分ほどよ...」

「...分かりました、コピーが終わるまで私が相手をします」

「...頼むわ、すぐに助けに行くから！」

アスカは、リカのために一人部屋を出て、応戦しようとした。

「...ドンドンドン...！」

アスカは、愛銃のグロッグ18Cを連射して警備員に立ち向かった。

「.....ドドガガガガ...！！！」

警備も負けずに装備しているライフルを乱射していた。銃声が鳴り響き、その場は一気に戦場と化した。リカは、情報管理室でコピーが完了されるのを待ちながら、愛銃の通常のマガジンからロングマガジンに替えていた。

一方、ローファイたちの取引は終盤となっていたが、そんな彼らに凶報が届きつつあった。

「...社長、トラブルが...侵入者が居るようです...現在、交戦中です...」

ローファイの部下が彼に歩み寄り、リカたちのことをそっと報告した。

「.....すぐに片付けろ」

ローファイは怒りを押し殺し、部下に指示した。

「...どうかされましたか？顔色が優れないようですが...」

「...いいえ、大丈夫です、契約成立ということで、そろそろお開きにしましょうか」

「そうですね、またいい買い物をさせてもらいました...またよろしくお願いします」

「...ええ、それと例のサービスの件、何卒、情報を外に漏らさないようお願いします、極秘事項なので...」

「...ええ、約束します、最強の軍隊をお持ちですな」

「ええまあ、軍事産業は危険がつきものですから...あなた方が居る世界と似ていますよ...」

「全くそうですね、お互い外を歩く時は気を付けましょう」

ローファイと蒼龍会組長が仲良く話をする中、蒼龍会の組員側は、言いなりになっている頭を情けなく思っていた。

「...スス」

蒼龍会の組員が取引現場から去ろうとする時、いくつかの気配がそこに接近しようとしていた。

「.....」

「どうした？」

その時、ウォンは外の気配に気づき、さりげなくローファイを守る体勢を取った。

「...ボス、僕から離れないようにして下さい...敵が来ます...」

「...うむ、分かった」

ウォンは、小声でローファイに護衛することを伝えた。他の用心棒も所定の位置につき、ローファイを護衛しようとした。

蒼龍会の組員たちは外に潜んでいる侵入者のことに気づいていなかった。

天井に潜んでいるクミコもタイミングを見計らって、任務のために動こうとしていた。

「バチン...！」



「な...停電か？」

その時、激しい音が鳴り響くのと同時にローファイたちが居る部屋だけ灯りが消えて暗闇に包まれた。

「バン！」

部屋が停電した直後、誰かが出入り口の扉を蹴破る音がして突入しようとしていた。

こうして、陰謀が渦巻く工場は荒れていき、衝撃の結末を迎えるのであった。

## サイクロプス

---

横浜港 某工場

港に浮かぶ煌びやかな工場地帯、その中では闇の取引が行われており、リカたち侵入者が居ることで、何事もなくお開きとはいかなかった。中国企業家ローファイら経営陣と、暴力団組織、蒼龍会の組員たちは、密偵の歌劇団メンバーに奇襲を掛けられていた。彼らは、停電で暗闇となった空間で錯乱状態になりつつあった。

「...何だ？停電か...どういうことか説明してくれ...！」

「.....」

蒼龍会側が狼狽える中、ローファイ側は何も答えず意外に冷静であった。用心棒を務めるウォンは、主人を守る体勢を取り、じっと成り行きを見据えていた。

「...バン！」

部屋が停電した直後、部屋の扉が激しく蹴破られる音がして、室内は騒然となった。

「...ドガガガガガ...ドドン...！！」

侵入した者たちは、装備している銃器を発砲していき、蒼龍会の組員が次々と撃たれていった。侵入者は、暗視ゴーグルを掛けているため相手の動きが丸見えであった。暗くて視界が悪い上に銃弾発射時の閃光と銃声で、襲われた方は限らない恐怖を感じていた。

「.....よせ、じっとしていれば、攻撃してこない...」

ローファイ側の護衛の一人が応戦するために装備した銃を抜こうとするが、すぐにウォンが撃たないようにそっと指示をした。奇襲を掛けた侵入者は、歌劇団メンバーのユズミ、ユリカ、ジュンで、ずっと部屋に潜んでいたクミコも参戦していた。

やがて、銃声は鳴り止み、予備電源に切り替わって徐々に部屋が明るくなっていった。ローファイや蒼龍会組員は、やっと地獄から解放されようとしていた。彼らは、ひとまずほっとして、奇襲を掛けてきた者たちの顔を拝めることとなった。

「.....何者だ...！お前たちは？」

蒼龍会の若頭が声を荒げて、目の前に居るユズミたちに声を掛けた。

「...警察みたいなもんや、悪いね、部下に怪我させて...」

蒼龍会の組員の数は、ユズミたちの手により、半分以上減っていた。組員たちは、肩や足を撃たれていて、応急処置をすれば問題ない怪我であった。

「...その警察みたいな者が何の用だ？随分と手荒なやり方じゃないか...」

蒼龍会組長は、落ち着いたトーンでユズミたちに話し掛けた。

「...これがうちのやり方なんでね...口だけでは大人しくならへんやろ？おたくら、これで話しやすくなったわけや...言う通りにしてもらおうか...！」

「...おいおい、我々が何をしたというんだ？御嬢さん...」

蒼龍会の人間は、痛い目に遭ったのにも関わらず、まだユズミたちを小馬鹿にしているようであった。

「とぼけるのもいい加減にしてや、ネタは上がってるんや、ここで闇の取引してたんやろ？蒼龍会の方々～」

「.....！」

ユズミの発言に対し、蒼龍会側はざわめいていた。

「...近頃、武力抗争が激化している...発端を作ったのはあなた方でしょう...我々はずっとマークしていました...」

ユリカは標的に銃を突きつけながら丁寧な発言を始めた。

「...さっきまでの取引現場の様子は、全て記録しているよ、言い逃れは出来ない...」

続けて、クミコが蒼龍会側を脅した。

「...く、あまりいい気になるなよ...」

蒼龍会が窮地に追い込まれる中、ローファイたちは平然としていた。ユズミたちは、彼らにも目をつけ始めた。

「そちらさんが売り手のようやね...初めまして...」

「.....停電させたのは君たちか？」

「そうや、配電室をいじらせてもらったわ、仕事のためやねん...堪忍やで」

「...で、我々は帰してくれるのか」

「...それは無理な要求やな、かなりやばい代物を扱っているそうやから...一緒に来てもらおうか？」

「.....それを拒んだ場合、どうなる？」

ローファイは、強気な姿勢でユズミたちに質問した。

「...蒼龍会の方々みたいな目に遭うかも...手荒な真似はしたくないんやけど...」

「...我々はこの国の人間ではないんでね、おまけに企業家として有名人で、本国では顔が利く...政治家や警察に友人が居る...我々を拘束することは不可能だよ」

「.....」

ユズミたちは、ローファイのふてぶてしい態度が気に入らない様子であった。

「...だからと言って、黙って帰すわけにはいかない、とにかく大人しくしてもらいましょうか？」

ユリカは落ち着いた口調で話すが、それには少し怒りが込められていた。

「...悪いが、君たちに話すことは何もない...元々あちらの強面集団の件で来たんだろう？彼らだけ相手にすればいいじゃないか...はっきり言って彼らとはもう関係ない、そろそろ切ろうと思っていた...」

「...何だと？」

組長は、ローファイの衝撃の発言で目が点になった。

「私の会社は世界各国に客が存在する...おたくらを切ったところで何も影響はない...だから無関係だ...」

「...言わせておけば、お前たちのどれだけ金をつぎ込んだと思っている？」

「...あなた方には感謝している、もう十分に援助してもらったので今日限りで切らせてもらう...なので、さっきの契約はなしだ...今までご贖罪にしてくれてありがとう...謝謝（シイエシエ）」

「.....ぐぬ...そうやって、わしらに問題ごと全てを押し付けるつもりか...許さんぞ...生きて帰れると思うのなよ...！」

組長は腸煮えくり返り、頭に血が上って危険な状態であった。彼の部下たちも殺意剥き出しで攻撃態勢を取ろうとした。蒼龍会とローファイたちは睨み合い、殺伐とした空気が流れつつあった。

「...何かまずい雰囲気のようなね...私らも参加出来るやろか？」

ユズミたち歌劇団メンバーは、蒼龍会側とローファイ側に挟まれ、三つ巴の戦いが始まろうとしていた。

「.....ドガがガガ...ドンドン...ドン」

またもや、取引現場で銃声が鳴り響き、激闘が繰り広げられた。ユズミたちは、とにかく攻撃してくる者だけを相手にした。

「...双方とも頭だけ生かすことを心がけるように...！」

ユズミは的確な指示をして、組長とローファイを生け捕りにしようとした。

「...ボス、脱出するので我々からはぐれないように...」

「ああ、言う通りにするよ、よろしく頼む」

ウォンはローファイを守るべく、強行突破しようと考えていた。他の護衛はローファイを守りながら武器を構えて応戦した。

「ドン...ドンドン！ドバ.....」

その時、ローファイの護衛の一人が蒼龍会の組員の撃った弾で倒された。しかし、ウォンや他の護衛はそれに顔色一つ変えず、応戦し続けた。

「...部下は盾代わりか...殺生な.....！」

ユズミがそう言い捨てると、倒れ込んだ護衛に異変が起きようとしていた。

「...さっきのショーのことを覚えていないようだな...」

ローファイは銃弾が飛び交う中、不敵な笑みを浮かべて、そう言い捨てた。

「...ピク」

その時、倒された護衛の目が赤く光りだし、何事もなかったかのように立ち上がった。蒼龍会側はこの現象を見るのは二回目であったが、同じように驚いていた。始めて見る歌劇団メンバーは、まだ何が起きているか把握出来ずにいた。

「...シュオオオオオオ...！」

さらに復活した護衛は、謎の黒い砂煙に包まれていき、次第にそれは鎧のような物を模っていた。

「...これは？」

突如、現れた謎の戦士は不気味さが漂い、その場に居たローファイ側以外の者たちは、とてつもない恐怖を味わうこととなった。

一方、リカとアスカは、ユズミたちと合流すべく、警備と激闘を繰り広げていた。警備は容赦なく重火器を使い、リカたちの進路を妨げていた。

「なかなか手強いですね、少々時間をロスしています...」

「普通の警備じゃないことは確かね...訓練を受けた精鋭たちのよう...」

「...先輩が追っている件が関係しているようですね...うちの部隊も接触しているかも...」

「...相手がプロなら、こっちも本気出さないとね...行きますか...」

リカたちは、物陰に隠れながら弾を補充して、大胆に強行突破を試みた。

「...ドンドド...ドドドン...！！」

リカとアスカは背中合わせになって、銃を連射して、次々と湧いて出る警備を一掃しようとした。

「...弾が勿体ない、ちょっと借りるよ」

そう言って、リカは倒した警備のライフルを奪い取り、それを乱射して、標的を蹴散らして行った。そして、彼女はアスカに奪い取ったライフルを放り投げて渡した。

「これで楽勝ですね～」

「.....カツン」

リカたちは一気に戦況を優勢にしようとしたが、また新たに行く手を阻む者が足音を立てていた。

「...！！？」

突如、リカたちの前に現れたのは、赤い鎧を身に纏った謎の人物ではあった。手には大型長身のライフルがあった。

「...あれは何です？」

「.....！」

アスカは謎の戦士に心当たりなかったが、リカは姿を見た途端、何故か体が凍りつきそうになった。彼女は、明らかに謎の戦士に心当たりがあるようであった。

「...ジャキン！」

謎の戦士は、無言のまま装備しているライフルをリカたちに向けた。

「...これはまずいかも...」

謎の戦士は、リカたちに照準を合わせてライフルの引き金を引いた。すると、閃光が走り橙色の光弾が発射された。彼女たちは逃げるしか手がなかった。

「ドグオオオオオオオオ！！！！！」

光弾が着弾すると、大爆発を起こして、リカたちが居るフロアの床や壁は深く抉られて崩れていった。フロア内で炎や粉塵が舞う中、謎の戦士はライフルを構えながらリカたちを捜索していた。

「.....」

リカたちは、息を殺して物陰に潜み、標的の動きを窺っていた。

「...！！」

「ドガシャーン！！」

その時、崩れた壁が謎の戦士の方に倒れていき、潜んでいるリカが現れた。彼女は不意を衝いて謎の戦士に襲い掛かろうとした。謎の戦士は壁を押し付けられたが、ダメージは全くないようであった。

「...ドガガガガガガ！」

リカは、至近距離からライフルを発砲して、謎の戦士をねじ伏せようとしたが、これも全く効果がないようであった。

「...やば.....！」

リカは、謎の戦士に首を掴まれて身動きが取れなかった。彼女はどうか抵抗して、宙に浮いた足をじたばたさせるが、相手はかなりの怪力でビクともしなかった。



「...ガガン！」

「...？」

その時、天井から物音がした。丁度、音がしたのは、リカと謎の戦士が居る真上であった。謎の戦士は、リカを押さえながら天井を見上げていた。

「ボゴオオオオオオ！」

その時、衝撃音が鳴り響くのと同時に天井の一部が崩れ落ち、謎の戦士は驚愕して、思わずリカを放そうとした。リカは、即座に下敷きにならないよう、その場から避難した。謎の戦士は、そのまま瓦礫の山に埋もれていった。

「...派手にやったね」

リカが呼吸の乱れを直そうとすると、崩れた天井からアスカが飛び降りてきた。彼女は、リカに手を差し伸べて起き上がらせようとした。

「...怪我はないですか？」

「...ええ、以前より大胆になったわね」

「大胆不敵じゃないとこの商売出来ませんよ...勿論、トップスターもね...」

リカは成長した後輩の姿を見て、自然と嬉しい表情を浮かべた。

「...にしても、豪いもんと出くわしたね...」

「...先輩が追ってるローファイとかいう男、かなりの危険人物ですね...本気で戦争を起こすつもりでは...？」

リカたちはローファイの恐ろしさを知り、仲間の応援に行こうとするが、瓦礫の山から身の毛がよだつ気配が感じ取れた。

「...おいおい、冗談でしょう...」

リカたちは、恐る恐る瓦礫の山の方に振り返った。すると、V字一つ目を妖しく緑色に光らせ

た謎の戦士が立っていた。

「彼、タフですね...」

「しつこいのは嫌われるよ～」

リカたちは驚きを通り越し、呆れた様子であった。こうして、リカたちと謎の戦士の激戦は続くのであった。

同じ頃、ユズミ率いる歌劇団班は、蒼龍会とローファイたちの抗争を止めようとするが、その矢先、予想外のことが巻き起ころうとしていた。ローファイの一人の護衛が黒い鎧に包まれた化け物に変身したのであった。

「.....どないしたんや？あいつ悪いもんでも食べたんか？」

「...悪いもん食べたくらいで、あぁなりますか？」

ユズミのボケに対して、クミコが冷静にツッコミを入れた。蒼龍会側は取引時に一度、黒鎧の戦士を見たが、再度、恐怖で震えている様子であった。

「感情的になって.....化け物だということを忘れていた...」

「...また思い出してもらおう、恐怖の時間を...」

ローファイは、怖気づく組長を嬉しそうに見ていた。

「...ここは特撮映画のスタジオやないで...ええ加減にしてほしいわ...全員黙らせたる！！」

「...ユズミさん！待って！」

ユリカがユズミを呼び止めるが、彼女は感情的になり、一切耳を貸そうとしなかった。

「...キン！」

ユズミは、真っ直ぐ黒鎧の戦士の居る場へと向かっていき、愛刀「加州清光」を抜刀した。黒鎧の戦士はそれでも平然としており、そのまま動こうとしなかった。

「...ガキン!!!」

その時、激しい金属音が室内に鳴り響き、その場に居た者は、ほとんど口が開いたままであった。誰より驚愕しているのはユズミであった。彼女の目の前には黒鎧の戦士が堂々と立っており、ありえないことが起こっていた。

「...カチャカチ...カチャ」

ユズミが放った刃は、黒鎧の戦士の腕で防がれていた。黒鎧の戦士の強度は鋼以上で、斬るところか傷をつけることも出来なかった。

「...ぐぬ！」

ユズミは、歯を食いしばってどうにか刃を振り下ろそうとするが、黒鎧の戦士の腕はびくともしなかった。

「...ふふ、そんな鈍ら刀で彼の体を斬れるものか、己の無力さを肌で感じるがいい」

ローファイの嫌味な発言が歌劇団メンバーや蒼龍会側を大いに苦しめた。

「...ガキャン!!!」

その時、ユズミは黒鎧の戦士の怪力で勢いよく弾き飛ばされ、そのまま壁に激しく叩き付けられた。

「...ぐは！」

「ユズミさん！」

歌劇団メンバーは即座にユズミを心配して駆けつけるが、彼女のダメージは大きく、気を失ってすぐに立ち上がることが出来なかった。これで黒鎧の戦士の実力が知らしめることとなった。

「何かとんでもない物に足突っ込んでいるみたいだね...」

クミコが苦笑して、現実で起こっていることだと実感していた。

「...どうしますか？」

歌劇団で一番後輩のジュンは、先輩の指示を聞こうとしていた。

「.....あくまで私たちの標的は蒼龍会だけど、彼らの争いを止めないとどうにもならないわ...特に組長が何かあっては困る...何かいい策があれば...」

ユズミの次に上級生のクミコが、深く考え込んで対策を練ろうとした。

歌劇団メンバーが困り果てている中、蒼龍会側とローファイ側の抗争は再開されようとしていた。

「...相手が化け物だろうと、逃がすわけにはいかん...！」

組長がそう言うと、組員たちはローファイとの取引で手に入れた武器を装備して立ち向かおうとした。

「...やれやれ、本当に馬鹿がつくほどドンパチが好きな連中だ...野蛮な...」

「...ここは任せましょう」

「...そうだな、お前の出る幕はなさそうだ」

ウォンは、蒼龍会の組員たちの相手を残り四名の護衛に任せようとして、ローファイたち経営陣を外に脱出させようとした。

「...！」

その時、数人のローファイの護衛に異変が起こり、それは悪夢の始まりであった。彼らは黒い霧に包まれ、一斉に黒鎧の戦士に変身した。

「...これで確実に不利になった...」

ユリカは頭の中で敗北の文字が浮かび上がっていたが、それを打ち消そうとするものが一人居た。

「.....いつまでポケットとしてるんや？」

「...ユズミさん！！」

その時、ユズミは意識を取り戻して、仲間に声を掛けた。

「...あ～いた...一瞬、三途の川が見えたで...油断大敵ってやつやな...今度は負けへんで...！」

「...奴らと戦う気ですか？」

クミコ、ユリカ、ジュンはユズミの発言に対し、愕然としていた。

「...あの化け物がうちの障害になる以上、相手するしかないやろう...？」

「...勝てる見込みはあるんですか？」

ユリカがそう言うと、ユズミは真剣な眼差しで訴える姿勢を取った。

「...例え敵わなくても相手に弱みを見せるな...先代の歌劇団トップスターの言葉や...このままだと、リカさんやアスカのようなスターにはなられへんで...」

「...！」

その時、ユズミの発言でクミコたちの目の色が変わった。

「...何か戦闘意欲が湧いてきました...」

「さすがユズミさん、いい意味で詐欺師ですね」

「そうや、そうや、騙されたと思ってやってみいや！」

ユズミたちは黒鎧の戦士と戦う決意をして、攻撃態勢を取ろうとした。すでに彼女たちが立ち向かう前に蒼龍会側が激闘を繰り広げており、室内は殺伐とした異様な空気で満ちていた。

「ドドドン...ドゴ...ドドゴ.....」

組員たちは銃火器を乱射して、黒鎧の戦士に応戦しようとするが、効果がないようで不利な状況に追い込まれていた。黒鎧の戦士は、弾が当たっても傷口はすぐに塞がってゾンビのように復活して立ちはだかっていた。

「...やはり駄目だ...勝ち目はない...！」

蒼龍会側は実力差をしみじみと感じ、士気が下がっていった。

「.....ドンドンドン！」

蒼龍会側が諦めかけた時、リズムがいい銃声が鳴り響いた。撃っているのはユリカであった。彼女は連射可能な散弾銃、AA-12を使って、黒鎧の戦士と対決しようとしていた。標的は傷口を回復させる暇がなく、弾の衝撃で前に進めなかった。

「これはとっておきだよ～」

そう言ってクミコは専用の装飾銃に弾を込めた。

「ドウドウドウ...」

クミコの撃った弾は、破壊力及び貫通力があり、黒鎧の戦士の体に大きな傷口ができて効果があるようであった。

「さあ、かかって来んか～い！」

ユズミは黒鎧の戦士に挑発して、先ほど自分を弾き飛ばした黒鎧の戦士を相手にしようとしていた。黒鎧の戦士は腕に仕込んである大刃（ブレード）でユズミと対決しようとしていた。蒼龍会は歌劇団メンバーと黒鎧の戦士の戦いを呆然と見ていた。

「...ぼけっとしている暇はありませんよ」

「...？」

蒼龍会側に歩み寄ったのは、ジュンであった。

「組長を囲んで撃ち続けて下さい、ありったけの弾を使って弾幕を張るんです...そうすれば相手はなかなか反撃出来ない」

「.....俺たちを助けてくれるのか...？」

蒼龍会の若頭が、ジュンに話し掛けた。

「あの化け物を黙らせないと、おたくら組織を挙げられないんでね...特に頭が死なれては困る...一時休戦ということで今だけ加勢します」

「...すまない」

組長がジュンに深々と頭を下げて、組員たちも続けて頭を下げた。こうして、歌劇団メンバーと蒼龍会側は同盟を結んで、黒鎧の戦士に立ち向かった。

一方、ウォンとローファイら経営陣は、撤退しようと工場の通路を走り抜けていた。

「タタタタタ...」

同じく通路を走る者が居て、彼らはウォンたちと接触しそうになっていた。

「...！」

「どうした？ウォン...」

ウォンは向かってくる気配に気づき、警戒していた。そして、運命の対面の時が訪れた。

「.....！！」

ウォンが警戒している者は、慌てて立ち止まった。その正体は、リカとアスカであった。

「.....何だ、お前たちは！？」

ローファイは、思わず声を張り上げた。

「...あんたらこそ何者？びっくりするじゃないの！」

「...あれ？ちょっと待って...リカさん！」

アスカは、鉢合わせした正体に気づき始めていた。

「...そうか、あんたはこの工場の所有者...！こんな所で会えるとはね...」

「...まだうっとうしい鼠が紛れ込んでいたか...仲間は、奥の部屋で日本のヤクザたちと交戦中だが...」

「...丁度、助っ人に行こうと思ってんだけど...思わぬ収穫があったわ...私の標的はあんたよ...」

「...はて、さっき会った連中は蒼龍会に用があると言っていたが.....！！」

その時、ローファイの顔色が変わり、どうも落ち着かない様子であった。

「...ボス、どうされました？」

「...あの女、見覚えがある確か...先日、蝕島で...まさか.....」

「...え？あの島の騒動の件ですか？」

「...何ごちゃごちゃと言っているの？」

「...いや、何でも.....！！」

ローファイは、またもやりカのあることに気づいた。

「何じろじろ見てるの？」

「.....その手にしているライフル、何処で...？」

「...ああ、これ？ここに来る途中、変な奴に出くわしてね...苦労の末、倒したんだけど...強力な武器みたいだから頂戴したわ」

「...そんな、あのガンナーを倒したのか？」

「...ガンナー？あの赤い奴の名前...？」

「そうだ、射撃能力に長けた有能な戦士だ.....お前は以前、違うモデルと一戦交えたはずだ...！」

ローファイは、核心を突くために大胆な質問をリカにした。



「.....そういえば確かあの島に潜入した時、似た奴と.....！」

リカは、ローファイの意味深な発言である記憶が甦ろうとしていた。

「...お前だけ、ただの警察組織の人間ではないな...これも何かの縁だ...あの時はよくもやってくれたな...！」

「.....ローファイ...あんたがあの時、島の武装隊に指令を出していた張本人ね...！」

「...いかにも、お前たちのせいでかなりの損害を受けた...今度は何しに来た？」

「...スン・ローファイ、あんたの悪事は暴かれたわ...日本の国産ステルス機強奪、その他の犯罪関与の容疑があるため、連行します...！」

「...おやおや、そんな馬鹿げたことを言うのは勝手だが...証拠はあるのか？」

「...あるわ、あんたの陰謀に関する情報はこの中に...あと、あんたを挙げれば事件は解決するわ」

リカは、情報をコピーしたフラッシュメモリーをちらつかせて、ローファイを脅した。

「...そうか、全て知ってしまったか、では生かすわけにはいかないな...お前が私を捕まえることは不可能だ...」

「...往生際が悪いわよ、大人しく捕まった方が身のためよ...！」

リカがローファイに近づこうとすると、ウォンが彼を守ろうとした。

「...お前の組織は、ステルス機を強奪した犯人も追っているんだろう？ついてるな...目の前に立っているのがその犯人だ」

「...！！彼が...！ウォン...イーシン...！！」

リカは、ウォンと衝撃の初対面を果たした。彼女は、一気に標的の主要人物と相見えた。

「...リカさん、加勢しますよ」

「...いいえ、その必要はないわ、あの二人は私の獲物よ...先に行って」

「...そうだ、行ってあげた方がいい、奥の部屋の争いには私の部下も参戦していてね...ガンナーのような強者が何人も居る...もう全員やられているかもしれないぞ」

「...あんな化け物が何人も...！！」

「早く行ってあげて...ここはいいから...」

アスカはこの場をリカに任せて、仲間を救おうと前進しようとした。

「リカさん、十分に注意して下さいね」

「...ええ、あなたこそ...これを持って行きなさい」

リカは、ガンナーのライフルをアスカに手渡した。

「え？いいんですか？」

「私にそれは必要ない...自分のやり方でやってみるわ...」

「分かりました、それではお気を付けて」

アスカは、ありがたくライフルを頂戴して先へ向かった。

「ウォン...彼女はいい...先にあの女を片づけるんだ...！」

ローファイは、アスカに攻撃を仕掛けようとするウォンを注意して、リカに集中させた。リカとウォンは、睨み合ってお互いの力をぶつけようとした。

「無駄な抵抗はよしな、木偶の坊！」

「.....」

リカが悪口を言っても、ウォンは無反応であった。

「バゴ！」

リカは、自慢の長い足をウォンに目がけて振り上げ、見事ヒットさせた。

「...どう、目は覚めた？.....！」

「.....」

ウォンは、リカの強烈な蹴りを浴びても、様子は変わらなかった。彼女の攻撃は、全く効いていなかった。

「...ウォン、手加減はしなくていい、これは命令だ、力を解放してその女を殺せ...！」

ローファイがそう命じると、ウォンの瞳は赤く光りだし、体に異変が起きた。

「...まさか、あんたも.....」

リカはウォンの変わり果てた姿を見て、嫌な記憶が甦って絶句した。

「...さて、かなりの手練れのようなだが、今度はどうかな...そいつは誤魔化しが利かんぞ...」

ローファイは、経営陣と共に安全な場所に移動して、リカとウォンの戦いを観戦しようとした。

「...任務了解、対象を抹殺する...」

ウォンは完全な殺人マシンとなり、リカを殺そうとした。彼は例の黒鎧の戦士に変身したが、元の体型より一回り大きく、異質のようであった。

「...その変異した姿の名はレイダー...主に接近戦、中距離の戦闘を得意とする...中でもウォンのレイダー変異体は、蝕島に居たレイダーとは比べ物にならないほど強力だ...勝てる確率は無論ゼロだ...覚悟するといい」

「ご忠告どうも...でもここまで来たら引き返すこと出来ないんだよね...何としても勝ってみせるわ...！」

リカは闘志を燃やし、驚異的な力を秘めたウォンに挑もうとした。

一方同じ頃、歌劇団メンバーと蒼龍会側は手を組んで、おぞましい力を持つ黒鎧の戦士軍団と対決していたが、勝敗の結果は明らかであった。歌劇団メンバーと蒼龍会側の使用する武器の弾は底を突き、反撃する力は残されていなかった。

「...ちっ万事休すか」

ユズミの愛用している刀を見ると、刃毀れして使い物にならなかった。さすがの彼女も諦めようとしていた。

「...ガチャ」

黒鎧の戦士は一つの場所に集まり、戦意喪失した相手に装備された光線銃を向けて、止めを刺そうとしていた。その時の彼らには喜怒哀楽の感情はなかった。

「...！」

その時、彼らが居る部屋の外から一つの気配が感じ取られ、事態は急変しつつあった。

「.....ドバゴオオオオオオ！！！！」

爆音が鳴り響いたのと同時に、外から放たれた橙色の光弾が部屋の壁を突き破り、大きな穴を開けた。

「ドドゴゴゴゴン！！」

その光弾は、黒鎧の戦士たちに命中して大爆発を起こした。

「...え？これは？」

歌劇団メンバーと蒼龍会側は、突然起きたことで錯乱状態となっていた。黒鎧の戦士は、光弾でかなりのダメージを受けていた。こうして、頭の中を整理出来ないまま一気に形勢逆転した。

「...！」

その時、開いた壁に人影が見え、砂煙が舞う中、ゆっくりと部屋の中に入ろうとした。

「...まさか今の...あんたがやったんか？」

「うん、危機一髪だったみたいだね」

ユズミたちを救ったのは、アスカであった。彼女は、ガンナーから奪い取ったライフルを使用したようであった。

「...何です？その大きなライフルは？」

クミコや他の仲間は、アスカの持っているライフルに興味を示していた。

「...何か変な奴と遭遇してね...そいつがこれを持っていたの...」

「変な奴って？」

「...！.....ドバゴオオオオオオ！」

その時、アスカは黒鎧の戦士の気配に気づき、瞬時にライフルの引き金を引いた。

撃たれた黒鎧の戦士はそのまま力尽きた。

「...そこで倒れているような奴よ」

「...あら、そうですか」

クミコたち後輩は、アスカの過激さに驚愕していた。

「...しかし、よく外から私たちの位置が分かったな...普通なら巻き添え喰らってるで...」

「この武器、かなりのハイテクでね、透視装置や赤外線サーモグラフィースコープが取り付けられていて、特定の標的を撃つように設計されているみたい...」

「へえ...あの黒い奴といい、凡人では理解出来へんな～S Fの世界はついて行かれへんわ...」

ユズミは髪の毛を掻き篋り、お手上げの表情を浮かべていた。

「...リカさんが色々詳しくそうだったけど...」

「リカさんは、何処に居るんですか？」

ユリカは、心配そうな顔でアスカに質問した。

「.....自分の任務を遂行しようとしているわ...私たちの助けは要らないって...」

「...そうですか、仕方ありませんね、もう彼女とは住む世界が違うわけですから...」

「...そういうこと、あの連中を連行させるのが優先よ」

歌劇団メンバーはリカを置いて、生き残った蒼龍会の組員を連行しようとした。

横浜市海域

海上に一隻の中型クルーザーが停船しており、船内には二つの気配があった。

「...潜入班から通信がありました、標的はちゃんと確保したと...」

「...そう、ようやく私らの出番のようね」

謎の搭乗者二人は歌劇団メンバーの仲間のように、一人の搭乗者がクルーザーのエンジンを掛けて発進させ、彼女たちを迎えに行こうとしていた。

こうして、横浜港の激闘は、終演に向かおうとしていた。

秘密日本国家請負機関S J A本部

未明時刻、リカが工場に潜入してから六時間以上が経っており、薄暗いS J Aオフィス内には、チカとユミコが一睡もせず、リカの帰りを待っていた。

「.....あれから何も連絡は入って来ませんね...彼女に仕掛けた発信器の反応が消えていないので大丈夫かと思われませんが...」

「極力、通信は避けるようにとっておいたからね...彼女も馬鹿真面目ね...少し弱音を吐いた方が可愛いのに...」

チカたちはリカのことを心配し、危険な旅に行かせた親のような気持ちになっていた。

「...やはり今の彼女には過酷だったんでしょうか...?」

「...かもしれないわね、今頃後悔してもお遅いけど...」

「...もう応援に行っても問題ないのでは?」

「...それは頭にあるけど、そう簡単には行けないわ...最高責任者であるノリコさんたちの許可が要るし、この時間、人手が足りないわ...皆を叩き起こすことなんて出来ないし...」

「ええ、そうでした、すみません、余計なことを言って...」

「...別にいいのよ、心配する気持ちは一緒よ...」

チカは、ユミコと話すことで硬い表情が若干和らいだようであった。

「.....リカのことなら大丈夫ですよ、私が保証します...」

「...!」

チカたちに話し掛けたのは、ケイであった。

「...先輩方、お疲れ様です」

その他には、ヒロミも居た。

「...もう帰ったのかと思ったわ」

「どうも帰れなくて...そこでばったりヒロミと会いまして...差し入れ持ってきました、ちょっと休んで下さい...何ならお休みになっても構いませんが...最近ろくに寝てないでしょう？私らが留守番するんで...」

ケイはそう言って、散らかったテーブルを片づけて、買ってきたブラックコーヒーとシフォンケーキを置いた。

「...ありがとう、気持ちだけ頂いとくわ、なんか目が冴えてきたし...制限時間も半分過ぎたことだし...」

「...そうですか、我々も夜明けまでお付き合いします...」

「...私たち厳しいこと言ってるけど、結局は仲間想いの甘ちゃんね...」

「...歌劇団から数えると、かなり付き合い長いですからね...仕方ないのでは...？」

「...そうね、皆で気長に待ちましょうか」

こうして、ピュア・ガーディアンズのメンバーは、仲間を信じて無事に帰還するのを待っていた。

リカはまだ任務継続中で、偶然出会った標的のウォンと死闘を繰り広げていた。二人が闘う度に工場内は荒らされていき、なかなか決着はつきそうになかった。

「...あの女...一体...どうしてあのウォンと互角に闘える...？」

ローファイと企業幹部たちは、予想外の展開を目にして冷や汗を掻いていた。

「...ドンドン...ドギヤ...ボゴ...！！」

リカとウォンは、衝撃音や銃声を鳴り響きさせながら稼動している作業スペースへと移って闘おうとした。



「...ドドーン！！ドゴゴゴゴ！.....」

リカたちの戦闘が影響して、工場内の装置は破壊されていき、作業で使用する化学薬品は危険な爆発物へと変化していった。

たちまち、二人の周りは赤く染まっていき、溶解炉がある空間は、まさに地獄であった。

しばらくして、二人はひとまず物陰に隠れて様子を窺おうとした。

「.....随分と手こずっているな」

ローファイは、隠れているウォンにそっと歩み寄った。

「...申し訳ありません、思った以上に手強くて...あながち、ガンナーを倒したのは嘘でもまぐれでもないようです...」

「...そのようだな、あの島の一件といい、全く妙な連中だ...勝てそうか？」

「...勿論です、確実に始末します...ただ、時間が掛かりそうなので、先に行ってもらえますか？裏口を使えばすぐに車を用意した場所に着けます...」

「...そうか、分かっていると思うが、この工場はあと十数分後経てば消えてなくなる...！」

「...証拠隠滅ということですね、奴らに関わるとろくな目に遭いませんね...」

「...ああ、うっとうしい害虫どもだ...もう好きにさせるわけにはいかないが...一地相手をする暇もない...後のことは任せる」

「...了解しました、それではお気を付けて」

「...ああ、お互いにな...まだお前にはやることが沢山あるからな...」

「.....ええ、心配なさらなくても、すぐに追いついてみせます...」

ローファイはリカの始末をウォンに任せて、先に幹部と共に脱出しようとした。

「...ドン...ドンドン！」

その時、銃声がして、撃ったのはリカであった。ウォンの場所を掴み、彼らに向けて威嚇射撃をしていた。しかし、その前にウォンが立ちほだかろうとしていた。

「そこをどいて...」

「無理な要求だ、先に進みたいなら俺を倒すしかない...」

「...あなたもボスと一緒に生け捕りにするわ...遊んでいる時間はないのよ...！」

「その通りだ...いいことを教えてやろう、あと十分経つと仕掛けてある起爆装置が作動する...化学反応を起こしたこの場が爆発すれば相当なものだ、生き残ることは不可能だ...！」

「...とっておきのオチね、私がそんなことで怖気づくとも...？」

「...自信家だな、本当に勝てると思っているのか？」

「やってみれば分かるよ...」

「.....にしても妙だ、普通の人間がこの俺と対等に闘えるとは信じがたい...撃ってくる弾は妙に効いているし、蹴り技もかなり応える...どういった仕掛けが...？」

「...うちの組織も世界に誇れる力を持っていてね...優秀な仲間に使われているわ...」

「...成程な、しかし、俺が求めているのはその力ではないのだよ...」

「...どういう意味？」

「ボスから聞いたぞ、あの島でお前は妙な化け物の姿に変身したと...その力でレイダー部隊を全滅させたのだろう...？」

「...！！」

リカはウォンの衝撃の発言を耳にして、表情が強張った。

「俺は変身したお前と闘いたい、見せてくれ...変身して闘え...！」

「.....悪いけど、それは出来ないわ、あの時のことははっきり覚えてなくてね...まだ上手く制御出来ないようだから変身した力に頼らないって決めたの...残念だけど期待に応えられないわ...」

リカは、淡々とした口調で率直に答えを出した。ウォンは、一瞬つまらなそうな表情を浮かべた。

「...では仕方ないな、そのか弱い体のままあの世に葬ってやろう...！」

ウォンは、変異した自分の姿をリカに見せつけて、決着をつけようとしていた。彼女は一切怯まず立ち向かおうとしていた。工場内が激しく燃え上がる中、二人の死闘はまだ続くのであった。

一方、歌劇団メンバーは確保した蒼龍会組員たちと共に工場を脱出しようとしていた。彼らも工場の異変に気づき始めていた。

「...工場内で一体何が？まさかあの中にリカ先輩が...！」

「リカさんのことが気になりますが、今は自分たちのことで精一杯です、無事であることを信じましょう...」

アスカがリカのことを心配する中、ユリカが彼女をそっと説得した。

「...そうね、ごめん...！」

そこに警備部隊が現れ、歌劇団メンバーと蒼龍会組員たちの行く手を阻もうとしていた。

「...くどい連中やで！」

「ユズミさん...！」

クミコは、困り果てたユズミに何か放り投げた。それは新しい加州清光であった。それはユズミの愛刀である。

「おお！スピアを用意するとは気が利くな」

新しい愛刀を受け取ったユズミは、水を得た魚となり、生き生きとしていた。他のメンバーも

ありったけの武器で対抗しようとした。

「...皆、港の方に向かって！援軍がやって来るから！」

歌劇団メンバーと蒼龍会組員たちは、必死に目的地に向かおうと包囲網を突破しようとした。彼らは工場が爆発することを知らないため本当の危機は免れそうになかった。しかし、そんな時、意外な者が救世主として現れようとした。

「...え？あれは.....！」

ジュンが指差す先には、ある物体の姿があった。それは猛スピードで向かって来ていた。

「ヴオオン...！」

轟音を鳴り響かせていたのは、一台の赤い車であった。

「...あれってまさか...先輩の...！！」

アスカは、その赤い車がリカの愛車であるアルファロメオ・グロリアだと分かった。

「...！！」

突如現れたグロリアの運転席には誰も乗っておらず、自動で走行しているようであった。

警備は、暴走するグロリアから逃げつつ、攻撃しようとしていた。

「ドババババ...ドギャギャ...ギャ...！」

グロリアは銃弾の雨を浴びせられるが、特に効果はないようであった。そして、グロリアに異変が起こり、周りの人間は立ち止まって様子を見ていた。

「...カシャン」

すると、グロリアは装備された武器を出して、目標を捕捉していた。

「...ドガガガガガ...バツシュシュシュ...」

「...ひ！！」

グロリアに装備されたバルカン砲やミサイルが一斉に発射され、その場は一気に錯乱状態となった。しかしそれは、全て警備の方に向けられた攻撃であった。警備隊は半分以上倒され、突破口が開かれた。

「...あの車のお陰で助かったわ～あれ、リカさんのやろ...？」

「...そうだけど、とても私たちを助けるためにやって来たとは考えにくい...工場内を目指しているし...先輩の身に何かがある...！」

「...アスカ！」

ユズミは鋭い目つきで余計な心配をするなど、アスカに訴えた。彼女たちは、ただひたすら港の方へ疾走して行った。それでも警備はしぶとく必死に追い掛けようとしていた。

「...あともう少し.....！」

あと一歩のところまで、目的地に着きそうな彼らであったが、そこに赤い鎧を纏ったガンナーが二体現れた。彼らは待ち伏せしていた。

「ちっ、簡単には逃がしてくれんか...！」

「戦うしかないようね...」

アスカたちは再び窮地に追い込まれた。

「アスカさん、そのライフルをぶっ放して下さい！」

「あいよ！」

アスカは、ユリカの一声で例の奪い取ったライフルを撃とうとした。しかし、どうも様子がおかしかった。

「どしたんや？早よ撃て！」

「.....おかしいな、引き金引いても発射されない...まさか故障？」

突然のトラブルで、脱出する彼らの戦況は悪化しようとしていた。

「...打つ手なしか...！」

今度こそ絶体絶命かと思われたが、何やらまた様子がおかしいようで、何故かガンナーや警備たちはアスカたちに攻撃しようとしなかった。

「...え？何か苦しいそうだけど...」

クミコの言った通り、標的は皆、頭を抱えて苦しんでいた。

「...これってまさか...！」

アスカだけ原因に気づいているようであった。やがて、警備はそのまま気絶してガンナーは鎧にひびが入って剥がれていき、そのまま気絶した。

「.....なかなか来ないんで、こっちから来たよ」

「...皆、無事ですか？」

アスカたちを助けたのは、増援で来た歌劇団メンバーであった。

一人目の名はミチコ。トップクラスの歌劇団員で、退団したチエの後任を任された現役トップスターである。歌劇団に存在する全班で経験を積み、その成果が認められることとなった。裏の世界でも力は一切衰えることなく、凶悪組織を成敗している。あらゆる武器に精通している他に特殊な乗り物の運転、操縦が可能で陸、海、空を制している。

二人目のポニーテールをしているメンバーの名はコト。多方面から注目されている勢いのある若手ホープで、チエの才能を受け継いだ若手スタートして評される。チエを師として仰ぎ、彼女が退団するまでずっと追い掛けて着々とキャリアを積んでいった。裏稼業でも同じことで、相手に精神的ダメージを与える聴こえない歌声を習得した。

「...ミチコさん、ほんま助かりました」

「...例の技を使ったんですよね？」

アスカとユズミが、助けに来たミチコたちに話し掛けた。

「うん、コトちゃんにも手伝ってもらったけどね～」

「...ミチコ大先生の前で緊張しました...」

「結果を見れば分かるけど、役に立ったよ...それにしてもこの赤いの...妙だね」

「ええ、思った以上にハードな内容でした...どうにか彼らを連れてきました...」

「...ご苦労様、用意した船、店員オーバーになりそうだね...」

こうして、アスカたちはミチコたちによって窮地を脱することが出来た。彼らは引き揚げようと、ミチコのクルーザーがある方へと向かった。

「...あれ？ジュンちゃん、久しぶりだね～」

「お！コトちゃん、ご無沙汰～」

ジュンとコトは、歌劇団の同期であった。

「また腕を上げたね～」

「ジュンちゃんこそ、逞しくなったね～」

「.....本当に頼むよ、あなたたちは歌劇団の将来を担っているんだから...！」

ミチコはジュンとコトの間に入り、背後からそっと二人の肩を叩いた。

「.....」

アスカは、工場のある方向を振り返って立ち止まり、ミチコはそんな彼女の姿が目に入り、声を掛けようとした。

「...何か気になることでも？」

「あ...いえ、何でもありません、行きましょうか...」

アスカはリカのことをどうしても気になっていたが、ミチコも前ではそのことを伏せようとした。

「...それにしても面白いの持ってるよね...」

ミチコは、アスカの持っているライフルに興味津々であった。

「...ああ、これはさっきの赤い奴の武器です...蒼龍会の取引相手がいるかと...」

「...別件だけど、気になるわね...一応押収しましょうか...」

「...はい」

歌劇団メンバーが無事に任務を遂行する中、リカはウォンの猛威に苦戦を強いられていた。

「ドギャギャギャ...バゴゴゴゴ...！」

二人の死闘で工場内に爆音が鳴り響き、破壊活動は続いていた。

「...ぐあ！」

リカは、ウォンの怪力で壁に激しく叩き付けられた。

「もう遊んでやれる暇はない...俺に殺されるか、この工場と運命を共にするか選ぶがいい」

「ぺっ！」

リカは口の中に溜まった血を吐き、まだ強気な表情を浮かべた。

「その顔気に入らん...まだ抵抗する気か？」

「...生意気なこと言って悪かったわね...あんたが強いことはよく分かった...」

「ほう、表情とは裏腹な発言だな、死を悟ったか？」

「...どうかな？ただ前言撤回するわ...」



「...何だと？」

リカがウォンに意味深な言葉を発すると、何やら異変が起き始めた。

「.....オオン」

耳を澄ませるとある音がかすかに聴こえ、それは次第に大きくなっていった。

「ボゴゴゴゴゴン...！」

「...な！」

その時、工場の壁が突き破られ、ウォンは驚愕していた。

「ヴオオオオオオオン...」

壁を突き破ったのは、リカの愛車のアルファロメオ・グロリアであった。グロリアは、そのまま猛スピードでウォンの方へと向かって行った。

「ドバン！」

ウォンはグロリアに撥ねられて、衝撃で十数メートル吹き飛ばされた。

「...待ってたよ、相棒」

リカは、すぐさま助けに来たグロリアに乗り込んだ。

「...ぐぐ、なめた真似を...！！」

ウォンは少々応えたようで、怒りをあらわにしていた。

「あんたを相手にしていたら生きて帰れないでね...諦めることにするよ、捕まえるのはボスだけで充分よ...」

リカはそう言い捨てて、愛車をバックさせてそのまま運転を続けた。

「...そうはさせるか！」

ウォンは、後退していくリカを逃がすわけがなく、獲物を狙う獣のように追い掛けた。

「...ガクン」

リカはギアチェンジして車を加速させ、必死にウォンの脅威から切り抜けようとした。しかし、ウォンは常人以上の速さでリカに追いつこうとした。装備されたバルカン砲やミサイルで応戦するが変異したウォンには効果はなかった。リカは下唇を噛んで諦めかけようとしていたが、あることが頭の中によぎった。

「...！」

リカは、即座にある操作をした。ウォンはそこまで来ており、グロリアに跳びかかろうとしていた。

「...バチ」

その時、グロリアの前方の空間が歪みだして、青白い球体が現れた。そして、それは光弾に変化し、ウォン目がけて放たれた。

「...何！！！」

光弾がウォンに直撃し、そのまま勢いよく吹き飛んで行った。親友のミナコの奥の手により助かったリカは、その隙に脱出しようとした。

「シュオオオオオオ！！！！！」

リカの攻撃を受けたウォンは、溶解炉がある方に叩き付けられ、光弾と挟まれて身動きが取れなかった。

「...あの女...許さんぞ！！！！！ぐああああああああああ...！！！！！」

ウォンは悔しさを滲ませて、断末魔を上げていた。工場爆破まであとわずかであった。

リカは、ひたすら車のスピードを上げて爆破から逃れようとした。

そして、ついに工場の起爆装置が作動した。

「.....ドガオオオオオオオオオオオ！！！」

工場は、強烈な爆音を上げて、瞬く間に忌まわしい炎に包まれていった。さっきまで煌びやかだった要塞は、一瞬で廃墟へと変わった。

「.....」

所有者であるローファイは、それを車内から黙って見ていた。また、関係者も遠く離れた場所から崩れていく工場を見届けていた。

「...リカさん」

アスカは、港から離れるクルーザーでリカのことを気に掛けていた。ウォンを撃退したりカへの消息は分からないままで、しばらく横浜の空の一部を赤く染めていた。

「.....！」

時間は流れていき、視界の悪い黒煙の中を見ると、一つの物影があった。それはリカの乗っているグロリアであった。グロリアは、どうにか爆破された区域を切り抜けて安全な場所で停車していた。車に損傷があるが、少々車体が焦げた程度で、リカを爆発から守り抜いたようであった。彼女の方は意識を取り戻して状況を確認しようとした。

「.....つ...あんたに守られてなかったら確実に助かってなかったわ...ありがとう」

リカはそっと愛車に礼を言って、ドアを開けて外を確認しようとした。彼女の目の前には衝撃的な光景が広がっていた。広範囲に灰が舞い、燃え上がる炎は生きているようであった。

「...♪」

その時、かすかに消防車や救急車のサイレン音が耳に届き、リカは見つからないよう急いでその場を後にした。

やがて悪夢の夜は去っていき、夜明けを迎えようとしていた。リカはS J A本部へと急ぎ、制限時間内に帰還した。彼女はくたびれた体で専用フロアへと向かった。

「...！」

チカたちはリカのこと気づき、温かく出迎えた。

「...任務を遂行し、戻ってまいりました」

「ご苦労、収穫はあるようね...」

「...ええ、とっておきのネタを掴みました...」

リカはそう言って、チカに極秘情報がコピーされたフラッシュメモリーを手渡した。

「...分析班に回します」

ヒロミはフラッシュメモリーをチカから受け取って、担当の部署へと向かった。

「...あの工場で何があったか、ゆっくりと聞きたいところだけど...今は休養が必要のようね...」

「...すみません、さすがに疲れました...お腹も空いてて...」

「...食べ過ぎは駄目よ、まずは治療よ、ケイ、医療室に連れて行ってあげて...」

「はい、じゃあ行こうか」

ケイはリカに肩を貸して医療室に連れて行こうとした。チカはようやく肩の荷が下りたようであった。

「彼女、本当に逞しくなりましたね...」

「私たちよりしっかりしてもらわないと困る...まだ試練は終わってないわ...私たちも休みましょう...ノリコさんたちが来たら緊急会議を開くわ...」

「了解です」

こうして緊迫した半日は無事に終りを迎えようとしていた。だが、チカの言った通り、これで終わりではなく、過酷な試練が待ち受けているのであった。

それから数時間後、ニュース番組でリカが潜入した工場のこと報道され、上空には二、三機のマスコミのヘリが飛び交い、現場付近では、民放各社の人間が見張りの警察に監視されつつ、押し寄せていた。今回の工場火災に関して、一切リカたちのことを降れておらず、単なる作業中の事故として処理された。工場の所有者であるローファイは、音信不通で行方不明となり、この件の真実を知っているのはごくわずかの人間だけであった。

内情に詳しいS J Aの関係者は、朝に緊急の作戦会議を行おうとしていた。

「...リカちゃん、無事に戻って来たんだって？」

「...ええ、ちゃんと任務を遂行しましたよ、彼女いい働きをしました」

オサコは、興味深くリカのことをチカに訊いていた。

「...よし、人数はこんなもんでいいでしょう、トウコは表の仕事の関係で来れないわ、そろそろ始めましょうか？」

会議室にはS J Aの上層部、関係者が集まれるだけ集まり、最高責任者の一人、ノリコは会議を仕切ろうとしていた。

「まず...ここしばらくステルス機強奪事件を追ってきたわけですが、ようやく進展がありました...」

第一声に、チカが現状の報告をしようとしていた。

「チカ、詳しく説明して頂戴」

チカは、ノリコの指示で話を進めた。

「...はい、今回の黒幕が明らかになりました...名はスン・ローファイ...表向きは中国の大起業家ですが、裏の顔は非合法で武器を売りさばく闇の商人です...彼が本国のステルス機を盗み出した証拠があります...こちらをご覧ください...」

チカがそう言うと、室内のスクリーンが作動して入手した情報が映し出された。それは会議参加者が手にしているタブレット端末にも映っていた。

「...これは？」

「...うちの部下が入手した極秘データです、彼が関わっている兵器産業のことが事細かに記録されており、強奪されたステルス機の設計図のデータも含まれていました...彼らは設計図を基に武器を搭載して完成させ、実戦テストを行った...全て記録されています」

「...そのローファイという者は、何を企んでいるんだ？」

一人の上層部の男が、チカに質問した。

「...それも解析済みです、膨大なデータの中に妙な計画書がありました...」

「...計画書？」

「はい、全て中国語で記されているので翻訳してまとめあげました...」

チカは、翻訳した計画書を会議参加者に見せた。

「...！！」

会議参加者は、計画書に目を通した途端に表情が一変して冷や汗を掻いていた。室内は騒然となり、彼らは恐ろしい事実を知ることとなった。

一方、リカは、ミナコの専用オフィスで時間を潰していた。部屋の大きな窓から修理中のアルファロメオ・グロリアが見えており、ミナコはそれを見て深く溜め息をついていた。

「...あんまり雑に扱わないでよ、グロリアちゃんはデリケートなのよ...」

「あれでも丁寧に扱った方よ、いい車ということが証明出来た...」

「...次から少しでも傷つけたら罰金取るからね...！」

リカは、ミナコの脅しに動じなかった。

「...とりあえずグロリアのお陰で命拾いしたわ...他の備品も役に立ったし...」

「当然よ、おすすめ品ばかりよ...うちのチームをなめないで...！」

「勿論分かってるけど、標的の力もたいしたものよ、あの鎧を纏った連中が気になるわ...二度戦

ったけど手強くて...」

「...ああ、例の化け物のことね、島で押収した薬品、回収した死体、おまけにあなたがコピーしたデータで解析済みよ...」

「...奴らの正体が分かったの？」

リカが訊ねると、ミナコは自慢げな表情を浮かべた、

「...あの化け物は、一歩先に進んだ科学の力で生まれたものよ...ただ、今の中国にそんな力があつたかは疑問だけど...」

「...まさかステルス機のように技術を盗んだとか...？」

「...ご名答！あの鎧は元々ドイツの科学チームの発想よ、うちのチームも関わっていてね...プラズマエネルギーと同じ時期に開発を計画した強化服よ...正式名称は、ハイブリット・スーツ `サイクロプス、」

「 `サイクロプス、...！」

「 `サイクロプス、は、炭素繊維とナノマシンで構成されていてね、薬品化した成分を生物の体内に注入すると、細胞は活性化し、鉄よりも軽くて強度がある鎧を造り上げて変異させるの...」

「...そのナノ...何とかってよく映画とかに出てくる...」

「そうよ、ゴマ粒よりも小さい優秀なロボットよ、それは状況によって自己分裂、自己増殖を繰り返すことが可能で、人間を意のままに操れる力も持っている...」

「...なんか恐ろしいわね」

「ええ、本来、医療に活用しようとして計画されていたけど、軍事的にも役立つことが判明してね...計画は凍結し、実現までに至ってないわ」

「...それを奴らは実現させた」

「ええ、一見、最強の兵器のように思われるけど、そうでもないわ、確かに通常の武器では歯が立たないけど、弱点はある...」

「そうなの？」

「サイクロプスは、極度の熱や冷気、超音波に弱い...二度戦って実感したでしょう、うちの備品で対抗出来ることが...？」

「...まあ、そうね、こうして生きているわけだから...」

「...最強の軍事力を手に入れたといっても、外見だけの薄っぺらい、しょうもない組織よ」

「...そうだといいけど」

リカは、毒を吐くミナコに対し、若干退いていた。

一方、リカたちの会話を露知らず、対策会議は続いていた。参加者は、入手した標的の計画書を隅々まで黙読していくが、その中の一部に注目して体が固まったままであった。

「.....これは本当なの？」

オサコは、冷静さを取り戻してチカに質問した。

「ええ、本気のように、今までの騒ぎは下準備に過ぎません、早く手を打つべきかと...」

「.....しかし、盗んだステルス機で日本に攻め込むなど...起業家のすることではないだろう...？」

上層部の男の一人が、チカに率直な疑問を投げ掛けた。

「...もはや、黒幕のローファイはただの起業家ではありません...彼はある組織を率いた幹部の一人です...」

「それは一体どういった組織なんだ？」

「.....入手したデータには、ローファイが運営する企業の社員リストの他にもう一つ違うリストがありました...調べると、それはテロ行為を行う集団のリストでした...」

「...テロリストということか...！」



「ええ、属している人物は元スパイや工作人員...犯罪歴があるならず者ばかりです...極めて危険な集団といえます...！」

「.....そんな組織、全く耳にしたことがないわ、もっと詳しく知りたいわ...」

ノリコが興味を持ち、チカの発言を待った。

「.....私も全く知りませんでした、この組織は特殊で私たちの知らない世界で暗躍していました、最近の大規模なテロや要人暗殺はこの組織が関わっている可能性が高いです、何より特殊で犯行の証拠を一切残しません...それには大きな力が加わっています...」

「...大きな力とは？」

「.....この組織の裏では、中国政府の力が働いています...つまり国家が創りあげた最強のテロ組織、その名称は`チーリン`、日本語に訳すと`麒麟`、...架空の動物ということから班来存在しない組織...所属している人数は、二万人以上...戦力は一国の軍隊を上回ります...」

「...！！！」

チカの発言で、室内はどよめき始めた。

「...国家公認のテロ集団.....！中東に続き、中国もついに本格的にテロ国家となったか...」

上層部の一人は、驚きを通り越して呆れた様子であった。

「.....ステルス機で日本に攻め込んで戦争でも始める気？」

ノリコは、さらに深くチかに質問した。

「...最初はそう考えられましたが.....他に目論みがあるようです、今回のステルス機の攻撃は戦争を起こすためではなく、ビジネスです...」

「ビジネス？」

「はい、我が日本と中国は熾烈なステルス機開発競争で争っています、やがて、日本に追い越されそうになり、焦った中国軍事関係者は、`麒麟`を利用して、本国のステルス機を盗ませた...

そして、盗んだステルス機をいかにも自国が開発したものだと見せかけようとした...」

「.....成程、あの国特有のお家芸か...何とも子供じみたことだが、それがどうビジネスにつながる...?」

上層部の一人が、再びチカに質問した。

「...もし、ステルス機が襲撃し、こちらが反撃出来なかった場合、中国の軍事力が最強だということが全世界に知れ渡ります...それと同時に経済効果にも影響するわけで、ステルス機は生産され、戦争を好む国、軍事国家から大量に注文され、関係企業の株価は急上昇...軍事産業に参入しているローファイにとって、これ以上のご褒美はないでしょう...」

「...結局は、金儲けのために我が国が利用されただけの話か...」

事実を知った上層部の人間は、あまりの内容の薄さで拍子抜けしていた。

「...とにかくステルス機での襲撃は今から十日後に決行されます...分析班によると、計画書のデータ量は膨大で、何重にもセキュリティロックが掛けられているため、作戦内容についてはもう少し時間が必要とのこと...」

「そう、まだ油断は禁物ね...盗まれた物が相手だと余計に厄介だわ...防衛省に協力してもらって対策を練らないと...」

こうして、騒ぎの火種となったステルス機強奪事件は最終局面に向かおうとしていた。

## 未知なる決戦予告

---

防衛省 大臣室

中国の謎の犯罪組織「麒麟」が日本に攻撃を執行する日が近づいていた。事実を知る者たちは、体験したことない緊張感を持ちつつ、綿密に対策を練っていた。

ある朝、防衛省大臣室で大臣、副大臣、政務官が集まり、例のステルス機の攻撃について密談していた。

「.....執行日まであと一週間か...終戦記念日の日とは縁起が悪いというか、皮肉が込められているように思えるな...」

大臣は、浮かない表情で口を開いた。

「...現在のところ、本国の防空識別圏とされる空域に問題ありません...領海も同じく慎重に監視を続けています...」

政務官は、現状を冷静に報告した。

「...今回の件に関して、外務省の者と共にアメリカ政府に協力要請を交渉しに行きましたが...協力にはあまり前向きではないようで...得体の知れない連中のために貴重な戦力を分け与えることは出来ないと...国から援軍を派遣されることも考えていないと...そのため在日米軍が全面でサポートすると...」

「...そうか、まあ予想していたことだが...」

大臣は副大臣の報告に対し、溜め息をついた。

「...万が一のことが起きれば直ちに対処するとのことですが...」

「万が一のことが起きた時では遅いのだ...それは我々の敗北を意味する...目的がどうあれ、撃退しなければならない...今こそ他国の力を借りなくても防衛出来ることを証明せねばならない...もし、失敗すれば所詮は平和ボケの国と世界中から馬鹿にされるだろう...」

「...ええ、強奪された兵器で滅ぼされたら馬鹿にされて当然です...汚名を返上するいい機会かと思われ...」

「...明日、首相と関係閣僚、自衛隊上層部で最後の対策会議を開くが、安保法案が迷走の一途を

辿る中、どういう結論が出るかな？」

「答えが一致することを願うばかりです、もう揉める時間もあまりありません...いい決断が出ればよいのですが...」

「...そうだな、本国の諜報部の働きがなかったら、こうも動かなかつたら...彼らには感謝している...先日会ったあの最高指揮官の女性とは気が合いそうだ...」

「...彼らも今回の作戦に参加することとなっています...当日、連携して行動することとなります...」

「...それは心強い、希望の光が見え始めた」

大臣は、ノリコ率いるSJAの力を買っており、期待感を募らせていた。

「大臣、そろそろ...」

大臣は、政務官に催促された。

「...ああ、分かっている、これから国会に行かなければならない、どうせ無駄な論争だが...」

「そう言わずに行って来て下さい...私も午後から会談出席のために沖縄に飛ばないとはいけません...」

副大臣は、ぼやく大臣の肩を軽く叩いて元気づけた。

「...お互い働きすぎだな、夏休みシーズンだというのに色々と面倒なことが舞い込んでくる...」

「何かに弄ばれていますね...我々でも弱音を吐くことがある、そんな姿を見て誰が得するのか...」

「...私たちがよく思っていない者の心当たりがありすぎる...かといって追い出すために国家を危機に晒す真似はしないだろう...気づけばど壺にはまってしまったのだ...」

大臣はそう言い捨てて、出掛ける準備をした。副大臣と政務官は大臣を見送ってそれぞれの持ち場へと戻った。

中国犯罪組織による日本への侵攻については、ネットで犯行声明らしき内容が公開されて全世界に知れ渡ることになった、しかし、関心がある分、ガセ情報ではないかと騒動になっていた。これにより、日本政府は明日に関係者による対策会議が開いた後、正式に公表するようになった。戦後から七十年間、一切、戦争や紛争に関わっていない国にとって未知なるものであった。

今回、標的となる中華人民共和国であるが、この国は日本だけでなく、世界にとって脅威となる国になりつつあった。現在、問題となっているのは領土問題である。自国近辺の国の領土を侵略しようとして企んでいる。日本の場合、東シナ海に浮かぶ尖閣諸島が領土紛争の餌食になったことが記憶に新しい。双方の国での論争が続く中、日本国政府による島の購入と国有化により、改めて自国領土ということとなり、ひとまず争いは収まりつつあった。

しかし、中国は次なる一手を密かに考えていた。突如、東シナ海に資源プラント（ガス田）の開発計画が実行され、それは日本側海域に迫ろうとして開発を続けようとした。最終的には軍事目的に使用される恐れがあり、日本政府は対応に追われている。

その他にも問題点があり、問題となる場所は南シナ海であった。中国が南シナ海で急速に埋め立てを開始していることが判明し、無断で進めていることから、こちらも侵略行為だということが領ける。埋立地には滑走路建設が予定され、東シナ海と同様に軍事目的で使用される可能性があり、周辺の国は警戒し続けている。中でも海域を荒らされているフィリピンは、中国に対して軍事施設の増強を急いでいる。これのより戦争が臭いが漂いつつあった。

中国による侵略行為が激化しているが、それはさておき、また別に驚くべき点が隠されていた。中国が南シナ海に無断で建設しようとしている滑走路は、二、三年後に完成される予定であるが、既に機能している場所は一つあった。それは密かに建設された軍事基地のような建造物であった。

「...ゴオオオオオオ」

そこに一機の小型航空機が着陸し、機内から出てきたのは今回の黒幕であるローファイであった。つまり、そこは「麒麟」が所有する秘密基地であった。ローファイはサングラスを外して、待っていた中国軍隊の上層部に挨拶しようとした。彼らも勿論、グルであった。ローファイは基地の偵察で訪れていた。

「...計画は順調のようだな？」

「...ええ、将軍、当日を楽しみにしといて下さい」

ローファイは、中国軍上層部と話しながら基地内部へと足を踏み入れた。

「...例の物、拝見させてもらった...実に素晴らしい、日本は密かにあんな物を造っていたとは...隅に置けないな、あれは我が国に相応しいものだ、よく実行してくれたな」

「...いえいえ、こちらもビジネスのためですよ、戦争は金儲けに利用出来ますが、特に中身には興味はありませんので...」

「...そうは言っても君はよく貢献している...今度の作戦が成功すれば、どれだけ世界情勢に影響するか...アメリカも余計なことが出来なくなる...気づいた時にはもう遅いのだ...日本は既に我が国の支配下にある...尖閣諸島だけではなく、沖縄も日本列島も制圧出来よう」

「...私はその件に関わっていないので、話す権利はないのですが、真の目的をお聞きしたいですな...」

「.....聞かせてあげよう、まず手始めに日本を降伏させる、東シナ、南シナの基地を完成させた後、ロシア、韓国と同盟を組み、アジアを征服する...アメリカや欧州の相手はその後だ...」

「.....第三次世界大戦の幕開けですか...スケールが大きすぎて想像もつきませんが...」

「...じき現実となる、君も一員として、重大な件を任されているわけだ...失敗は許されないぞ！」

「.....勿論です、我が組織の力を信じて下さい...！」

ローファイは真剣な眼差しで、将軍たちに忠誠を誓った。基地内には日本製から中国製に改造したステルス機が搬入されており、驚くことに奥には同じような機体が並べられ、整備されているようであった。日本政府のみならず、リカが属する諜報機関SJAもその脅威に気づいていなかった。

東京 SJA本部

リカたちは、中国犯罪組織`麒麟、による襲撃に備えて、対策方法を開発部で話し合っていた。

「...それで、解読はどういった感じ？」

「ほとんど解読出来ていますが、難関な箇所がありまして...襲撃による戦術プログラムがなかなか開けません...かなり嚴重です...」

チカは、リカが必死になって手に入れた`麒麟、の極秘情報の解読の具合をミナコに訊いて

いた。

「...簡単な襲撃のシミュレーションは見たわ、あのステルス機が出撃するしか分かってないけど...」

「...ええ、どんなに屈強な軍隊の一部隊でも一瞬で全滅させられる性能がありますから...」

「うちのチームは自衛隊側と合同で動くことになったけど、どう動くか聞かされていませんよ」

ケイは、チカに疑問を投げ掛けた。

「...そのことで集まってもらったわけよ、ついて来て...」

‘麒麟、’に迎え撃つメンバーとして選ばれたユミコ、ケイ、ヒロミ、リカは黙ってチカとミナコについて行った。その場所は、すっきりとした広いスペースがある研究室であった。

「...さあ入って、お客さんがお待ちよ」

ミナコの誘導で部屋の中へ入ると、紺色の制服を着た凛々しい男たちが立っていた。

「...この人たちは？」

「航空自衛隊の方々よ、彼が一等空佐の...」

「...どうも、藤澤と申します、今日は中国の奇襲の件でやって参りました」

「...チカさん」

「私たちは藤澤一等空佐の下で動くことになったわ、それで詳しい作戦内容を知らせに来てくれたわけ...」

リカたちと航空自衛隊関係者は、席に着いて‘麒麟、’に対する合同作戦会議を開こうとした。

「...それではどういった対策か説明して頂けますか？」

チカは、藤澤に内容を訊ねた。

「...まず自衛隊がどういった防衛策を取っているかご説明しましょう...頼む」

藤澤は部下に説明させようとして、それに関する資料をリカたちに手渡した。

「...お手元の資料に記されていますが、自衛隊は陸海空で三つに分けて防衛ラインを張ることにしました...本国と中国周辺の海域、空域を防衛ラインとして、フィリピン軍の協力で南シナ海を第一防衛ラインとします、そこには海上自衛隊の最新鋭ヘリコプター搭載護衛艦を向かわせませ、また、緊急で沖縄基地より在日米海兵隊の戦闘機が出撃する手筈となっています...」

「...もし、第一防衛ラインが突破されたら？」

「そうなる、我々の出番です、那覇基地司令部の発令で動くことになっています、あなた方は、第83航空隊隷下の第206飛行隊と合同で東シナ海に向かってもらいます...」

「...その第206飛行隊とは？」

その時、ユミコが挙手して、航空自衛隊側に質問した。

「航空自衛隊の精鋭戦闘機部隊ですよ、戦闘機F-15Jカスタムで応戦させるつもりです...」

「...言っておきますが、私たちは自衛隊員ではないので戦闘機を操縦出来ません...どうすればいいですか？」

ユミコは、さらに航空自衛隊側に質問を続けた。

「...襲撃決行日まであと僅かしかありませんので...はっきり言って乗りこなすのは不可能でしょう...」

「...では足手まといになるのでは？」

「そのことについては対処済みです、十分に活躍の場を設けています...君の出番だ...」

報告者は、また新たな報告者にバトンを渡した。

「...ここからは私が担当します、よろしくお願いします...」



「あなたは...！」

リカたちは、新たな報告者に心当たりがあるようであった。

「...彼を知っているんですか？」

藤澤は、リカたちに視線を合わせて訊ねた。

「...先日の任務でお世話になりました...」

「そうでしたか、彼は現場ではなく、開発担当なんですよ」

「航空開発実験集団装備部の江本と申します、先日は大変失礼しました...」

「...え？私たち何か言った？大したこと言っていないと思うから気にしないでいいけど...」

リカたちは、江本を温かく迎えた。

「...先日の任務での活躍を耳にして、改めて感銘を受けました...今回、あなた方をサポートしますので...」

「有難いけど、どういったサポートを？」

チカが代表して、江本に質問をした。

「...直接見て頂いた方が早いかと思えます、こちらへどうぞ...」

江本は何か見せたい様子で、リカたちでなく、航空自衛隊関係者も立ち上がって誘導された。その場所には、ある物が布で被されていた。江本はその布を取ろうとして、何故かミナコも手伝おうとした。

「...！」

布が取られると、中のシルエットが明らかとなった。リカたちはそれを見たのは初めてではなかった。

「...これは確か...潜入した時の！」

「ええ、蝕島に降下した時に使用したジェットボードです、これならちゃんと操縦出来るかと思っています」

「...これで本当に応戦出来るの？」

ケイは、率直な疑問を江本に投げ掛けた。

「...以前は自動モードで使用してもらいましたが、今回は自分の力で操作出来るようにプログラムしてあります、なので空の戦いがメインになる以上、役立つかと思っています」

「うちの開発チームと提携して、改良を加えました、高性能レーダー探知機や武器などが搭載されているため強化されています...」

ミナコは、江本の説明に付け加えをした。

「私たちが空を飛べない以上、これに頼るしかないようね...」

チカは、ジェットボードにそっと触れて呟いた。

「...さて、そちらの問題は解決したようすな、話の続きをしましょうか...」

リカたちは、元の席に戻って作戦会議の続きをしようとした。

「コホン...では先ほどの続きですが、我々が担当するのは東シナ海、第二防衛ラインということとなります、我が部隊とあなた方の部隊で標的を包囲する...万が一、捕らえることが出来ない場合、撃墜が許可されており.....政府の判断で地对空誘導弾P A C 3を発射させる対処も考えています...勿論、最悪なケースを想定してのことですが...」

「...一応訊いておくけど、私たちの防衛エリアが突破された場合の対処は？」

チカの質問によって、その場は重苦しい空気に包まれて、しばし全員沈黙していた。

「.....第三防衛ラインは九州地方、西部方面区の陸上自衛隊が応戦することに...そうなれば民間人居住区はたちまち火の海になる恐れが...」

「...それは何としても避けなければなりませんね...」

藤澤自ら、チカの質問に答えた。

「相手は空の化け物です...空を制する我々の働きが重要になることは間違いありません...」

「...私たちも決死の覚悟で応戦しますので、何卒よろしくお願いします...！」

「...こちらこそ、あなた方のこれまでの功績は実に素晴らしいものだ...心強いですよ...それで一つお尋ねしたことがあるのですが...よろしいですか？」

「...はい、何でしょう？」

次に、藤澤がチカに質問しようとした。

「標的の潜伏場所を知りたいのです...うちの活動範囲は限界があるため調べようがない...密偵を専門に扱っているあなたの組織なら有力な情報は入っているかと思ひまして...」

「...成程、確かに我が組織のネットワークを利用すれば安易に思われるかもしれませんが...生憎、そういった情報はまだ入っていません...衛星で上空から怪しい施設がないか調べたり、中国国内に調査員を派遣しましたが、何も情報を得られず、黒幕であるスン・ローファイも未だ行方不明です...お力になれず申し訳ありません...」

「...いえ、謝る必要はありませんよ、あなた方の力がなければここまで対応出来なかった...日本は滅んでいたでしょう...それによく考えれば軍隊でない我々では奇襲は不可能だ...防衛に力を注ぐしかないようですね...」

藤澤はチカの言葉に少々落ち込んだ様子であったが、すぐに丁重に受け止めた。

「...まだ調査は継続中なので、分かり次第即急にお伝えしますので...」

「...よろしくお願いします、他に頼れるのはあなた方しか居ないもので...先日の会議で、統合幕僚長があなた方組織を甚く気に入ったようでした...」

「...そのようですね、うちの責任者と意気投合した様子で...大変喜んでいと聞きました」

「...これで我が国の軍事力がいい方向に変わればいいんですが...」

深刻な議論は続き、やがて合同作戦会議は終わろうとしていた。双方、暑く握手を交して別れ

の時を迎え、航空自衛隊側はS J A本部を後にした。開発部の大部屋にはリカたちだけが残った。彼女たちは、まだ「麒麟、侵攻について話し合っていた。

「...今までに経験したことない任務のようね」

「先日の東シナ海の島の任務が今回の前ぶれだとは思いましたがね～難儀やわ～」

「...ネットを覗くとかなり荒れていますね、もう世界の終わりだとか、日本滅亡を予告したりと...」

「...交通機関にも影響しているみたいで、海外に逃げようとする人が増えていっているようで...公表が待てないようですね...」

「...国民が政府を信用してないということでしょうか...」

「...とにかく当日のパニックは避けられない...まずはこの乗り物を乗りこなさないとね...試乗出来る広いスペースはある？」

チカは、ジェットボードを整備しているミナコに訊ねた。

「...生憎、そのようなスペースはありません、でもシミュレート出来る部屋を設けています」

「...そう、そこなら問題なく乗りこなすことが出来るの？」

「...勿論、高度や風圧、気候...戦闘機との空中戦も体験出来て、あらゆる状況がプログラムされているため、実践に役立つのは間違いなしです」

「...分かったわ、時間がある時、そこを使わせてもらうわ、一週間あれば充分でしょう」

「...あともう一つ、いいですか？見せたい物があるんですが...」

ミナコは、去ろうとするリカたちを呼び止めた。彼女は机の上にある物を置いた。

「...これは？銃？」

「...最新型の銃です、サイクロ...例の鎧を纏った戦士に対抗出来る代物です...念のために造ってみました...」

「...普通の銃とどう違うの？」

リカが興味を持ち、ミナコに質問した。

「...弾が実弾ではなく、荷電粒子...つまりプラズマエネルギーよ、あなたの車に装備されているのと同じよ...」

「...成程、あれか～」

「...この銃があの化け物に有効だと...？」

「...はい、かなりのダメージを与えられるかと思えます...実は標的が所持していた武器を参考にしたんです...」

「...！」

すると、ミナコは見せたのは長身のライフルであった。リカは心当たりがあり、それは工場潜入時に対決した赤い鎧を纏った戦士「ガンナー」の主要武器であった。

「...これは故障していますが、色々と分析して、小型化に成功しました...小さくても威力は強力です、撃ってみますか？」

ミナコは的を用意して、チカに試射させようとした。

「あのコンクリートの柱を撃てばいいのね？」

「ええ、自分のタイミングで撃って下さい」

ミナコにそう言われると、チカは静かに頷いて口を閉ざして集中した。周りのメンバーも一切喋ろうとせず、気が散らないよう静か空間を作り上げた。

「...！」

チカは的の柱に照準を合わせて、引き金をしっかり引いた。

「...ベシユン！」

特殊な銃声が出て、チカが撃った光弾は柱に命中して見事に貫通した。着弾した箇所は焦げ跡が残り、煙を放って凄まじい威力だということを物語っていた。それでもチカは驚いた様子はなく、そっとミナコに銃を返した。

「...どうですか？」

ミナコは不安そうな表情を浮かべて、チカに質問した。

「.....まあそうだね、反動が少なくて使いやすいそうだけど、私には合いそうにないわ...悪いけど必要ないわ...あの乗り物だけ使わせてもらう...本当に御免ね...それじゃあ」

「...いえ、全然構いません」

チカはミナコの勧めを丁重に断って、その場を後にした。

「...私も悪いけど、遠慮しとくわ、自分の力しか信用しない性格なんでね...あのボードは有難く使わせてもらうよ」

チカに続いて、ユミコも断ってその場を後にした。

「私は一応貰っとくよ、せっかく用意してくれたから」

「私も頂いときます、新しい物好きなんで...」

「...私も勿論貰っとくよ、射撃専門なんで...」

ケイ、ヒロミ、リカは快く受け取り、ミナコはほっとした様子であった。

「...あの二人は古い人間だから最新の物は受け入れないんだな～」

「...ケイさん、まだチカさんたち近くに居ますよ...！」

「悪口じゃないんだからいいじゃない、二人はプライドが高いって話よ.....それじゃあ私もそろそろ失礼しますか、リカまたね～」

「...私も別の仕事があるので失礼します」

それからケイと緋紹もが去っていき、室内はリカとミナコの二人きりであった。

「...ようやく静かになったわね、あなた、予定は？」

「特にないけど...これを機会に体のメンテナンスのでも行こうかと思っているけど...」

「...成程、それもいいかもね、これからまた忙しくなっていくから...お茶でも飲んで行く？」

「そうね、ずっと堅苦しい話をしてたから何か疲れたわ...一服したい～」

リカは、ミナコの専用オフィスに寄ろうとした。

「...えっと確か前にお土産でもらった洋菓子が...」

ミナコは、世話焼きの親戚の叔母さんのように振る舞った。二人は冷茶を啜りながら適当に雑談を始めようとしたが、ミナコはふとあることに気づいた。

「.....これ、あなたに渡しておくわ」

「...え？何これ？」

リカは、ミナコから一通の封筒を渡された。それは手紙のようであった。

「...あの壊れたライフル、警視庁から送られてきてね...送り主は私たちがよく知っている連中よ、ご丁寧に綺麗な箱に入っていてリボンもされていたわ...おまけにその手紙が添えられていた...あなた宛てよ」

リカは開封して、中の手紙を読もうとした。

「.....！」

リカは手紙を書いた相手のことに気づき、自然に笑みがこぼれていた。リカは黙読していき、ミナコは仕事をする振りをして、彼女が手紙を読み終えるのを待った。

場所は変わり、警視庁公安課警備部暗躍係部長室、そこには公安のトップを務める新沼光博とナンバー2を務める本澤直人が居て、アスカが呼び出されて立っていた。

「...蒼龍会の件、ご苦労だった、お蔭で都内及び関東圏の暴力団組織は落ち着きを取り戻した...  
もう少しで大勢の血が流れる抗争が起こるところだった...」

新沼は、アスカを褒め称えているようであった。しかし、アスカの方はどうもぎこちなかった。  
。

「...どうした、何か言いたそうだな？」

本澤はアスカの様子が気になり、つい声を掛けた。

「.....一つお訊きしたいがあるんですが、よろしいですか？」

「...何だ、言ってみろ」

「...標的が居た場所なんですが、そこで元秘密警察の人間に会いました...」

「...！」

その時、新沼と本澤の顔色が変わった。

「...ほう、それは誰だ？知っている顔か？」

アスカは新沼たちの顔色を窺いながら話をしようとした。「...よく知っています、以前、一緒に仕事をしていました...裏と表でも...裏の世界ではこう呼ばれていました...エージェント・リカと...！」

「...！！」

新沼と本澤は、さらにアスカに問い詰められた。

「.....久々に名前を耳にした、彼女は元気だったか？」

「.....ええ、以前と何も変わっていませんでした、彼女は仕事で来たと言っていました...」

「...そうか、彼女はうちとはまた違う組織の属し、裏の世界で生きているようだが...まさか彼女と行動を共にしたのか？」



「...はい、リカ先輩が属する組織の許可を得て行動を共にしました...」

「...任務に支障をきたさなければ問題ない...彼女も同じ獲物を追っていたわけではあるまい...」

「...はい、偶然、こちらの獲物に接触していたようで、別件でそれを追っていたようです...」

「...暴力団組織とつながりがある組織...明らかにまともではないな...大物か？」

「...はっきりしたことは聞いていません、聞く必要はないかと思ひまして...」

「そりゃそうだ、異なった組織の人間が余計な情報を得ることはない...」

アスカは、リカと情報交換したことを黙っていた。

「...共同で動いたのはごく僅かな時間です...お互い標的を見つけた時点ですぐに別行動を取りました...」

「...分かった、わざわざ報告してくれてありがとう...今のことは報告書に書かなくていいぞ...言いたかったことはそれだけか？」

「.....はい、大変失礼しました...報告終わります」

「...では、用は済んだということで...もう下がっていいぞ...忙しい時に呼び出して済まなかったな...」

「...いいえ、全然、結構です、それでは失礼します...」

アスカは新沼たちに一礼して、静かに退室していった。彼女は扉を閉めた後、腑に落ちない表情を浮かべた。新沼、本澤もまた何か落ち着かない様子であった。

「...読まれているようすな」

「ああ、勘が鋭い娘だな」

「ええ、若手の頃から実に頭が切れる実力者で予想以上にいいエージェントに成長しました...表の世界でも実力ある舞台人として人気を博しています」

「...だろうな、我々もそうだが彼女もまた肝心なことを隠しているな...」

「お互い探り合って話していたわけですか...何とも過ぎた真似を...済みません」

「別に構わんよ...いずれ分かることだ...まだ明かすことは出来ないからな...」

「...はい、例の件が片付くまでお預けですか...どうにか揉めずに済みました...」

「そうだな...さて、お手並み拝見といこうか...彼女がどれだけ成長したか...」

新沼たちは、あることを期待に胸を膨らませて、この先を見届けようとした。

一方、アスカは新沼たちと別れてエレベーターホールに向かおうとするが、その途中、ある人物と出会った。

「.....上手く話し合えた？」

「ええ、つい口が滑りそうになりました、リカさんとの出会いは偶然ではなく、意図的なものではないですか?...とね」

「それを言えばあの二人の機嫌が一気に悪くなるわ、言わなくて正解...核心をつく必要はないわ...お疲れ様」

アスカの前に現れたのは、ミチコであった。

「...演技は専門ですが、演技して相手の反応を見極めるのはまだ未熟で...でも思った通りでした、彼らは何かを隠している...」

「隠し事はお互い様よ、例の物はちゃんと届いているはずよ...あなたも隅に置けないわね...彼女の新しい職場、かなり大きな件を扱っているみたいよ...」

「...今、騒動になっている日本への襲撃が関係しているのでしょうか？」

「詳しいことは分からないけど、恐らくそうでしょう、密かに対策が練られているみたい...」

「...リカさんも何か遠い存在になりましたね...」

アスカとミチコは、しみじみとしながらエレベーターに乗り込んで警視庁を後にした。

一方、同じ頃、S J A本部開発部

リカが手紙を読み終わると、ミナコはまた何か見せようとした。

「...あなたの銃の手入れをしていたら、こんな物を見つけたわ...」

「...え？何それ？」

「...超小型のGPS発信器よ、これがあなたの銃に付着していたわ」

「全然気づかなかった...誰が付けたんだろう？」

「.....特に問題ないよ、これってうちが扱っているだから...」

「え？ああ、そうなんだ...でも何で？」

ミナコは、リカの鈍さにとことん呆れていた。発信器を付けたのは、アスカであった。彼女は、仕掛けた発信器を頼りにリカが所属するS J A本部の場所を突き止めて、押収したライフルと激励の手紙を送ったのであった。リカとアスカは別の環境で生きているわけだが、二人の絆は少しも揺るぐことがなかった。また、秘密警察とS J Aの関係性が問われているが、それが解明されるのはまだ先のこととなる。

翌日、日本政府は約束通り、中国犯罪組織「麒麟」が攻めてくることを正式に公表した。日本全国は騒然となり、慌てて国外に逃げ出す者も居れば、政府の指示に者も居て、中には危機感を覚えず、普段通りの生活を送る者も居た。国家分裂が危ぶまれる中、「麒麟」による侵攻の決行日は刻々と近づいていた。

## 蒼穹の死闘

---

二〇一五年 八月十五日 未明 場所は香港。そこには、今回の黒幕であるスン・ローファイのオフィスビルがあった。彼は会社の最上階の大部屋に居て、経営幹部も集まっていた。

「.....ついにこの日が訪れたな」

「...はい、あと数時間で我が国は世界中から注目を浴びることになります...」

室内に設置されたモニターには中国軍部の関係者が映っており、ローファイは丁重に対応しているようであった。

「...作戦については、全てそちらに任せてある...我が兵も好きに使ってくれていい」

「ありがとうございます、絶対に成功させます、ご期待に背くことは致しません」

「...ああ、お前の言うことを信じよう...失敗は許されない...では健闘を祈る...」

中国軍幹部は通信を切り、室内の重苦しい空気は消えた。しかし、それでもローファイたちの緊張がほぐれることはなかった。また新たな来客は待っており、彼らに休む暇はなかった。モニターの映像が切り替わり、画面には怪しい人影が大勢映っていた。彼らはローファイの大事な顧客であり、世界各国の名だたる投資家で裏の世界に精通している者たちであった。闇の投資家たちは、今回のローファイの計画に対し、非常に興味を持っているようで、彼のプレゼンテーションに参加しようとした。

「...皆さん、お待たせしました、是非これから始まるショーをご覧になって頂こうと思えます...！」

「...ミスタースン、あなたは毎回我々を楽しませてくれていますが、今回の件はかなり危険な香りがする...本当に大丈夫なんですか？」

一人の若い男性投資家は、ローファイを少々疑っているようであった。

「...心配なさらなくても大丈夫です、準備は万全です、確かにリスクを伴うことですが、世界を巻き込む争い事にはつながりません、あくまでビジネスです...商品の性能をほんの少し見て頂きたいだけです...」

「...そうですか、では安心して援助しましょう...」

若い男性投資家はローファイの発言に納得している様子であった。

「.....日本を金儲けの餌にするのは構わんが、その後のことは...見返りは期待出来るんだろうな？」

また一人の男性投資家が、ローファイに問いただした。

「はい、今回の件が成功した暁には大いなる富が得られることをお約束します...」

「...ほほう、詳しく聴きたいな」

「...まず、うちの株を買って頂ければ決して損はありません、さらには資金援助して頂ければ、例のステルス機の量産化が実現し、世界中から注文が殺到して、うちは大儲け...勿論、その分の謝礼もお渡しします」

「...成程、それは美味しい話だな、しかし、私は強欲でな...他の方々も同じだと思うが...金品だけでは満足出来んのだよ...」

男性投資家の発言で、他の投資家たちは一斉に頷いた。

「...と言いますと？」

「.....富を得るためには圧倒的な支配力が必要だ.....例の計画を進めてほしい...」

「...！！」

その時、男性投資家の要求を耳にしたローファイの表情が強張ったように思えた。

「...頼めるかね？」

「.....はい、応じます」

ローファイは冷や汗を掻きながら返事をした。投資家たちはようやく納得して、穏やかになり始めた。

「.....それではひとまず退散して、時間になればお邪魔させてもらおうとしよう...」

「...はい、存分に楽しめるものにしてみせますので...」

投資家たちはひとまず通信を切り、ローファイはしばし苦痛から解放されようとした。

そして、時が過ぎ、夜が明けようとしていた。終戦記念日となるその日の天気は、晴れているが、しつこい猛烈な暑さであった。日本はお盆休みで里帰りをしたり、行楽地が賑わうシーズンであるが、今回に限り、状況は違っていた。中国テロ組織「麒麟」による日本侵攻決行時刻は、日本時間の午前十時となっている。日本国民の過半数は、緊急事態宣言の発令により、政府の指示で安全な場所へと避難していた。当然のことながら航空機や新幹線、全国各地の交通機関は全て運休となって、活動範囲が制限され、人口が集中する都市は機能しておらず、無人となっていた。これでひとまず国民の安全は保障されることとなった。こうして、日本は安全保障関連法案が可決して国民の理解が得られないまま、試されようとしていた。

早朝、自衛隊と組みことになったリカたちは、送迎車に乗り込み、本部からある場所に向かっていた。

市ヶ谷 防衛省自衛隊 統合幕僚監部 中央指揮所

ここでは防衛大臣、自衛隊の統合幕僚長その他、陸・海・空の上層部の人間が集結しており、何とも言えない緊張感に包まれていた。

「...現在、無人偵察機を飛ばして偵察中ですが、我が国の領空...防空識別圏に異常はありません...！」

「...そうか、何処から攻めてくるか分からない以上、こちらが不利...奇襲に備えて、鉄壁の構えが重要になる...大丈夫か？」

防衛大臣が、統合幕僚長に問いただした。

「はい、いくつかの防衛ラインに分けて対処する手筈です、我が国の地に踏み込むような真似はさせません...」

「ああ、何としても侵攻を阻止しなければならない...責任重大だ、こんなことは初めてで手の震えが止まらん.....！」

「...恐くて当然ですよ、こんな状況で正常でいられる方がおかしい...数時間後に起こることが予

想出来ません...」

防衛大臣と統合幕僚長は、周りを見渡しながらか本音をこぼした。

「.....あの、S J A本部から通信が入っています」

「...S J A...そうか」

防衛大臣たちは、通信をつなぐよう指示した。

「...お早うございます、今回、我々も協力させていただきますのでよろしくお願ひします...！」

通信相手は、ノリコであった。通信室内には彼女の他にトウコ、オサコなど関係者が集まっていた。

「...わざわざ悪いね、頼りにしているよ、それで参戦する気かね？」

防衛大臣が愛想よく、ノリコに質問した。

「はい、うちの精鋭を派遣しました...今頃、現場に向かっているかと思われます...」

「...航空自衛隊チームと協同で動いてもらうことになりました...戦力になることを期待いぞ...」

統合幕僚長は防衛大臣に軽く説明して、ノリコに主張した。こうして、彼らは決戦の時を見届けようとした。

場所は変わり、東京都多摩地域中部、横田基地。そこにリカたちが呼ばれ、作戦行動に移ろうとしていた。基地には藤澤一等空佐が待っており、リカたちを見送ろうとした。

「...先日はどうも、あなた方にはこちらで用意した輸送機に搭乗して現場に向かい、第206飛行隊と合流してもらいます、後とから指示しますのでそれまでは待機ということで...」

「...了解しました、見送りありがとうございます...それでは」

隊長のチカを先頭にメンバー五人は、藤澤に一礼して、自分たちが搭乗する輸送機の格納庫へと向かった。

「...あれ？」

リカたちは、あることに気づいた。彼女たちが搭乗する輸送機の近くに航空開発部の江本が立っていた。

「...どうも、お待ちしていました、準備は出来ています...」

リカたちは江本に先導されて、輸送機の中へと足を踏み入れた。

「...また世話になるわね」

チカから順番にメンバーたちは、応戦のために使用する小型音速機ジェットボードが搭載されたスペースに入って行った。

「...そちらの開発担当の方に送ってもらい、整備が終わったところです、出発前に操作方法の確認をしたいんですが...」

「ええ、結構よ」

「...降下するまでは以前と一緒にですが、ボードに立ち上がった後は、自分で捜査しなければなりません...ちゃんと乗りこなせたようですね」

「ええ、当然よ」

チカが代表して江本に応答すると、他のメンバー四人はどや顔を浮かべた。

「...ご存知の通り、体重のかけ具合で自由に飛行が可能ですし、ボードと離れていても遠隔操作で呼び寄せることが出来ます...それとこれを...」

江本は、G（重力加速度）に耐えられる特殊スーツをリカたちに渡した。

「...これ着ると動きにくいけど...」

リカたちは特殊スーツの不満を訴えたが、江本は既に見抜いているようであった。

「...そのスーツも改良しています、以前より軽く丈夫で動きやすいはずですよ...ボードに乗りなが



らの戦闘に問題ありません」

「さすが、気が利くわね～」

「あと改良した部分ですが、スーツは特殊な磁気に覆われていて、万が一、ボードから落下したり、引き離された場合、自動的にボードに引き寄せられる仕掛けになっています...ただ、ボードに引き寄せられる距離は制限されていて、それを超えてしまうと磁気が働かないので注意して下さい」

「へえ～色々と気を遣わせちゃったね～」

ケイはスーツを手に取りながら感心していた。

「スーツに関しては、そちらの開発チームのアイデアですよ...」

リカは、ミナコのアイデアだと分かっていた。

「あと、以前より機動性が高くなっていますが、緊急時のパラシュートは仕掛けられていませんので...何か質問ありますか？」

「...いいえ、ないわ、わざわざありがとう」

「...では私はここまでです、ご武運を...」

江本はリカたちに敬礼して、その場を後にした。彼女たちは特殊スーツを着て、出発に備えていた。

「...それではそろそろ発進します、座って待機して下さい...」

輸送機の発進する時が訪れて、リカは自衛隊員の指示に従った。

「ゴオオオオオオオオオオ...」

リカたちを乗せた輸送機C-130Hハーキュリーズは、とてつもない轟音を鳴り響かせて、横田基地の滑走路から離陸した。

こうして、彼女たちは未知なる戦場へと飛び立って行った。

まもなく、麒麟、による侵攻の決行時刻の午前十時となり、日本はそれに対し、警戒態勢を取ろうとした。

再び、市ヶ谷 防衛省自衛隊 統合幕僚監部 中央指揮所

「...もうそろそろ時間だ、動きはあったか？」

自衛隊の統合幕僚長は、オペレート責任者に現状を訊ねた。

「...領空、領海とも隈なくチェックしていますが、特に異常はないようです.....ステルス機探知用の高性能レーダーにも反応はありません.....本当に襲ってくるのでしょうか...？」

「...さあ、もし、誤報やデマだった場合、国民にどう言い訳するかだ...間抜けな国だと世界中から笑い者になるしな...戦後七十年にして最悪な終戦記念日となるだろう...」

統合幕僚長は、防衛大臣の目を気にしながら、そっとぼやいていた。ここで気持ちが空回りした彼らであったが、思わぬことがすぐそこまで近づいていた。

「.....これは...！」

その時、一人のオペレーターがあることに気づき、慌ただしい様子であった。

「...どうした？」

オペレート責任者が慌ただしくしているオペレーターに質問した。

「...あっはい...微弱な電波を発見しまして...気になりまして...場所は日本領海と南シナ海の間海域...念のため、無人偵察機を向かわせてもよろしいでしょうか？」

「...許可しよう」

中央指揮所は怪しい電波をキャッチして、直ちに無人偵察機を現地に飛ばした。

数分後、座標をプログラムした無人偵察機が謎の反応がある付近に到達し、司令部にその場所の映像が送られた。映像を観ると、南シナ海の大海洋が広がっており、とても怪しい動きがないように思えた。

「...反応があった地点に到達...特に異常はありません...」

「...どうして姿がないんだ？見間違いじゃないのか？」

「...そんなはずは...一応もう少し確認してみます.....！」

その時、担当オペレーターはある異変に気付いた。

「...どうした？」

オペレート責任者が、部下に訊ねた。

「何か上手く操作が出来なくて...調子が悪いようです.....」

「...ザ.....ザザ...ザザザ.....ザ」

何故か無人偵察機から送られた映像が乱れて、司令部からの操作が不可能であった。

「...駄目だ、どうすることも出来ない...！」

「故障かもしれない...もう偵察を止めて帰還させろ」

「...！」

無人偵察機を帰還させようとした、その時であった。映像の状態が回復し、操作も可能となった。

「.....何だ、直ったのか？...！！」

幕僚長は担当オペレーターたちに呼びかけるが、彼は司令部の巨大モニターである物を観てしまった。司令部に居る者たちもそれに釘付けとなった。

「...あれは！？」

司令部の人間の目線の先には、複数の飛行物体が押し寄せる姿があった。

「...戦闘機.....いや、あれはまさか...例のステルス戦闘機...！」

「...そんな盗まれたのは一機のはずだろう？明らかに数が多すぎるぞ！」

統合幕僚長たちの目では、ステルス機十機が確認出来て無人偵察機の方へと真っ直ぐ向かって  
いた。

「...ドドン.....ザー.....」

ステルス機が近づいて来るのと同時に、無人機は被弾して送られた映像出力が切れた。

「...撃墜されました」

「...そうか、当然だろうな...どうやら本気のようにだ...引き続き警戒態勢を取らなければ...第一防  
衛ラインの指揮官と連絡を取りたいんだが...緊急を要する...！」

さっきまで落ち着いていた自衛隊上層部たちの顔色が悪くなり、緊迫感が重々伝わっていた。  
司令部から連絡を受けた海上自衛隊の護衛艦は直ちに針路を変えて応戦準備をしていた。同時に  
沖縄基地から米海兵隊の戦闘機がスクランブル発進した。自衛隊たちは一気に慌ただしくなり、  
対応に追われていた。

一方、リカたちは、まだステルス機が現れたことを聞かされておらず、静かに待機していた。  
彼女たちは、ただ上からの指令を待った。

同じ頃、香港中心街 ローファイのオフィスビル

ローファイは、専用の大部屋でステルス機による日本侵攻の様子を見ていた。

「...ふん、そう簡単に手の内を見せるわけがないだろう...もうこちらの勝利は目に見えている...  
」

ローファイは余裕の笑みを浮かべて、ない一つ不安はないようであった。

「...もうショーは始まったようですね...世界中にニュースで流れていますよ...」

一人の闇の投資家が、通信でローファイに話し掛けた。

「...本番はこれからです、最後まで目が離せませんよ...」

「...そのようですね、また儲けさせてもらいますよ」

闇の投資家は不敵な笑みを浮かべて、ローファイの話に乗っていた。

最新鋭ステルス戦闘機十機は、まもなく第一防衛ラインに到達しようとしていた。

「...何故、ステルス機があんなに飛んでいたんだ？戦力が全然違うじゃないか...！」

統合幕僚長は、予想外のことで錯乱状態であった。

「.....どうやら、さっきのは量産機のように、設計図も盗まれたのでそれで完成させたかと...」

オペレート責任者は、統合幕僚長に恐る恐る情報を伝えていった。

「...全く何様のつもりだ、よその国の技術を根こそぎ盗みよって...性能は壱号と同じなのか？」

「...はい、性能はほぼ変わらず、有人機の他に無人機があって、それは組み込まれたプログラムと壱号からの遠隔操作で動いています...」

「...やはり、本体を破壊しなければ戦況は不利か...もはや、あれは我が国のためのものではない...ただの殺戮兵器だ...」

統合幕僚長は、深く溜め息をついて自分の席に深く座り込んだ。防衛大臣は沈黙したままで悪い空気は消えそうになかった。

## 南シナ海海域

第一防衛ラインを担当する海上自衛隊員の何人かは護衛艦の甲板に出て、携行地对空ミサイルを発射するランチャーを構えて標的が来るのを待っていた。護衛艦もまた装備された機関砲や近接防空ミサイルを作動させようとしていた。

さっきまで静かだった空は、たちまち不気味さが漂い、風を切る音が第一防衛ラインに迫っていた。

「...目標捕捉.....攻撃開始！！！」

海上自衛隊の指揮官の命令でステルス機に一斉攻撃を行い、その場は一瞬で鬼気迫る戦場となった。

「ドガガガガガ.....ドンドドバ.....」

護衛艦四隻は機関砲や対空砲を乱射して弾幕を張り、ステルス機の侵攻を妨げようとした。また、甲板に居る海上自衛隊は装備しているミサイルランチャーで応戦するが、全く効果はないようで反撃されていた。

「うわああああ.....！」

甲板上で隊員たちは悲鳴を上げながら炎を浴びてもがき苦しむ、その場は瞬く間に火の海となった。護衛艦の攻撃も効果がないようで被弾していた。ステルス機全機は、無傷のまま侵攻を続けようとした。護衛艦は追跡出来ず、他の部隊に後を任せようとした。

次にステルス機の相手をするのは、米海兵の戦闘機部隊でお互い接触しようとしていた。

「...！」

米海兵隊の戦闘機F/A-18Dホーネットは、フォーメーションを組んで華麗な飛行を見せてつけていた。ステルス機はそれに構わず、第一防衛ラインを突破しようとしていた。

「...ドガガガガガ...ガガガガガ...！」

米海兵隊は目標を捕捉して、固定武装の20ミリバルカン砲を連射した。ステルス機は、攻撃を回避するため散らばって旋回した。ここから激しいドックファイトが展開されて、日本領空は平穏さを失っていた。

米海兵隊はステルス機の暴走を止めようとするが、機体の性能に差がありすぎて、追いつくのがやっとならであった。

激闘が繰り返されて時間が過ぎていき、ステルス機は容赦なく日本本土に迫って行った。司令部からミサイル発射が許可され、使用したが難なくかわされていき、反撃を受けて米海兵の戦闘機は半分の数を失った。気づけばステルス機は、第二防衛ラインに到達しようとしていた。

一方、航空自衛隊対策司令部に居る藤澤は、現状報告を受けて、ある決断を下そうとしていた

。「...うちの輸送機は今、何処を飛んでいる？」

「まもなく鹿児島上空を抜けますが...」

「...機につなげられるか？」

「はい」

藤澤は部下に頼んで、リカたちが搭乗している輸送機に連絡を取ろうとした。

「...こちらC - 130H...どうかされました...一等空佐？」

「...ああ、実は緊急を要する事態が起こった、予想以上に早く標的が本国に向かっているので、もう作戦を実行しようと思う...標的は完全に破壊せよとのことだ...彼女たちに伝えてくれな  
いか？」

「...了解しました」

輸送機に搭乗している航空自衛隊員は、藤澤の命令ですぐにリカたちが待機している場所へと向かった。

「...あら、もう目標地点に着いたの？」

チカが代表して、隊員に問い掛けた。

「.....いえ、急遽、作戦が変更になったので伝えに来ました...！」

「...作戦変更？何か非常事態？」

ケイは、少々落ち着かない隊員に問い掛けた。

「.....海上自衛隊の防壁が崩されて、現在、米海兵隊と交戦中とのことですが、戦況はこちら側が不利のようです...ステルス機の数は一機だそうです...！」

「...一機？入手した情報と全然違うじゃない！」

「...まんまと騙されたようやな」

ユミコは、座り込んだまま深く溜め息をついていた。

「...それで私たちはどうすれば？」

続けて、ヒロミが隊員に問い掛けた。

「...あと数分で九州空域を抜けます、それと同時に皆さんにはジェットボードに乗って、現地まで行ってもらおうかと思えます...例のステルス機は、全機破壊せよとのことです...！」

「...もう私たちの出番ですか？」

リカはそう言って、準備に取り掛かろうとした。他のメンバー四人も彼女に続いて準備しようとした。彼女たちは速やかにジェットボードに乗って出撃に備えた。

一方、米海兵隊とステルス機の戦闘に限りが見え始めていた。あいかわらず、米海兵隊は弄ばれて防戦一方であった。ほとんど撃墜されて残った戦闘機は二機だけであった。やがて、ステルス機部隊は飛行速度を上げて、米海兵隊を相手にしていなかった。

「...！」

ステルス機部隊は、そのまま米海兵隊を無視して行くかと思われたが、何か企んでいるようであった。ステルス機から何か射出されて、それは猛スピードで米海兵隊の戦闘機に接近して行った。

「.....！！」

「...何だ？反応が増えたぞ...新手か？」

「...これは無人航空機です...武装型の...まずい展開です...！」

統合司令部は自ら開発したステルス機の恐ろしさを肌で感じて震えていた。

「...ボグオオオオオオオオオ...！」



無人航空機は爆音を鳴り響かせて、米海兵隊の相手をしようとした。ステルス機部隊は無人航空機に注意を引かせて、先に進もうとした。米海兵隊は標的を追跡出来ず、無人航空機の餌食となった。これで第一防衛ラインは突破され、第二防衛ラインへの侵攻を許してしまったであった。リカたちを乗せた輸送機は、九州空域を抜けて高度一万フィート（約三キロメートル）の位置で飛行していた。

「...ステルス戦闘機が飛んでいる大体の座標データをそちらに転送しました...それを頼りに向かって下さい...ご武運を！」

「ありがとう...では行って来るわ」

自衛隊たちはリカたちに別れを告げ、彼女たちの表情が険しくなっていた。

「...ゴゴゴゴゴゴ」

ついに輸送機の後部ハッチが開かれ、息が詰まるほどの強風が機内に吹き荒れたのと同時にリカたちは勢いよくジェットボードと共に射出された。彼女たちは、その時の衝撃波体験済みで慣れたものであった。リカたちは空を切ってステルス戦闘機に応戦しようとした。

同じ頃、S J A本部

S J A対策本部では、ノリコが指揮を執ってリカたちのことを気に掛けながら別の捜査も同時に行っていた。

「...指揮官、派遣メンバー五名が出撃したそうです...映像も後で送られて来るとのことですが...」

「...分かったわ、そっちも気になるけど、こっちは進展があった？」

「...ノリコ、丁度トウコから通信が入ったわよ...」

ノリコは、オサコに呼ばれてトウコからある情報を聴き出そうとした。

「...そっちの調子はどう？」

「まあぼちぼちや、香港の株主は目が血走ってて怖いわ...」

トウコは、香港である捜査をしていた。

「...で、彼の居所は分かったの？」

「...ああ、分かったで、中心街に立派な高層オフィスビルがそびえ立っているわ...ローファイのオフィスに間違いはないわ...」

「...本拠地に潜伏していれば、こちらは手が出せないからね...どうにか引きずりだす方法はないかな？」

「...今日、奴は世界各国の投資家たちを招いてプレゼンを行っているそうや、ただし、投資家は裏社会に通じる大物ばかり...例のステルス機が利用されているのは間違いはないで...」

「そのようね、彼女たちは出撃したそうよ」

「...そうか、クライマックスが近づいているようやな...こっちももう少し情報収集するわ、何かまた進展があれば連絡する」

「了解...気を付けてね」

トウコは一旦無線を切って、寛いていたカフェを出ようとした。彼女は店に出た途端。何か冷たい視線を感じ取り、警戒しながら歩いて行った。トウコを尾行する者が居るようで、尾行者三人は彼女に気づかれないように尾けていった。

「...！」

その時、トウコは歩くスピードを上げて裏路地へと回った。尾行者は見失わないよう走って彼女を追った。

「...ジャキ」

尾行しているのを悟られた尾行者たちは、用心のために得物の銃をちらつかせた。

「.....？」

裏路地に何故かトウコの姿は見当たらず、煙のように消えたようであった。

「...うちに何か用か？」

「...！！」

その時、トウコの声がして、彼女は雑居ビルの二階非常口に隠れていた。

「...えらい物騒なもん持ってるな...それで私を殺す気か？」

「...ああ、死んで...もらう」

尾行者の一人が片言の日本を話して不敵な笑みを浮かべた。トウコは二階非常口から飛び降りて尾行者の相手をしようとした。中国人の尾行者は、サイレンサー（消音装置）付きのH&K USPという自動拳銃をトウコに向けて撃とうとした。

「...バシュ...バシュ...！」

中国人の尾行者は容赦なく引き金を引くが、トウコは微塵も恐れることなく弾を避けて立ち向かった。

「バキヤ！！！！」

トウコは相手との距離を詰めて行き、反撃して銃を持った手を蹴り上げた。尾行者の一人は隙を作ってしまう、強烈な蹴りを浴びせられた。残り二人は反撃しようとするが既に遅く、トウコの華麗な連続技を浴びせられた。その時、トウコの手足から蒼い炎のようなものが発せられ、実に美しく燃えていた。彼女は、あっさりと勝利していた。

「...まだ死んだらあかんで、あんたらには訊きたいことがある...」

トウコを襲った連中は、ローファイの部下のようであった。

日本侵攻作戦が始まってから一時間近く経ち、リカたちとステルス機部隊はついに対面することとなった。また、航空自衛隊の精鋭戦闘機部隊である第206飛行隊も合流して、日本の防衛を賭けた決戦が始まろうとしていた。

「...こちら206飛行隊...後方支援をお願いしたい...」

「...了解、サポートに回る...」

S J A派遣メンバーと206飛行隊は、お互い連絡を取り合って迎撃に備えた。

「...！来たか」

その時、ステルス機部隊が姿を現し、リカたちが居る場所に強行突破しようとしていた。

「...全員、行くわよ！」

チカ的一声で、S J A派遣メンバーたちはジェットボードを自動モードからマニュアルモードに切り替えて配置に着いた。

「ドシュ...ドシュシュシュ！！」

第206飛行隊は、リカたちより前に出て、横一列に機体を並ばせて一斉に誘導弾を発射した。それに対し、ステルス機部隊は散開して誘導弾を避けようとした。

「...！」

第206飛行隊の誘導弾は、一発も命中しなかった。第206飛行隊は次なる手を考えてフォーメーションを組んだ。リカたちは飛行隊の後をついて行った。

第206飛行隊とステルス機部隊はお互い、華麗なアクロバット飛行を行って壮絶な空中戦を展開しようとしていた。

「...ドガガッガガ...ドガガガ！」

第206飛行隊は装備された機関砲で応戦してステルス機部隊に食らいついた。ステルス機部隊はそれを物ともせず、先に進もうとした。ここでも機体の性能の差を見せつけられて、自衛隊側の戦況は不利であった。第206飛行隊は優れた操縦技術と勘を頼りに攻撃を続けた。また、後方支援に回るリカたちは闘志を燃やしていた。

「...！」

ステルス機部隊は、残りの無人航空機を射出させて、第206飛行隊やリカたちの妨害を切り抜けようとした。

「...小さい方は私たちが相手をします、先に行って下さい...」

「すまない...では任せる」

チカは第206飛行隊に指示して、SJA派遣メンバーだけで無人航空機の相手をしようとした。無人航空機の機数は、SJA派遣メンバーの人数分で、彼女たちに照準を合わせてミサイルを発射しようとしていた。

「...ドシュ！」

無人航空機から発射されたミサイルは、空気を切り裂きながらリカたちに襲い掛かった。彼女たちは散開してミサイルを避けようとした。発射されたミサイルはSJA派遣メンバーに命中せず、着弾する前にリカの手で破壊された。

「一人につき、一機ずつ相手にするのを心がけましょう...五分以内に片づけるのを心掛けて...」

「了解！」

チカの命令に対し、SJA派遣メンバー四人は声を揃えて応答した。

SJA派遣メンバーはジェットボードを自力で操作して、無人航空機と激しいドックファイトを繰り広げた。

「.....ついてきな、相手してあげるよ」

チカはそう言って、無人航空機を挑発して、鬼ごっこの鬼となった。SJA派遣メンバーが扱うジェットボードは、無人航空機より若干性能が上でじりじりとチカは追い詰めていった。彼女は逃げてばかりせず、自分のタイミングで振り返って攻撃を仕掛けようとした。お互い猛スピードで接触して決着が着こうとしていた。

「.....ヒュオオオオオオオオ」

チカと対決した無人航空機は、急にシステム障害を起こして、そのまま魂が抜けたように海へと墜落していった。これでチカの勝利は確定した。彼女は、得物の`チルド・グローブ、で標的を凍らせたのであった。

「...チカさん、はっや~負けてられへんな」

ユミコはそう言い捨てて、無人航空機の相手をしていた。彼女は標的のスピードに合わせて、ジェットボードを飛ばして攻撃する機会を窺っていた。

「...ボシュ！」

無人航空機は、ユミコに目がけてミサイルを発射した。彼女は微塵も避ける素振りを見せなかった。

「.....ドオドドン...！！！！」

その時、無人航空機の発射したミサイルは着弾前に爆発を起こした。その後、ユミコは口から特殊な超音波を発して、その効果で無人航空機は機能停止して、チカの時と同じように海へと墜落した。ユミコはどや顔でチカの方へと向かった。

「...あの江本とかいう坊やの言う通り、性能が良くなってるね～この服も動きやすい～」

ケイは呑気にジェットボードを乗り回して、無人航空機に追い掛けられていた。

やがて、彼女は徐々にスピードを緩めて旋回して、まっすぐ標的の方へと向かった。

「...チャ」

ケイは居合の構えをして、無人航空機の方へと突っ込んだ。

「.....キン」

ケイが刀を鞘に納めた時、勝負は決まっていた。無人航空機は、彼女に一刀両断されて撃破された。残りはヒロミとリカの二人となり、時間は充分にあった。

「...先輩たちを待たせるわけにはいかない...さっさと片付けちゃおう～」

ヒロミはそう言って、自分が扱うジェットボードを急上昇させた。無人航空機は罨だと知らずホイホイとついて行き、返り討ちに遭うこととなる、彼女は、太陽の光を背にして一斉に無数の苦無や小刀を放った。それらは、無人航空機の装甲を深く抉り爆発を起こした。

残りはりカだけとなり、彼女は足手まといにならないよう必死であった。

「.....さて終わらせるか」

リカはそう言って、勝負の時を待った。無人航空機は、彼女の真上から襲い掛かろうとした。彼女はジェットボードをホバリング（空中停止）させて、そのままの状態であった。

「...カシュ」

無人航空機は最後のミサイルをセットして、リカの真上から発射しようとしていた。

「...！」

リカはぎりぎりまで標的を引きつけて、そっとプラズマ銃を天に向けた。

「...ベシュ！」

その時、プラズマ銃の特殊な銃声がして、放たれた光弾は見事に無人航空機に命中した。命中後、無人航空機は木端微塵となった。リカは表情を変えず、ゆっくりと銃をホルスターに納めた。

「...三十二秒、時間が余っている...いいウォームアップになったわね」

チカは安堵の表情を浮かべて、メンバーに次なる指示を出そうとした。リカたちはジェットボードを完璧に乗りこなして、経験したことない空中戦をもろともしなかった。彼女たちは直ちに第206飛行隊の応援へと向かった。

こうして、長きに渡るステルス機の騒動に終止符が打たれようとしていた。

東シナ海の海域、台湾海峡

日中、台湾の空にはいくつもの飛行物体が飛び交っていた。空の異常に気付いた台湾人たちは、唾然としながら空を見上げて、当初は未確認飛行物体UFOではないかと恐れていた。しかし、その正体は日本航空自衛隊の特殊部隊、第206飛行隊と国際テロ組織`麒麟、が日本から強奪した最新鋭のステルス戦闘機であった。

「...ビュオー！！！」

双方、ハイレベルな空中戦を繰り広げているが、戦況は第206飛行隊の方は不利であった。台湾海域には、倒された第206飛行隊の戦闘機の残骸が浮かんでいた。

「...何という性能だ...あの第206飛行隊が苦戦しているとは.....敵となれば恐ろしいということがよく分かった...」

一等空佐の藤澤は無人偵察機から送られた映像を観て、体の震えが止まらなかった。

「...このままでは第二防衛ラインを突破されるのは、時間の問題です...増援部隊を出撃させますか...?」

「...味方の数を増やしても同じことだ...それにまだ望みは捨てていない...彼女たちが居る...!」

「.....S J Aの部隊ですか...?」

「...ああ、彼女たちの働きに賭けてみるしかないようだ...そういった事態になってしまった...今、何処に居る?」

「.....武装型の無人航空機と交戦して、全機撃墜後、第206飛行隊たちが居るエリアに急行しています...三分後に接触します...」

藤澤は、頼みの綱であるリカたちに全てのことを託そうとした。彼女たちはジェットボードを駆って、仲間の応援に向かっていった。ステルス機部隊の侵攻が止められないまま台湾空海域を過ぎていき、まっすぐ日本領域に向かっていった。

「.....この命、どうなってもいい...一機だけでも片付けみせる...!」

第206飛行隊の隊長は、極限のG（重力速度）に耐えて、ステルス機一機に照準を合わせた。彼はいつ気を失ってもおかしくない状態であった。

「.....ドドドガン!!!!」

その時、第206飛行隊の隊長が撃つ前にステルス機一機が謎の爆発を起こし、そのまま墜落していった。

「...今のは?」

第206飛行隊の隊長は、状況が把握出来ないまま戦闘機のを速度を緩めた。

「.....ふう、これ使えるね~」



第206飛行隊の隊長機の後方を見ると、長身のライフルを構えているリカの姿があった。さらに他のメンバーも揃い、反撃の 때가訪れた。

「...全機、無事？」

チカは、第206飛行隊の安否を確認した。ほとんどやられてパイロットは離脱して残ったのは我々、三機のみだ...相手には傷一つ付けられなかったが...今のは君たちがやったのか...？」

「...ええ、力を貸すわ、相手は奴らだけだから...」

「...もうあの無人航空機を片づけたというのか...頼もしいな...」

「...感心してる暇はないわよ、奴らも長くは待ってられない...」

ステルス機部隊は、リカたちが来たことで警戒して様子を窺っていた。残り九機の機体は自由に飛行せず、フォーメーションを組んで戦おうとした。

「...さて、こちらはどうする？我々はかなりの戦力を失った...とても相手出来そうにない...」

「...私たちが前に出て、あなたたちがバックアップに回るって作戦はどう？」

「...それしかないようだな、そっちの方が慣れてるようだし...承知した...！」

こうして、SJA派遣メンバーが先陣を切ることとなり、最終決戦が始まろうとした。

日本政府の人間や自衛隊の関係者は、リカたちを頼り、固唾を飲んで見守っていた。また、自信ありげな黒幕であるスン・ローファイは、様子が一変して、彼は深刻そうな表情で現場の映像を観ていた。

「...それじゃあ手筈通りに...シミュレーションの時を思い出して...一人につき、一機以上片づけるように心掛けて...」

「...了解！」

チカが的確に指示をして、リカたちは威勢のいい返事をした。

ステルス機数機が前に出て、早速、攻撃しようとするが、リカたちは微塵を焦っていなかった

。まず、チカがステルス機に挑もうとした。

「...？」

その時、チカは素早くステルス機部隊を通り過ぎて行って何かをやり遂げた。

「！！」

チカが通り過ぎた後、ステルス機三機に異常が起きて、自由に飛べないようであった。たちまち、そのステルス機は機能停止したようで反応がなかった。

「...ミサイルを撃って！」

チカは声を張って、第206飛行隊に攻撃するよう指示した。

「ドドッドガ...ドバン！！」

身動きが取れないステルス機は、ミサイル攻撃を受けて、そのまま撃墜された。チカは、無人航空機対戦時と同じように内部から冷凍していた。これでステルス機の数は一機となり、戦況に変化が起ころうとしていた。

SJA派遣メンバーの勢いは止まらず、チカに続き、ユミコがステルス機に挑もうとした。彼女もまた、標的にぎりぎりまで接近して、死角となる真下に移動した。

「...！」

ユミコは、ステルス機部隊の真下から特殊な超音波を発した。その超音波を浴びせられた機体は、たちまち障害を起こして制御不能となった。その際に第206飛行隊はチカの時と同じようにミサイルで撃墜した。ここで一気にリカたちの流れになったが、相手も黙っていなかった。

「.....ドドガン！！！」

その時、第206飛行隊の一機の戦闘機が被弾して、そのまま撃墜された。

「...何だと？」

第206飛行隊とSJA派遣メンバーは、一時、錯乱状態となった。気がつけば、彼らの目の

前には一つの人影があった。

「...あれは！」

S J A派遣メンバーは、その人影に見覚えがあるようであった。

こうして、自衛隊、S J A共同チームと`麒麟、の死闘は、ついに最終段階に突入しようとしていた。

## 終章 奇跡の翼

---

リカたち派遣メンバーと自衛隊チーム、ステルス機部隊の対決は続き、さらなる強敵が現れたことにより、混迷を極めることとなった。

「.....あの人型の物体は...確か...」

「はい...標的の強靱な戦士です...S J Aが何度か接触しています...」

オペレート責任者がそう言って、自衛隊統合幕僚長と防衛大臣にある資料を渡した。それはS J Aから送られた物であった。

「.....サイクロプス...?これが奴の名前か...?」

「はい、ナノテクノロジー...高度な科学力で生まれた兵器です...元々はドイツの技術のようですが...」

「...これもまた盗作か...呆れるばかりだ」

「.....資料によると、モデルは3タイプあって、地上戦専用が`レイダー`、狙撃専用が`ガンナー`、そして、最後に現在戦っている相手が、空中戦専用の`フライヤー`、とのことですよ」

「...それで奴に勝てる見込みはあるのか？」

「.....S J A派遣メンバーが何度か`サイクロプス`と戦って勝利しているため、問題はないようですが...」

「...彼女たちに頼りきりだな、今の時代、女性強しということか...そのうち、自衛隊にも女性が増えるかもしれんな...」

統合幕僚長は複雑な表情を浮かべて、ゆっくりと自分の席に戻った。防衛大臣は机に両肘を立てて、静かにリカたちを見守っていた。勝負の行方は分からないままであった。

「...どうやらあの中に有人機が紛れているようね...油断は禁物よ...注意して！」

ステルス機の数に着実に減っていくが、リカたちはまだ安心出来ず、慎重に行動に移ろうと

した。

「...それじゃあ、あの人型は私が相手をするから...残りのステルス機は任せるわ...」

チカはそう言って、サイクロプス飛行型、`フライヤー`に接近しようとした。残りのメンバーは、ステルス機応戦に力を注ごうとした。

「...混戦になるのは間違いないな...皆、心して掛かりや...！」

ユミコがチカの代わりに指示して、士気を高めさせた。リカたちは、一心不乱に標的に立ち向かおうとした。

「...ドシュ...ドシュ...！！」

ステルス機四機がリカたちに目がけて、ミサイルを一斉発射した。

「...！！」

その時、第206飛行隊は後方に下がって、リカとヒロミが迎撃しようとした。

「バシュバ...バシュバシュ...！」

リカは、発射されたミサイルに向けて得物のプラズマライフルを連射した。彼女の的確な射撃により、第一波は防ぐことが出来た。続いて、第二波のミサイルはヒロミを標的にして、逃げる彼女を追跡した。ステルス機が発射したミサイルは、追尾機能があるため、ヒロミを何処までも追い掛けていった。

「...！」

その時、逃げるヒロミに変化があった。彼女は旋回して、ステルス機部隊に急接近してきた。標的は、突然のことに対応出来ずにいた。

「...バ！」

さらに、ヒロミは大きな布のような物を出して、そのまま猛スピードでステルス機部隊の方に突撃しようとした。標的は直ちに装備されたバルカン砲で応戦しようとするが、時既に遅しであった。

「...！！」

ヒロミは、ステルス機と衝突するぎりぎりの距離で用意した大きな布をジェットボードごと覆った。すると、彼女の姿が消えた。

「！！.....ズガオンンンン！！！！」

ヒロミを見失ったステルス機一機は、自ら発射したミサイルの直撃により、大爆発を起こした。気がつけば、ヒロミの姿があり、彼女は一機撃墜していた。

「...ふう、上手く使えそうだね...」

ヒロミはほっとした様子で攻撃を続けようとした。謎の大きな布は、S J A開発部が開発した備品の「トレースマント」であった。それは周囲の景色と同化して、覆われた物は気配を感知出来ない効果があった。今回は特注で、自衛隊開発部の力を借りて改良が加えられて大型化されていた。

S J A派遣メンバーの活躍で、徐々にステルス機の数が減っていくが、そこにまた機内に潜んでいた戦士「フライヤー」が現れた。その相手はケイが引き受けようとした。

一方、チカは最初に現れた「フライヤー」と激闘を続けていた。

「...なかなかやるじゃないの...」

チカは、少々苦戦しているようで落ち着く暇がなかった。「フライヤー」は優れた飛行能力を持ち、空中戦、奇襲攻撃、潜入に長けていた。背部に取り付けられた飛行ユニットは分離、合体の機能が組み込まれていて、分離した飛行ユニットは遠隔操作が可能であった。また、飛行ユニットはジェットボードのように立ち乗りすることも可能で、あらゆる戦術に対応している。

「ババシュ...バシュ！！」

「フライヤー」はチカに向けて、下腕部に装備された二連装式荷電粒子砲を連射した。

「...ちっ、これまたS F映画の世界ね...！」

チカは、「フライヤー」の攻撃を紙一重で避けつつ、間合いを詰めて行った。

「...ブシュ...ブブシュ！」

チカが『フライヤー』に攻撃しようとするが、彼女は先手を打たれた。『フライヤー』は、体各部に仕掛けられた手裏剣のような武器を放った。それは、チカの頬や肩をかすめた。

「...チカさん！！」

ユミコがチカのことを心配するが、彼女は問題ないと目で訴えた。

「...つ、島で戦った時のより強いね...こりや楽しめそう...」

チカは、血が出ている頬に触れて不敵な笑みを浮かべた。彼女は恐れを知らず、楽しんでいるようであった。ステルス機は、リカたちの手によって順調に撃墜されているが、まだ安心出来ず、新たな脅威、『フライヤー』が厄介となっていた。

「.....機関砲残弾数ゼロ...ミサイル発射不可、被弾箇所多数...エンジントラブルで飛行速度低下...レーダーは使い物にならない...済まないが我々はここまでのようだ...」

「...ご苦労様、よくやってくれたわ、あとは私たちが何とかするわ...」

「...すまない、たいして役に立てなかったが、一緒に戦えて良かった...無事に任務を遂行出来ることを祈っている...！」

「...ありがとう」

第206飛行隊の隊長は、リカたちに敬礼して、残った仲間と共にその場から離脱しようとした。ステルス機はついに残り一機となり、ここが正念場であった。

「...戦闘区域を離れていく...！まさか強行突破を？」

残り一機のステルス機はリカの言った通り、飛行速度を上げて日本の領空へと侵入しようとしていた。

「...リカ、あのステルス機を追いなさい！何か嫌な予感がする...第三防衛ラインに着く前に片づけるのよ...！」

「...え、でも...！」

「...私たちなら大丈夫よ、こいつらを倒してすぐに応援に行くわ...！さあ、考えている時間はないわよ！！」

「...すみません、では先に行きます！」

リカは仲間のことを心配しつつ、残りのステルス機を追跡した。

「...さあ、皆、目の前の人形たちに私たちの実力を見せてあげましょう...！」

「...了解！」

「フライヤー、は四体揃い、S J A派遣メンバー四人との死闘が繰り広げられようとしていた。

一方、リカは日本への侵攻を続けるステルス機一機を追跡して、どうにか追いつこうとしていた。

「.....」

標的は、接近するリカを警戒しながら先に進んでいた。

「バシユン！」

リカは、ステルス機に照準を合わせてプラズマライフルの引き金を引いた。ステルス機は旋回してその攻撃を避けた。彼女は標的の後方からプラズマライフルを連射して、行く手を阻んでいた。さすがの最新鋭ステルス機も逃げ切れず、反撃に出ようとしていた。リカとステルス機は、小細工抜きで正面攻撃を掛けようとした。

「ドガガガガガ...バシユ、バシユ...！」

リカたちはお互いの武器を使って、死力を尽くした。二人は猛スピードですれ違い、旋回して再度、攻撃を続けようとした。

「...ボン！.....？」

その時、ステルス機からかすかな爆音が鳴り響いた。突如、機体にトラブルが起きて、これによりリカに明るい兆しが見え始めた。



「...これで終わりよ」

リカは、しっかりと煙が立っている標的に照準を合わせて引き金を引こうとした。

「...ガシン」

その時、ステルス機のコックピット部分が展開され、そこに人影があった。その人影はステルス機から飛び降りるが、リカは攻撃対象をステルス機優先にして、気にせず引き金を引こうとした。

「...ドバン!!!」

その時、リカが撃ったプラズマ弾は、ステルス機に命中せず、何かに妨害された。

「...!？」

その時、リカの前に現れたのは、またしても「フライヤー」であった。標的は、腕に仕掛けられた金属製の盾で彼女の攻撃を防いでいた。ステルス機の方は無人ではあるが、任務を果たそうと飛行を続けていた。

「.....機体は自動操縦にしてある...ここから先に行かせるわけにはいかないな...！」

「え...？」

その時、まともに話しそうにない「フライヤー」がはっきりと言葉を発した。リカはそれに驚きが隠せなかった。彼女の目の前に居る「フライヤー」は、ただの殺戮マシンではなく、人間味があり、その正体はリカがよく知っている人物であった。

一方、S J A派遣メンバー四名と「フライヤー」の攻防戦は続き、彼女たちは苦戦しつつ、勝機を掴もうとした。

チカは反撃せず、ただひたすら攻撃を避けていた。彼女は華麗に空を舞って、何かを企んでいた。

「.....!？」

ずっと攻撃を続けていた「フライヤー」であったが、突如、異変が起こって身動きが取れなかった。たちまち攻撃を止めて、その「フライヤー」は沈黙した。

「はい、一丁あがり...」

チカはそう言って、ゆっくりと落下して行く`フライヤー`に軽く触れた。

「パリン！」

その直後、`フライヤー`の体はワイングラスが割れたかのようにばらばらになって消滅していった。これでチカは勝利したこととなった。彼女は攻撃回避に徹する振りをして、密かに`フライヤー`の周りに冷気を撒いて膜を作っていた。それにより、標的は体が凍って身動きが取れずにいた。最後に彼女は凍った`フライヤー`の体に軽く刺激を与えて、内部から破壊したのであった。

「.....キン...キキキ...ガキン！！」

また別の空域では、金属音がぶつかる音が何度も鳴り響き、ケイは`フライヤー`と激しい白兵戦を展開していた。

「...しつこいね、嫌いなタイプだわ」

ケイは、ぼやきながら`フライヤー`の相手をしていた。実力はほぼ互角のようで勝負はまだ決まりそうになかった。ただ、ケイの無駄のない動きと体力を消耗していない様子から、まだ彼女の方に勝機がありそうであった。

「...ふう、ふう、はあ...はあ...」

「.....あんたみたいな化け物でも疲れることあるんだね〜」

「...！！！」

ケイの冗談を耳にした`フライヤー`はどうも様子がおかしく、マスクで素顔を隠していても顔色が優れないことがよく分かった。標的には、ただならぬ恐怖が付き纏っていた。

「ゴオオオオオオオオオ...！」

その時、`フライヤー`は何か覚悟を決めたようで、飛行速度を限界まで上げてそのまま急上昇した。ケイはその様子を見上げながら少しも動こうとしなかった。

「...ジャキン！」

ミフライヤーは、装備されたブレード（大刃刀）を構えながらケイが居る場所に急降下した。彼女はそれでも動こうとせず、ずっと見上げていた。

「.....！！！！！！」

ミフライヤーは全力でケイに突撃したが、それも虚しく簡単に避けられた。

「...キン」

ケイはミフライヤーとすれ違った瞬間、抜刀したようであったが、とても肉眼では捉えられず、気がつけば彼女は納刀していた。

「...パキ...パキパキパキ...」

ケイに攻撃を避けられたミフライヤーはそのまま落下していき、体中にひびが入っていた。標的は、完全なる敗北を味わった。

「ブジャ！」

たちまち、ミフライヤーは血の花を咲かせて力尽きた。ケイは、静かに勝利の瞬間を味わった。

ユミコの方も、佳境に入ろうとしていた。

彼女はジェットボードを巧みに使い、華麗に攻撃を避けて標的を翻弄していた。

「ええ加減飽きたわ...そろそろ終わらせるで...」

ユミコはそう言って、急にミフライヤーの前に立ち止まった。標的は彼女の動きが予測出来ず、隙を作ってしまった。

そこに、ユミコはすかさず反撃を企てていた。彼女は深く息を吸い込んで、口を大きく開いた。すると、近くに居たミフライヤーに異変が起こり、とても苦しそうであった。ユミコは特殊な音波を纏った歌声で標的の体を崩壊していった。

「...ドバン！！」

標的は身動きが取れず、苦しみは時間が経つにつれて消えていき、そのまま息絶えて海に沈んでいった。

「...今度はまともな生物に生まれ変わるんやで...」

ユミコはそう言い残して、海に向かって手を合わした。

残るヒロミも、決着をつけようとしていた。`トレースマント`を活用して`フライヤー`と闘っている彼女であるが、どうも上手くいかない様子であった。標的には`トレースマント`で隠れた姿を探る能力があり、ヒロミは奇襲を何度も失敗していた。しかし、彼女は諦めようと思わず、形勢逆転を狙っていた。

「...あ～あ～これじゃあ丸見えだね～」

ヒロミの使っている`トレースマント`は攻撃を受けすぎて、ぼろぼろになっていた。彼女は、ジェットボードの機動力を信じて大胆に標的に突撃しようとしていた。

「...！！」

`フライヤー`はヒロミの動きを捉えて、腕に装備された二連装式荷電粒子砲をしっかりと構えて止めを刺そうとしていた。彼女はそれに怯まず、標的に挑もうとした。

「バシユン！」

`フライヤー`は、ヒロミに二連装式荷電粒子砲を一発撃った。手応えはあるようで、これで標的は勝利を確信した。

「.....？」

その時、`フライヤー`があることに気づき仰天した。確認出来たのは、使い物にならないぼろ雑巾と化した`トレースマント`とジェットボードだけで、ヒロミの姿はなかった。

「...ここだよ」

突如、ヒロミの声が聞こえて、`フライヤー`は小動物のようにびくついていた。

「...!!」

ヒロミは、大胆にも『フライヤー』の頭上まで飛び移り、そのまま標的が居る場所に落下した。彼女は、標的に絡みついて伸し掛かり、体の自由を奪った。

「...グッバイ」

ヒロミはそう言い捨てて、止めを刺そうとした。

「...バチ...バシシシシシ...ンン!!!」

ヒロミは『フライヤー』に必殺武器の高圧電流を流した。標的は全く抵抗出来ず、敗北を悟った。黒焦げとなって沈黙した『フライヤー』は、落下して海に沈んでいった。

これで、S J A派遣メンバー四名は強敵に打ち勝った。残るはリカだけとなり、日本の平和は彼女に託された。

「...リカは何しているの？」

「...ステルス機と交戦中とのことですが...何やら状況に変化があるようです...」

「...彼女だけに任せられないわね...私たちも行くわよ...」

チカたちはリカのことを心配して、直ちに応援へ向かおうとしていた。

一方、リカは『麒麟』の日本侵攻を阻止すべく、最後の敵に立ち向かおうとしたが、突如、意外なことが起こって困惑していた。

「.....ただの戦士じゃないわね、話がちゃんと通じそうだわ...出来ればそこをどいて欲しいんだけど...」

「...悪いが無理な相談だ.....ステルス機が日本本土に辿り着くまでここに居てもらおう...」

「...たった一機に何を託しているというの?もうそっちに希望はないわよ」

リカがそう言うと、彼女の目の前に居る『フライヤー』は喋るのを止めて、マスクを外そうと

した。

「...!？」

リカは「フライヤー」の素顔を見た瞬間、背筋が凍りそうになった。

「.....先日は世話になったな...お蔭で何度も死線を彷徨ったよ...俺もしぶといんでね...」

リカの前に現れたのは、「麒麟」の主要メンバーであるウォン・イーシンであった。彼は以前、スン・ローファイが所有する工場でリカと接触して、死闘を繰り広げた。その結果、彼は敗北を喫したが、地獄の底から蘇り復活を遂げた。

「...まさかまた会うとはね...本当に嫌いだわ...」

「お前のことを思い出すと、全身の傷が疼くんでね...俺は必ず、お前に報復すると誓った...そして、使命を果たす...!」

ウォンはそう言って、痛々しい傷跡や火傷跡をリカに見せた。

「ふん...あんたと遊んでいる暇はないわ...!」

「...先に進みたいのなら、まず俺を倒すことだ...それといいことを教えてやろう...お前はさっきステルス機一機だけで何が出来るとほざいたが...あれは特別だ...実は核燃料が積んであってね、計算してみたが被弾しても、ちゃんと日本本土に届く...墜落するとどうなるか...日本列島は核の炎で汚染されて多くの生物が死滅していく、一生生活出来ない国となるだろう...!」

「.....!!!!」

リカは、ウォンからの衝撃的な発言を耳にして愕然としていた。また、リカたちの会話は他の者の耳にも入っていた。

「.....核燃料...厄介ごとが増えたわね...何としても阻止しないと...これは世界的危機よ!」

チカたちは、リカたちの会話を聴きながら対処方法を考えていた。

一方、防衛省自衛隊 統合幕僚監部 中央指揮所。

「...航空自衛隊司令部が命令を待っています...PAC3での迎撃はどうされますか？」

防衛大臣と自衛隊の統合幕僚長は、部下の質問で精神的苦痛を味わっていた。

「.....大臣、これは我が国のみならず、全世界が関わることとなります...もし、日本が核攻撃を受ければ、それを引き金に世界を巻き込んだ戦争につながる恐れがあります...！」

「...言われなくても分かっている...もう少しというところで、とんでもない奥の手を持っていたものだ...迎撃というのが容易なことではない...失敗すれば以前に起きた福島原発事故の二の舞となり、被害は比にならないだろう...」

「...では迎撃は許可しないと...？」

「そうは言っていない、発射準備はさせよう...時間はないが、他の対処法を...知恵を絞り出すのだ...」

統合幕僚長は防衛大臣の提言に対し、深く頷き、部下たちに的確に指示した。

「.....やはり迎撃は見送りか...当然のことだが考えている時間はない...我がチームは全滅してしまい、頼れるのは彼女たちだけか...」

航空自衛隊指令部の指揮官である藤澤は、下唇を噛みながら苛立っている様子であった。

一方、香港のオフィスビルに居るローファイは、余裕の表情を浮かべながら闇の投資家たちと共にショーの幕引きを見物しようとしていた。

そして、リカたちの会話はまだ続いていた。

「.....さて、さらにゲームを盛り上げるための朗報がある...聞きたいだろ？」

「早く言いなさい...！虫唾が走る！」

「...冷静さを無くすと不利になるぞ...まだそっちにチャンスはある...例のステルス機は自動操縦で動いているが、遠隔操作で停止させることも可能だ...」

「え...？」

その時、リカは意外なことを耳にして、強張った表情が若干緩んだ。

「.....この携帯型レーダーでステルス機を操作出来る...操作方法は簡単でボタン一つで停止させることが可能だ...ただし、一定の距離から離れると、電波が届かなくなって反応しなくなる...」

「...つまり、あんたからそのレーダーを奪い取れば解決ってことね...?」

「...そういうことだ、奪い取るためならどんな手を使ってもいい...」

「.....それじゃあ、あんたの命頂くわ!」

リカは眉間に皺を寄せて、目つきが鋭くなり攻める構えを見せた。ウォンはレーダーをウエストポーチに入れて、彼女の攻撃に備えた。これからの時間は一秒も無駄に出来ず、日本国民のみならず、世界の存亡を賭けた戦いが始まろうとしていた。

「.....バシユン...ババシユン!!!」

先手を取ったリカは、得物のプラズマライフルを連射するが、ウォンは綺麗にそれを避けていた。

「...カシユン」

それから不利な状況が続き、ついにリカが愛用していたプラズマライフルはエネルギー切れになった。

「...ボゴオ!!」

ウォンは、隙を作ったりカに容赦なくタックルを浴びせて、彼女をジェットボードから引き離れた。

「...!」

リカは、海に激突する寸前にジェットボードに体を拾われて体勢を立て直した。彼女はエネルギー切れとなったライフルを放り捨てて、携帯型のプラズマ銃を使用した。

「...!!」

リカは反撃しようとするが、既にウォンが構えていて、再度、彼女を怪力で吹き飛ばした。



「...俺はただ、時間稼ぎをすればいい、たっぷりと可愛がってやるよ...！」

「...ちっ！」

ウォンは日本滅亡の危機をゲームとして楽しみ、リカは一筋縄ではいかないと悟った。

「...リカー！！」

その時、チカの声がリカの耳に届き、他の仲間たちも駆けつけた。

「...皆、そちらは片付いたんですか？」

「ええ、そっちは手こずっているようね」

「...すみません、思ったより手強くて...」

「...手を貸そうか？あの化け物を倒せば解決するんでしょう？」

「ええ、奴の持っているレーダーを奪えば、こちらの勝ちです...」

「じゃあ、ちゃっちゃと倒しちゃおうよ～」

ケイがリカとチカの会話に割って入るが、また予想外のことが起ころうとした。

「.....助けは要りません、私一人で奴を倒してみせます...！」

リカの衝撃の発言で、S J A派遣メンバー四人は唖然とした。

「...この非常時に何言っているんや！笑えん冗談や...ええ根性してるわ！」

ユミコはリカに怒号を上げた。他のメンバーは黙っているが、彼女の発言が正気の沙汰ではないと目で訴えた。

「冗談ではありませんよ、本気です、一人でやらせてもらえませんか？」

リカは自分の意見を変える気はなく、先輩たちの返事を待った。

「.....自信はあるの？」

「はい、こうなったのも奴を生かしてしまった私の責任です...命を懸けて、あのステルス機を停めてみせます...！」

チカはリカの目をじっと見て、彼女が正常であることを理解した。

「.....では任せるわ、念を押しとくけど、あなたは日本だけでなく、全世界の運命を背負っていることを忘れないで...」

「...はい、心得ています！」

「.....だからと言って、リカだけに任せるわけにはいきません、私たちにも何か出来ることがあるはずですよ...！」

その時、ヒロミが反論したが、チカはある作戦があるようであった。

「...勿論、私たちにもちゃんと仕事があるわ...もし、リカが失敗した時のことを考えてお膳立てを...ステルス機が日本に侵入する直前に私たちで食い止めるのよ...！」

S J A 派遣メンバー四名は、チカの提案に異議なく同意した。

「.....話はまとまったようだが、俺は同意出来ない...我が組織の障害になる者は排除させてもらうぞ...！」

ウォンは、まとめて五人の相手をしようと考えていた。

「...バシユン...バシユバシユ...バシユ！」

その時、プラズマ銃の銃声がして、油断していたウォンは何発もそれが直撃した。

「...今のうちに早くステルス機を追って下さい！」

「...じゃあ頼んだわよ」

リカはチカたちにステルス機を追跡させようと、突破口を開いた。

「.....はは、今の攻撃は良かったぞ...どうやら一騎打ちの方が楽しめそうだ...！」

「...ほざけ、時間がないんで一気にケリをつける...！」

リカは緊張感を高めて、ウォンの猛攻に立ち向かおうとした。

「藤沢指令...S J Aのメンバーから緊急通信がありました...例のステルス機の居所を知りたいと...」

「...教えてやれ、それとメンバーの責任者と少し話がしたい...つないでくれるか...」

航空自衛隊対策司令部の司令官である藤澤は、S J A派遣メンバーのチカと話をしようとした。

「...ステルス機が飛行している場所の座標データを送りますが...そっちの状況を教えてほしい...侵攻を防ぐ手立てはあるんですか...？」

「.....いくつか手段はあります、ただ、どれも一筋縄ではいかない...はっきり言って我々だけで対応出来るかどうか不安です...」

「...そうですか、何か手助けしたいところですが、たいして力になれそうにない...あの化け物に太刀打ち出来る力が残っていない...切り札として、迎撃ミサイルがありますが...上手くいくかどうか...自衛隊上層部や政府関係者はずっと頭を抱えていますよ...」

「...構いませんよ、想定外のことが起こっているんですから...何とかしてみます...」

「...任せても大丈夫なんですか？」

「ええ、無謀なやり方ですが、我々の命を捧げれば解決するかもしれません...」

「.....！何を馬鹿なことを！他に方法があるはずだ...！」

「...あまり考えている時間はありません、我々はあなた方の組織とは違い、あくまで影の存在...世界を守るなんて大それたこと出来るかどうかわかりませんが、やれるだけやってみます...！」

「.....そうですか、ではあなた方を信じます.....核攻撃を阻止して、無事に全員が帰還すること

を祈っています...！」

「...ありがとうございます、それでは...」

チカは藤澤に礼を言って、通信を切ってジェットボードの速度を上げて、仲間に追いつこうとした。

一方、リカとウォンの激しい攻防は続いており、最終局面に近づいていた。

「バシュ...ババシュ...ドゴ...バキ...！」

リカは銃術と格闘術を組み合わせ、ウォンを追い詰めていった。

「...こざかしい！」

ウォンは攻撃を控えて、反撃の時を狙っていた。リカの攻撃は残念ながら、ウォンの強靱な肉体の前では歯が立たなかった。

ステルス機が日本に到達するまであと僅かで、彼女は焦る気持ちが拭えなかった。

「...カシン.....！！」

その時、リカの愛用しているプラズマ銃が弾切れとなり、ウォンはふと笑みをこぼしていた。

「...もう終わりか？ではこちらから攻撃させてもらうぞ...！」

「.....バゴオオオオオオオオオオ！」

ウォンの猛反撃が始まり、リカはジェットボードから引き離された。彼の攻撃は続き、彼女は人形のように宙を舞い続けた。

「...ぐぐ...！」

リカは、抵抗出来ないまま海の方へと落下していき、ジェットボードとの距離が広がって行った。

「...ドガガン！」

リカはジェットボードに拾ってもらおうとするが、ウォンの妨害で破壊されてしまった。よって、彼女はそのまま虚しく海面に叩き付けられて沈んでいった。

「...海の藻屑となれ」

ウォンはそう言い捨てて、チカたちを追跡しようとした。

「.....」

リカは東シナ海の海中で気を失っていた。その場は静かで心地いいが、放っておけば彼女は死ぬこととなる、彼女を助けられる者はおらず、絶体絶命の状態であった。

「.....！！」

リカは意識を取り戻したが、すぐに地獄を体験することとなった。彼女は空気を吸おうと浮上しようとするが、間に合いそうになく、もがき苦しんで溺れていた。

「...導こう」

その時、何処からか謎の声がリカの耳に届き、彼女の体に異変が起きた。

「...ピカ！」

リカはまばゆい光に包まれ、薄暗い海中は瞬く間に明るくなった。この現象により、事態は大きく変化するのであった。

一方、ステルス機を追跡するS J A派遣メンバー四人は、リカの異変に気付いておらず、彼女たちに魔の手が迫っていた。

「.....私たちに接近する反応が...これはリカじゃない...！」

S J A派遣メンバー四人に接近しているのは、不敵な笑みを浮かべるウォンであった。彼女たちは、一旦ジェットボードを停めた。

「...待っていてくれてありがとう」

「.....あんなだけのようね、リカはどうしたの？」

「.....あの生意気な女なら今頃、魚の餌になっているだろう...」

S J A派遣メンバー四人は、ウォンから衝撃の発言を耳にしたことで悔しさが滲み出ることとなった。

「.....チカさん、ユミコさん、先に行って下さい...ここは私たちが食い止めます...」

ケイはそう言って愛刀を抜いて、ヒロミも戦闘準備をしていた。

「.....さすが機転が利くわね...私の冷氣攻撃とユミコの超音波ならステルス機を止められる...確かに二手に分かれて行動するのは時間短縮になるけど...却下するわ、こいつを瞬殺してステルス機を止めさせるわ、私たちだってあの娘の敵を討ちたい...！！」

「...分かりました、ではさっさと取り掛かりましょうか...」

ケイはチカたちの意見を受け入れ、四人でリカの敵を討とうとした。

「.....！！」

S J A派遣メンバー四人とウォンの因縁の対決が始まろうとしたが、突如、新たな反応がとてつもない速さで接近していた。

「...何だと...！？」

ウォンは、啞然として謎の反応がある方向に注目した。

「...あれは.....！！」

突如、チカたちの前に現れたのは知らない者であった。謎の出現者は、人間にはとても見えず異形で、背中には巨大な白い翼が生えていて、全身は美しい白い羽毛に覆われていた。また、髪の毛は金色のパーマヘアでその姿はまさに天使であった。

「.....な...何だ、お前は？」

ウォンは動揺しながら謎の天使に話し掛けた。

「.....私は異界の使者...悪しき者を葬る者だ...」

謎の天使は、ウォンと睨みつけた後、よく通る美しい声で応じた。

「.....まさか...！」

S J A派遣メンバー四人は、謎の天使の正体に気づき始めた。

「...ふん、新手が来ても同じことだ、まとめて相手を.....！」

気がつけば、謎の天使はウォンの目の前に居た。

「...時間がない、そのレーダーを頂く...」

謎の天使はそう囁き、ウォンは無言のまま立ちすくんでいた。

「.....ボボゴゴゴゴゴ！！」

その時、ウォンの体に窪みが表れ、彼はいつの間にか致命傷を受けていた。謎の天使の攻撃は肉眼で捉えることが出来ず、周りに居るS J A派遣メンバー四人は、レベルの差を肌で感じていた。

「...が.....はあ...はあ...こ...こんなことが...！！」

ウォンは謎の天使に向けて、二連装式荷電粒子砲を発射した。至近距離で発射したので命中は確実かと思われたが、ウォンの判断は甘かった。

「...残念だったね」

謎の天使はそう言って、自身に生えた翼でウォンの攻撃をかき消した。謎の天使の翼は特殊な金属のようなもので、ウォンが身につけている盾とは比べ物にならない程の強度があった。これにより、謎の天使の力がウォンの力をはるかに上回っていることが分かった。

「...くっ、お前のような奴は初めてだ...名はないのか？」

「...どうしても呼びたければこう呼べばいい...ベルダ（麗人）と...」

「.....ベルダ...いい名前だ...」

その時のウォンの表情は妙に落ち着いていて悔いがないように思えた。彼は何かを悟って、最後の抵抗をしようとした。

「...プチン」

その時、ベルダは自分の羽を一枚抜き取った。すると、それは変形して西洋の剣を横っていた。

「...行くぞ」

ベルダは、自ら造り上げた剣を構えてウォンに立ち向かった。

「...ズバン！！！！」

勝負は一瞬であった。ウォンの攻撃はベルダに通用せず、相手の横一文字の斬撃を浴びせられた。

「.....み...見事だ.....ベルダとやら...お前が何者か分かったぞ.....今度は地獄ではなく、天に召されるのを祈っている.....」

たちまち、ウォンの傷口は熱を帯びて大爆発を起こした。

「...勝ったの？」

S J A派遣メンバー四人は、あっという間の出来事に口をぽかんと開けていた。

「.....」

ベルダは、S J A派遣メンバー四人をちら見して、無言のままその場を後にした。

「.....ちょっと待って.....り...リカ！」

チカは、ベルダの正体がリカだと確信して、つい彼女の名を叫んだ。



「...チカさん、追いましょう！」

ケイたちもチカと同じく、ベルダの正体がリカだと分かり、すぐさま彼女を追跡しようとした。

「.....」

ベルダ（リカ）はスピードを上げて、ある場所を目指していた。彼女の手にはウォンから奪い取ったレーダーがあった。彼女はステルス機の居所を探って追っていた。ステルス機は、あと五分程で日本本土に到達することとなっている。ステルス機を遠隔操作出来るレーダーは、半径五百メートル以内じゃないと電波が届かないため、ベルダ（リカ）は急いで標的に接近した。

「.....ピ！」

ベルダ（リカ）はレーダーの緊急停止ボタンを押して、全世界の運命をそれに賭けた。

「.....ドバン！！！！！！」

核燃料を積んだステルス機は、ベルダ（リカ）が緊急停止ボタンを押したことで、機能停止して奄美大島付近の海域で墜落した。機体は沈んでいき、二度と蘇ることはなかった。

「.....ふ」

ベルダ（リカ）は核攻撃を食い止めて、安堵の表情を浮かべた。

「.....！！！」

その時、ベルダ（リカ）に異変が起き、まばゆい光に包まれていった。次第に美しい白い翼や羽毛体が消えていき、変身が解けているようであった。変身が解けたリカはそのまま力尽きて落下していった。

「...ビュオ！」

その時、猛スピードでリカに近づく者が居た。

「.....ふう、間に合った.....あれ？」

落下していくリカを助けたのは、ケイであった。彼女は無事にリカを救出するが、あることに気づいた。

「……ん？あれ？ここは…何処？」

リカは意識を取り戻して、一時的な錯乱状態になっていた。

「……何言ってんの？自分でここまで来たんじゃないの？さっきの天使ってあんたでしょ？」

「…天使？何のことですか？」

「……どうやら、また妙なことに遭遇したようね……あんた何で裸なの？」

「…え？は…裸…！？」

リカは自身の体の異変を確認すると、顔が真っ赤になって恥かしそうに体を小さくした。

「……とりあえず任務は遂行された…だけど私たちの手柄にならない…まあ、それでいいんだけど…しばらく休めるわね…」

「…ええ、別荘でケイさんと再会したのが、かなり前のことのように思います…」

リカはここ一ヶ月に起きた出来事を思い出した後、ほっとした表情を浮かべた。S J A派遣メンバーは、C - 1 3 0 Hハーキュリーズ輸送機と合流して、無事に帰還した。

一方、黒幕であるローファイは計画が失敗したことでショックを受けて、口を開かないまま放心状態となった。

「……これでショーは終わりのようすな、期待していたことと違いましたが、結構楽しめましたよ…ただ、今回の結果では援助は出来かねます…残念ながら話はなかったことにして頂きたい…」

「こっちも同意見です、資金援助はまたの機会ということで…機会があればの話ですが…」

闇の投資家の一人が、意味深な言葉をローファイに告げて通信を切った。他の闇の投資家も通信を切って、彼を見捨てるように去って行った。

「.....こんなはずではなかった...」

ローファイは両膝をついて、ぶつぶつと独り言を言っていたが、そんな彼に迫って来る者が居た。

「...ボシュ！」

その時、一機の戦闘機がローファイのオフィスビルにミサイルを発射して、着弾確認後、何処かに消えていった。ローファイは失敗した際、死を覚悟していた。

「.....対象は沈黙、死亡したとされる...対象を消した者は不明で、捜査続行は不可能...現状報告終わり...もう帰ってええか？」

「...良いわよ、こっちの件も片付いたし、戻っておいで、ご苦労さん～」

香港で極秘捜査していたトウコは、ノリコの許しを得て、日本に帰国しようとした。S J A本部には続々と吉報が届き、指揮官であるノリコは、笑顔で同僚のオサコと顔を合わせて、ほっとした様子であった。

八月十五日、日本時間十四時二十二分、国家テロ組織`麒麟、による日本侵攻計画は失敗に終わった。今回の任務で派遣された自衛隊員や米海兵に多くの怪我人が出たが、奇跡的に死亡者が出なかった。また、任務内容にリカたちの名前は一切挙がらず、表向きは自衛隊だけが任務に携わったことになっており、日本の平和が維持されることとなった。よって、リカたちS J Aの活躍を知る者は数少なかった。

日本各地の自衛隊対策本部は歓喜に沸いており、航空自衛隊の指揮官である藤澤は、しばらく目を閉じながら敬礼していた。

「...ありがとう」

藤澤は、密かにリカたちに向けて感謝の意を述べた。何人かの自衛隊関係者も藤澤と同じことをしていた。一方、海底に沈んだステルス機は後日回収されることとなり、`麒麟、の秘密軍事基地は謎の爆発を起こして、消滅していった。これは何者かによる証拠隠滅のための犯行とされるが、捜査は進んでいない。まだいくつか問題点が見受けられるが、終戦七十年を記念すべき日は終わろうとしていた。そして、それから数週間が経とうとしていた。

東京 防衛省

気持ち良い快晴となったその日、防衛副大臣は、ある人物を招いていた。

「...お忙しい中、よく来てくれました、美味しいお茶をご用意しています...」

「ありがとうございます、以前お邪魔した時は緊張のあまり、頂くことが出来ませんでした、今日は頂きます...」

防衛副大臣に招かれたのは、公安課警備部暗躍係部長を務める新沼であった。

「...いやしかし、ここ数ヶ月、いろんなことが起こりましたね...一部の者しか感じてないと思いますが...」

防衛副大臣は、笑みを浮かべながら新沼に話し掛けた。

「.....そうですね、うちも結構ばたばたしていました、少しはお役に立てたかと思えます...」

「勿論ですよ、あなたが紹介された組織のお陰で本国は救われました...なんとお礼を言ったらいいか...」

「...犯人を見つけるのはかなり苦労しましたが、うちが追っている件とつながりがあるとは思いませんでした...本当に驚きました...」

「...何はともわれ、あなた方の協力が無くしては、事件を解決することが出来なかった...今回の件で友好国や安全保障理事会から信用を取り戻すことが出来ました...防衛大臣も大いに喜んでいました...」

「...それは良かった、紹介した組織の者にちゃんと伝えておきます...」

「...それにしても、例の組織はあなたが考案されたそうですね...?」

「.....ええ、まあ、私だけで考えたことではありませんが、一応そうなっていますね」

「...立ち上げた経緯というのは?」

「きっかけはうちの組織に限界を感じたからです、日本は法律に頼り国ですからね...枠内でしか動けないので別の手段を考えました...」

「...成程、それで新たなスパイ機関を設立されたわけですね...?」

「ええ、スパイはもう過去の遺物だと批判する声があるようですが、私は違うと思います、日本

並びに世界の平和を脅かすのは、人のみです...それに対抗出来るのも人...無人偵察機や衛星だけでは手に負えないでしょう...私は部下の無事を祈り、有力な情報を待ちます...」

「...つまり、あなたは攻防一体の組織を創りあげたわけですか？」

「その通りです、二つの組織が交われば最強の戦力となるのは間違いないでしょう」

「...成程、参考になります、うちの組織も考えを改めないといけないようですね...」

防衛大臣と新沼は意気投合して、日本の防衛策について熱く語り合った。

場所は変わり、都内の高層マンション。

マンションの一室を覗くと、奥のリビングにあるソファで死んだかのように眠っている住人が居た。設置されたテレビの電源は入ったままで、ソファの主はかなりの時間眠っているようであった。その正体は、リカであった。彼女は、無防備で涎を垂らしながら爆睡していた。目覚めた時、彼女は「麒麟、との死闘のことを忘れているかもしれない。これまでのことはまだ始まりに過ぎず、また新たな試練がリカに待ち受けていた。

鳳の眼 起の章 完

鳳の眼 起の章

<http://p.booklog.jp/book/99192>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99192>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99192>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ